

茨木市佐保所在

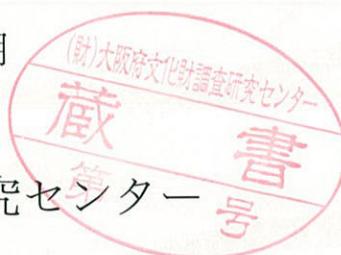
佐保栗栖山砦跡

—国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う調査報告書—

中世山城の調査

2000年11月

(財)大阪府文化財調査研究センター





1. 全景（東から）尾根先端部に位置する。手前に尾根を切断する堀切がみえる。

2. 遠景（南から）
中央縦方向に清坂街道が走り、
奥に行けば丹波亀岡に抜ける。



3. 全景（北から）砦跡斜面にある里道から分岐し、砦へ連なる通路がみえる。
奥のブルーシートは栗栖山南墳墓群。



4. 全景（北東から）



5. 全景（北西から）



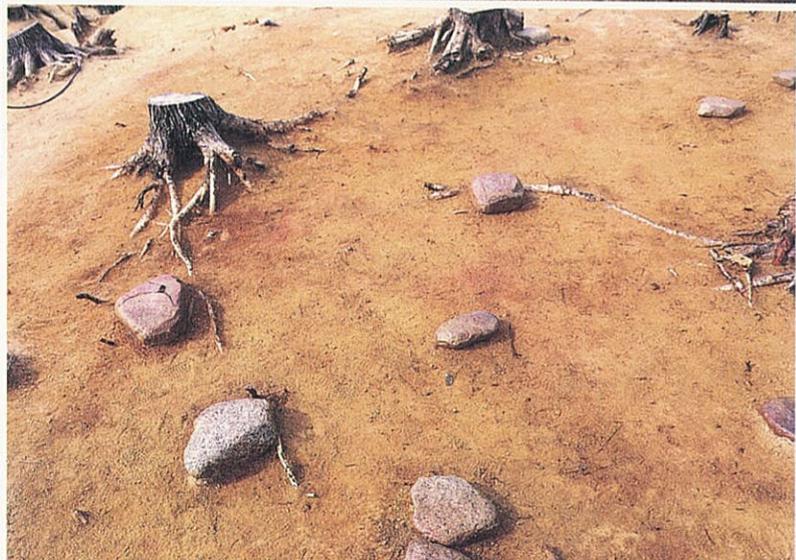
6. 全景（北東から）



7. 曲輪1・9と石積1
（南から）
曲輪1に礎石建物



8. 土壁〔曲輪1出土〕木舞の痕跡が観察される。



9. 火熱を被った曲輪1平坦面
（北から）

10. 曲輪2全景（南西から）手前に建物2



11. 出入口1（北西から）
通路には石敷を、両側には石積を施している。



12. 出入口1（北西から）

13. 石積3〔曲輪12〕（北西から）



曲輪3全景（北東から）

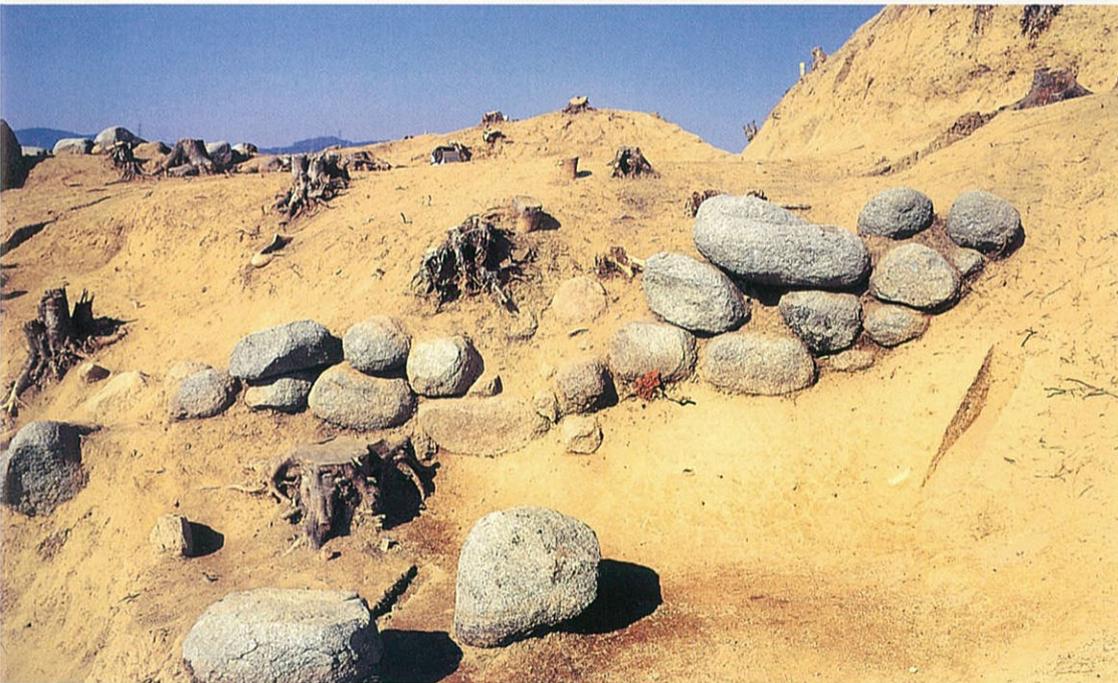


15. 通路7・8（南から）
曲輪3・13・4を結び、
スロープと石段から成る。

16. 曲輪5全景（南西から）
遺構密度が高い



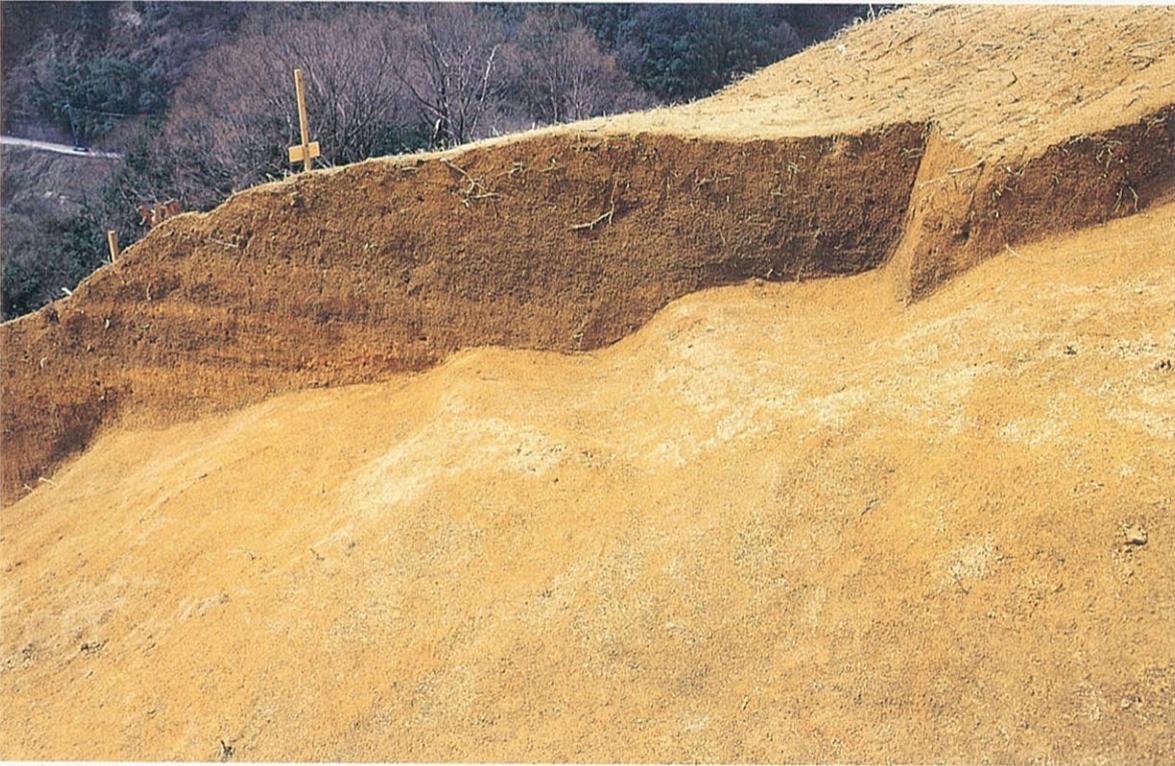
17. 石積10（南東から）
曲輪4と5を区切る
巨石を使った石積



18. 曲輪2・9の盛土状況
（南西から）



19. 曲輪2
南東斜面盛土断面
〔断面20〕（南西から）
版築状に盛土している。



20. 曲輪11南東斜面盛土断面〔断面28〕（北東から）
地山部分を階段状に成形した後に盛土している。



21. 瀬戸鉄釉鳥形水滴〔曲輪2出土〕

序 文

佐保栗栖山砦跡は、茨木市の中央部に位置する戦国時代の山城です。

この山城は大阪平野を見下ろす尾根先端部に位置し、東側には亀岡と大阪を結ぶ清坂街道があり、当時の交通の要衝として重要な場所に築かれていたことがうかがわれます。この北摂地域は大小、多くの山城・砦が分布しています。特に、東に位置する芥川山城は三好長慶が城主となった時、畿内政治の中核となっており、また、織田信長の摂津侵攻にも係わった重要な山城です。このような位置におかれた当砦跡は史料には登場しませんが、調査以前からその存在が地元の人々や城郭研究者に知られておりました。

このたび、佐保栗栖山砦跡を含めた茨木市と箕面市にかけて、国際文化公園都市(彩都)の土地区画整理事業が進められることとなり、当センターがその建設に先立って発掘調査を行ってきました。その後の整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査の結果、人工的に造り出された平坦地である曲輪・堀・土塁・建物跡・石積などが検出され、さらに、現在見えている姿になるまで、幾段階かの造り替えがあったことも明らかになりました。また、山城造成のために、どの部分を削り、どの部分に盛土したか、その盛土方法など、土木技術が明らかになったことは、地表面観察ではまったくわからなかったことであり、発掘調査による多大な成果です。

この調査は、当地域の歴史にとどまらず、全国の中世山城研究にとって、貴重な資料となるものと確信されます。

最後に発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、都市基盤整備公団関西支社、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会に深く感謝して序の言葉といたします。

2000年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は国際文化公園都市特定土地地区画整理事業に伴う佐保栗栖山砦跡（さほくるすやま とりであと）発掘調査報告書である。なお、佐保栗栖山砦跡は大阪府茨木市佐保字クルスに所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが都市基盤整備公団の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は1997年11月4日から1999年4月15日まで、整理作業は1999年4月16日から2000年6月30日まで実施した。なお、発掘調査と整理作業は砦跡南側に位置する栗栖山南墳墓群と並行して行い、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第57集『栗栖山南墳墓群』2000.11が同時に刊行されている。
4. 発掘調査・整理作業ならびに本報告書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施し、北部調査事務所が所管した。発掘調査は北部調査事務所長藤田憲司、調査第2係長金光正裕の指示の下、調査第2係主査森屋美佐子、技師市本芳三、専門調査員瀬戸哲也・福島正和が担当した。本書作成に関わる整理作業は北部調査事務所長藤田憲司（2000年度小野久隆）、調査第2係長金光正裕の指示の下、主査森屋（2000年度係長）、技師市本、専門調査員瀬戸が行い、主査上野貞子が写真を担当した。出土品の保存処理は中部調査事務所主査山口誠治、専門調査員立花るりこ、非常勤職員水取康人が行った。また、報告書執筆には北部調査事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。
5. 各分析について、以下の方々に依頼し、原稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。
佐保栗栖山砦の縄張りとは遺構 村田修三（大阪大学）
窯1の熱残留考古地磁気年代測定 前中一晃・尾上忍（花園大学）
窯1・焼土坑41の放射性炭素年代測定 (株)地球科学研究所
6. 発掘調査および整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏に御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、団体五十音順）。
森岡秀人（芦屋市教育委員会）、免山篤（茨木市文化財愛護会）、小笠原健一郎（(財)岩手県文化振興事業団）、小林義孝・森屋直樹（大阪府教育委員会）、川口宏海（大手前女子学園）、福島克彦（大山崎町歴史資料館）、乗岡 実（岡山市教育委員会）、佐藤亜聖（(財)元興寺文化財研究所）、百瀬正恒（(財)京都市埋蔵文化財研究所）、伊野近富・森島康雄（(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館）、稲垣正宏・大崎哲人（(財)滋賀県文化財保護協会）、高田 徹（織豊期城郭研究会）、古川久雄（摂陽文化財調査研究所）、藤井重夫（築城史研究会）、鋤柄俊夫（同志社大学歴史資料館）、遠藤啓輔（奈良大学）、山上雅弘（兵庫県教育委員会）、岡村道雄・坂井秀弥（文化庁）、中井 均（米原町教育委員会）、山川 均（大和郡山市教育委員会）、大阪府立中之島図書館、織豊期城郭研究会、城郭談話会、中世土器研究会、
7. 発掘調査および整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た（五十音順）。
－発掘調査－
間野静雄・石黒智美・小島祥美・小牧健太郎・近藤千恵・清水 哲・瀧本勇一・立岩美津子・椿 浩人・長本 幹・藤村 俊・三木麻衣子・横山雅之

－整理作業－

今田明子・近藤千恵・酒井 貢・立岩美津子・津田春子・長本 幹・波岸初美・二宮栄子・野口佳子・前田千津子・八十千里

8. 本調査に関わる遺物・写真・カールスライド・実測図等は(財)大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。また、普及資料課において発掘調査記録映画『佐保栗栖山砦跡・中世墓群の発掘調査－「戦国時代のとりで」と「村人の墓」』(16mm フィルム・VHS ビデオテープ)を作成した。広く利用されることを希望する。
9. 表紙の揮毫は当センター総務部 白橋鐘道による。

凡 例

1. 挿図の縮尺は各図のスケールに縮尺率を明示しているので参照されたい。
2. 遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値である。他に大阪湾平均海面(O.P.)もあり、両者のレベル差は、 $T.P. \pm 0 \text{ m} = O.P. + 1.3\text{m}$ である。
3. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第IV座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた方位の矢印の方向はいずれも座標北を示す。座標の記載はすべて m 単位とする。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ}12'$ 、磁北が西へ $6^{\circ}40'$ 振っている。
4. 遺構図における断面位置および見通し位置は図面上に「L」形によってその位置を明記した。
5. 挿図および写真図版における遺物番号は各挿図内で完結する番号を付与している。
6. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本としている。それぞれの縮尺率は、各スケールに明示している。
7. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
8. 本書の執筆については目次に記した。また、編集は市本が行った。

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言・凡例

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査に至る経過 …………… (森屋美佐子) …………… 1

第2節 発掘調査の方法 …………… (市本芳三) …………… 4

第2章 位置と環境

第1節 自然環境 …………… (瀬戸哲也) …………… 6

第2節 歴史環境 …………… (瀬戸) …………… 7

第3節 佐保栗栖山砦跡をめぐる歴史的背景

1. 16世紀摂津地域の歴史的動向 …………… (市本) ……………10

2. 主要城郭の動向 …………… (市本) ……………11

第3章 調査の概要 …………… (市本) ……………15

第4章 砦跡の遺構・遺物

第1節 遺構

1. 曲輪1 …………… (市本) ……………21

2. 曲輪9 …………… (市本) ……………27

3. 曲輪2 …………… (市本) ……………27

4. 曲輪3 …………… (市本) ……………35

5. 曲輪8 …………… (市本) ……………40

6. 曲輪5 …………… (市本) ……………40

7. 曲輪6 …………… (市本) ……………44

8. 曲輪10 …………… (市本) ……………44

9. 曲輪4 …………… (市本) ……………46

10. 曲輪7 …………… (市本) ……………48

11. 曲輪11 …………… (市本) ……………48

12. 曲輪12~14 …………… (市本) ……………48

13. 竪堀1・2 …………… (市本) ……………49

14. 竪堀3 …………… (市本) ……………49

15. 盛土・切土 …………… (市本) ……………49

第2節 遺物

1. 土器・石製品 …………… (市本) ……………61

2. 金属製品 …………… (市本) ……………68

3. 銭貨 …………… (福島正和・市本) ……………71

第5章 砦以前の遺構・遺物	
第1節 遺構	(市本) ……72
第2節 遺物	(市本) ……72
第6章 基礎分析	
第1節 構造と変遷	
1. 石積・石敷・石段	(市本) ……74
2. 出入り口ー虎口	(市本) ……75
3. 堀・土塁	(市本) ……75
4. 曲輪内施設ー建物・土坑・落ち込み・溝	(市本) ……75
5. 変遷	(市本) ……76
6. 小結	(市本) ……78
第2節 曲輪の築造方法	
1. 切土・盛土	(市本) ……80
2. 土量の計算	(市本) ……80
3. 土量からの検討	(市本) ……83
4. 小結	(市本) ……83
第3節 出土遺物の検討	
1. 土器	(市本) ……84
2. 金属製品	(市本) ……86
3. 石製品・他	(市本) ……86
4. 土壁	(市本) ……87
5. 遺物の分布・出土量・器種構成	(市本) ……89
6. 小結	(市本) ……92
第4節 窯1の熱残留考古地磁気年代測定	
1. はじめに	(前中一晃・尾上忍) ……93
2. 試料の測定手順	(前中・尾上) ……93
3. 帯磁率の測定	(前中・尾上) ……93
4. 残留磁気測定結果	(前中・尾上) ……93
5. 残留磁化方向測定の結果	(前中・尾上) ……94
6. 考察	(前中・尾上) ……96
第5節 窯1・焼土坑41の放射性炭素年代測定	(株)地球科学研究所) ……98
第7章 総括	
第1節 佐保栗栖山砦跡の調査成果	
1. 構造・変遷	(市本) ……100
2. 築城主体について	(市本) ……101
3. 最後に	(市本) ……102
第2節 佐保栗栖山砦跡以前の調査成果	(市本) ……103
付章 佐保栗栖山砦の縄張りと言構	(村田修三) ……104

挿図目次

- 図1 国際文化公園都市全体図
- 図2 佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群調査位置図
- 図3 国土座標系とそれによる地区割り
- 図4 トレンチ配置と地区割り
- 図5 周辺地質図
- 図6 周辺主要遺跡分布図
- 図7 周辺の中世城郭と街道
- 図8 東攝城址図誌 佐保砦跡
- 図9 調査前の地形
- 図10 調査前縄張り図(村田修三先生作成)
- 図11 佐保栗栖山砦跡全体図
- 図12 曲輪 1・9
- 図13 曲輪 1 建物 1
- 図14 曲輪 1 石組 1
- 図15 曲輪 1 石積 2
- 図16 曲輪 1 通路 5
- 図17 曲輪 9 石積 1・土層断面 2
- 図18 曲輪 2
- 図19 曲輪 2 建物 2
- 図20 曲輪 2 ピット 49・84
土坑 7～9・13・15・16・39
- 図21 曲輪 2 出入口 1
- 図22 曲輪 2 石積 3～5
- 図23 曲輪 2 石積 3～5 土層断面(断面 9～10)
- 図24 曲輪 2 石積 4・5 下層ピット 104～109
- 図25 曲輪 2 土坑 7・39・40、落ち込み 2
- 図26 曲輪 3
- 図27 曲輪 3 建物 3・集石 1・土坑 17～20
- 図28 曲輪 2・3 間 通路 6
- 図29 曲輪 3・4 間 通路 7・8
- 図30 通路 7 土層断面(断面 19)
- 図31 曲輪 8・通路 10～13
- 図32 曲輪 5・6
- 図33 曲輪 5 ピット 75・91・97・100～102、溝 3・4、
土坑 26～28・30・32・34・37
- 図34 曲輪 5 集石 2
- 図35 曲輪 4 石積 10 土層断面
- 図36 曲輪 4 石積 10
- 図37 曲輪 10 石積 7・8
- 図38 曲輪 4・7・11、竪堀 3、土塁 3
- 図39 曲輪 12～14
- 図40 竪堀 1・2
- 図41 竪堀 1 断面
- 図42 竪堀 2 断面
- 図43 切土・盛土分布図
- 図44 曲輪 3 盛土造成以前地山状況
- 図45 土層断面 1・5・7・8・12
- 図46 土層断面 6
- 図47 土層断面 13・21
- 図48 土層断面 15・16・18
- 図49 土層断面 25～27
- 図50 土層断面 23・24・28～30
- 図51 土層観察断面配置図
- 図52 曲輪 1 出土遺物
- 図53 曲輪 2 出土遺物
- 図54 曲輪 2 出土遺物
- 図55 曲輪 3 出土遺物
- 図56 曲輪 4・5 出土遺物
- 図57 曲輪 5 土坑 26 出土遺物
- 図58 曲輪 6～12、竪堀 2・3、通路 4・9・13 出土遺物
- 図59 曲輪 盛土内出土遺物
- 図60 出土金属製品
- 図61 出土銭貨
- 図62 砦以前出土遺物
- 図63 窯 1・2、焼土坑 41
- 図64 遺構変遷図
- 図65 佐保栗栖山砦跡復原図
- 図66 盛土部分断面推定図
- 図67 他城郭盛土土量計算
- 図68 土師器皿のタイプ

- 図69 土壁の分析
 図70 遺物出土分布図(1)
 図71 遺物出土分布図(2)
 図72 窯1の試料の交流消磁直交消磁図

- 図73 西南日本の永年変化曲線
 図74 カーボン年代測定結果
 図75 佐保栗栖山砦跡全体図

挿図写真目次

- 写真1 現地説明会風景
 写真2 現地説明会資料
 写真3 栗栖山南墳墓群（古墳）
 写真4 栗栖山南墳墓群（中近世墓）

表目次

- 表1 佐保栗栖山砦跡土量計算表
 表2 佐保栗栖山砦跡土器組成
 表3 中世山城土器組成比較
 表4 中世山城貿易陶磁器組成比較
 表5 窯1焼土試料の帯磁率・残留磁化の強さ・その相対比
 表6 窯1の試料の残留磁化測定結果
 表7 掲載遺物一覧(1)
 表8 掲載遺物一覧(2)
 表9 掲載遺物一覧(3)
 表10 掲載遺物一覧(4)
 表11 掲載遺物一覧(5)
 表12 掲載鉄釘一覧
 表13 掲載金属製品一覧
 表14 掲載銭貨一覧
 表15 遺構一覧(1)
 表16 遺構一覧(2)
 表17 遺構一覧(3)

巻頭カラー図版目次

1. 全景（東から）
 2. 遠景（南から）
 3. 全景（北から）
 4. 全景（北東から）
 5. 全景（北西から）
 6. 全景（北東から）
 7. 曲輪1・9と石積1（南から）
 8. 土壁〔曲輪1出土〕
 9. 火熱を被った曲輪1平坦面（北から）
 10. 曲輪2全景（南西から）
 11. 出入口1（北西から）
 12. 出入口1（北西から）
 13. 石積3〔曲輪12〕（北西から）
 14. 曲輪3全景（北東から）
 15. 通路7・8（南から）
 16. 曲輪5全景（南西から）
 17. 石積10（南東から）
 18. 曲輪2・9の盛土状況（南西から）
 19. 曲輪2南東斜面盛土断面〔断面20〕（南西から）
 20. 曲輪14南東斜面盛土断面〔断面28〕（北東から）
 21. 瀬戸鉄釉鳥形水滴〔曲輪2出土〕

写真図版目次

- 図版1 周辺航空写真 (1961年撮影)
- 図版2 佐保栗栖山砦跡調査前
1. 曲輪3から曲輪1・2・9を望む (南西から)
 2. 曲輪1から曲輪2、通路3・4を望む (東から)
 3. 曲輪2から出入口1・通路4を望む (南西から)
 4. 曲輪1から曲輪2・3を望む (北東から)
- 図版3 佐保栗栖山砦跡調査前
1. 曲輪2から曲輪8、通路11・13を望む (北から)
 2. 曲輪3から曲輪4・7・11、土塁3を望む (北東から)
 3. 竪堀1 (北西から)
 4. 石積10 (北東から)
- 図版4 佐保栗栖山砦跡 全景
1. 全景 (北西から)
 2. 全景 (西から)
 3. 全景 (南から)
- 図版5 曲輪1
1. 曲輪1・9全景 (南西から)
 2. 建物1全景 (南西から)
- 図版6 曲輪1
1. 石積2 (西から)
 2. 石組1 (南西から)
 3. 通路5 (南西から)
- 図版7 曲輪9
1. 全景 (西から)
 2. 石積1 (南西から)
- 図版8 曲輪9 石積1
1. 石積1西半 (南から)
 2. 石積1東半 (南東から)
- 図版9 曲輪9 石積1
1. 石積1裏込め状況 (南西から)
 2. 石積1裏込め状況 (南西から)
 3. 石積1裏込め状況 (南西から)
 4. 石積1最下段検出状況 (南西から)
 5. 石積1最下段検出状況 (南西から)
 6. 石積1最下段検出状況 (南東から)
- 図版10 曲輪2
1. 南半全景 (北東から)
 2. 北半全景 (南西から)
- 図版11 曲輪2
1. 建物2 (南西から)
 2. ピット49 (南から)
 3. 土坑16 (南西から)
 4. 土坑8小柄出土状況
- 図版12 曲輪2
1. 落ち込み2 (東から)
 2. 出入口1、通路4 (北東から)
 3. 溝1 (南西から)
 4. 溝1埋土 (北東から)
- 図版13 曲輪2 出入口1、通路4
1. 出入口1、通路4全景 (北東から)
 2. 出入口1、通路4 (東から)
 3. 石積3 (北西から)
 4. 石積3裏込め状況 (南西から)
- 図版14 曲輪2 出入口1、通路4
1. 石積4 (北西から)
 2. 石積5、通路4 (東から)
 3. 石積4・5直交部分 (西から)
 4. 通路4石敷 (北から)
- 図版15 曲輪8、通路3・4・10~13
1. 通路3・4 (北東から)
 2. 通路3・4 (北西から)
 3. 曲輪8、通路10・11・13 (北東から)
 4. 曲輪8、通路10~12 (北から)
- 図版16 曲輪3・10、通路7・8
1. 曲輪3・10全景 (南東から)
 2. 通路7・8石段 (南東から)

図版17 曲輪3、通路7・8

1. 建物3 (北から)
2. 通路7 石段1 (南東から)
3. 通路8 石積9 (南西から)

図版18 曲輪3・6・10、通路7

1. 通路7 石段2掘方 (西から)
2. 曲輪3 石列1 (南から)
3. 曲輪3 集石1 (南西から)
4. 曲輪6 石積8 (南から)
5. 曲輪6 石積8 (南西から)
6. 曲輪10 石積7 (南東から)

図版19 曲輪5・6

1. 曲輪6 (西から)
2. 曲輪5 (南西から)
3. 曲輪5 (北東から)
4. 曲輪5 (西から)

図版20 曲輪5

1. 集石2 (南から)
2. 土坑26 (東から)
3. 土坑27 (北西から)

図版21 曲輪4 石積10

1. 石積10全景 (北東から)
2. 石積10 (南東から)
3. 石積10裏込状況 (北東から)
4. 石積10最下段 (北東から)

図版22 曲輪4・7・11~14、土塁3

1. 曲輪4・7・11、土塁3 (東から)
2. 曲輪4・7・11、土塁3 (北東から)
3. 曲輪11 (北東から)
4. 曲輪12~14 (北から)

図版23 曲輪12~14、通路14

1. 曲輪12 (北西から)
2. 曲輪13、通路14 (西から)
3. 曲輪13 (東から)
4. 曲輪14 (東から)

図版24 竪堀1、土塁1

1. 竪堀1 (南東から)
2. 竪堀1、土塁1断面 (東から)

3. 竪堀1頂上部 (東から)
4. 竪堀1、土塁1 (北から)

図版25 竪堀1・2

1. 竪堀2 (南東から)
2. 竪堀2〔通路3分断部分〕(西から)
3. 竪堀1・2頂上部断面 (北西から)
4. 竪堀2断面 (北西から)

図版26 竪堀3

1. 竪堀3 (西から)
2. 竪堀3 (北西から)
3. 竪堀3頂上部 (南東から)
4. 竪堀3断面 (北西から)

図版27 曲輪1 堆積土・盛土

1. 曲輪1平坦面堆積土〔断面2〕(西から)
2. 曲輪1平坦面堆積土〔断面2〕(西から)
3. 曲輪1南東斜面盛土〔断面1〕(南西から)
4. 曲輪1南斜面堆積土・盛土〔断面2〕(南西から)

図版28 曲輪9 堆積土・盛土

1. 曲輪9盛土〔断面3・4〕(東から)
2. 曲輪9盛土〔断面2~4〕(西から)
3. 曲輪9石積1盛土〔断面2〕(南西から)
4. 曲輪1南斜面~曲輪9堆積土・盛土〔断面2〕(南西から)

図版29 曲輪2・3 堆積土・盛土

1. 曲輪2東端堆積土〔断面8〕(西から)
2. 曲輪3北斜面・曲輪2南端〔断面8〕(南東から)
3. 曲輪2南東斜面盛土〔断面7〕(南西から)
4. 曲輪2南東斜面盛土〔断面5〕(南西から)

図版30 曲輪2 盛土、下層遺構

1. 曲輪2南東斜面盛土〔断面5~7〕(北東から)
2. 曲輪2南東斜面盛土〔断面6〕(北東から)
3. 曲輪2石積3盛土〔断面9〕(北から)
4. 曲輪2石積4・5下層ピット104~109 (東から)

図版31 曲輪2・3・8、通路9 盛土

1. 曲輪2南東斜面、通路10堆積土・盛土

- 〔断面6〕(南から)
2. 曲輪8盛土〔断面6〕(北東から)
 3. 曲輪3・通路9盛土〔断面14~18〕(北から)
 4. 曲輪3盛土〔断面15〕(北東から)
- 図版32 曲輪3・5・10 盛土
1. 曲輪3南斜面、曲輪10盛土〔断面19~22〕
(南から)
 2. 曲輪3盛土〔断面21〕(東から)
 3. 曲輪5盛土〔断面26・27〕(西から)
 4. 曲輪5盛土〔断面27〕(北東から)
- 図版33 曲輪4・5・14 盛土
1. 曲輪5盛土〔断面25〕(西から)
 2. 曲輪4盛土〔断面23〕(北東から)
 3. 曲輪14盛土〔断面28〕(南西から)
 4. 曲輪14盛土〔断面28〕(南西から)
- 図版34 窯1・2、焼土坑41
1. 窯1(南から)
 2. 窯1奥壁(南東から)
 3. 窯2(南東から)
 4. 窯2煙道(東から)
 5. 窯2煙道断面(東から)
 6. 焼土坑41(南東から)
- 図版35 曲輪1・2 出土土器
- 図版36 曲輪1・2 出土土器
- 図版37 曲輪2・3・5 出土土器
- 図版38 曲輪4・5・8 出土土器・石製品
- 図版39 曲輪8・9、各曲輪盛土出土土器
- 図版40 盛土・遺構出土土器、金属製品
- 図版41 金属製品
- 図版42 金属製品

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査の経過

佐保栗栖山砦跡および栗栖山南墳墓群の発掘は、住宅・都市整備公団（1999年度より都市基盤整備公団）による『国際文化公園都市特定土地地区画整理事業』に伴う発掘調査事業である。

国際文化公園都市は、箕面市および茨木市にまたがる北摂丘陵に所在し、おおよそ、茨木川以東の東部・府道1号線および茨木川間の中部・府道1号線以西の西部の三地域に区分される。総面積742.2haにおよぶ。

これらの事業地内は、遺跡の分布がほとんど知られていなかったために、1993年度から3年間に渡り分布調査が行われ、その後、分布図を基に試掘調査が数年度にわたり、行われた。その結果、中部地区においては、遺物がわずかに出土したものの遺構は皆無で、西部地区では粟生間谷遺跡・徳大寺遺跡・宿久庄西遺跡・粟生岩阪遺跡・粟生岩阪北遺跡、東部地区では佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群・福井北古墳群・佐保遺跡・椿木北石切場跡の10箇所の遺跡が確認された。

本調査は、1995年から2000年度にかけて数次に渡り粟生間谷遺跡の発掘調査が行われ、その間、粟生岩阪遺跡・粟生岩阪北遺跡・徳大寺遺跡・宿久庄西遺跡の調査が行われ、終了している。

なお、粟生岩阪遺跡および徳大寺遺跡に関しては、すでに報告書が刊行されている。

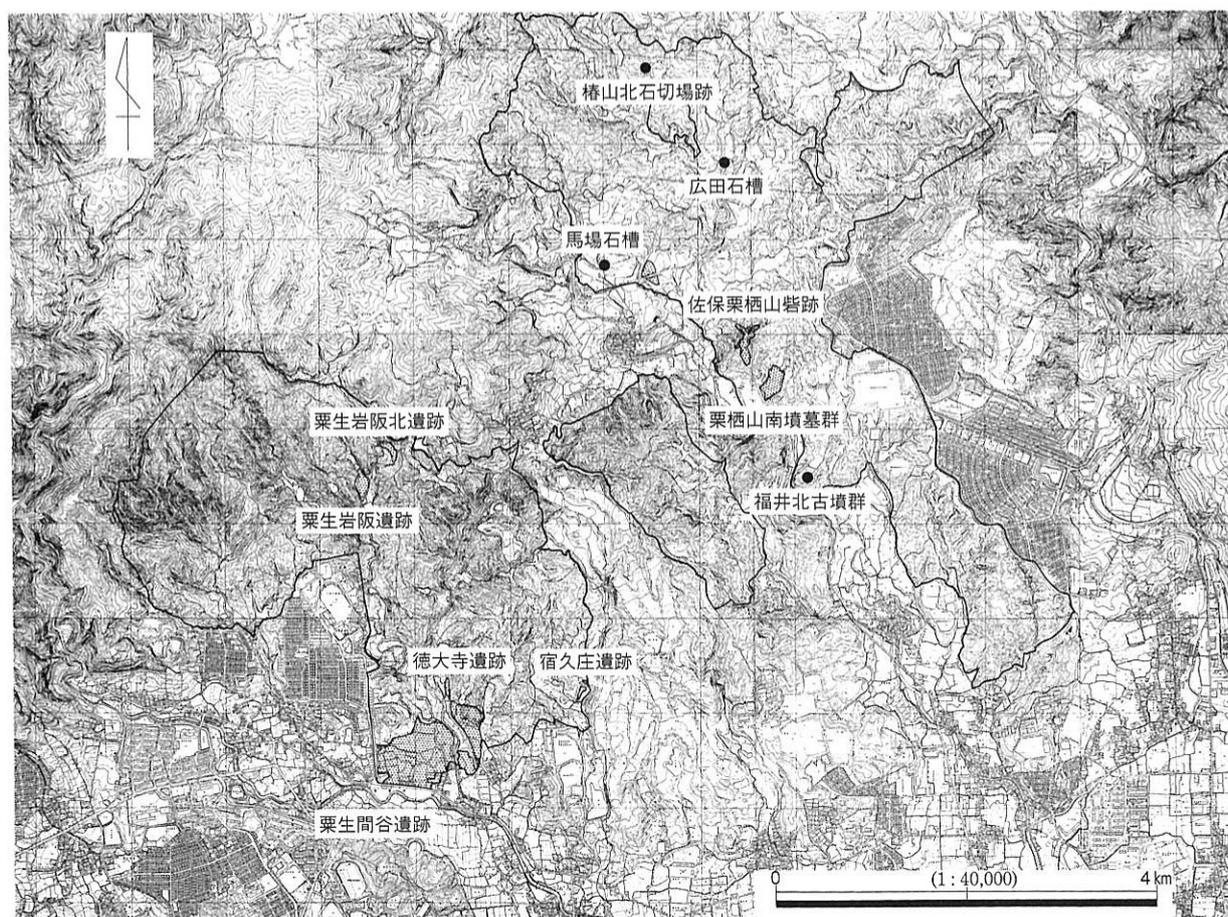


図1 国際文化公園都市全体図

佐保栗栖山砦跡および栗栖山南墳墓群は東部地区の佐保字クルスに所在し、従前より、遺跡であることが知られていた。砦跡に関しては、『日本城郭大系』（1981 新人物往来社）にも掲載されている。また、数カ所の曲輪や豎堀および土塁の存在が現況で確認されているが、その実態は不明な点が多々見受けられた。また、栗栖山南墳墓群に関しては、現況で石仏が数体露出しており、地元の方々が参拝している痕跡が見受けられた。この墳墓群は、1967年に南側のグラウンド造成に先立って、茨木市教育委員会により一部が発掘調査され、『栗栖山中世墓』として1970年に報告書が刊行されている。さらに、地元の要望により、1996年度に住宅・都市整備公団により27体の石仏が馬場共同墓地に移転されている。

当遺跡は、大阪府教育委員会の指導の下、1996年度に試掘調査および石造物の分布調査が行われ、本調査の範囲が確定された。本調査は、1997年11月から1999年5月まで行われた。

調査は、2カ所に分断されるために砦跡をB地区、墳墓群をA地区と称し、それぞれを8区分および6区分している。

この間、調査成果の早期公開として、中世墓および砦跡に関しては、それぞれに現地説明会（1998年8月8日・1999年1月23日）を行い、古墳群に関しては、現地公開（1999年2月27日）を行っている。

遺物整理事業に関しては、1999年4月から開始され、2000年6月までの期間に行われた。本報告書印刷に関しては、2000年度に実施した。

なお、遺跡の性格上、砦跡と南墳墓群は別冊としている。

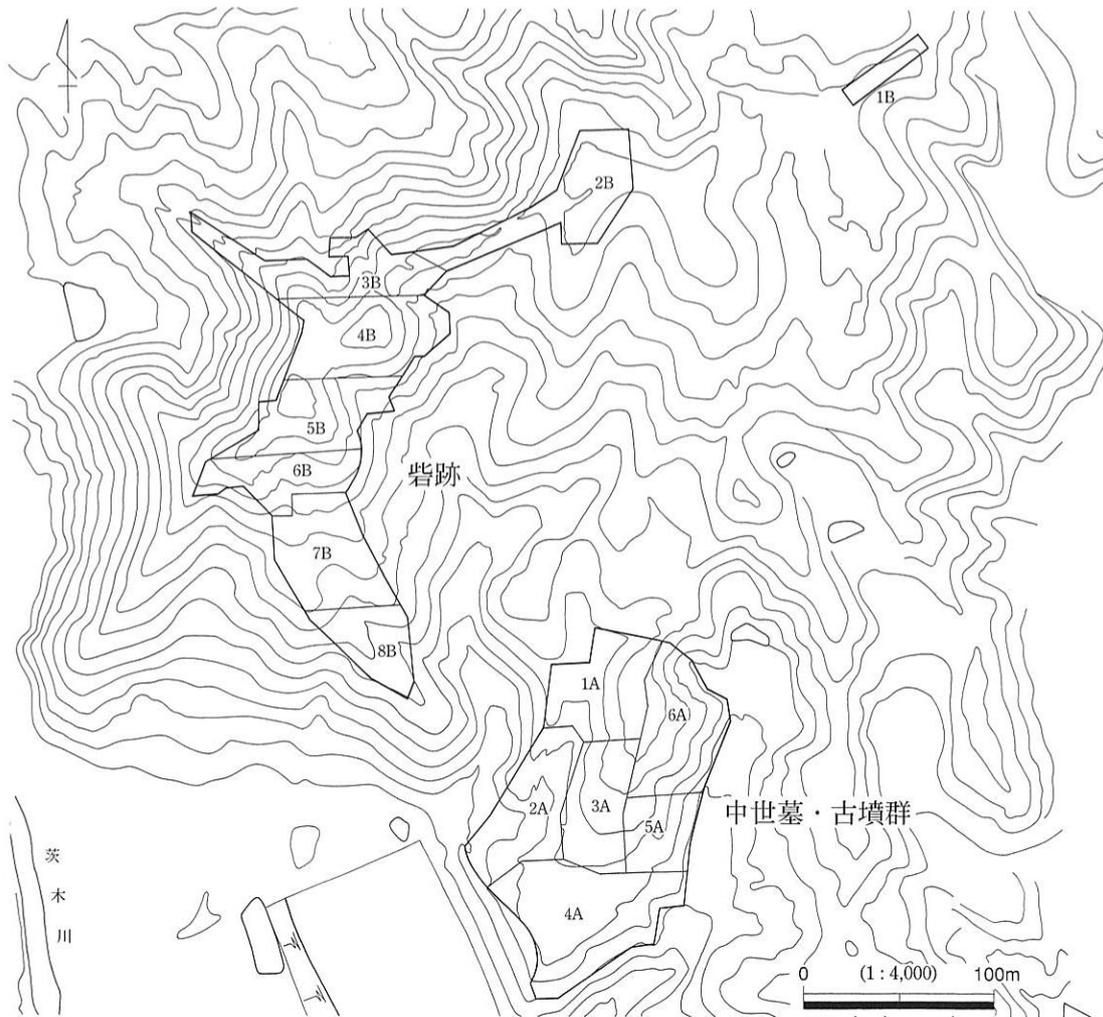


図2 佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群調査位置図



写真1 現地説明会風景



写真2 現地説明会資料

第2節 発掘調査の方法

砦跡と墳墓群の調査は墳墓群を先行させ、砦跡地区は1998年7月より掘削に入った。調査区は1Bトレンチから8Bトレンチに分割して行った。1B・7B・8Bトレンチに関してはサブトレンチを設定し、遺構・遺物の拡がりを確認した結果、サブトレンチのみで調査を完了した。

調査面積は12,392m²を測る。樹木を伐開し、腐植土、流出土を掘削し、測量後、各部分の造成盛土を掘削した。流出土と盛土を確認するために各所にサブトレンチを先行して設置した(図51)。

遺構平面と石積立面の実測は写真測量を行い、平面図は1/20、1/50とそれらを縮小編纂した1/100を、立面図は1/20を作成している。また、必要に応じて平面図、断面図を作成した。

区割については国土座標を基準線とした地区割りを利用し、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準ラインとした。これは、国土座標軸の第VI座標系を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で絶対的な遺構の位置、遺物の出土地点を示すことができるものである。

地区割りは図3のように第I区画から第IV区画の単位がある。第I区画は1万分の1地形図の地区割りを使用し、東西8km×南北6kmの範囲を示す。第II区画は2,500分の1地形図を使用し、東西2.0km×南北1.5kmの範囲を示す。第III区画は第II区画を東西に20分割、南北に15分割し、100m四方の範囲とする。第IV区画は第III区画を東西、南北共に10分割し、10m四方の範囲としたものである。

佐保栗栖山砦跡の調査範囲は第I区画がL-5,K-5、第II区画が4,16、第III区画がO15~O18・A16~A18である。

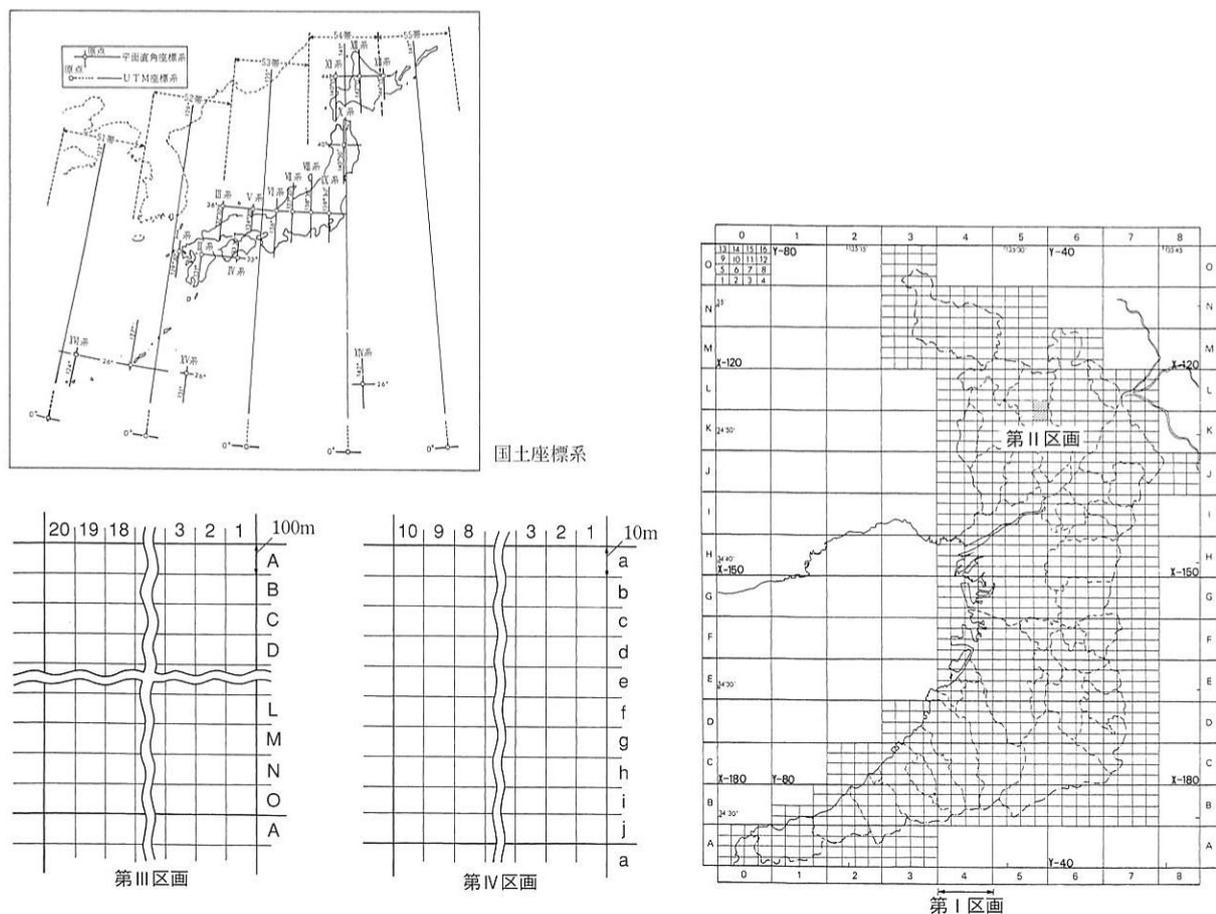


図3 国土座標系とそれによる地区割り

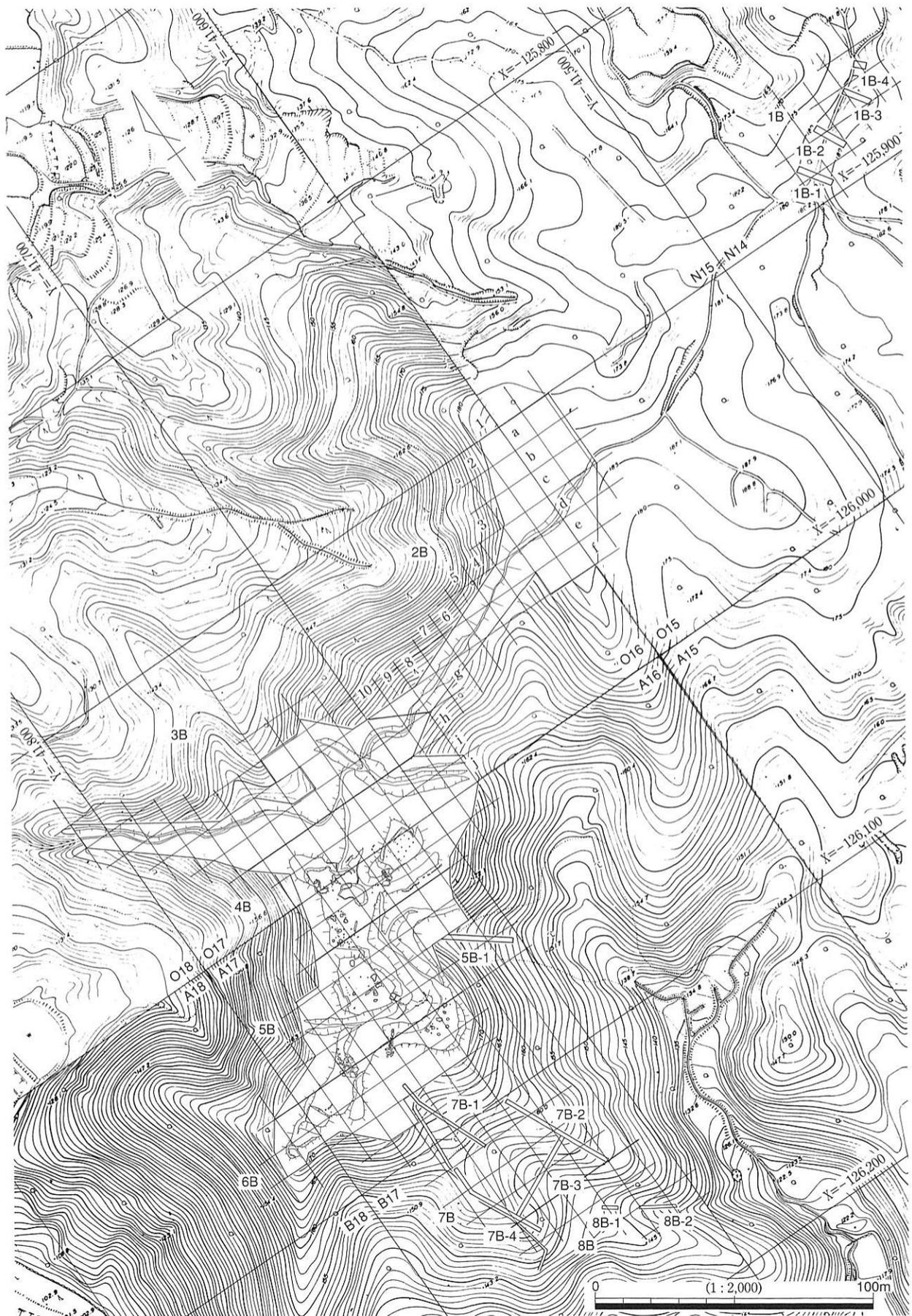


図4 トレンチ配置と地区割り

第2章 位置と環境

第1節 自然的環境

佐保栗栖山砦跡は、大阪府北部の茨木市佐保字クルスに所在する。当遺跡は、茨木市域北部に広がる北摂山地の南端にあたり、遺跡の西側は茨木川が蛇行している。

茨木川は、その支流である勝尾寺川、佐保川を合わせて南下し、三島平野を南下する安威川に合流する河川である。しかし、現在の茨木川は、1937(昭和12)年に、天井川化による氾濫を防ぐために、付け替えられたものである。茨木川の流れる北摂山地は、東を京都盆地の西端に、西は六甲山地まで、南を大阪平野に接し、北は亀岡盆地の南縁部に至る部分の山地の総称である。

北摂山地を地質学的に見ると、丹波帯と呼ばれる古生代末から中生代前半に堆積した泥岩・砂岩などから構成される部分と、中生代白亜紀頃の花崗岩類(茨木複合花崗岩体)から構成されている。茨木複合花崗岩体は、南北2岩体に区分され、南側は能勢岩体、北側は妙見岩体と呼ばれている。当遺跡から北側は能勢岩体であり、石英閃緑岩・花崗閃緑岩・細粒斑状花崗岩から構成されている。これらのうち主体をなす花崗閃緑岩は、粗粒花崗閃緑岩と、斑状花崗閃緑岩に区分される。当調査区では、粗粒花崗

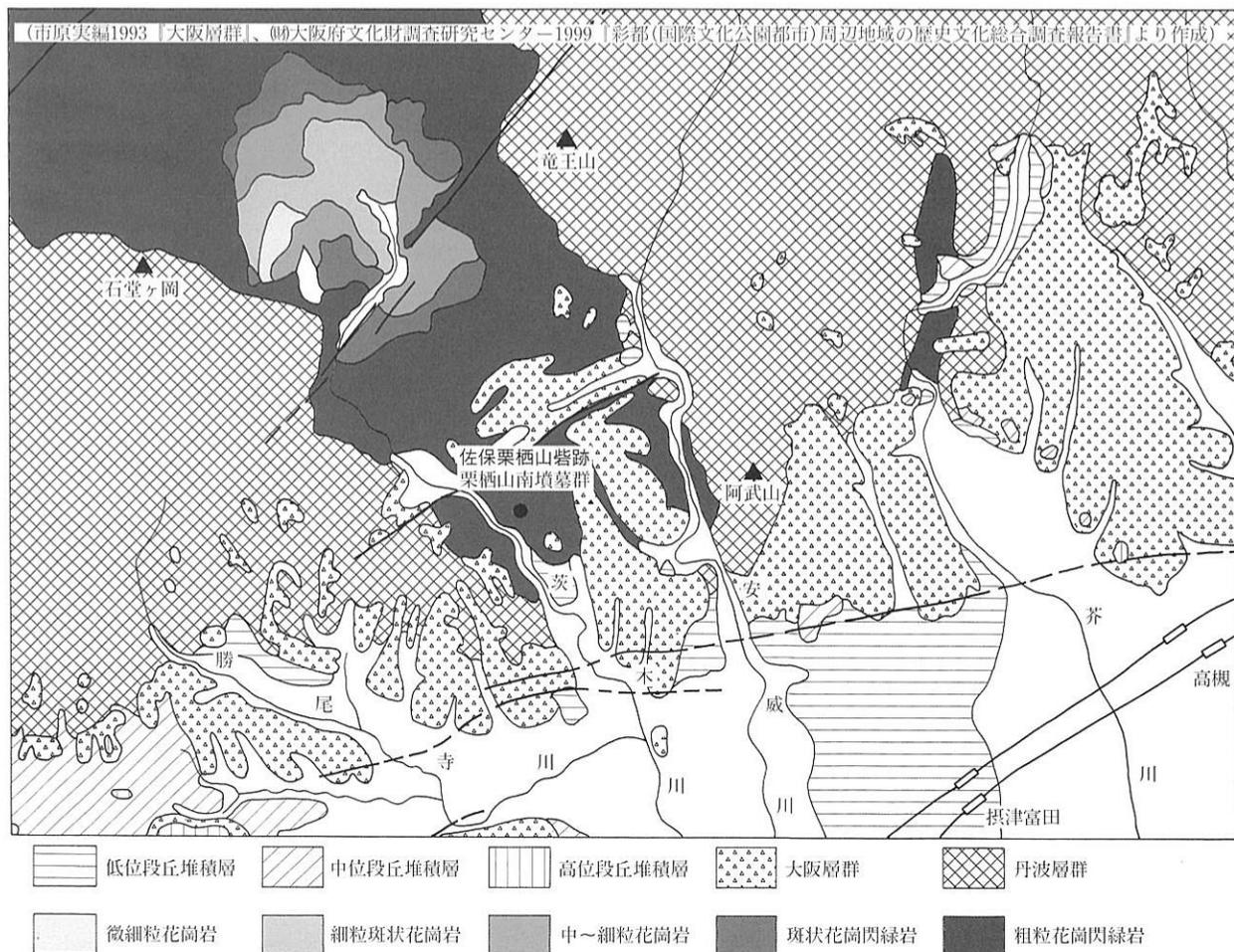


図5 周辺地質図(縮尺 1:80,000)

閃緑岩の巨石が見られ、また、当砦跡の礎石や石積の大部分は粗粒花崗閃緑岩である。

砦跡は、茨木川へ向かう北東から南西方向に伸びる尾根の頂部から先端部に位置しており、北斜面と西斜面が急峻、南側は緩やかになっている。南東方向には谷を挟んで平行して尾根があり、その頂部をやや下った中腹部には、同時に調査を実施した古墳群と中近世墓群が検出された栗栖山南墳墓群が存在する。また、谷およびこの尾根と茨木川の間は沖積層で形成されており、棚田が造成されている。尾根筋を北東に下れば国見峠に至り、丹波方面へ向かうことができる。西北西約600mには現在の馬場の集落があり、佐保、泉原へ抜け出る。また、茨木川を下流に向かうと、福井の集落そして三島平野が広がる。

第2節 歴史的環境

佐保栗栖山砦跡は、今回の調査で、15世紀中葉から末に存在した山城であることが判明した。また、10世紀の炭窯、遺構は伴わないが6～8世紀の須恵器も出土している。そこで、当砦跡の理解を深めるために、三島地域、特に茨木市北部を中心に周辺の歴史的環境について若干触れてみたい。

周辺における最古の人類の活動は、後期旧石器時代に遡る。太田・耳原・安威・郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層からナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している。また、津之江南・郡家今城遺跡や粟生間谷遺跡では、礫群を含む石器製作跡が検出されている。

縄文海進により、三島平野の大部分が海底下になるため、縄文時代の遺跡は絶対的には少ない。しかし、晩期の遺跡は最近の開発に伴う調査により増加している。代表的な遺跡としては、晩期の甕棺墓16基が検出された耳原遺跡、晩期の井堰・水田が検出された牟礼遺跡が挙げられる。山麓部では、西福井・太田・粟生間谷遺跡などで縄文土器が出土している。

弥生時代前期になると、安満・東奈良・目垣・耳原・郡遺跡などが形成される。特に東奈良遺跡は、安満遺跡と同じく北摂地域における代表的な拠点集落であり、鑄型の出土から銅鐸をはじめとする青銅器生産を担っていたことが判明している。中期および後期になると、安威川・佐保川・勝尾寺川の兩岸、丘陵部、山間部などに新たに集落が形成され、遺跡数の急増が認められる。天神山・見付山・太田・溝咋遺跡や高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などである。また、拠点集落である東奈良遺跡の周囲には中条小学校遺跡が、郡遺跡の周囲には中河原・倍賀・春日遺跡など小規模な集落が形成される。

古墳時代には、三島地域では数多くの古墳が築造され、現在約350基が確認されている。これらは、水系ごとにいくつかのグループにまとめられ、造営主体の違いに由来すると考えられている。前期古墳は山麓部に営まれ、高槻市域では弁天山古墳群・安満宮山古墳、茨木市域北部に將軍山古墳・紫金山古墳・安威0、1号墳などが築造される。中期には、墓谷古墳群・尼ヶ谷古墳群や石山古墳・土保山古墳・番山古墳などの土室の古墳群などが築造される。土室の南東部に三島地域最大の規模を有する太田茶臼山古墳、また後期には継体天皇陵と考えられている今城塚古墳が築造される。また、埴輪窯である新池遺跡では、両古墳に埴輪を供給していたことが判明している。

後期には、横穴式石室を主体とする古墳が造られ、導入期の古墳として青松塚古墳が挙げられる。平野部には、南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳、横穴式木室を主体とする上寺山古墳が築造される。また山麓部には塚原古墳群・塚脇古墳群・塚穴古墳群・慈願寺古墳群・梶原古墳群・新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ淵古墳群・福井北古墳群・真龍寺古墳群などの群集墳が形成される。その後、終末期古墳としては、初田1・2号墳、中臣鎌足の墓の可能性も指摘されている阿武山古墳が挙げられ

る。当砦跡に隣接する栗栖山南墳墓群では7世紀の6基の古墳、その後の8～9世紀の火葬墓など古代の墓が検出されている。

古代には律令が施行され、高槻市が嶋上郡、茨木市が嶋下郡に相当する。嶋上郡の郡衙としては、郡家川西遺跡が確認されている。嶋下郡の郡衙は、郡遺跡あたりが想定されているが、確定されていない。この地域は、穂積氏、中臣氏系である中臣太連・中臣藍連・三宅氏などの有力氏族の本拠地だと考えられている。穂積廃寺・太田廃寺・三宅廃寺などの寺院が建立されているが、先の有力氏族との関係が言われている。中世の墓地でもある岡本山古墓群では、奈良・平安時代の火葬墓、木棺墓が検出されている。平安時代には、勝尾寺・忍頂寺・総持寺が建立されている。

中世になると、摂関家領およびその氏寺・氏神である興福寺領・春日社領の荘園が多く経営され、福井庄・安井庄・沢良宣庄・新屋庄・溝杭庄・垂水牧などがあつた。摂関家領以外では、仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄・造酒司領太田保・長講堂領溝杭庄・総持寺領寺辺領・中宮式領宿久庄などがある。仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄は、忍頂寺を中心に大門寺・大岩・佐保・泉原・銭原・音羽などを含む茨木市域北部にある。中世の集落としては、宮田・郡・総持寺・玉櫛・粟生間谷遺跡などが挙げられる。当砦跡に隣接する栗栖山南墳墓群では13世紀後半から16世紀まで続く600基に及ぶ中世墓地、その後17世紀から19世紀にも20数基の墓が存在した。当地域は石造品が多く残されているところでもあり、佐保・八坂神社などの石槽や、国見八幡神社の文安三年(1446)銘五輪塔、忍頂寺の元享元年(1321)銘五輪塔が挙げられる。

中世末期には、戦乱が相次ぎ、三島地域にも多くの城が築かれる。芥川山城では細川春元、三好長慶、織田信長等といった名が記載された文献資料があり、非常に重要な城であったと考えられている。高槻城は、キリシタン大名の高山右近が城主であったこともあり、29基のキリシタンと思われる木棺墓も検出されている。そして、近世には、千提寺キリシタン遺跡や下音羽などでは、キリシタン墓碑などのキリシタン関係の遺物が発見されている。

参考・引用文献

市原実編 1993 『大阪層群』 創志社

茨木市史編纂委員会 1969 『茨木市史』

茨木市教育委員会 1998 『茨木の史跡』

高槻市史編纂委員会 1977 『高槻市史』第1巻本編I

高槻市教育委員会 1993 『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告第17冊



写真3 栗栖山南墳墓群(古墳)



写真4 栗栖山南墳墓群(中近世墓)

第3節 佐保栗栖山砦跡をめぐる戦国期の歴史的背景

1. 16世紀の北摂津地域の歴史的動向

明徳3年(1392)、将軍足利義満の時、南北朝が合一し、動乱の時代が終わった。しかし、南北朝の動乱の中で下克上の風潮はますます盛んになった。15世紀に入り、幕府内部でも細川氏と畠山氏との分裂があり、将軍の座を巡って足利氏自体も分裂していた。こうした中で、応仁元年(1467)に始まった応仁・文明の乱は文明9年(1477)に終結したが、抗争は強まって戦国時代へ入っていくこととなった。

明応2年(1493) 管領細川政元、将軍義材を廃して幕府の実権を握る。

細川政元の継嗣をめぐる分裂が起こる。関白九条政基の子澄元、一族の備中の細川政春の子高国、阿波の細川義春の子澄之の3人の養子を巡る争い。

永正元年(1504) 摂津国守護代薬師寺元一は政元を除いて澄元を擁立しようとするが、元一は淀城に亡びる。

永正2年(1505) 澄元が阿波から上洛。澄之と澄元の対立。澄之は丹波へ流される。

永正4年(1507) 澄之は摂津国守護代薬師寺長忠と結び、政元を殺害。澄元は甲賀へ逃亡。澄之、細川氏家督を継ぐが、澄元方の三好之長に襲われ、自害。

永正5年(1508) 澄元は高国に攻撃され、近江に逃亡。高国が管領を継ぎ、実権掌握。しかし、澄元の抵抗も続き、和泉・摂津で戦いが繰り返される。伊丹城主伊丹元扶は細川高国方につく。それに対し池田城主池田貞正は細川澄元方について反抗。

永正8年(1511) 和泉国深井合戦で高国方(反澄元)として池田・伊丹・三宅・茨木・安威・福井・太田・入江・高槻などの国人士豪が参加する。能勢頼則、芥川城主に。

永正16年(1519) 池田城・伊丹城他で細川澄元軍と細川高国が争う。

大永7年(1527) 阿波の三好元長が足利義維(前将軍足利義澄の次男)と細川晴元(細川澄元の子)を擁して、堺を拠点に、摂津で管領細川高国軍勢と戦い、勝利。丹波の柳本賢次は細川高国に反旗をひるがえし、高国方の山崎城・芥川城・太田城・茨木城・安威城・福井城・三宅城等は晴元方に落ち、高国は近江に逃れる。

享禄4年(1531) 高国が堺平定のため出陣。天王寺合戦で元長は高国を破り、高国は尼崎にて自殺。

享禄5年(1532) 三好元長と細川晴元が敵対関係へ。

天文元年(1532) 晴元と山科本願寺(一向宗徒)が元長を攻めて堺顕本寺において自害させる。間もなく晴元は一向一揆の強大化を恐れ一向宗と対立。

天文2年(1533) 晴元・茨木長隆が池田城へ。晴元、芥川城に入る。天文5年まで畿内政治の中心地となる。

天文8年(1539) 晴元は京都を追われ、三好長慶(三好元長の子)が芥川城入城するが和議により退城。六角定頼により摂取。薬師寺与一が城主に。

天文10年(1541) 木沢長政が晴元に反旗。芥川城を巡る攻防。

天文12年(1543) 鉄砲伝来。

天文15年(1546) 遊佐長教ら河内勢が芥川城を攻撃。

天文16年(1547) 芥川城開城。城主薬師寺元房から芥川孫十郎へ。



- | | | | | | |
|------------|------------------|-------------|-----------------|---------------|---------------|
| 1. 忍頂寺 | 2. 八坂神社の石槽 | 3. 泉原城跡 | 4. 泉原遺跡 | 5. 千堤寺キリシタン遺跡 | 6. 庄ノ本遺跡 |
| 7. 佐保城跡 | 8. 佐保の石槽 | 9. 国見遺跡 | 10. 大門寺古墳群 | 11. 霊仙寺 | 12. 片ヶ谷古墳群 |
| 14. 下ノ口古墳群 | 15. 塚穴古墳群 | 16. 塚脇古墳群 | 17. 宮之川原遺跡 | 18. 成合窯跡群 | 19. 芝谷古墳 |
| 21. 粟生岩阪遺跡 | 22. 粟生岩阪北遺跡 | 23. 佐保栗栖山砦跡 | 24. 栗栖山南墳墓群 | 25. 福井北古墳群 | 26. 三島街道 |
| 28. 初田2号墳 | 29. 桑原古墳群 | 30. 阿武山古墳 | 31. 塚原古墳群 | 32. 殿岡神社古墳 | 33. 墓谷古墳群 |
| 35. 尼ヶ谷古墳群 | 36. 大蔵氏遺跡 | 37. 真上遺跡 | 38. 真上古墳群 | 39. 奥天神町遺跡 | 40. 古曾部遺跡 |
| 42. 紅茸山古墳群 | 43. 奥坂古墳 | 44. 宿久庄北遺跡 | 45. 熊ヶ谷古墳 | 46. 福井城跡 | 47. 福井城跡 |
| 48. 長ヶ淵古墳群 | 49. 安威寺跡 | 50. 新池遺跡 | 51. 前塚古墳 | 52. 鬮野古墳 | 53. 鬮野古墳 |
| 55. 岡本山古墳群 | 56. 郡家車塚古墳 | 57. 上野遺跡 | 58. 郡家本町遺跡 | 59. 慈願寺山1号墳 | 60. 石川年足墓 |
| 62. 真上古墳 | 63. 慈願寺山2号墳 | 64. 天神山遺跡 | 65. 伊勢寺古墳 | 66. 中將塚古墳 | 67. 宿弥塚古墳 |
| 69. 粟生間谷遺跡 | 70. 徳大寺遺跡 | 71. 庄田遺跡 | 72. 宿久庄西遺跡 | 73. 宿久庄遺跡 | 74. 新屋古墳群 |
| 76. 西福井遺跡 | 77. 青松塚古墳 | 78. 南塚古墳 | 79. 海北塚北方遺跡 | 80. 海北塚古墳 | 81. 真能寺古墳群 |
| 83. 安威城跡 | 84. 安威遺跡 | 85. 耳原古墳 | 86. 鼻摺古墳(耳原方形墳) | 87. 上土室遺跡 | 88. 番山古墳 |
| 89. 土保山古墳 | 90. 土室遺跡 | 91. 石山古墳 | 92. 二子山古墳 | 93. 高樋古墳 | 94. 太田茶白山古墳 |
| 95. ツゲノ古墳群 | 96. 氷室塚古墳 | 97. 今城塚古墳 | 98. 郡家川西遺跡 | 99. 宮田遺跡 | 100. 郡家今城遺跡 |
| 102. 芥川遺跡 | 103. 安満遺跡 | 104. 耳原遺跡 | 105. 太田城跡 | 106. 太田遺跡 | 107. 太田庵寺跡 |
| 109. 高槻城跡 | 110. 西園街道 | 111. 郡山古墳 | 112. 茶臼塚(馬塚)古墳 | 113. 中河原遺跡 | 114. 郡山城跡 |
| 115. 郡神社古墳 | 116. 郡山古墳 | 117. 地藏池南遺跡 | 118. 上穂積山古墳 | 119. 弁天山遺跡 | 120. 上穂積神社西古墳 |
| 121. 穂積庵寺跡 | 122. 見付山古墳 | 123. 見付山遺跡 | 124. 上寺山古墳 | 125. 郡遺跡 | 126. 春日遺跡 |
| 128. 総持寺遺跡 | 129. 普門寺城(富田寺内町) | 130. 茨木城跡 | 131. 茨木遺跡 | 132. 牟礼遺跡 | 133. 溝昨遺跡 |
| 134. 鮎川遺跡 | 135. 芝生遺跡 | 136. 大塚西遺跡 | 137. 中条小学校遺跡 | 138. 東奈良遺跡 | 139. 目垣遺跡 |

図6 周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1:60,000)

天文17年(1548)	茨木孫三郎・長慶は細川政元を倒し、長慶が摂津を支配。
天文18年(1549)	江口の合戦において、長慶(細川氏綱・十河一存)は晴元配下の三好政長を敗死させ、摂津を掌握。入京して晴元を京都から追放。晴元政権の崩壊、三好長慶政権の確立。伊丹親興、長慶に抵抗。長慶の伊丹攻略。
天文21年(1552)	長慶は將軍義輝と和すが、義輝は晴元と結んだため和がやぶれる。晴元側の芥川城・有馬城・八上城・明石城・三木城などで戦いがある。
天文22年(1553)	長慶、芥川城(晴元残党芥川孫十郎)を攻撃。開城。永禄3年(1560)まで在城。芥川城は再び畿内政治の中心地となる。
天文23年(1554)	長慶、丹波の波多野氏を八上城に攻める。
永禄元年(1558)	足利義輝・六角義賢が京都奪回に乗り出す。長慶の敗北。
永禄3年(1560)	長慶は畠山勢を下し、芥川城より飯盛城に移る。三好義興(長慶の子)、芥川城入城。三好義興の死(1563)・三好長慶の死(1564)後、三好三人衆(三好長逸、石成友通、三好政康)は幼主三好義継を擁して権力をふるう。堺を拠点に摂津・河内を押さえ、土豪・地侍を率いて大和の松永久秀を攻め、石山本願寺と組んで織田信長と戦い続けた。
永禄11年(1568)	織田信長は將軍足利義昭を擁して入京し、摂津一帯を制圧。細川昭元・三好長逸ら芥川城に立て籠もるが逃亡。信長芥川城に入城し、和田惟政を城主とする。高槻城開城。
永禄12年(1569)	和田惟政が高槻城主へ。高山飛驒守が芥川城主に。
元亀2年(1571)	白井河原の合戦で和田惟政敗死。和田惟長(惟政の子)が高槻城主に。
元亀4年(1573)	和田惟長は高山右近(和田惟政の家臣)と荒木村重に高槻城を追われる。高山氏が高槻城主となる。信長政権の摂津直接支配の開始。
天正3年(1575)	明智光秀が丹波・丹後平定のため入国。
天正4年(1576)	信長は安土城築城に着手。
天正6年(1578)	信長は伊丹城荒木村重討伐のため、摂津に出陣。茨木城を包囲するため、総持寺に本陣を置く。高槻城主高山右近、茨木城主中川清秀、信長に降る。光秀は丹波にはいり、波多野秀治の八上城を包囲。
天正8年(1580)	光秀、丹波亀山城を拠点とする。
天正10年(1582)	本能寺の変。信長の死去。
天正13年(1585)	羽柴秀吉、高槻を直轄。

2. 主要城郭の動向

○芥川山城：延徳2年(1490)、能勢頼則が城主となる。永正12年(1515)、細川高国が築城し、能勢頼則が城主となる。大永6年(1526)、高国と細川晴元の合戦において高国方に付くが、翌年山崎城が落ち、安威・茨木・福井・太田・三宅と共に開城。能勢氏は芥川山城から姿を消す。天文2年(1533)、細川晴元入城。天文5年(1536)まで畿内政治の中心地となる。天文8年(1539)、晴元と三好長慶の争い。一時長慶が入城するが、和議の成立により退城。城主は薬師寺与一となる。天文16年(1547)、晴元側が敗れ、長慶の支配へ。芥川孫十郎を城主とする。天文22年(1553)、長慶自らが入城し、永禄5年(1562)頃まで拠点とする。再び畿内政治の中心地となる。永禄11年(1568)、織田信長が入城し、和田惟政が城主となる。元亀

2年(1571)、池田氏・荒木村重との合戦で敗れる。破却はこの頃か。

○安威城：大永7年(1527)、細川高国と細川晴元の戦いにより高国方の芥川・茨木・福井・太田・三宅と共に落城する。その後晴元方につき、天正14年(1586)、茨木城に移り、安威城は廃される。

○高槻城：大永7年(1527)、細川家内紛の戦いで山崎城から敗走した細川高国側の薬師寺国盛が高槻城にはいる。永禄12年(1569)、三好方の城主入江春継は信長に敗れ、和田惟政が城主となる。天正元年(1573)和田氏は配下の高山氏により滅亡。天正2年(1575)、高山右近が城主になる。天正13年(1585)、右近は秀吉により移封され、豊臣氏の直轄領となる。慶長6年(1601)、徳川家康、高槻を直轄。

○普門寺城：永禄4年(1561)、細川晴元は三好長慶により普門寺に幽閉され、同6年に死去。

○池田城：永正5年(1508)、大内義興の下足利義尹が細川高国らを従えて上洛。池田城主池田貞正は反抗、敗れる。

○茨木城：文明14年(1482)、摂津守護細川政元が摂津国人一揆鎮圧の中で茨木城を攻め落とす。薬師寺元長に与えられる。大永7年(1527)、細川高国と細川晴元の戦いにより高国方の芥川・安威・福井・太田・三宅と共に落城する。永禄11年(1568)、信長が摂津に進入時、茨木城主は三好長慶方であったが、信長に降ったため本領を安堵される。元亀元年(1570)、一向一揆や三好三人衆が兵をおこした時、高槻城の和田惟政と共に信長方の前線を守るが、翌年、白井河原の戦いで池田衆に敗れ、茨木氏は滅びる。茨木氏から代わった城主中川清秀は信長ではなく、荒木村重と組んでいたが、天正6年(1578)の信長の茨木城包囲により、離脱し、信長側につく。城主として安堵。

○三宅城：大永7年(1527)、細川高国と細川晴元の戦いにより高国方の芥川・安威・福井・太田・茨木と共に落城する。天文5年(1536)、細川晴元と一向宗の争いの時、城主三宅国村は一向宗側にいたが、敗北がわかると晴元方に帰属する。天文15年(1546)、細川氏綱・遊佐長教と晴元・三好勢の争いでは国村は氏綱方に属していたが、三宅城を囲まれ、明け渡すことになり、晴元に属することになる。天文17年(1548)、晴元と三好長慶の争いでは国村は長慶側に属するが、晴元方の香西元成が三宅城を攻め、入城。三好政長、晴元が続いて入り、晴元方の本営を呈した。長慶方は三宅城・江口城を攻撃し、江口城の政長を自決させ、三宅城の晴元は近江へ敗走した。再び国村は城主となり、永禄5年(1562)、長慶をまたも裏切るが高屋城陥落を聞くや、城を捨て、堺へ敗走する。

○福井城：大永7年(1527)、細川高国と細川晴元の戦いにより高国方の芥川・安威・三宅・太田・茨木と共に落城する。

○太田城：大永7年(1527)、細川高国と細川晴元の戦いにより高国方の芥川・安威・三宅・福井・茨木と共に落城する。『信長公記』の天正6年(1578)11月項に「大田の郷北の山に御取出」普請の記述がみられる。

○吹田城：大永6年(1526)、細川高国と細川晴元の争いで晴元方の吹田氏は高国方に討たれる。

図7 周辺の中世城郭と街道

①佐保栗山砦 ②芥川山城 ③佐保城 ④泉原城 ⑤福井城 ⑥安威城 ⑦耳原城 ⑧太田城 ⑨今城山城 ⑩高槻城 ⑪普門寺城 ⑫茨木城 ⑬目垣城 ⑭水尾城 ⑮沢良宜城 ⑯三宅城 ⑰吹田城 ⑱穂積城 ⑲郡山城 ⑳宿久城 ㉑善福寺原城 ㉒池田城 ㉓有岡城 ㉔塩山城 ㉕高山城 ㉖余野本城 ㉗余野城 ㉘東掛城 ㉙田能城 ㉚犬甘野城 ㉛笑路城 ㉜法貴山城 ㉝高岳城 ㉞穴太城 ㉟余部城 ㊱亀山城 ㊲矢田城 ㊳浄法寺城 ㊴山本城 ㊵野間城 ㊶丸山城 ㊷宿野城 ㊸滝ヶ嶺城 ㊹総持寺 ㊺勝尾寺 ㊻忍頂寺



図7 周辺の中世城郭と街道

○今城山城：織田信長の摂津進攻の陣城と考える説もあるが、構造より天文22年(1553)に芥川孫十郎の立て籠もる芥川山城を攻めた三好長慶の陣城と考えられる。

○総持寺砦：天正6年(1578)、信長が伊丹城の荒木村重を攻める時、荒木側の茨木城を包囲するため本陣とした。

○伊丹城(有岡城)：16世紀の細川家の対立抗争において戦場として登場する。永正17年(1520)、摂津侵攻の細川澄元により伊丹城の伊丹但馬守・野間豊前守が自害。入城するが、細川高国の反撃に遇い、播磨へ引き返す。享禄2年(1529)、細川晴元勢の柳本賢治の攻撃により伊丹元扶が自害、落城。晴元の被官高島甚九郎が入城。享禄3年(1530)、高国の反撃により明渡し。天文18年(1549)、三好長慶の伊丹城攻撃。翌年伊丹親興と和睦。永禄11年(1568)、摂津を制圧した信長は伊丹氏を摂津の三守護に任命。天正2年(1574)、茨木城主荒木村重により伊丹城が攻められ、伊丹氏を滅亡させる。村重は摂津の新守護となり、有岡城に改名する。天正6年(1578)、村重の敵への内通の噂により信長は有岡城を攻撃。翌年落城。池田之助に城を与える。天正11年(1583)、羽柴秀吉の直轄領となり、廃城となる。

○亀山城：中世の亀山砦を天正5～7年(1577～79)にわたって明智光秀が拡張して築城する。

○東掛城：城主赤沢義政が天文の頃(1532～55)、三好長慶の丹波入りを助ける。

○法貴山城：細川晴元の従臣、酒井氏城主。

○笑路城：城主長沢重綱が明智光秀と対面時、法貴城主酒井孫左衛門がとりなし、笑路城を安堵される。

○宿野城：天正7年(1579)、織田信澄により落城。

○野間城：天正年間(1573～92)、野間資持が在城。野間氏は余野氏と共に能勢三惣領の1つ。

○丸山城：能勢氏の本拠地。天正8年(1580)、織田信長に従属しない能勢頼道は殺害され、丸山城に迫る塩川勢を弟頼次が打破。

○山辺城：能勢氏の詰城。能勢町の西半分の能勢勢力にとっては極めて重要な城。天文年間(1532～55)、大町右衛門尉宗長の居城。天正7年(1579)、織田信澄・塩川国満に攻められ、落城。

○余野城：明応年間(1492～1501)、能勢氏の余野頼幸が築城。天正12年(1584)、余野高綱は高山右近と戦い、自害。焼亡。

参考文献

高槻市役所 1977 『高槻市史』第1巻 本編I

茨木市役所 1969 『茨木市史』

大阪府 1981 『大阪府史』第4巻 中世編II

新人物往来社 1980 『日本城郭大系』第11巻 京都・滋賀・福井 新人物往来社

新人物往来社 1981 『日本城郭大系』第12巻 大阪・兵庫 新人物往来社

中井均 1996 「雪野山古墳の中世城郭遺構について」『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団

第3章 調査の概要

佐保栗栖山砦跡は文献にその名前を残さない城跡であるが、この尾根には不自然な平坦面があり、調査以前から砦跡(山城)の存在が知られていた。明治年間に記された『東摂城址図誌』(東城兎幾雄著 大阪府立中之島図書館蔵)記載の「佐保砦趾」と考えられる。また、『わがまち茨木 城郭編』(茨木市教育委員会 1987)には免山篤氏により、詳細な現況について記述されていた。

調査前の曲輪の遺存状況は良好であり、伐開作業後の現状地形測量で確認された平坦面、堀などは発掘調査後も同様に確認された。また、この時点で、大阪大学文学部教授村田修三氏により縄張り図が作成され、詳細な観察がなされた(図10)。これらの図を基にし、曲輪の平坦面・斜面を明らかにし、曲輪の造成状況の把握も行った。

今回の発掘調査では全斜面と盛土部分を含めて、全面的な調査を行った。まず、樹木の伐開を行い、調査前の地形の航空測量を行った。基本層序は腐食土、流出土(堆積土)、盛土、地山である。曲輪平坦面造成に伴い、切土・盛土の造作を行っているが、平面観察では不明瞭なため、適宜断ち割りトレンチを設定することにより、盛土と流出土を確認した。

北斜面に走る里道(通路3)は東へ行けば丹波と大坂を結ぶ清坂街道に接続しており、当時から重要な道であったと考えられる。調査区の設定にあたっては、里道とその東側の平坦面をも含め、外部施設の確認も行った。通路3の東側は南北両斜面が急峻となっており、土橋状になっている。断ち割り調査を行ったが、人為的な盛土は確認出来なかった。また、北斜面が近年大きく崩れたことを地元人より聞いている。2 B トレンチの東端平坦面においても門などの砦関係の遺構は検出されなかった。

ここでは各遺構について詳述する前に佐保栗栖山砦跡全体について概要を記しておく。

位置は北東から南西へ伸びる尾根先端部にあり、約150×70mの範囲に広がる。曲輪と縦堀を含めた面積は約3,800m²、頂上の標高はT.P.187mを測り、尾根先端下との比高差は約85mある。

尾根頂上部には砦の中心となる曲輪1～3があり、これらを取り囲むように小規模の曲輪が配置され、通路が各曲輪を繋ぐ。斜面には堀切、石積が検出された。石積は砦の斜面を全周するものではなく、必要とする箇所のみを設置されている。曲輪2の北東斜面からは砦の出入口1が検出された。出入口を下っていくと尾根北斜面に沿った通路3と接続している。また、曲輪の造成は尾根頂上部を削り、その残土を利用し、盛土を行っている。盛土は版築状に積み上げるが、その単位が粗い部分もある。また、盛土造成以前に地山部分を成形した部分もある。

曲輪1の平坦面から礎石建物が検出され、その北側と東側には土塁2がある。建物の礎石や床面は火熱を受けており、火災を被ったことが確認された。また、建物に使用されたと考えられる焼けた土壁も多量に出土している。曲輪1の南側にある曲輪9の南斜面には全長17.5mの石積が検出された。曲輪1と9の連絡通路は曲輪1の南西隅から検出されており、階段状に成形されていた。

曲輪2は両側の曲輪1・3より一段低くなっており、掘立柱建物や土坑が検出された。北東端には砦北斜面から伸びる通路4と接続する出入口1があり、その両脇には石積の伴う張り出しが付属する。南東端には曲輪8へ下る出入口がある。なお、出土遺物量は曲輪2が最も多量に出土している。

曲輪3の平坦面からは礎石建物、土坑が検出された。南東隅には石段とスロープを伴う曲輪4・13への通路7・8が、北東隅には曲輪2との連絡通路6がある。

曲輪5からはピット、土坑が検出された。土坑の内壁を石組とする土坑や甕を据えた土坑が検出された。曲輪4・5間には巨石を使用した石積が検出された。曲輪15～17は尾根先端に位置する小規模な平坦地である。

曲輪1の東側には尾根を切断する豎堀が南東斜面と北西斜面にあり、南側の豎堀1の砦外側には並行して土塁1を設けている。曲輪3の南西側にも豎堀3が検出された。

以上のような遺構が検出されたが、曲輪2の溝1、豎堀3などの様相から現状の曲輪の形態ではなかった時期があったことがわかり、複数時期の変遷が推定される。

石積(石垣)は各所から検出されたが、その設置は部分的なものであり、裏込め石もほとんどなく、完成された石垣とは言いがたいものである。よって、当砦跡で検出されたものは石積と表現した。

曲輪の造成の盛土は主として南斜面側に盛ることにより、平坦面を確保している。盛土は版築状に丁寧積み上げる箇所と粗く積み上げる箇所がある。曲輪4・11に関しては盛土部分が中途になっており、未完成のまま、放棄された可能性がある。



図8 東攝城址図誌 佐保砦跡 (大阪府立中之島図書館蔵)

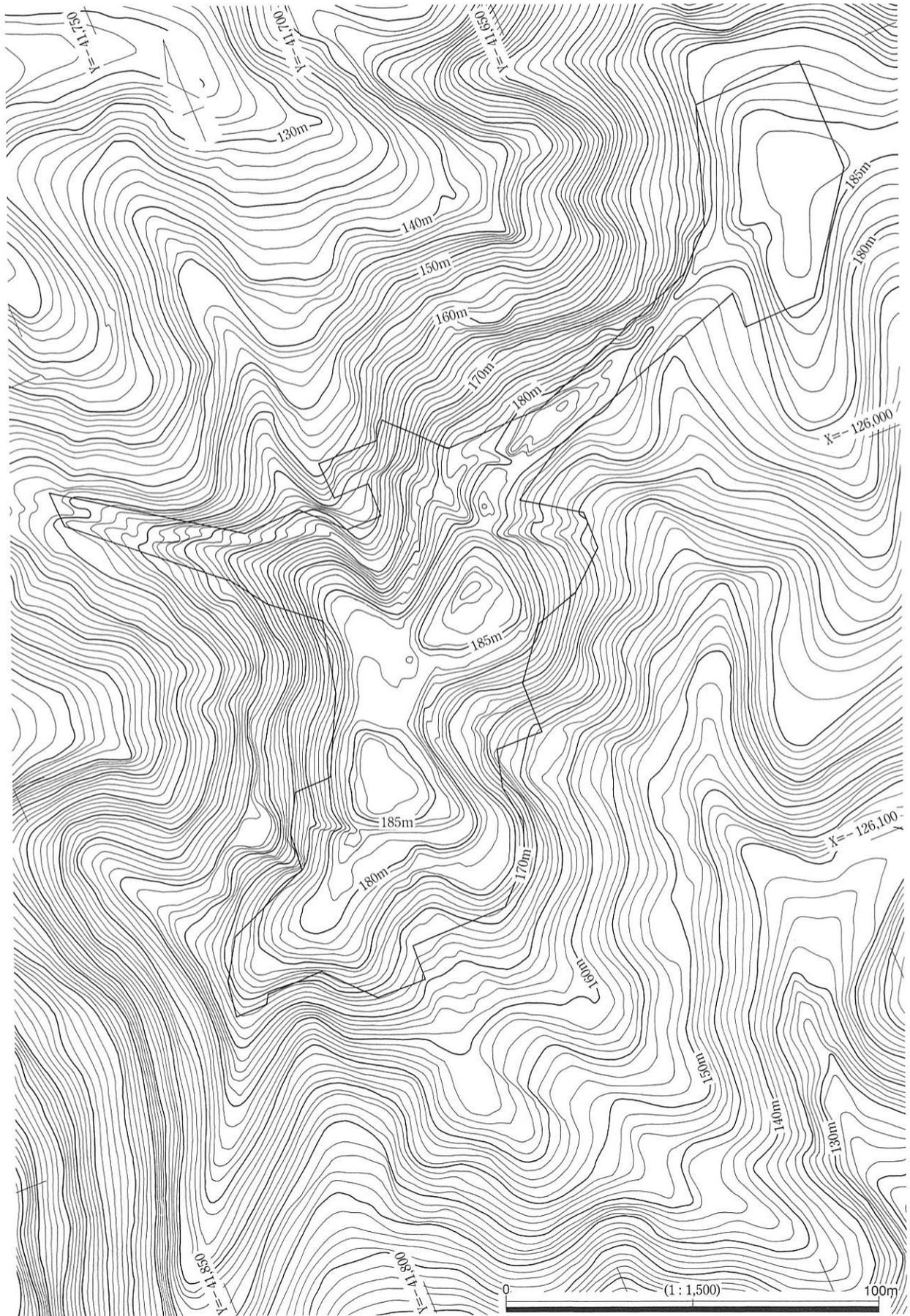


図9 調査前の地形

出土遺物については土師器小皿、白磁皿・碗、青磁碗、染付皿・碗、瀬戸美濃皿・碗、備前徳利、丹波壺、備前・丹波播鉢、備前甕、瓦器仏花瓶・火鉢・香炉、土師器鍋、瀬戸美濃水滴、石臼、鉄釘、銭貨、刀子、土壁等が出土している。遺物は主に曲輪1～3・5から集中して出土している。食膳具、調理具、貯蔵具が揃っており、ある程度の生活ができたことが伺える。

土壁は特に曲輪1・2から集中して出土しており、土壁を有する建物の存在が推定される。但し、瓦は出土していない。

また、砦跡からの眺望は南から南東方向に開けており、淀川から大阪平野まで見渡すことができる。

なお、曲輪内からは井戸は検出されなかったが、地元古老によると北斜面下に八角形の井戸が存在したらしいが、確認できなかった。

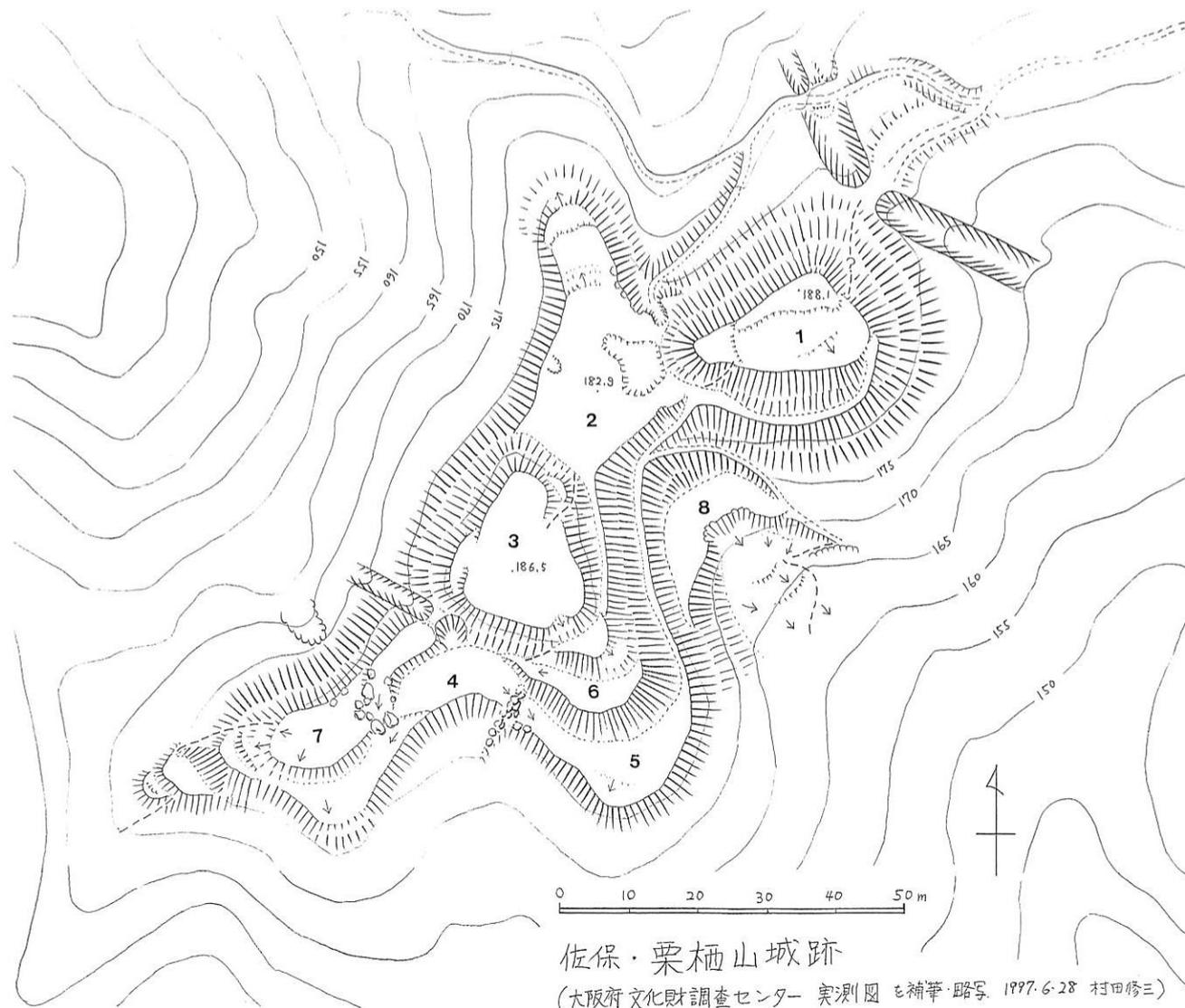


図10 調査前縄張り図 (村田修三氏作成)



图11 佐保栗栖山岩跡全体图

第4章 砦跡の遺構・遺物

第1節 遺構

1. 曲輪1

曲輪1は砦の東端に位置し、標高は中央部で187mを測る。最大長約25m、最大幅15m、面積約165㎡の規模をもち、平坦面は南側に向かってやや傾斜がある。平坦面西側には約0.6m一段下がってさらに平坦面が広がる。

東側平坦面には、礎石建ちの建物1が検出され、その北側と東側には高さ約0.8mを測る土塁2が存在する。逆L字形の平面を有し、西端と南東端は建物側へさらに折れ曲がっている。土塁と平坦面は地山削り出しにより形成されており、平坦面の南東隅から南側にかけて盛土により構築されている。土塁南

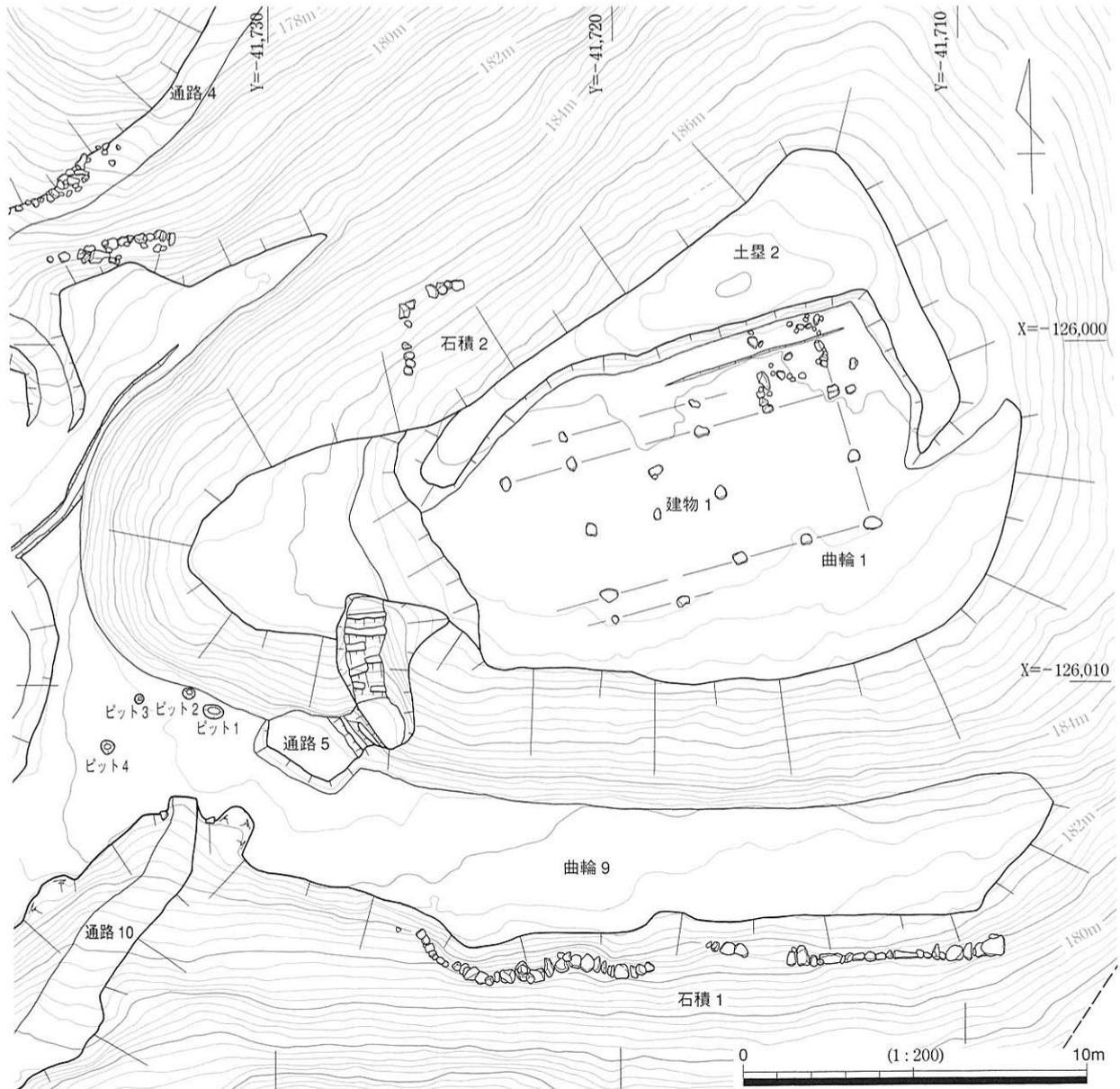


図12 曲輪1・9

側は急斜面になっており、また、南東端と西端部分は高さが低くなっているが、盛土が流出したためと考えられる。

建物1が存在する平坦面は2次被熱を受け、赤く焼けており(カラー図版9)、また、この建物に使用されたと考えられる2次被熱をうけた土壁(カラー図版8)が約105.3kg出土しているところから建物1

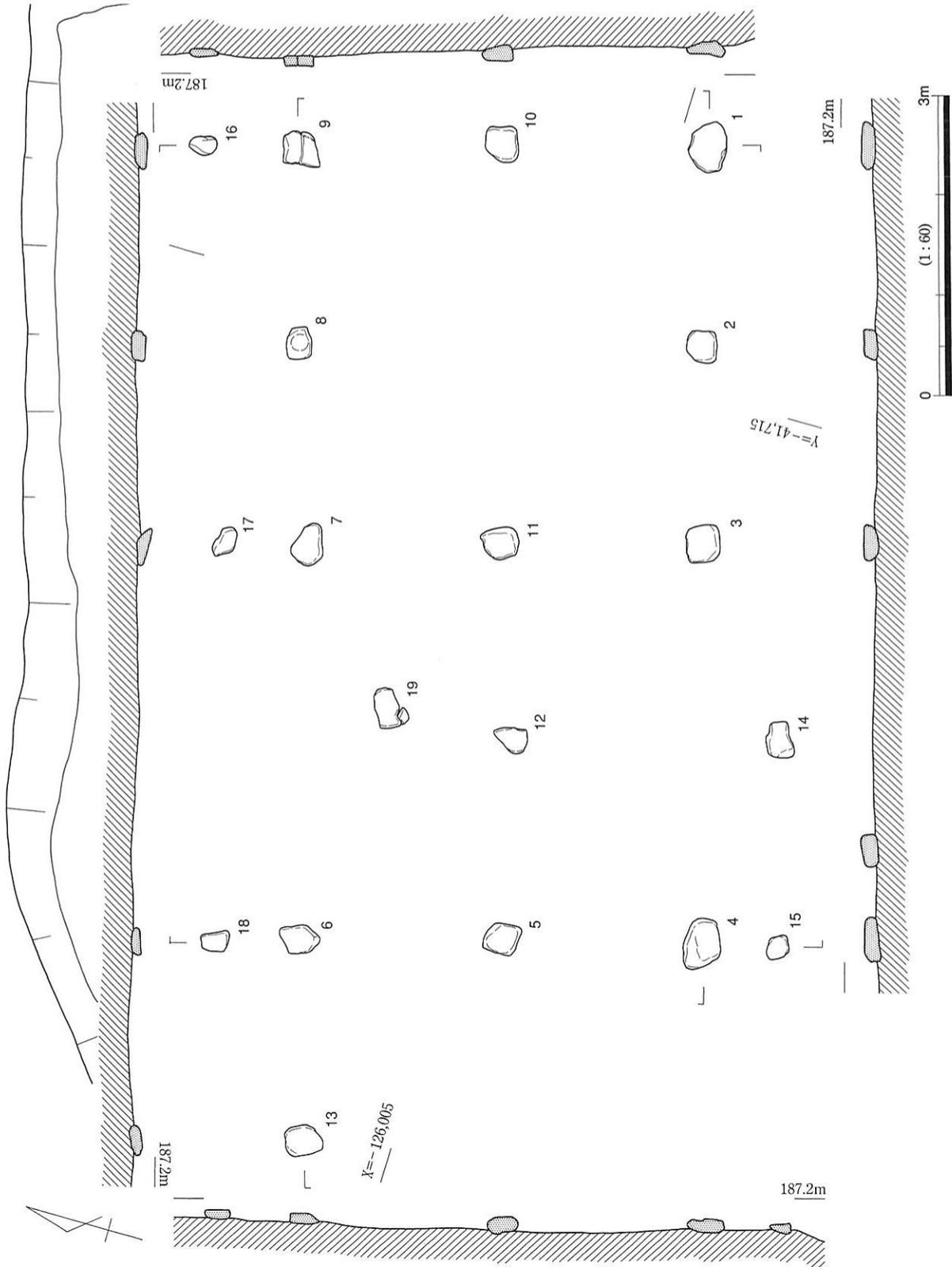


図13 曲輪1 建物1

は火災を受けたと思われる。建物1(図13、図版5)の西側梁間は礎石13のみの残存であるが、礎石18・5・4・15のそれぞれの西側にも設置してあったと考えられ、5×2間の母屋に南北両側の桁行方向に庇が付属する建物と考えられる。また、建物内部の南北柱筋の礎石2・8間の礎石が検出されなかったため、総柱建物なのか、西側半分のみ総柱なのかは不明である。礎石3・4間も検出されていない。礎石6・7間は本来礎石19が設置してあったと考えられる。柱間間隔は母屋部分で約2.0m、庇部分で約0.8~1.0mを測る。桁行と梁間は直角をなしており、柱間間隔も統一がとられており、非常に整った建物である。礎石は扁平な河原石を使用し、曲輪の平坦面に掘方を掘削せずに設置している。但し、庇部分の礎石16はやや平坦面にめり込んでいる状態が観察された。母屋部分の礎石は長辺30~50cm、短辺22~38cmを測るが、庇部分は長辺28~38cm、短辺18~28cmを測り、庇部分の礎石はやや小型のものを使用していることがわかる。礎石8には柱座を観察することができ、柱の直径が16cmであったことが確認できた。各礎石上面のレベルは桁行柱筋の礎石1~4間では3cm、礎石6~9間では6cmの高低差のみでほぼ水平に設置されているが、梁間柱筋は15cmの差があり、南に向かって下がっている。

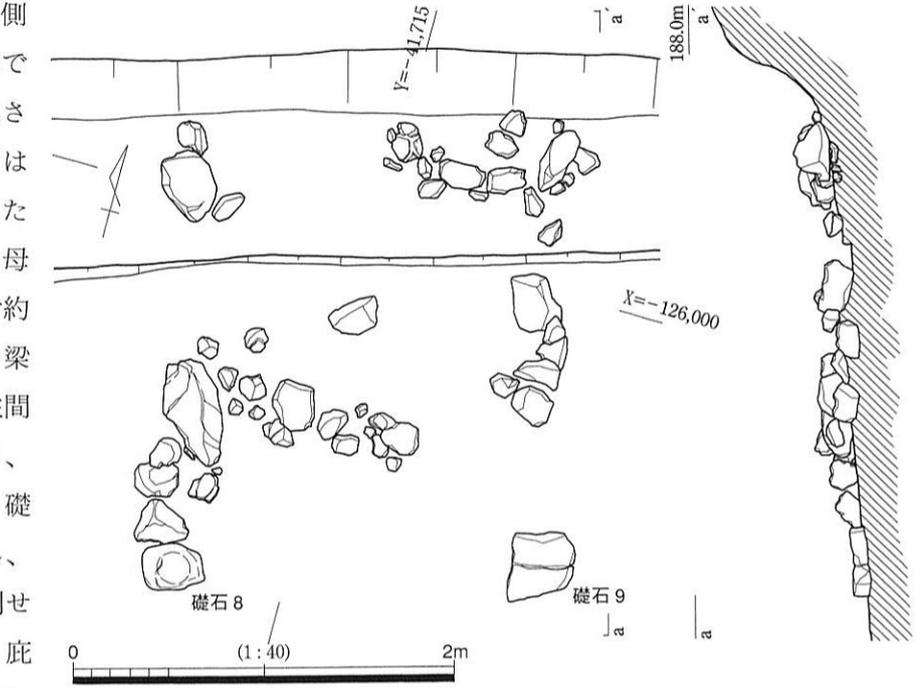


図14 曲輪1 石組1

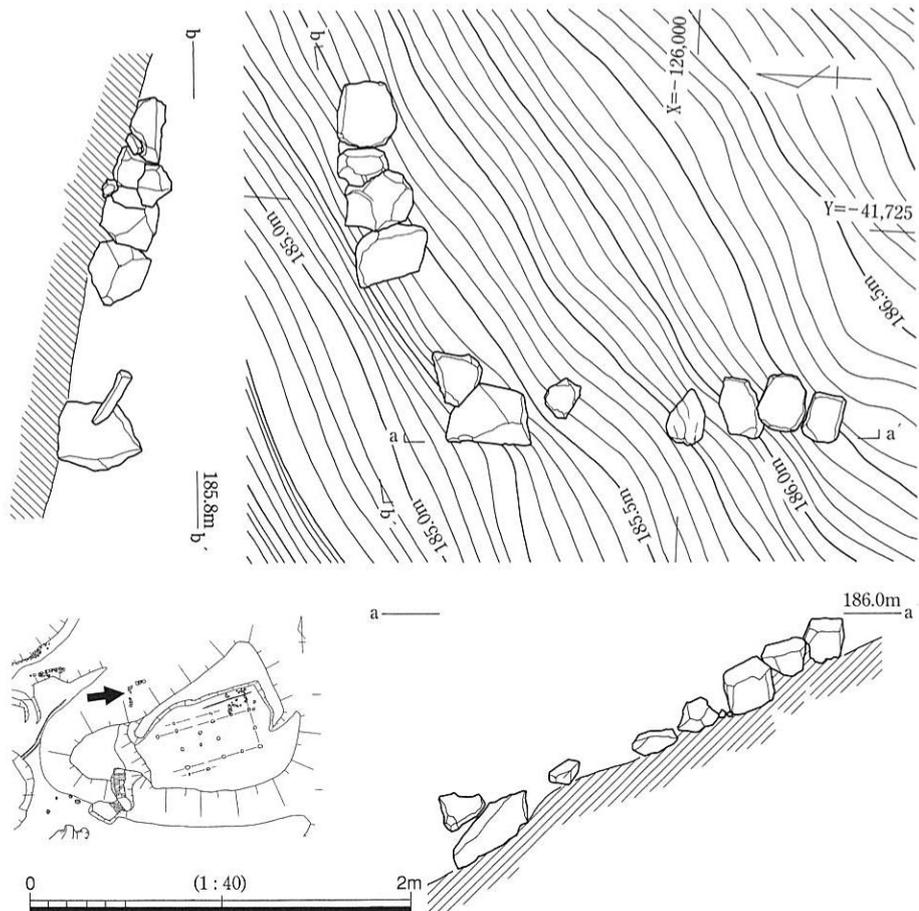


図15 曲輪1 石積2

なお、瓦は出土していない。

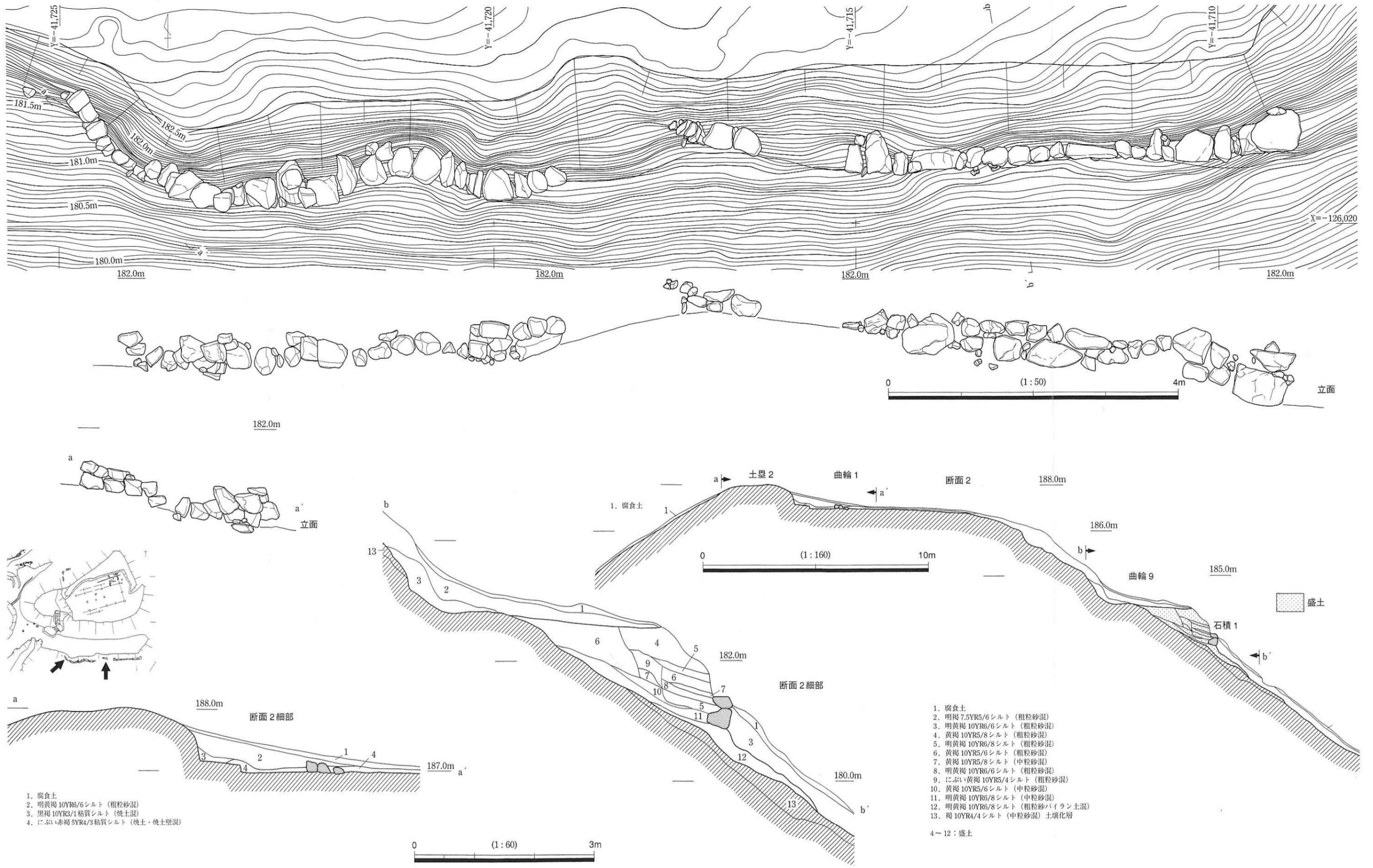
建物1の桁行と土塁2の南辺は平行しており、その間の床面のうち礎石16・17付近には高さ約5cmの段差が設けられている(図14、図版6-2)。また、建物1北東隅と土塁2の間には割り石を使った方形の石組1が検出された(図14)。建物1の礎石1・10・9・16列と礎石2・8列と方向が合致する。建物と土塁の隙間を利用した施設と考えられるがその性格は不明である。

土塁2の北西斜面に逆L字を呈した石積2(図15、図版6-1)が検出された。約108°の鈍角の開きがあり、1段のみの残存である。本来は数段あり、土塁2とは比高差がありながらも、一体化した張り出しを呈していたと考えられる。後述する通路4への攻撃が有効な「横矢掛り」になっている。

曲輪1とその南側に位置する曲輪9をつなぐ通路5が西端から検出された(図16、図版6-3)。地山を削りだし、階段状のステップと踊り場から成している。最下段は曲輪1平坦面から突出して地山を削り残し、平面約2.5×1.5m、高さ約0.2mの踊り場を有する。2段のステップを上るとさらに踊り場が設け



図16 曲輪1 通路5



- 1. 腐食土
- 2. 明黄褐 10YR6/6シルト (粗粒砂混)
- 3. 黒褐 10YR3/1粘質シルト (焼土混)
- 4. にぶい赤褐 5YR4/3粘質シルト (焼土・焼土壁混)

- 1. 腐食土
- 2. 明褐 7.5YR5/6シルト (粗粒砂混)
- 3. 明黄褐 10YR6/6シルト (粗粒砂混)
- 4. 黄褐 10YR5/8シルト (粗粒砂混)
- 5. 明黄褐 10YR6/8シルト (粗粒砂混)
- 6. 黄褐 10YR5/6シルト (粗粒砂混)
- 7. 黄褐 10YR5/8シルト (中粒砂混)
- 8. 明黄褐 10YR6/6シルト (粗粒砂混)
- 9. にぶい黄褐 10YR5/4シルト (粗粒砂混)
- 10. 黄褐 10YR5/6シルト (中粒砂混)
- 11. 明黄褐 10YR6/8シルト (中粒砂混)
- 12. 明黄褐 10YR6/8シルト (粗粒砂・バイラン土混)
- 13. 褐 10YR4/4シルト (中粒砂混) 土壌化層

4~12: 盛土

図17 曲輪9 石積1・土層断面2

られ、左へ約63°の屈曲をさせ、7段のステップにより曲輪1へ登りきる構造になっている。

2. 曲輪9

曲輪1の南側に位置しており、長さ約25m、幅約5mの平坦面を有し、面積約106m²の規模をもつ(図12、図版7)。標高183m、曲輪1との高低差は約4.0mを測り、1段低く造られている。東側は行き止まりになっており、西側は曲輪2と同一レベルで接している。

平坦面からは遺構は検出されず、また、平坦面を形成する盛土は南東部の一部が流出していた。

平坦面の南斜面からは全長17.5mの石積1(図17、図版7～9)が検出された。石積1は1～2段の残存である。その基底面の標高は180.2～181.6mを測り、完全な水平ではないことがわかる。また、平面も直線ではなく、波打っており、西端は約2.5mにわたって折り曲がっている。この折り曲げに伴って、曲輪9の平坦面の幅も狭くなっている。

石積はその基底面を地山直上に置かず、まず、盛土(図17-断面b-b'No.12の土層)によりおおよその平坦面を造成し、その上に設置している。それぞれの石は加工せずその石のもつ平滑な面を外側に向けており、また、基本的に石の長辺を斜面と同一方向に据えている。石と石の隙間にはやや小さめの石を挟んでいるが、裏込め石は存在しない。

曲輪9の平坦面は曲輪1下端を切土し、約1.0mの地山の平坦面を作り、さらにその南側は通路5付近を除いて盛土にて構成されている。盛土は石積の設置と並行して行っていることがわかり(図17-断面b-b'No.11の土層)、粗く積み上げた(断面b-b'No.6の土層)後に、石積付近のみ、版築状に丁寧に盛っている(断面b-b'No.5～10の土層、図版28-3)。

3. 曲輪2

曲輪1と曲輪3に挟まれた平坦面であり、標高約183mを測り、曲輪1より約4m、曲輪3より約3m、低くなっている。最大長約35m、最大幅約25m、面積約567m²の規模をもつ。土坑、落ち込み、溝、ピット、建物、出入口、通路等、多くの遺構が検出された(図18、図版10)。

建物2(図19、図版11-1)は南西端において検出された2×2間の掘立柱建物であり、北西-南東柱筋は曲輪3北面の下端線に平行する。ピットの直径は0.2～0.5m、深さは0.1～0.5mを測る。柱間はやや広く、2.0～2.9mを測るが、南西柱筋のピット67・77・81の間にはそれぞれの間位置にピット74・80が検出されており、この建物2に伴うピットと考えられる。

ピット1～4は東端に位置しており、台形状に配置されている(図18)。直径0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mを測り、埋土は黄褐色シルトである。通路10の登りきった先端に位置し、ハの字形の塀状の施設が推定される。柱間は1-2間が0.9m、2-3間が1.5m、3-4間が1.7mを測る。

ピット84(図20)は建物2の南西に位置し、ピット内中央に扁平な石が検出された。ピット49(図20、図版11-2)は建物2北西に位置し、54×40cmの扁平な石がピット内に設置してあった。

土坑7(図20)は中央部やや北東寄りに位置しており、1.7×4.0mの長方形の平面に深さ約0.3mを測る土坑である。埋土の状況から一度に埋められたことが考えられる。

土坑8(図20)は中央部やや北西寄りに位置しており、一辺約1.5mを測る方形の土坑である。深さは12cmを測り、浅い。図61-25(図版11-4)の小柄が出土している。

土坑16(図20、図版11-3)は建物2の西端に位置し、直径約1.1m、深さ0.5mを測る。壁面はほぼ垂直に掘削され、円柱状の土坑である。

落ち込み1(図18)は曲輪2の東寄りに位置し、5.0×10.7mの三日月形を呈する。調査以前から窪み

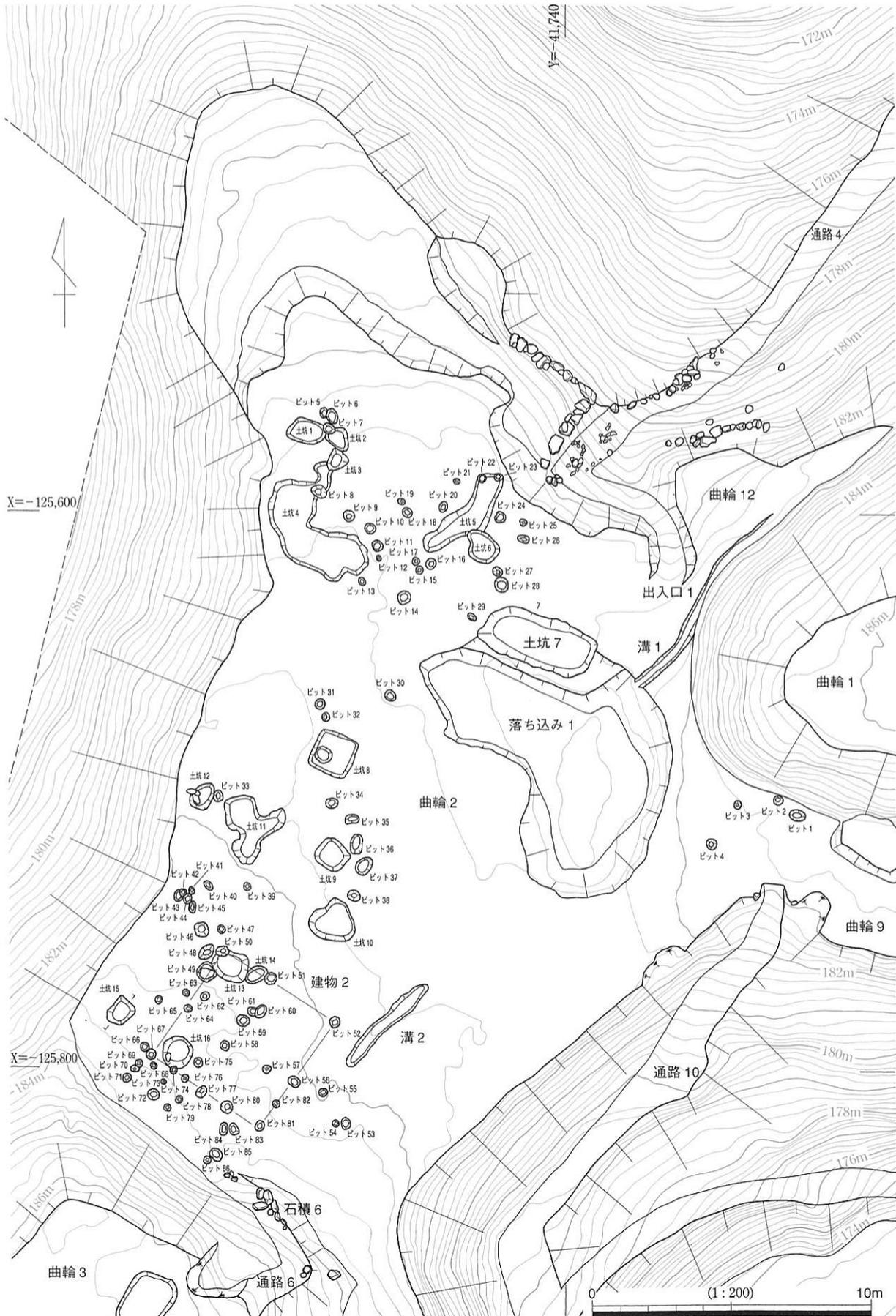


図18 曲輪 2

が存在していた遺構である。曲輪2内の移動を規制する効力があると考えられ、落ち込み1の東側と南側と溝2の南東側が通路になっていたと思われる。また、後述する曲輪2の出入口1の正面に位置しており、防御施設としての役割も推定される。土坑7との関係は同時存在していた時期と土坑7が埋められた時期があったと考えられる。

北東端からは砦外部との出入口1が検出された(図21、図版13)。砦北斜面に沿う通路3から曲輪2へ向かって伸びる通路4が分岐し、曲輪2へはいることができる。通路4は坂道になっており、直前に2回の屈曲を有する。通路4は幅0.7~1.2mを測り、上端部約7.0mの範囲には石敷が施されている。石敷は割り石である。なお、曲輪2の昇りきった地点には柱穴等の遺構は検出されなかった。

さらに通路4の両側には曲輪2に付属して石積3と石積4・5が検出された(図22、図版13・14)。

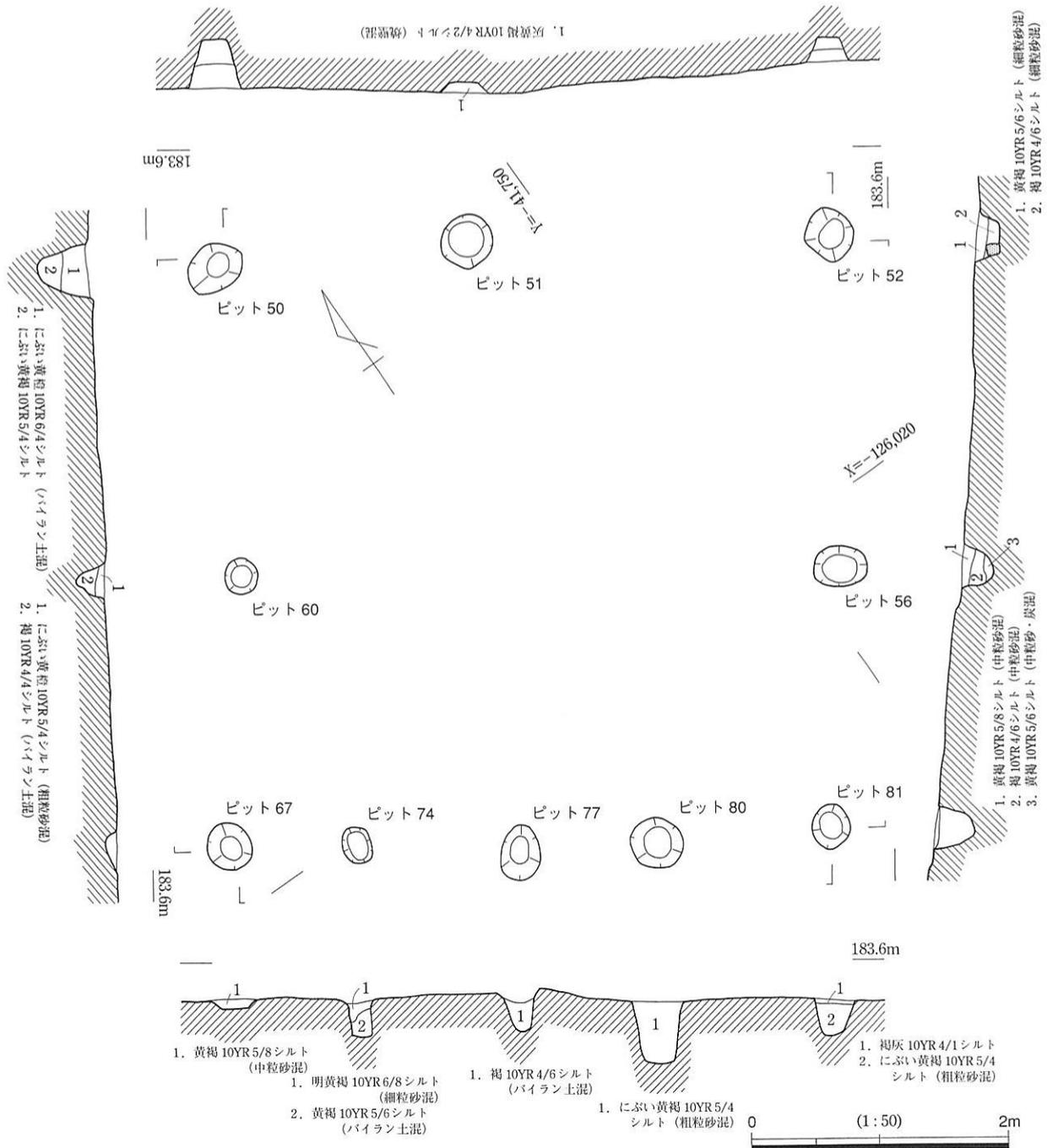


図19 曲輪2 建物2

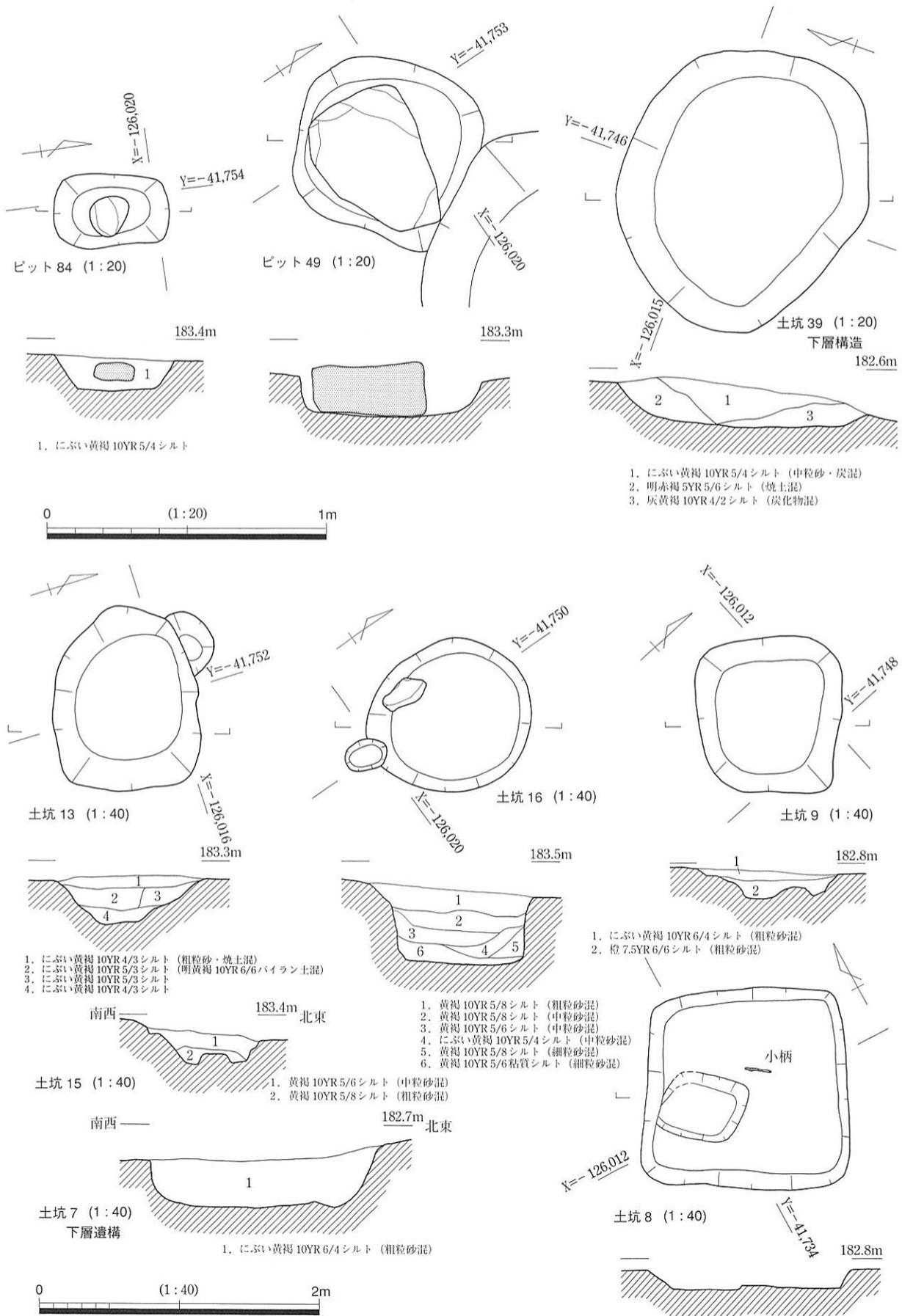


図20 曲輪2 ピット49・84 土坑7・9・13・15・16・39

石積3は通路4の南東側にあり、長さ3.8mの直線を成す。この石積により曲輪2の平坦面は通路4の屈曲に沿った形で張り出しを有することとなる。通路4に対する攻撃の効果がある「横矢掛かり」と考えられる。石積3は三段まで残存し、隙間には小石をはさみ、また、裏側には裏込め石が確認できた。基底部の設置に際しては地山を石の幅に合わせて水平にカットし、平坦面を造成したのちに積み上げている(図23-断面9)。

石積4・5は通路4の北西側にあり、石積4が長さ4.0m、石積5が長さ3.3mのL字形を呈する。石積3と相對しており、同様に通路4に対しての攻撃の「横矢掛かり」の効果をもっていたと考えられる。石積は一段のみの残存である。やや規模の大きい石材を使用しており、また、隙間や裏込めの小石はほ



図21 曲輪2 出入口1

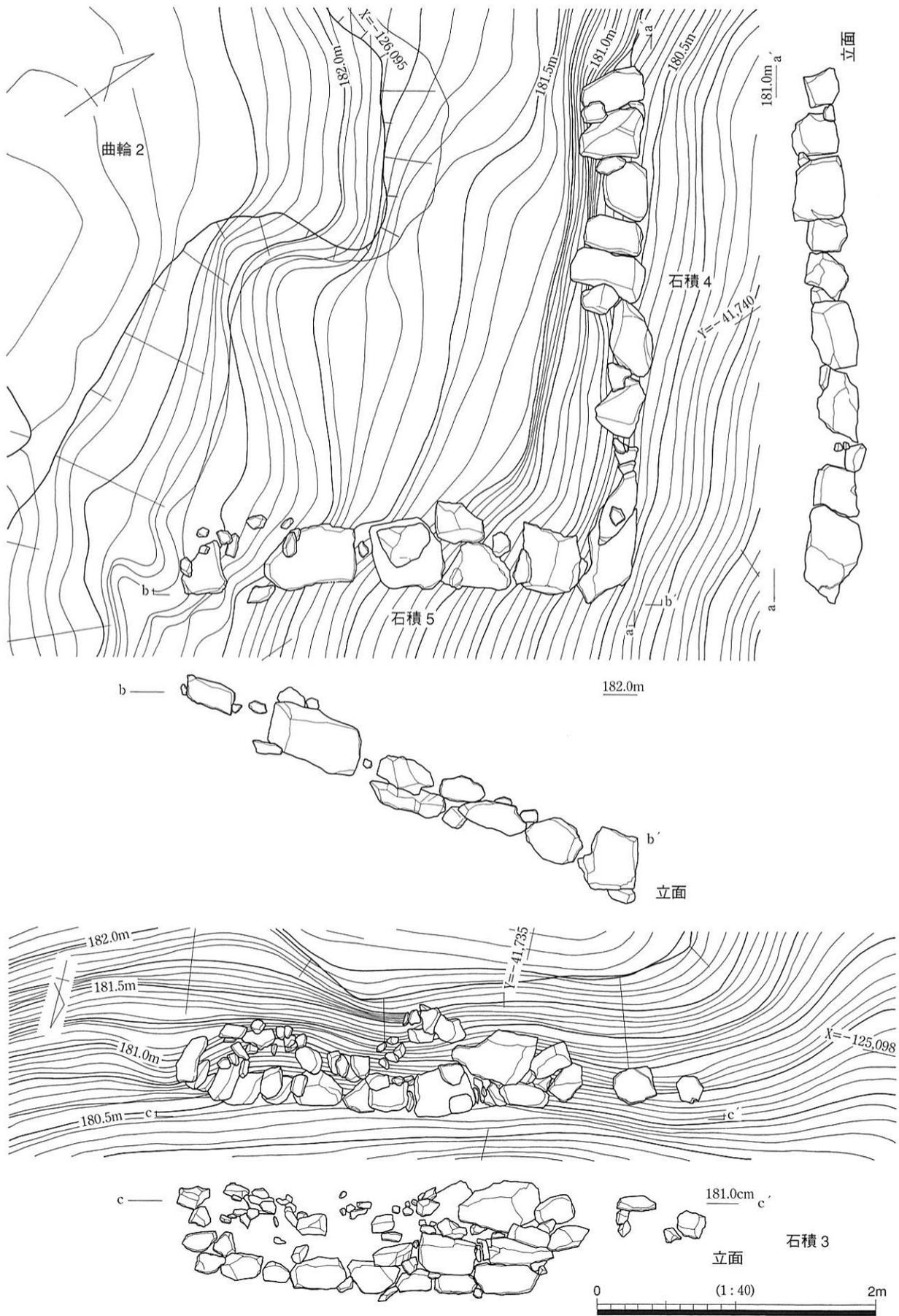


図22 曲輪 2 石積 3 ~ 5

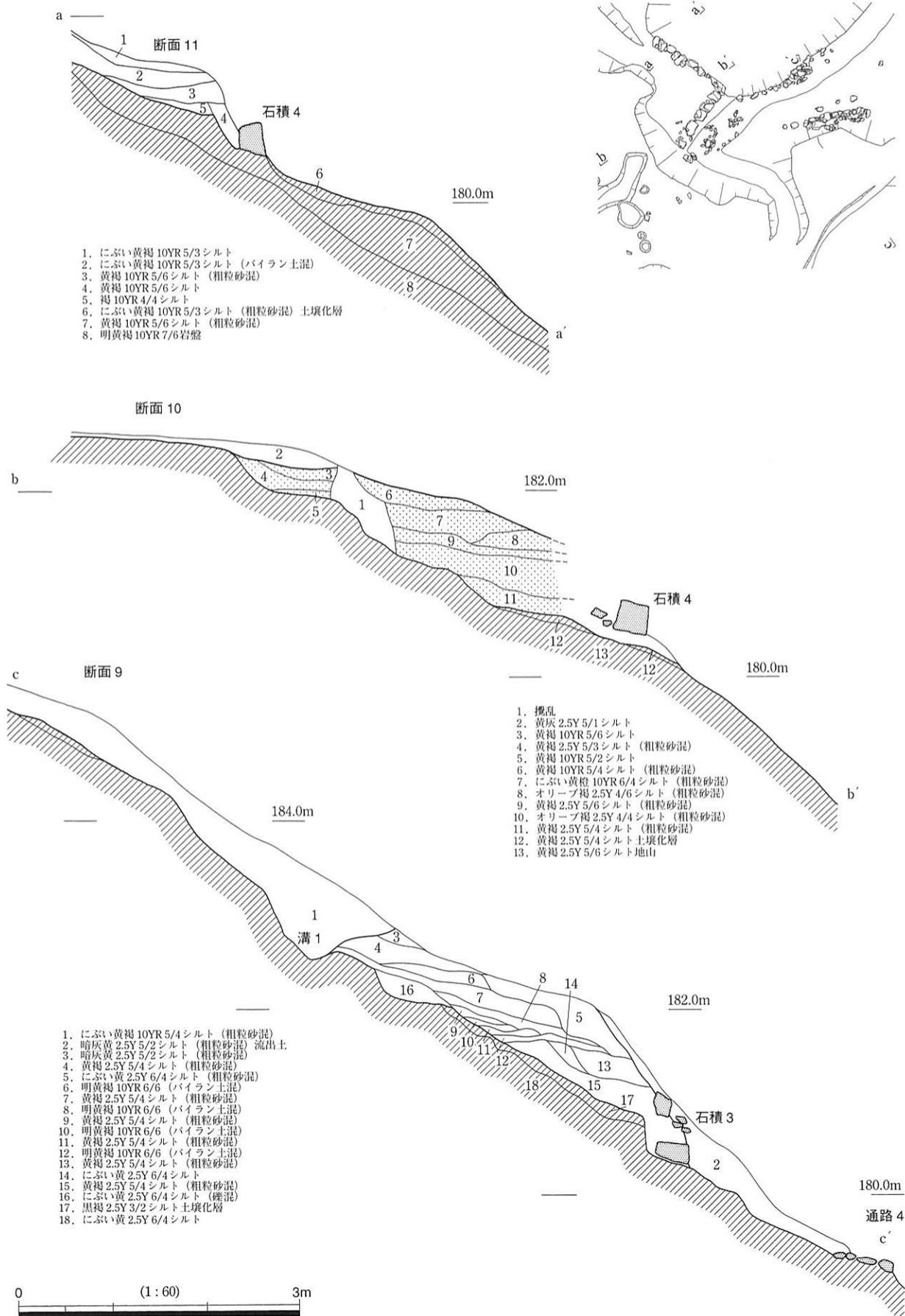


図23 曲輪 2 石積 3～5 土層断面 (断面 9～10)

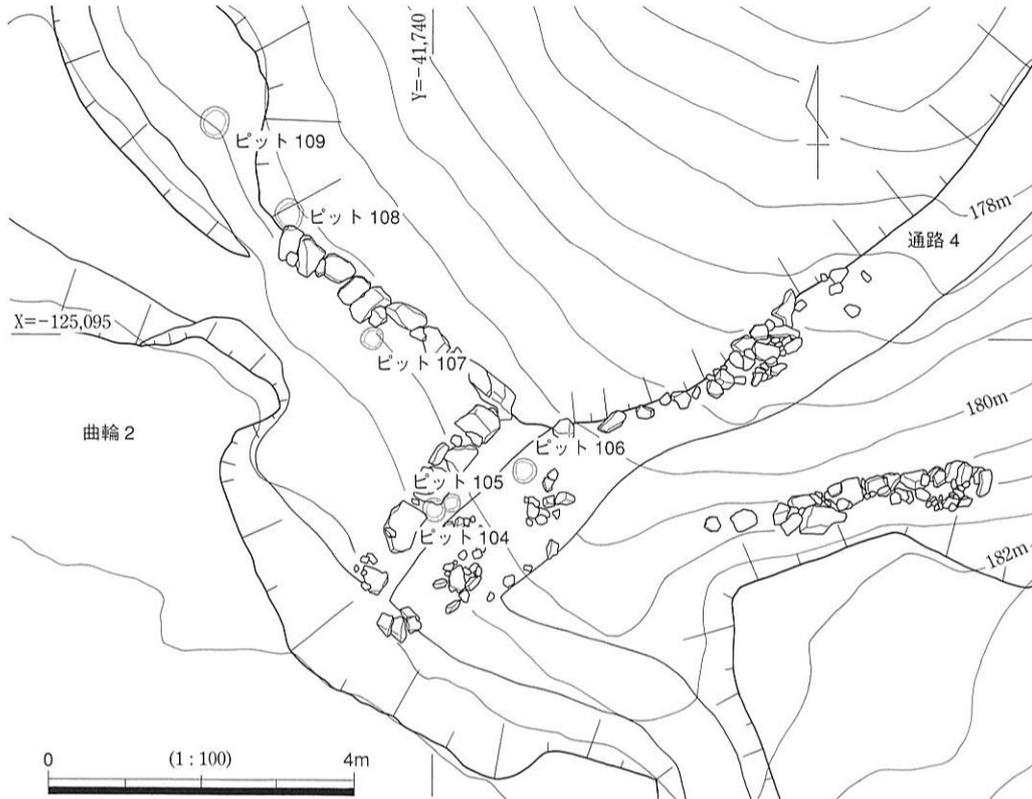


図24 曲輪 2 石積 4・5 下層ピット104～109

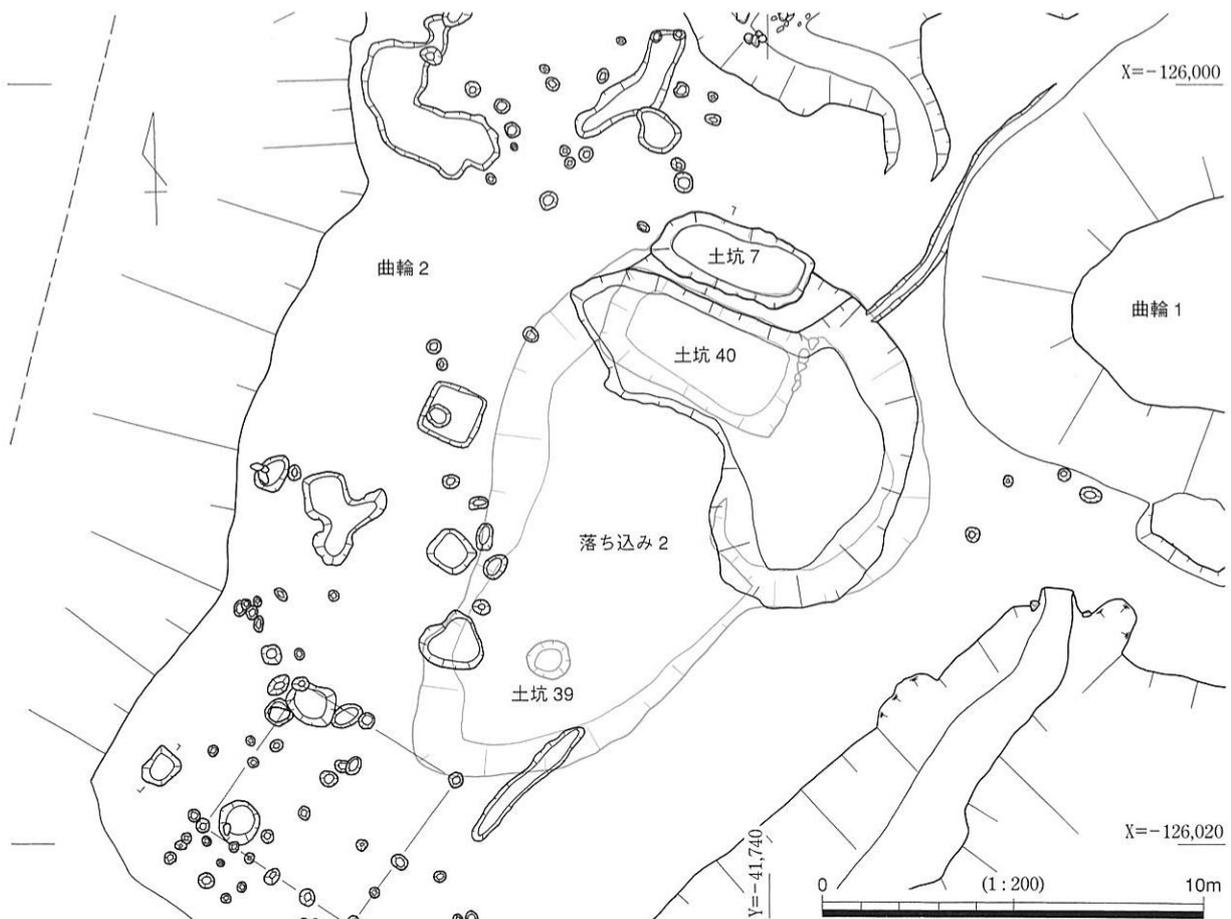


図25 曲輪 2 土坑 7・39・40、落ち込み 2

とんどみられない。石積5は斜面に対し垂直方向に設置しており、基底面を造成せずに、斜めの基底面の状態から積んでいる。石積4基底部は東寄り部分は盛土を行い、西寄り部分は地山をカットし、設置面を造り上げている(図23-断面10・11)。

これら石積3～5の石積、盛土を除去することにより下部からピット104～109が検出された(図24、図版30-4)。ピット106～109は1.6～2.6mの間隔を持ち、ピット106～109列とピット104・105列はやや鋭角に曲輪2の斜面に存在する。石積4・5の設置以前の土留めの柱列と推定される。

曲輪2の中央部からは、落ち込み1が形成される以前の下層遺構である落ち込み2が検出された(図25、図版12-1)。落ち込み1の南西方向に広がっており長辺17.0m、短辺11.4m、深さ約0.6mを測る。北東寄りには土坑7と並行して土坑40が検出された。土坑7と同一形態をしており、長辺5.3m、短辺2.8mの長方形を呈している。また、北東部分の上肩には石列が残存していた。南西寄りからは土坑39が検出された(図25)。炭化物、焼土が混じる埋土である。落ち込み2は落ち込み1と同様に曲輪2の南東部側を通路として、人の動きを規制する効果があるものと考えられる。

溝1は曲輪1の西側下端に沿って伸びる溝である(図18)。西寄りの検出状況は幅0.4m、深さ約5cmを測る細く浅い溝の状況である(図版12-3)。しかしながら東側半分では図23の断面9のように溝1の上端が本来は現状の曲輪2の平坦面より上部にあり、幅1.2m以上、T.P.182.8m以上の遺構面が想定される。よって、検出された曲輪2の形態ではない時期があり、曲輪1の西側に沿って幅広の溝1が存在していたと考えられる。

曲輪2の造成は南東の曲輪8側に大きく盛土を行い、曲輪2の南東辺を直線に造成している。盛土は丁寧に版築状に盛り上げていた(カラー図版19)。

4. 曲輪3

曲輪2の南西側に位置し、標高約186mを測り、曲輪2と約3mの高低差を持って高く造られている。最大長約21m、最大幅約20m、面積約313m²の規模をもつ。平面は台形を呈しており、西側に約0.5m低くなった長さ5.4m、幅1.0mの突出部がある(図26、図版16)。平坦面からは建物、土坑、ピットが検出され、北東隅と南東隅には隣接する曲輪との連絡通路6・7・8がある。

建物3は中央部やや南東寄りに位置しており、2間以上×1間以上の礎石建物である(図27、図版17-1)。曲輪平坦面に礎石を置くが、礎石1のみ掘り込んで据えている。礎石4のみが河原石である。礎石上面の標高は186.2～186.3mである。柱間は東西方向柱筋が約2.4m、南北方向柱筋が約2.0mを測る。周辺の空間から考えると2×2間、或いは2×3間の東西方向を桁行とする建物が推定できる。

石列1は西寄りに位置し、曲輪3の西側上端線と並行している。柱間は1.0～1.1mを測る(図27、図版18)。礎石4のみが河原石である。

集石1は曲輪3の南西隅から検出されており、約0.7m四方の拡がりを持つ(図27、図版18)。下部に掘り込みはされていない。直径4～10cmの石であるが、そのほとんどが河原石であり、投石用のつぶて石として集石された可能性が考えられる。

曲輪3からは2次被熱を受けた土壁、炭化物が出土しており、曲輪1と同様に建物の火災が推定される。曲輪3出土の土壁量は18.3kgである。

曲輪3の北東隅からは曲輪2との連絡通路である通路6が検出された(図28)。曲輪3下端ラインに沿ってスロープ状に登り、途中、曲輪3側へ直角に折れ曲がる。通路側壁の一部には石積6が設置されているが、乱雑な積み方である。



図26 曲輪3

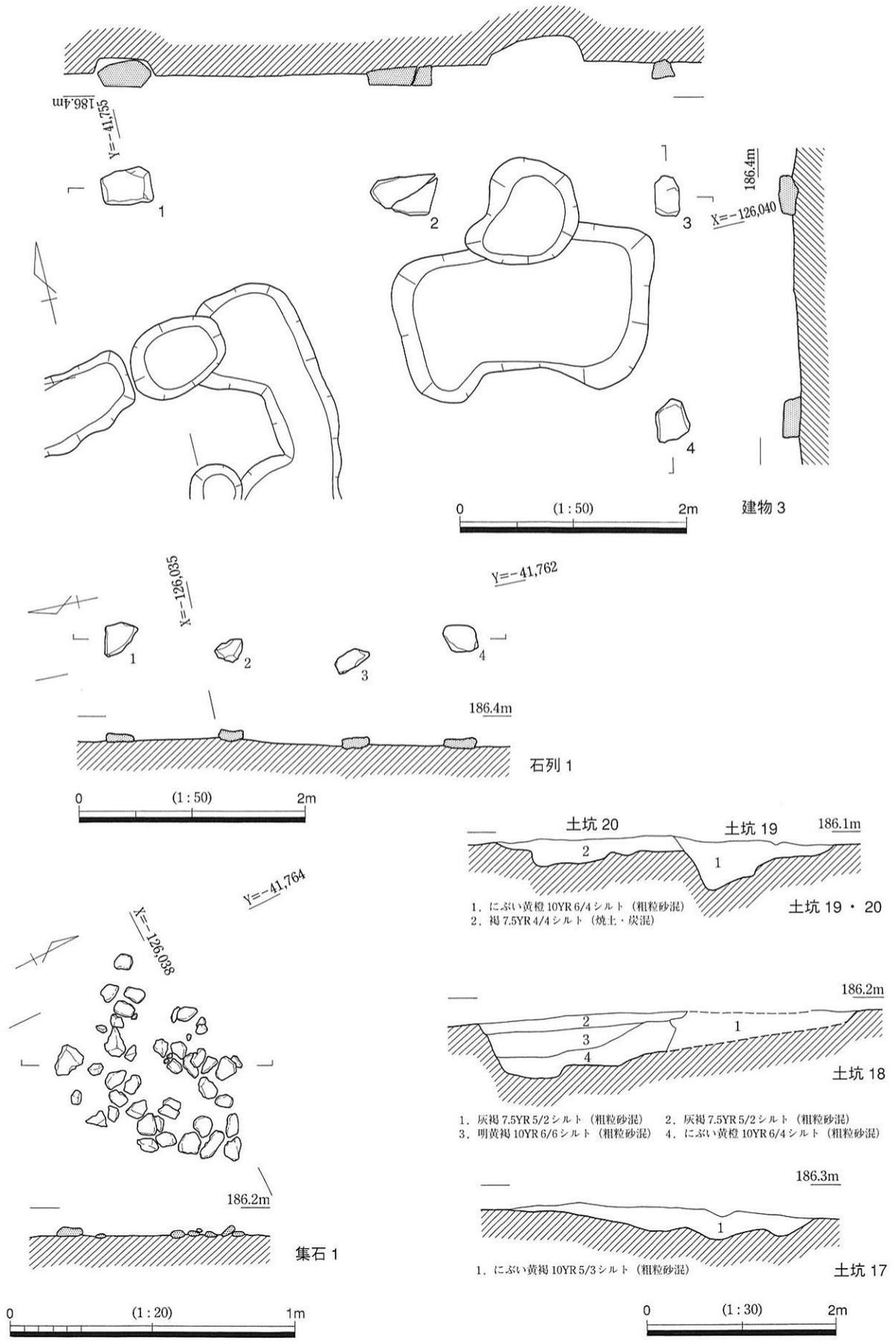


図27 曲輪3 建物3・集石1・土坑17~20

曲輪3の南東隅からは曲輪10・4との連絡通路である通路7・8が検出された(図29、図版16-2)。曲輪4から長さ約7mのスロープをなす通路8があり、曲輪10へ到達し、曲輪3側へ直角に折れ曲がる通路7へ連なる。通路8の南側上端ラインには石積9が設置してある。石積9は掘方を有し、石を並べるが、裏込め石はない。曲輪10へ登りきった位置には2段の石段を有する。石段3は北西端に扁平の石を据え、その南東側は小石である。石段4は小石から成っている。通路7は曲輪3の斜面を掘り窪め、斜面を緩やかにしているため、曲輪3の平坦面上端ラインから内側へ入り込んでいる。2段の石段を設置し、石段2で高さ16cmのステップを、石段1で高さ36cmのステップを有する(図版17-2)。石段2は掘方を有し、石段1はその上部を曲輪3の盛土としている(図30)。

通路9は曲輪3の東側に沿って曲輪2と曲輪10と連絡する(図26)。北側が幅約2.4mと広がっているが、これは曲輪3東斜面の盛土が流出したためと思われる、本来は、幅約2mの通路と考えられる。

曲輪3の造成は南から東側に盛土を行っていた。曲輪2と接する北斜面は地山を削り出している。

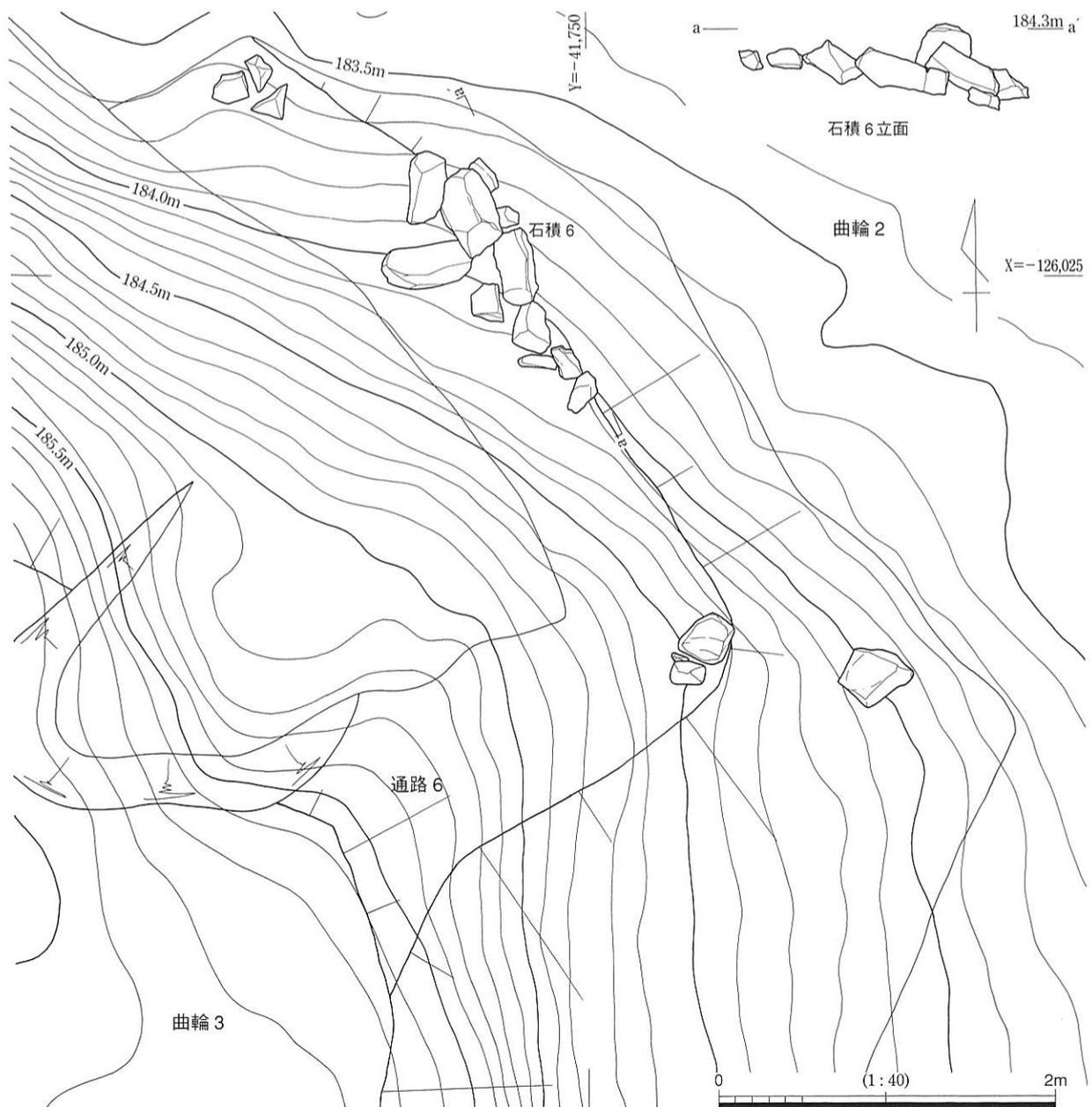


図28 曲輪2・3間 通路6

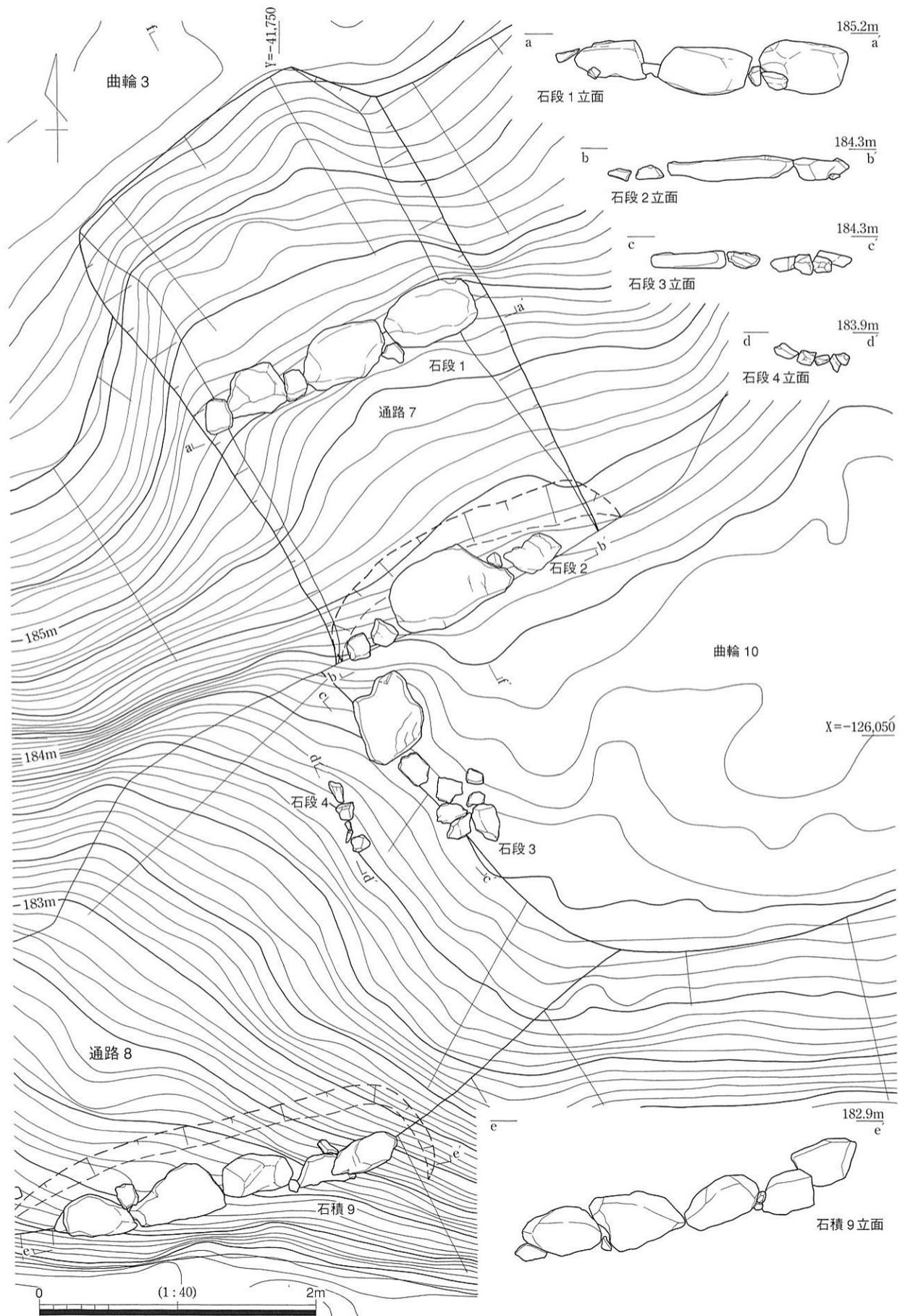


図29 曲輪 3・4間 通路 7・8

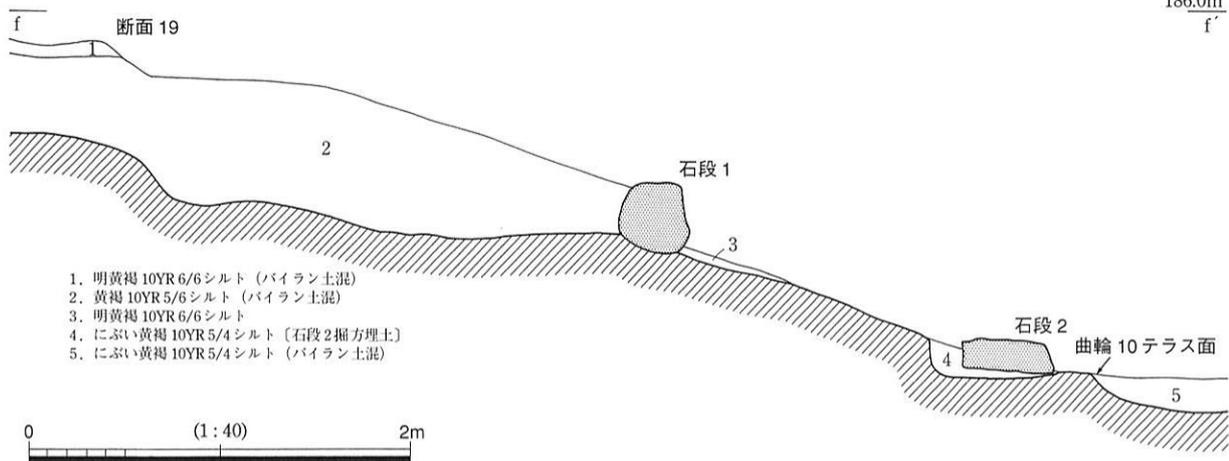


図30 通路7土層断面

5. 曲輪 8

曲輪 8 は曲輪 2 の南東谷部に位置しており、標高174mを測る。曲輪 2 との段差は約9.0mあり、低くなっている。三日月形の平面を呈しており、最大長約13.0m、最大幅約5.6m、面積約75m²の規模をもつ(図31、図版15-3)。遺構は西寄りから土坑38が検出されたのみである。

曲輪 8 の北東隅から上部へ向かって幅0.8~1.2mを測る通路12が伸びており、通路10・11に接続する。幅1.0~1.8mの通路10は曲輪 2 へ連絡しており、通路10上端部の両側には割り石が据えてあった。幅0.6~1.2mの通路11は通路 9 と曲輪 8 の間の斜面に伸びる通路であり、通路10・12を介して曲輪 5 と連絡している。幅0.5~1.2mの通路13は曲輪 8 の南端に位置しており、直接、曲輪 5 へ連絡している。

曲輪 8 の造成は奥の北西よりは地山を削り出し、南東側の谷筋は盛土を行っていた。

6. 曲輪 5

曲輪 3・6 の南側に位置し、標高約177mを測り、一段低く造られている。最大長約29m、最大幅約13m、面積約272m²の規模をもつ。三日月形の平面を呈しており、遺構は溝、土坑、ピットが検出された(図32、図版19)。平坦面の南東側と南側が若干盛土が流出しており、西端は大きく崩落している。東端で、通路11・13と接しており、曲輪 2・8 と連絡している。西端には石積10が構築されている。

土坑26(図33、図版20-2)は曲輪の東寄りに位置しており、長辺2.6m、短辺1.0mを測り、内部に直径0.8~0.9mの円形の窪みを有する。備前大甕が出土しており、大甕を据えた痕跡と思われる。

土坑27(図33、図版20-3)は曲輪の東寄りに位置しており、1.4×1.7m、深さ0.6mの平面方形の土坑であり、北東辺、南東辺に三段の石組を設置している。内部に石が落ち込んでいるところから、南西辺には石組が、北西辺には石組がない三方に石組を有する土坑であったと考えられる。

溝 3・4(図版19-3)は曲輪 6 の下端に沿って検出され、幅25~40cm、深さ 8~10cmを測る。排水溝の機能が推定される。

溝 4 の上面に集石 2 が検出された(図34、図版20-1)。長さ2.8mの範囲に石が乱雑に斜面に積み上げであり、河原石が大半を占める。中には礎石に使用されていた可能性がある石材が多く含まれていた。他に石臼、備前大甕片も混じっていた。石臼は使用不能となり、他の石と共に廃棄された状況が伺われる。これらは散乱しておらず、集石しているところから集石 2 存在時は曲輪 5 が機能していたと推定される。

石積10は曲輪 4 と曲輪 5 の境に位置する。曲輪 6 から 5 へ下る斜面から曲輪 5 平坦面に設置しており、



图31 曲輪 8・通路10~13

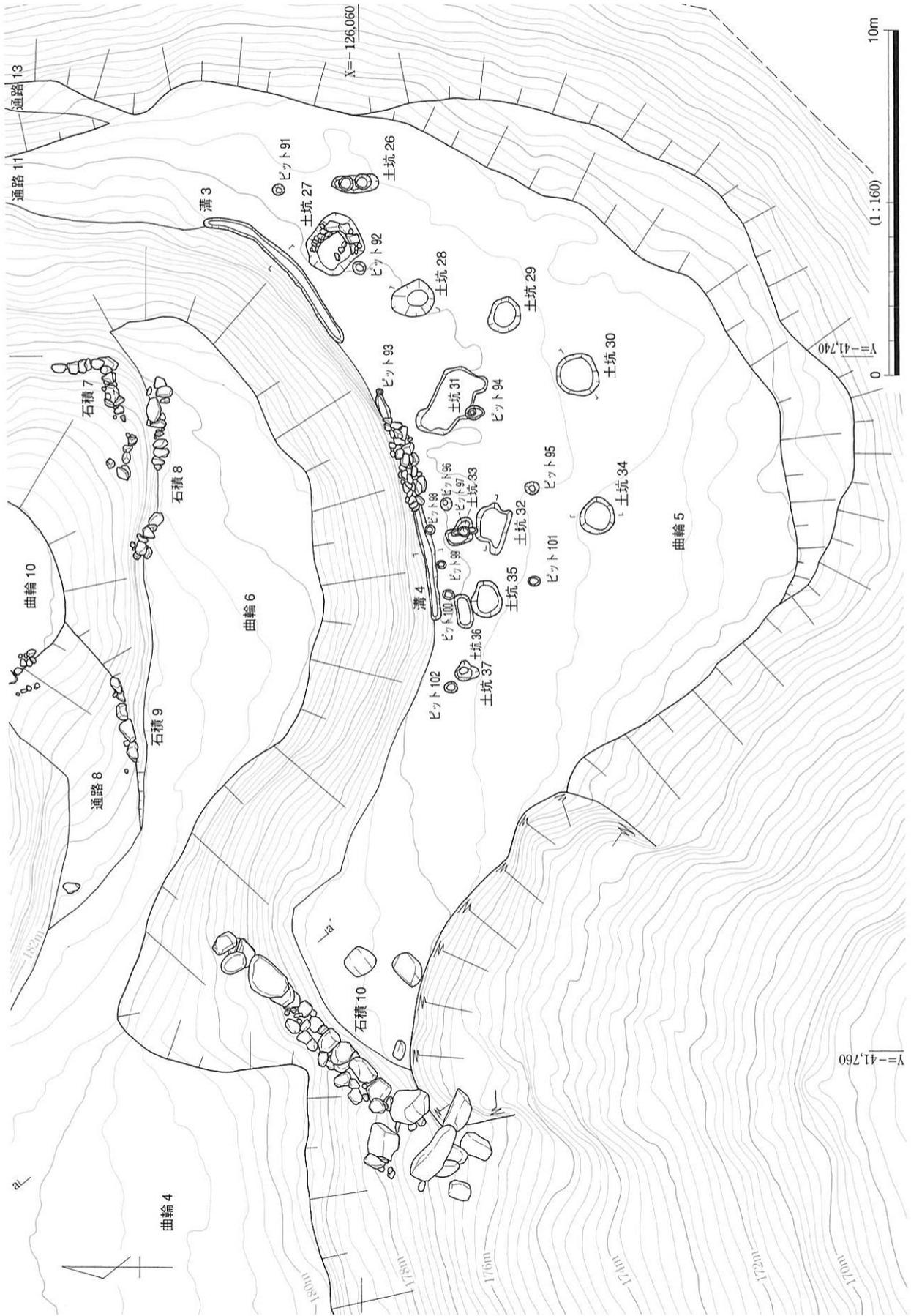


図32 曲輪5・6

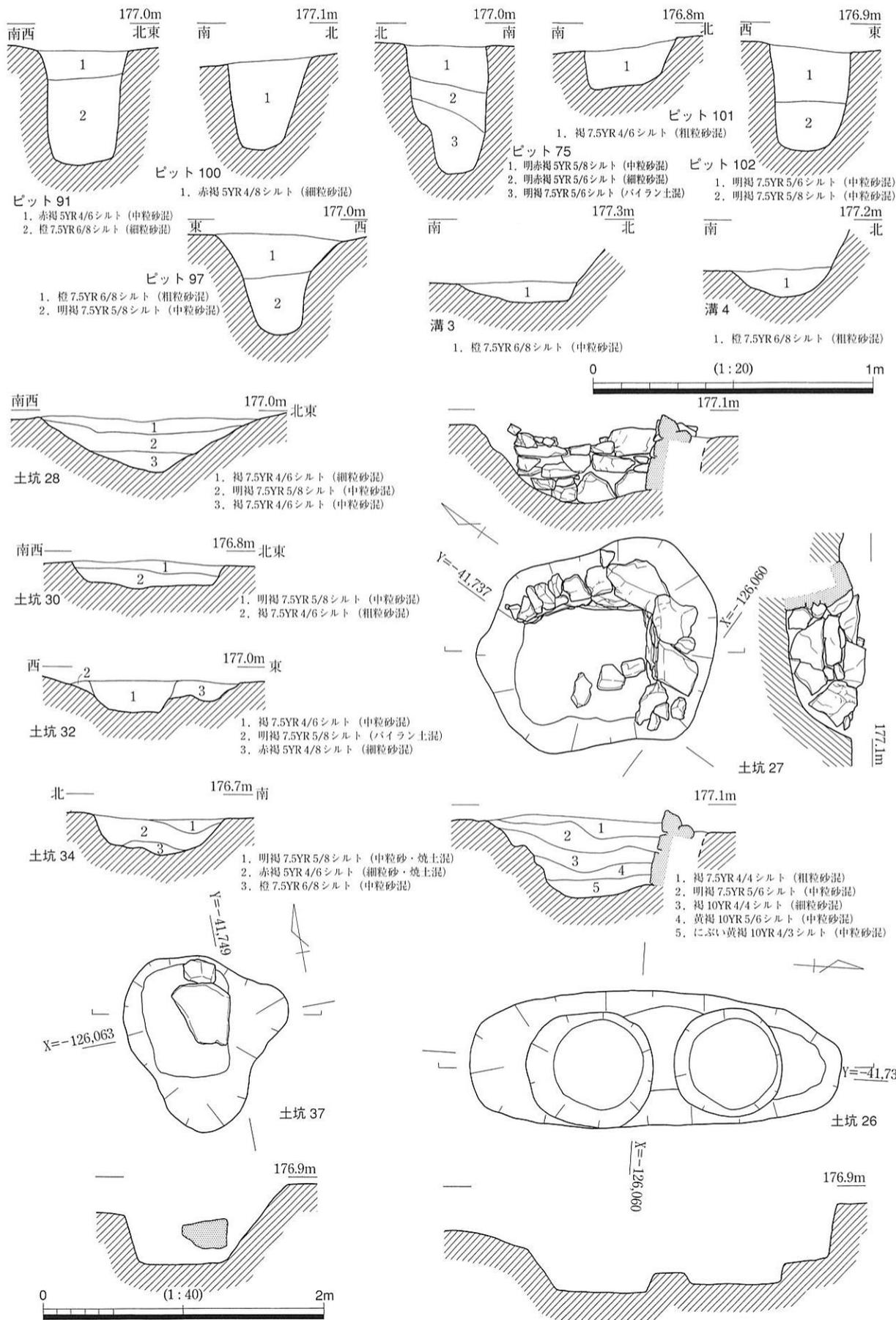


図33 曲輪5 ピット75・91・97・100～102、溝3・4、土坑26～28・30・32・34・37

長さ約8.0mを測る(図35・36、図版21、カラー図版17)。他の石積と相違し、非常に大きな石材を使用している。3段まで残存し、南端は崩落している。裏込め部分には一辺約0.3m程度の石を置いているが、石材を詰めるような本格的な裏込めではない。裏面側の曲輪4盛土は粗い積み方である(図35)。

曲輪5の造成は曲輪6下端部の地山を削り出し、南端側は盛土を行っている。

7. 曲輪6

曲輪6は曲輪5の北側上段に位置しており、標高181.2mを測る。最大長約15m、最大幅約5m、面積約54㎡の規模をもつ(図32、図版19-1)。西側は曲輪4と接し、通路7・8を介して曲輪10・3と連絡している。東側は行き止まりになっている。

平坦面からは遺構は検出されていない。曲輪北東端から石積8が検出された(図37、図版18-4)。石積8は途切れがあるが、長さ5.3mを測り、1段のみの残存である。地山面に張りつけており、法面保護のための設置であろう。

造成は盛土を行わず、削り出しにより平坦面を形成している。

8. 曲輪10

曲輪10は曲輪3で述べた通路7と通路8に挟まれた位置にあり、曲輪3と曲輪4をつなぐ平坦面であ

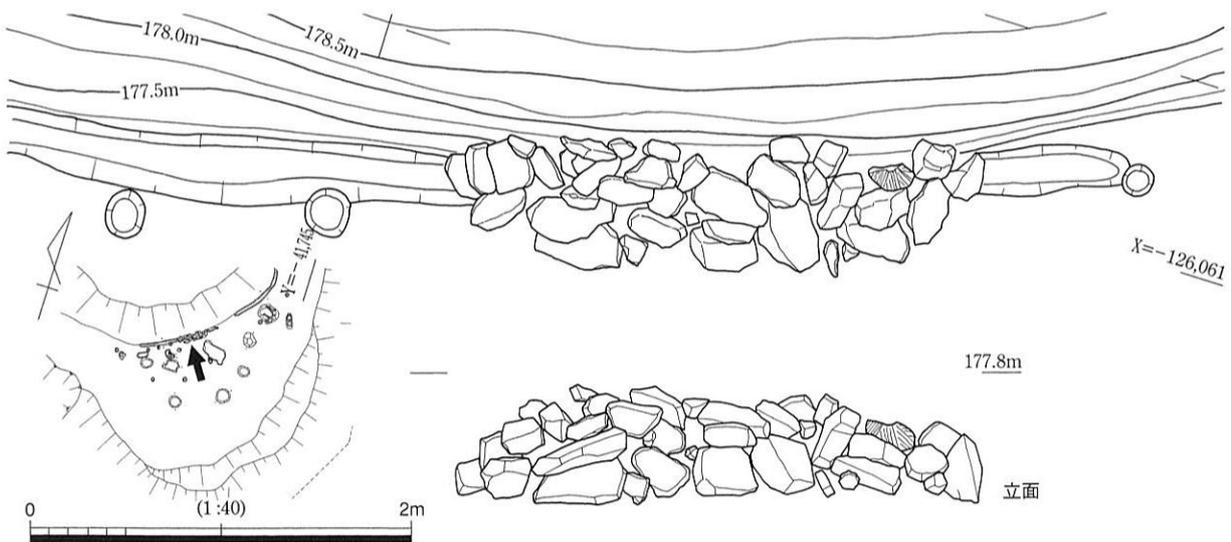


図34 曲輪5 集石2

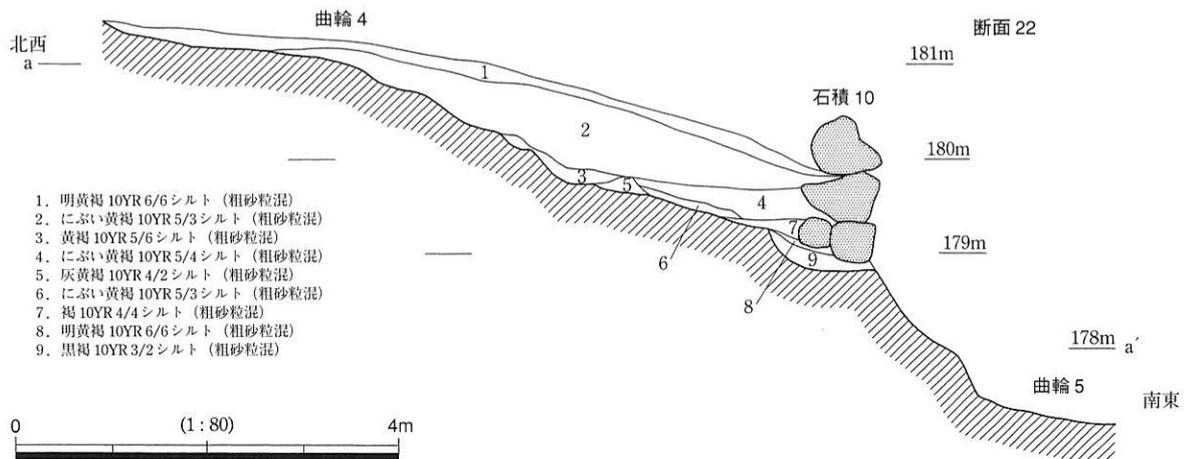


図35 曲輪4 石積10土層断面

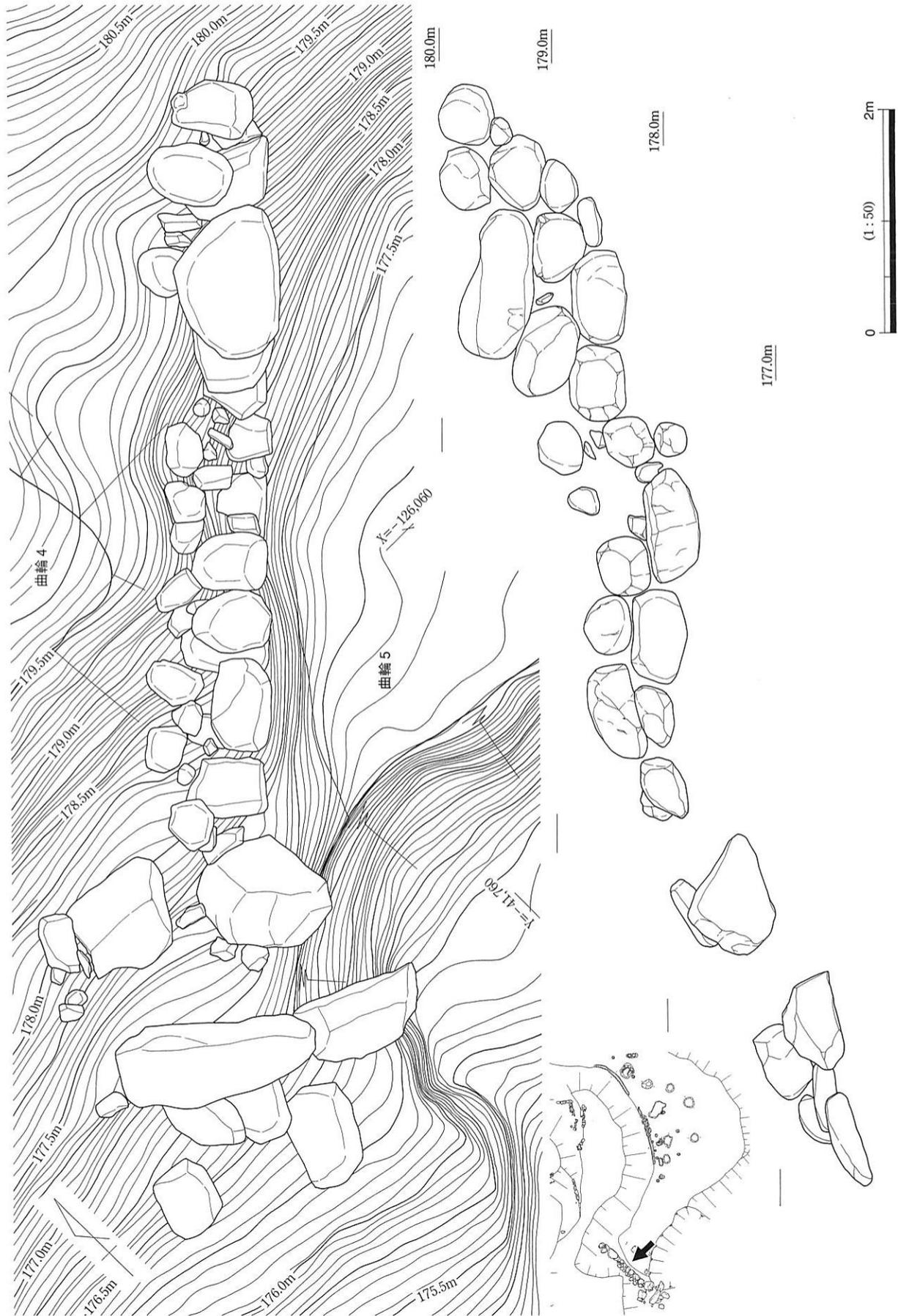


図36 曲輪 4 石積10

る(図26、図版16-1)。曲輪3より約1.8m低くなっており、最大長約6.0m、最大幅約3.6m、面積約21m²の規模をもつ。南東方向の下端には石積7があり、曲輪10と同一の高さではない平坦面の存在が考えられる。石積7(図37)は2辺が直角を成しているが、南辺の西半分にはズレ(図37b-b')がある。2段までの残存である。裏込め石は存在しない。

9. 曲輪4

曲輪3の南側に位置し、約5.0mの段差をなして低く造られている(図38、図版22-1・2)。最大長約20m、最大幅約11m、面積約172m²の規模をもつ。遺構は検出されていない。平坦面は比高差約1mの傾斜地になっている。南端のラインは石積10の南西端まで伸びていたと思われるが、完全な平坦化をすることなく、造成を放棄した可能性もある。

北西方向から西方向には土塁3がある。地山削り出しにより造成され、高さ2.1mを測る。西半分には巨石が散乱しているが、地山と盛土が流出し、露呈してしまったと考えられ、土塁に取り込んで一体としたものである。土塁造成時に露呈しており、取り込むために、移動させているものもある。北斜面に

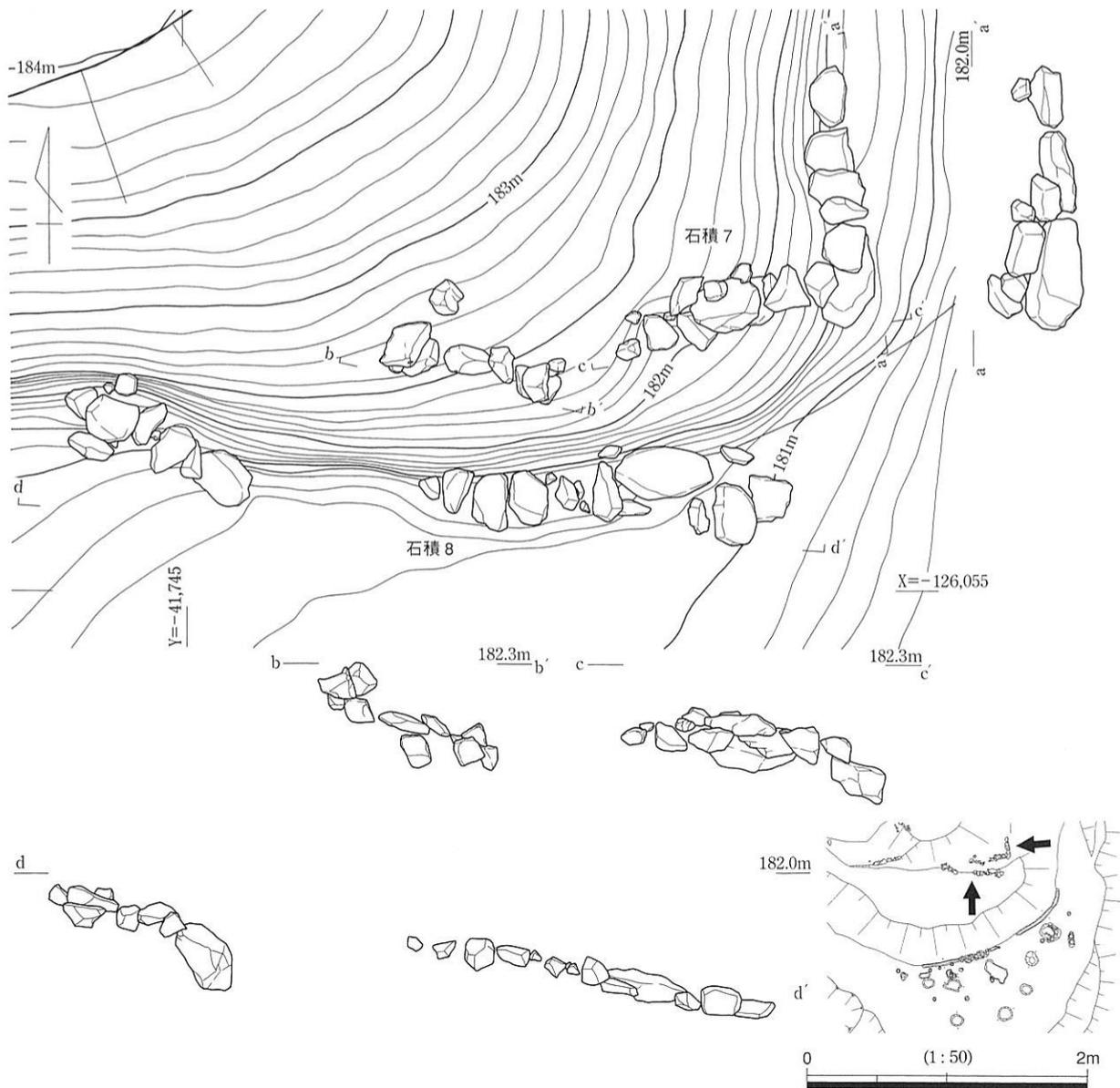


図37 曲輪10 石積7・8

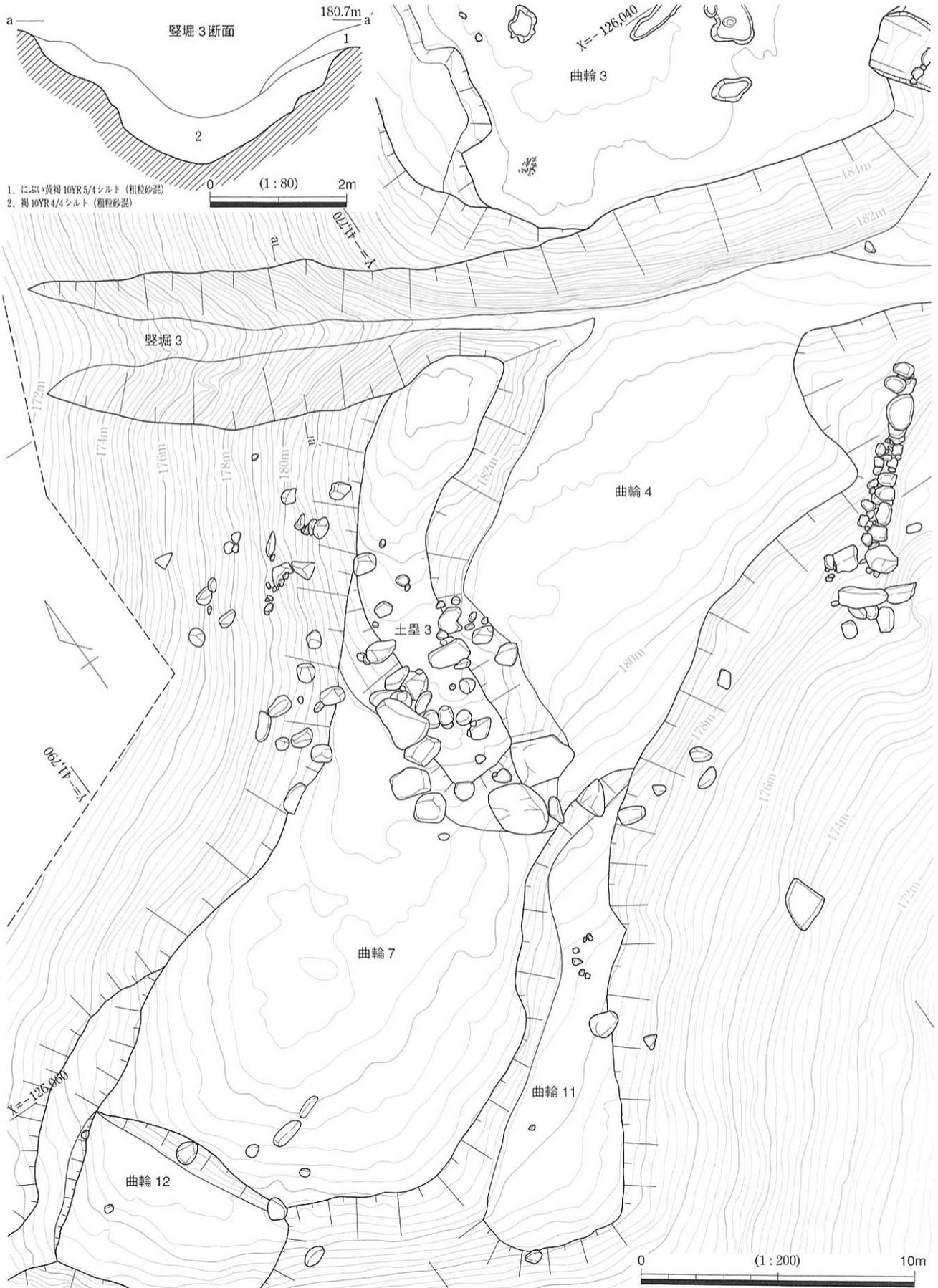


図38 曲輪 4・7・11、堅堀 3、土塁 3

みられる石群も地山内の一部であり、単に露呈したものであって、人為的な構築物ではない。

曲輪 4 の造成は土塁 3 の造成と共に平坦面を削り出し、その南側は大規模に盛土している。

10. 曲輪 7

曲輪 4、土塁 3 の南西に位置する。標高180.4mを測り、最大長約15m、最大幅約13m、面積約174m²の規模をもつ(図38、図版22-1・2)。曲輪 1～3 のような平坦面ではなく、南側と南西側に向かって緩い傾斜をもっている。遺構は検出されていない。

造成は頂上部より南側に向かって曲輪11と共に盛土を行っているが、完全に平坦化することなく造成を放棄した可能性も考えられる。

11. 曲輪11

曲輪 7 の南側に位置する(図38、図版22-3)。南側に向かって緩い傾斜をもっている。遺構は検出されていない。標高179mを測り、最大長約17m、最大幅約 5 m、面積約48m²の規模をもつ。南側の盛土が大きく流出していると思われるが、曲輪 7 同様、完全な平坦化を行っていない可能性がある。

12. 曲輪12～14

曲輪12～14は西端の尾根先端に位置する小規模な曲輪である(図39、図版22-4)。いずれも北端に沿う通路14により曲輪 7 から連絡している(図版23-2)。

曲輪12は標高178.4mを測り、最大長8.0m、最大幅5.0m、面積約36m²の規模をもつ。造成は東側が地山を削り出し、西側に盛土を行っている。曲輪 7 下段を直線とする(図版23-1)。

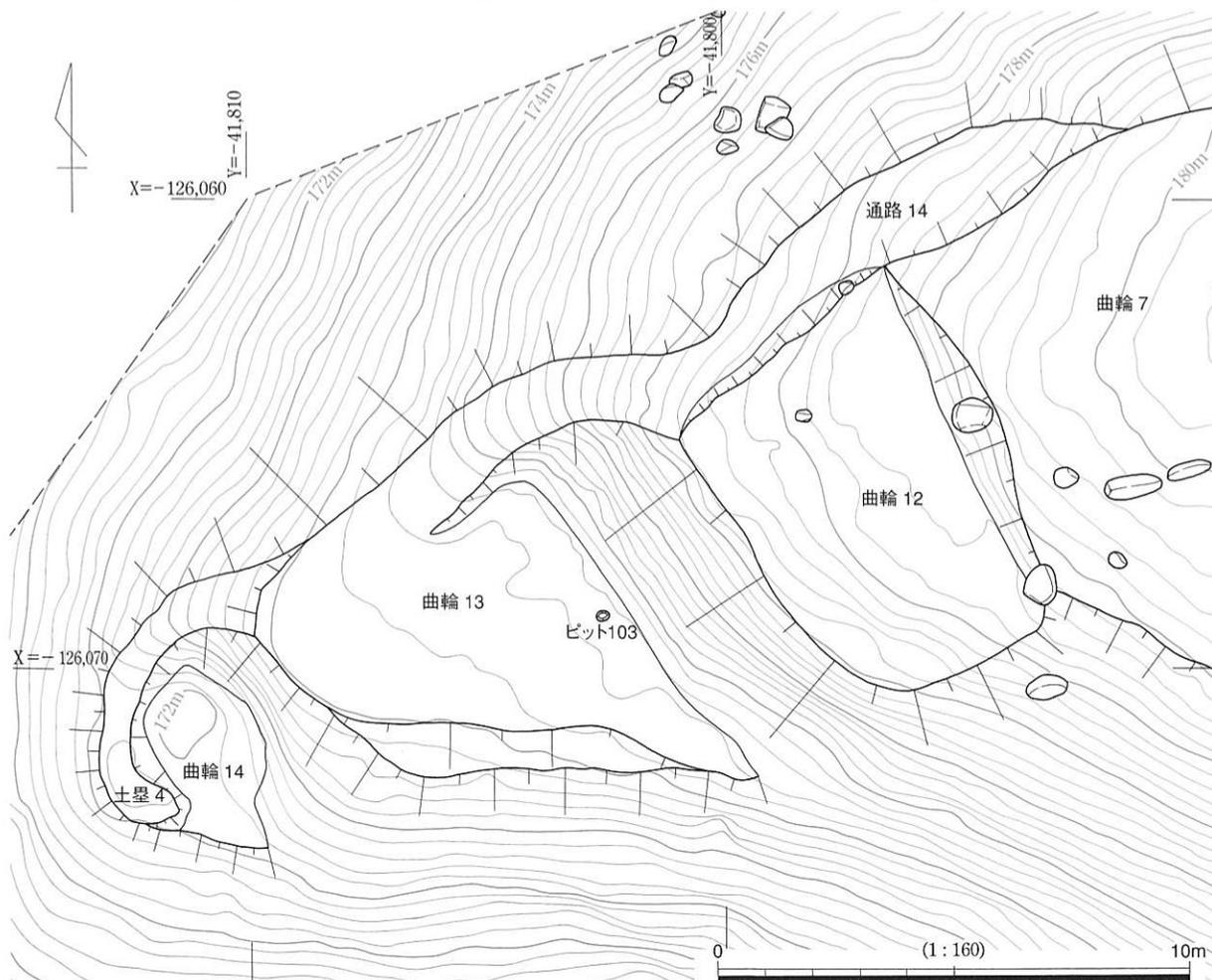


図39 曲輪12～14

曲輪13は標高174.4mを測り、最大長10.0m、最大幅6.6m、面積約41m²の規模をもつ(図版23-3)。東側の地山を大きく削り出し、曲輪12下段を直線とする。曲輪12との高低差は4mを測る。西側への盛土は浅い。遺構は東端からピット103が検出されたのみである。直径0.2m、深さ0.3mを測る。

曲輪14は最先端に位置し、標高173.4mを測る。最大長4.2m、最大幅2.2m、面積約7m²の規模をもつ(図版23-4)。曲輪13との高低差は1.0mを測る。北側から西側にかけて土塁4が取り巻いている。土塁4は盛土により構成されている。

13. 竪堀1・2

曲輪1東側の尾根南斜面と北斜面に位置している。尾根頂上部でつながっており、尾根を完全に遮断している(図40、図版24・25)。頂上部では調査前は完全に埋まっていたが、調査により深さ約2.0mを測り、断面はU字形を呈することが確認できた。地山の岩盤を切り崩している。頂上部に木橋、ピット等の遺構は検出されなかった。

竪堀1は南斜面に位置する。尾根頂上部から長さ約28.0m、幅約7.0mを測り、断面形態はU字形を呈している(図41)。東側には土塁1が並行しており、堀の深さをさらに増し、防御の効果を上げている。盛土は版築を行わず、竪堀1を掘り上げた土砂をそのまま積み上げたものであり、粗粒砂混じりの黄褐色シルトで構成されている。頂上部付近は盛土が流出しており土塁の高さが低くなっている。

竪堀2は北斜面に位置する。尾根頂上部から長さ約32.0m、幅6.5~9.0mを測り、断面形態はU字形からV字形を呈している(図42)。通路3はこの竪堀2により切断されているが、堀内部はこの部分のみ浅くなっており、通過可能のようになっている(図版25-2)。なお、調査以前は通路3が切断されておらず、南、北に竪堀がそれぞれ存在するかのようであった。

14. 竪堀3

曲輪3南側の南西斜面に位置する(図38、図版26)。長さ21.0m、幅3.4~6.0mを測り、断面は緩やかなV字形を呈している。南東端は土塁3を切断しているかのごとく、曲輪4の平坦面と連続しているが、土塁3の北東端の下端が曲輪4側へ長く伸びる(図版26-3)ところから、土塁3、曲輪4に先行して竪堀3が存在していたことが推定される。

15. 盛土・切土

前述の曲輪、通路、土塁、竪堀について、その造成状況を各部分において確認をおこなった(図51)。造成は掘削した土を盛土することを基本とし、その盛土の方法は各部分によって相違があり、盛土以前の地山造成にも有無がある。

曲輪1・9 北辺には盛土を行っていない(図17-断面2)。土塁2と曲輪1平坦面北側2/3は地山を削り出している。曲輪1の南東隅(図45-断面1)は地山面から約0.7mの高さまで細かく積み上げ、その上部は粗く、さらにその上部を再び細かく盛土している。約1.2mの盛土高を測る。曲輪9は曲輪1下端側1/3部分を地山削り出しており、曲輪9の盛土部分は地山の加工をせず、石積1を設置しながら行っている(図17-断面2)。石積裏側約0.8m部分は版築状に積み上げているが、その奥側は同一土質の盛土を行っている。約1.4mの盛土高を測る。

曲輪2・8 曲輪2は両側の曲輪1・3より下がった位置にあり、曲輪1と接する東辺と曲輪3と接する南西辺を大きく地山を削り出し、立ち上がりが急な斜面としている(図45-断面8)。盛土は南東部側約1/3の範囲で行っており(図46-断面6)、平坦面の南東辺を直線に仕上げ、全域において細かく積み上げている。特にテラス面直下は細粒砂とシルトの互層になっており、丁寧な積み方である。約

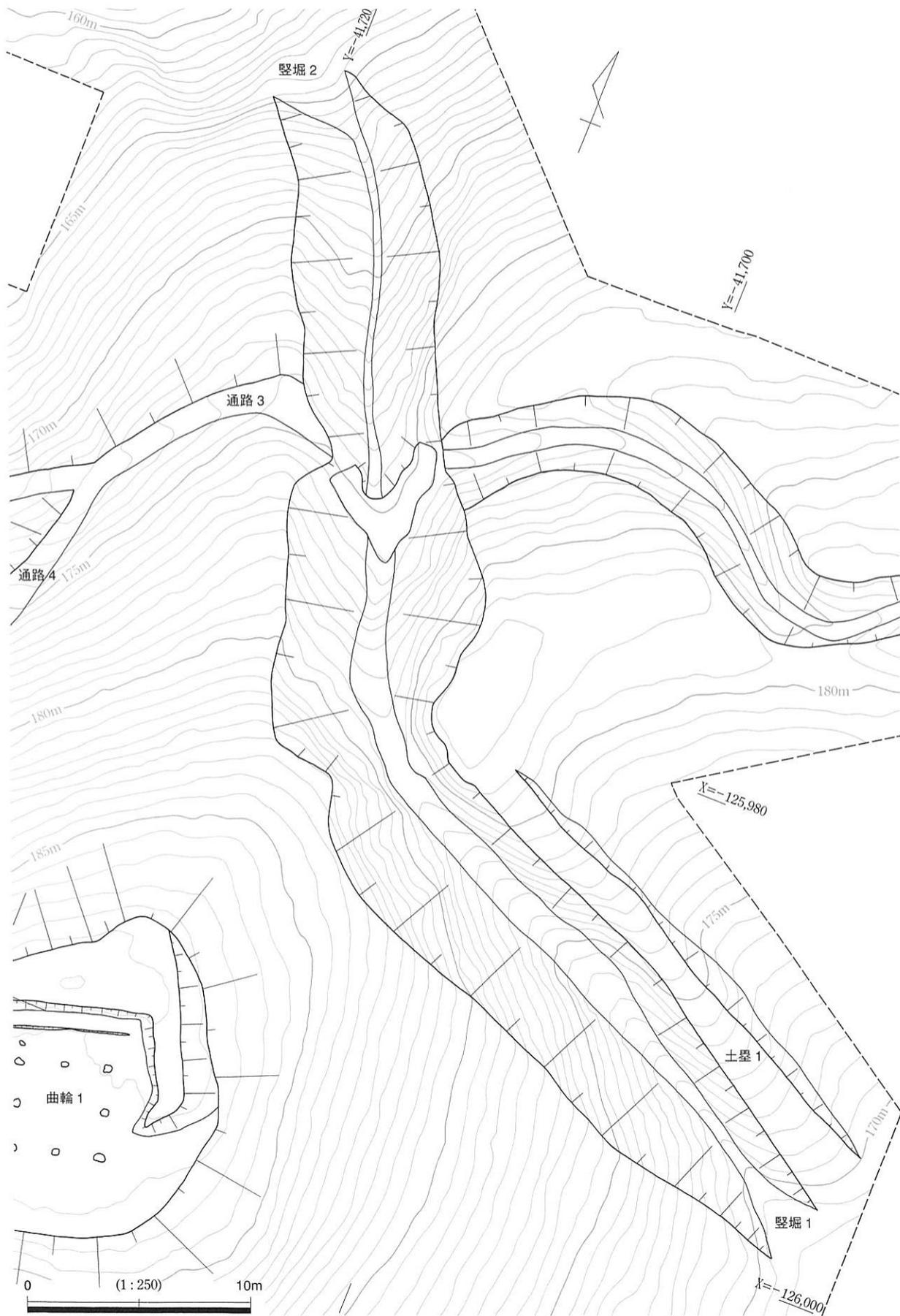
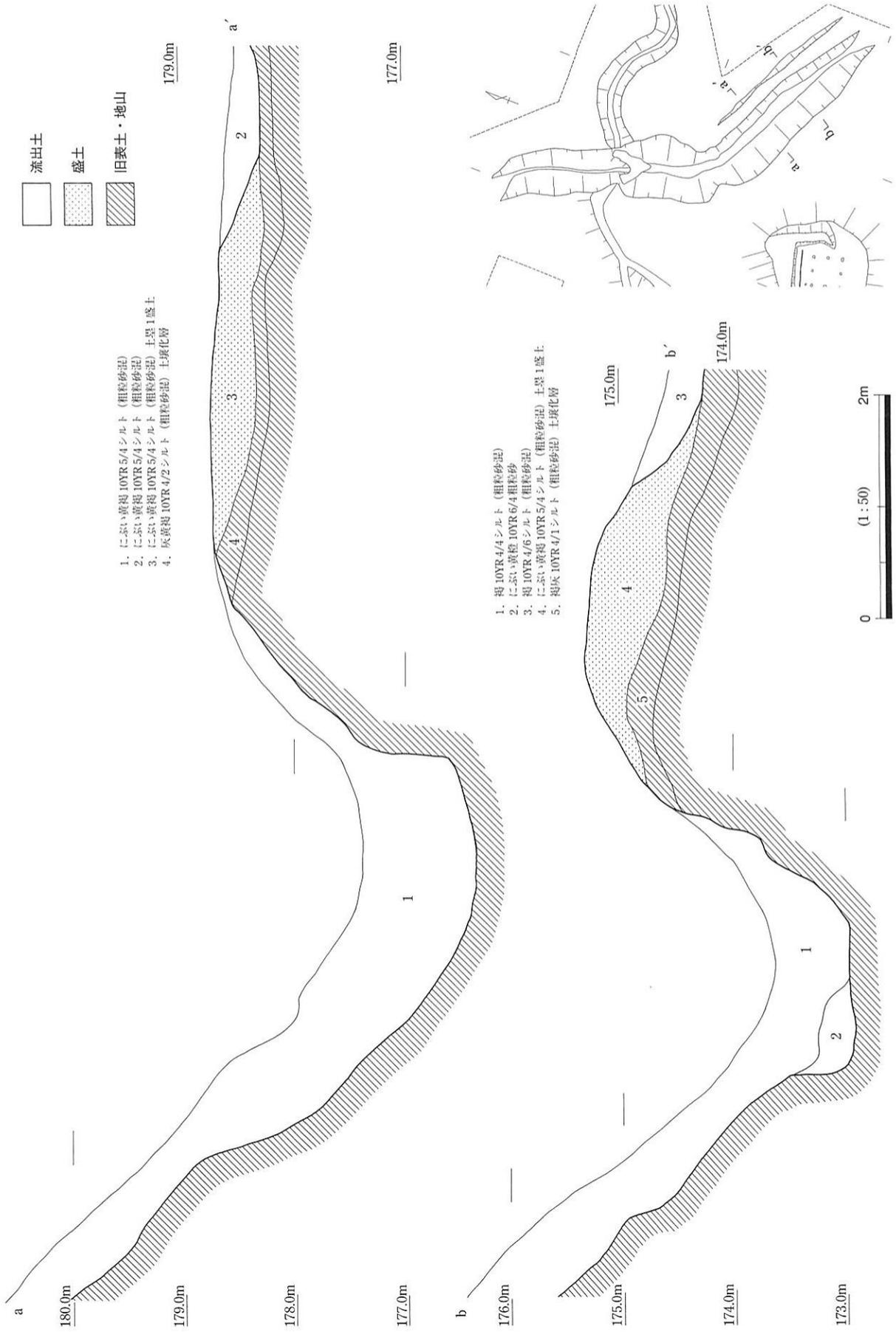


図40 竖堀 1・2



- 1. にぶい黄褐 10YR 5/4 シルト (粗粒砂泥)
- 2. にぶい黄褐 10YR 5/4 シルト (粗粒砂泥) 土器 I 盛土
- 3. にぶい黄褐 10YR 5/4 シルト (粗粒砂泥) 土器 I 盛土
- 4. 灰黄褐 10YR 4/2 シルト (粗粒砂泥) 土壌化層

- 1. 褐 10YR 4/4 シルト (粗粒砂泥)
- 2. にぶい黄褐 10YR 6/4 粗粒砂
- 3. 褐 10YR 4/6 シルト (粗粒砂泥)
- 4. にぶい黄褐 10YR 5/4 シルト (粗粒砂泥) 土器 I 盛土
- 5. 褐灰 10YR 4/1 シルト (粗粒砂泥) 土壌化層

図41 竪堀1断面

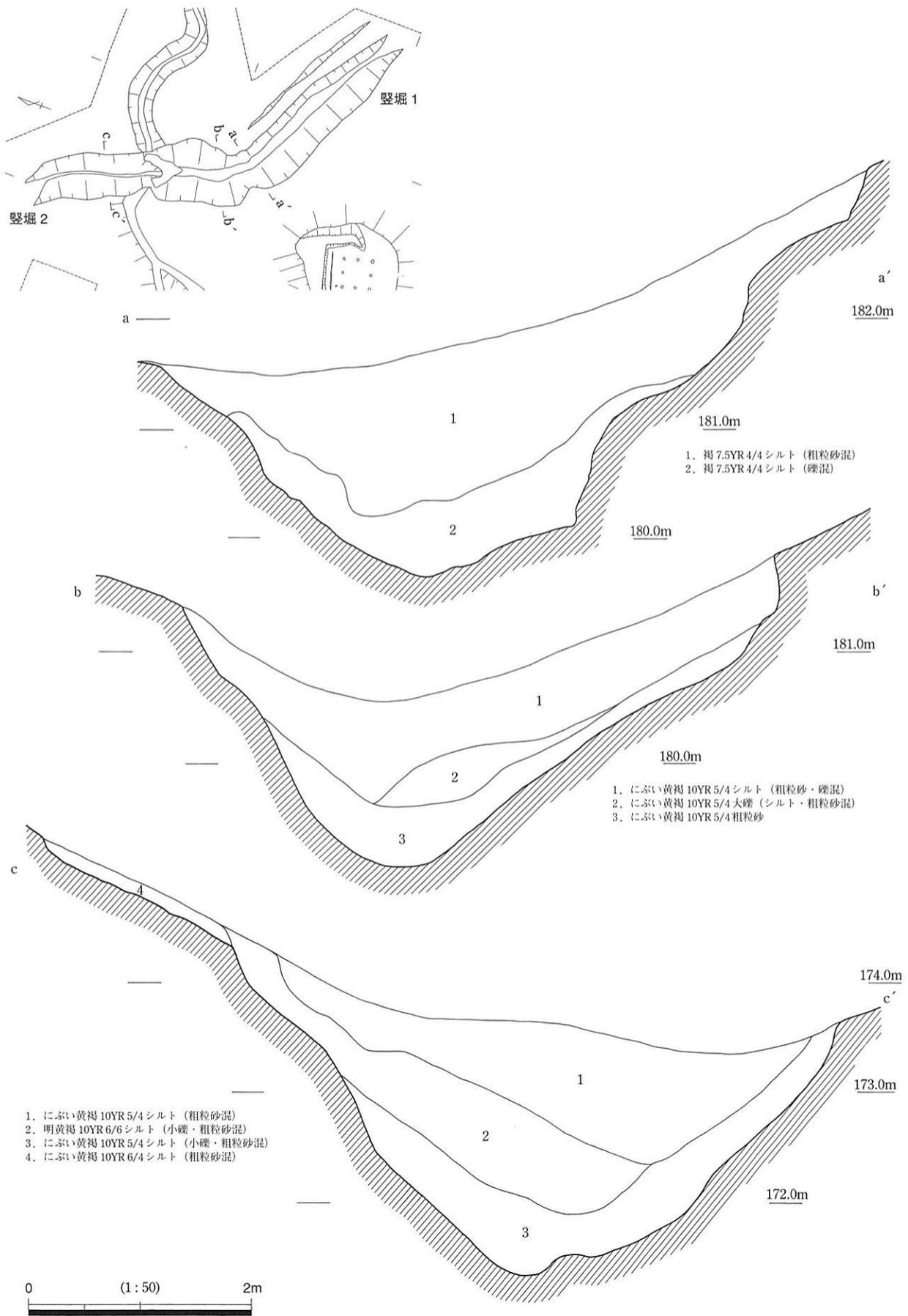


図42 竖堀2断面

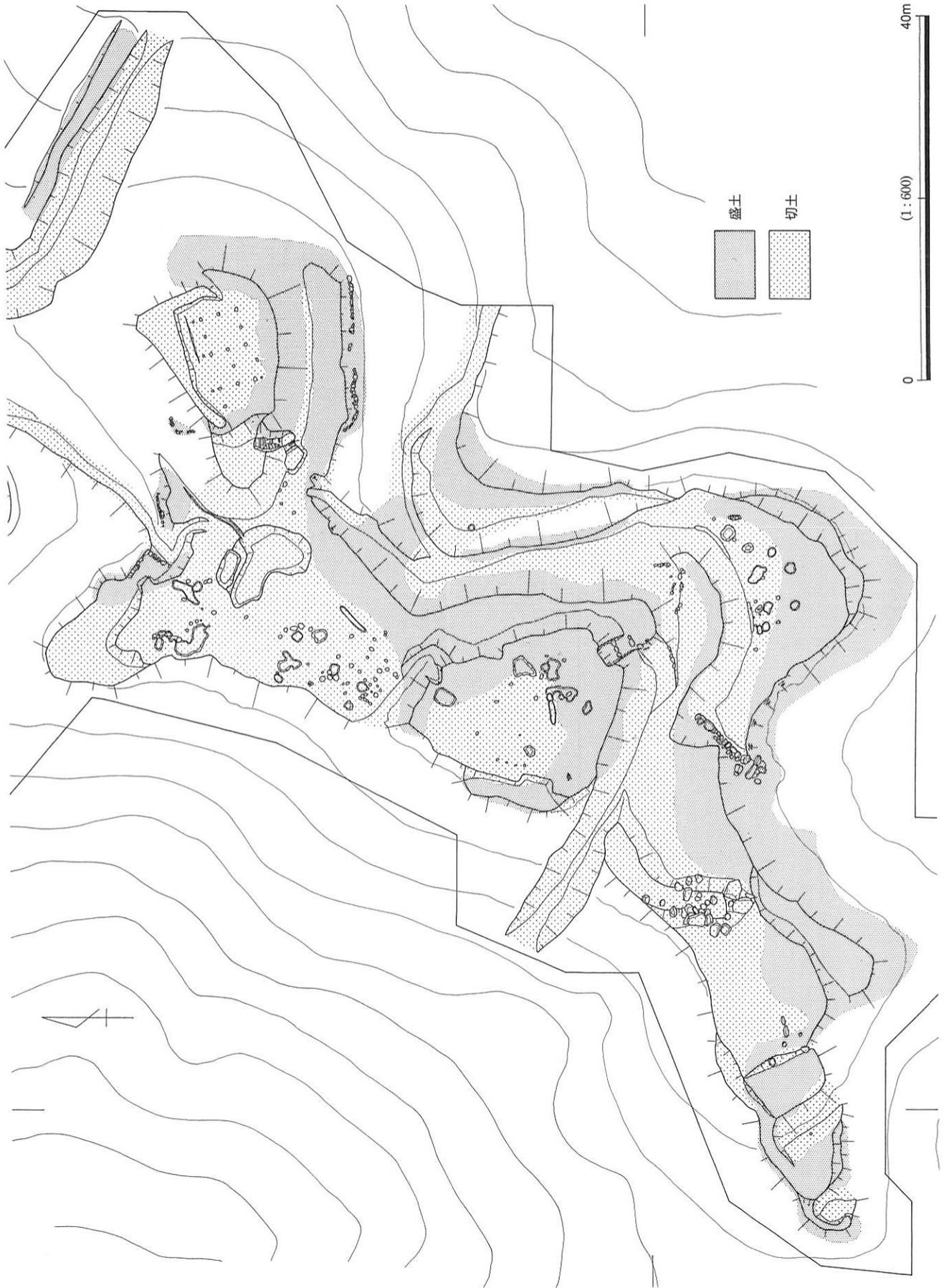


图43 切土·盛土分布图

1.0～1.4mの盛土高を測る。曲輪2下面にあたる通路10・12は盛土にて形成されている。さらに、曲輪8は北西辺端部を除いてそのほとんどを盛土造成していた。曲輪2と同様に細かく積み上げられている。約1.4mの盛土高を測る。

曲輪3 北辺の盛土量は少なく、下端から高さ2/3は地山を削り出している。約0.8mの盛土高を測る(図47-断面13-土層5)。西辺は張り出し部分に盛土(図48-断面18)がみられるが、それ以外は盛土を行っていない。約0.5mの盛土高を測る。東辺は通路9にかけて盛土を行っている。東辺の北側においては盛土以前に地山部分を鈍角にカットしており(図44)、カット部分の盛土は細かく積み上げ(図48-断面15-土層4～7)、その上部は同一土質である。約1.3mの盛土高を測る。通路9は下層部に細かい土層が観察されたが、上層部は曲輪3盛土の土層(図48-断面15-土層1)が続く。約1.1mの盛土高を測る。通路7から南辺にかけての下端部は地山を削り出している。盛土はやや粗く積み上げており、約0.7～1.5mの盛土高を測る(図47-断面13a-a'、断面21)。

曲輪5・6 曲輪6は地山を大きく削り出し、南辺の平坦部分に約0.4mの盛土を浅く積み上げている(図49-断面26)。斜面はすべて地山が露出し、下端部は垂直に削り落としている。曲輪5の北辺側約1/3は地山を削り出している。南辺側の盛土は尾根筋ラインに高く積み上げている。尾根筋ライン部分は細かく積み上げているが、両側の盛土は粗い(図49-断面25・27)。約0.6～1.6mの盛土高を測る。

曲輪4 土塁4の地山削り出しに伴って曲輪4平坦面の北辺部分も地山を削り出している。南辺の盛土は粗く積み上げられており、縁辺部はなだらかな斜面になっている。約1.0～2.0mの盛土高を測る(図50-断面23・24)。

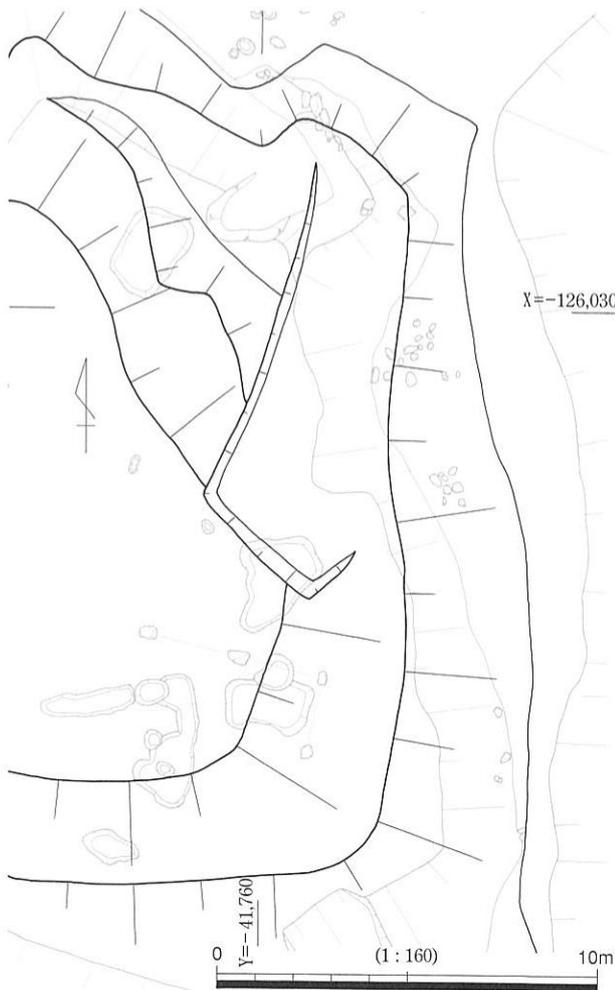


図44 曲輪3盛土造成以前地山状況

曲輪7・11 曲輪7・11は水平な平坦面をもたず、南側に向かってゆるやかな斜面になっている。曲輪7の北辺は地山が露出しており、南辺は盛土が粗く積まれている(図50-断面28細部a-a'-土層2)。約0.5mの盛土高を測る。曲輪11は全面盛土である。盛土造成前に地山を階段状にしており(図50-断面28の地山ライン・カラー図版20)、その上部に高さ約1.0mまで細かく盛土を積み上げている。その上部約0.7mは粗い盛土である。

曲輪12～14 曲輪12の東辺端は地山を削り出しており、他は盛土をしている(図50-断面29)。盛土は大きく流出しており、平坦面は西へ向かって傾斜している。曲輪13の東辺は地山を削り出し、平坦面の約1/3を地山が露出している(図50-断面30)。盛土の深さは約0.3mを測り、地山部分の傾斜は緩い。曲輪14は地山を削り出しており、土塁4は盛土で形成されている(図50-断面30-土層3)。

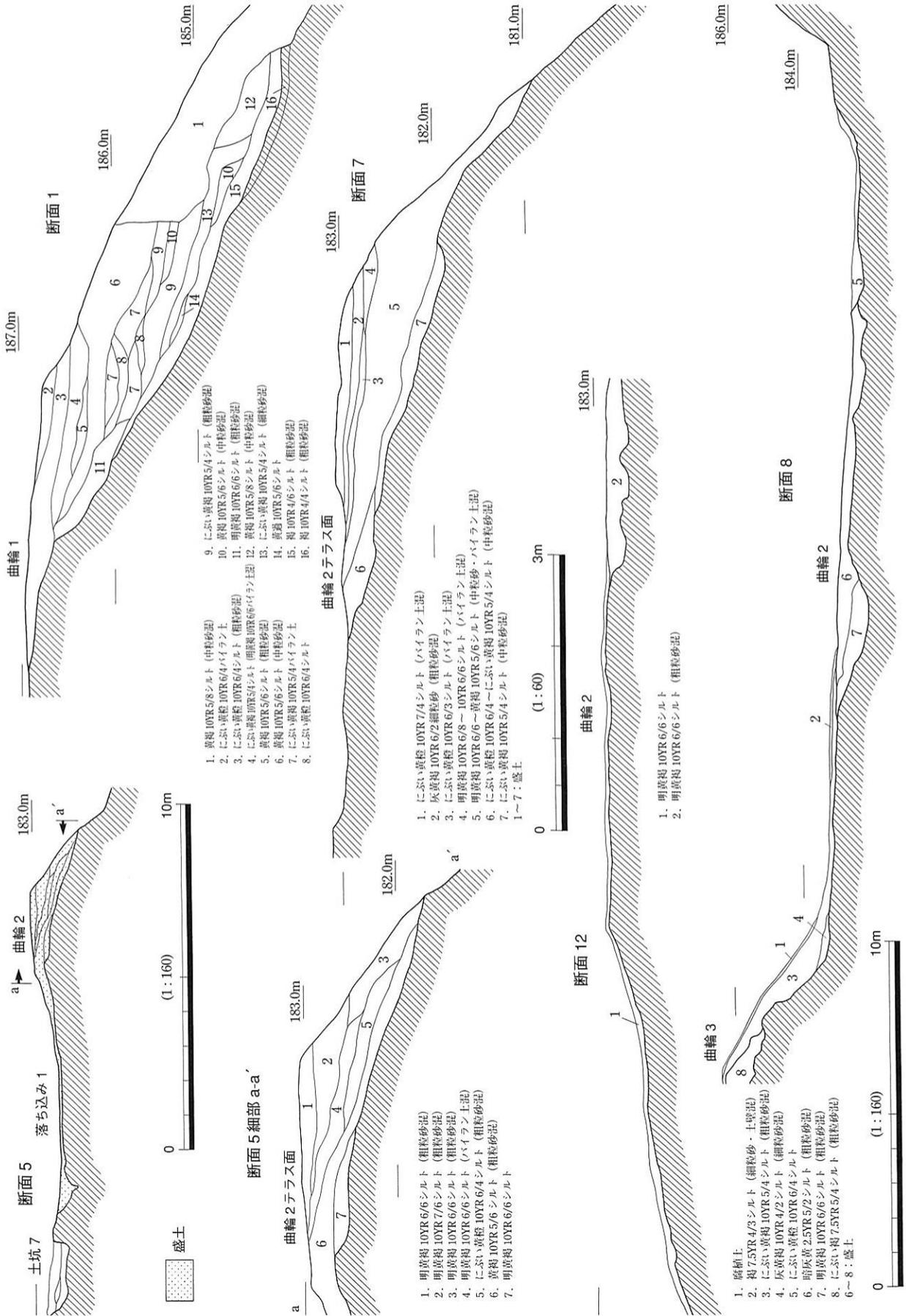
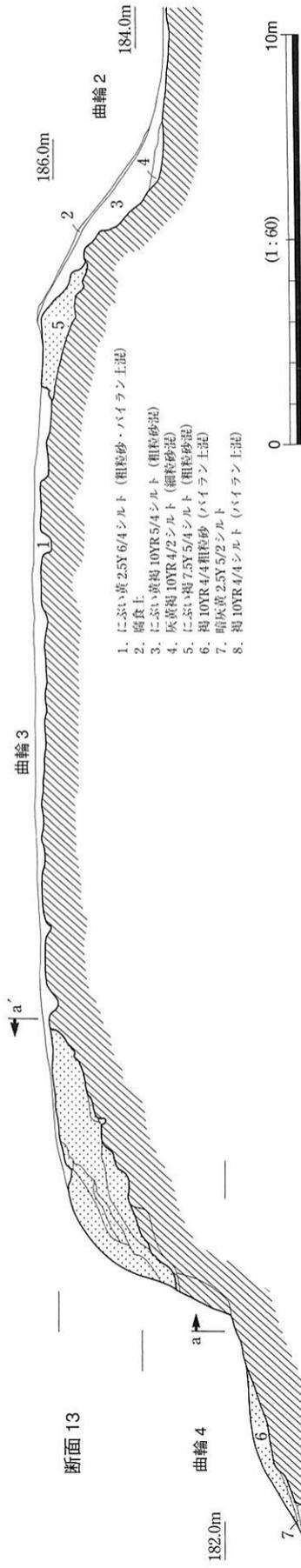


図45 土層断面 1・5・7・8・12

断面 6



図46 土層断面 6



1. にぶい黄 2.5Y 6/4シルト (粗粒砂・バイラン土泥)
2. 腐食土
3. にぶい黄褐 10YR 5/4シルト (粗粒砂泥)
4. 灰黄褐 10YR 4/2シルト (細粒砂泥)
5. にぶい褐 7.5Y 5/4シルト (粗粒砂泥)
6. 褐 10YR 4/4粗粒砂 (バイラン土泥)
7. 暗灰黄 2.5Y 5/2シルト
8. 褐 10YR 4/4シルト (バイラン土泥)



1. にぶい黄 2.5Y 6/4シルト (粗粒砂・バイラン土泥)
2. 黄褐 2.5Y 5/6シルト (盛土)
3. 暗灰黄 2.5Y 5/2シルト (粗)
4. 黄褐 2.5Y 5/3シルト (粗粒砂泥)
5. 暗灰黄 2.5Y 5/2シルト (粗)
6. 黄褐 2.5Y 5/4シルト (粗粒砂泥)
7. 明灰褐 10YR 6/6シルト (バイラン土泥)
8. 黄褐 2.5Y 5/3シルト (粗粒砂泥)
9. 暗灰黄 2.5Y 5/2シルト (粗粒砂泥)
10. 黄褐 2.5Y 3/1シルト
11. 黄褐 10YR 5/6シルト (粗粒砂泥) 地山

図47 土層断面13・21

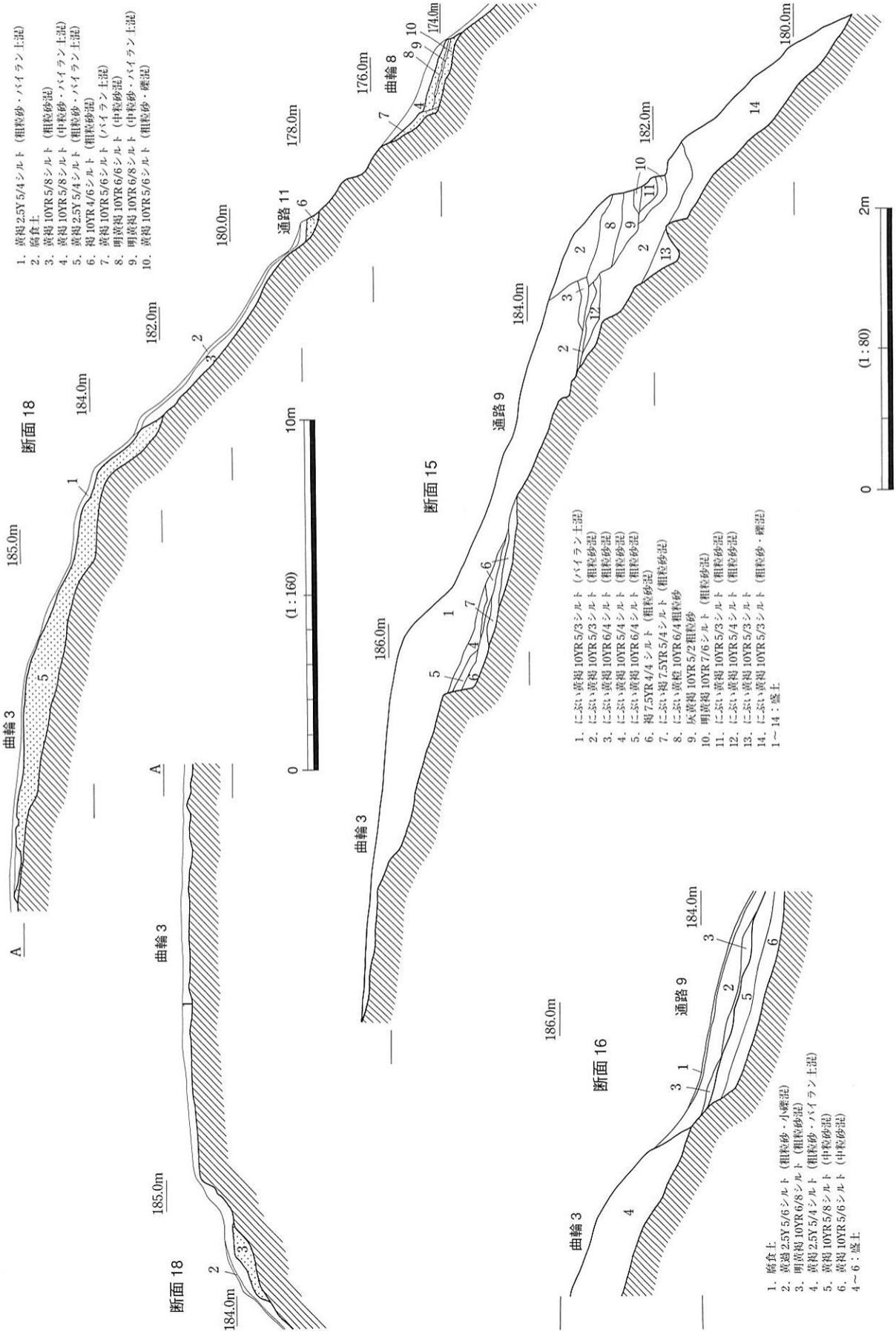


図48 土層断面15・16・18

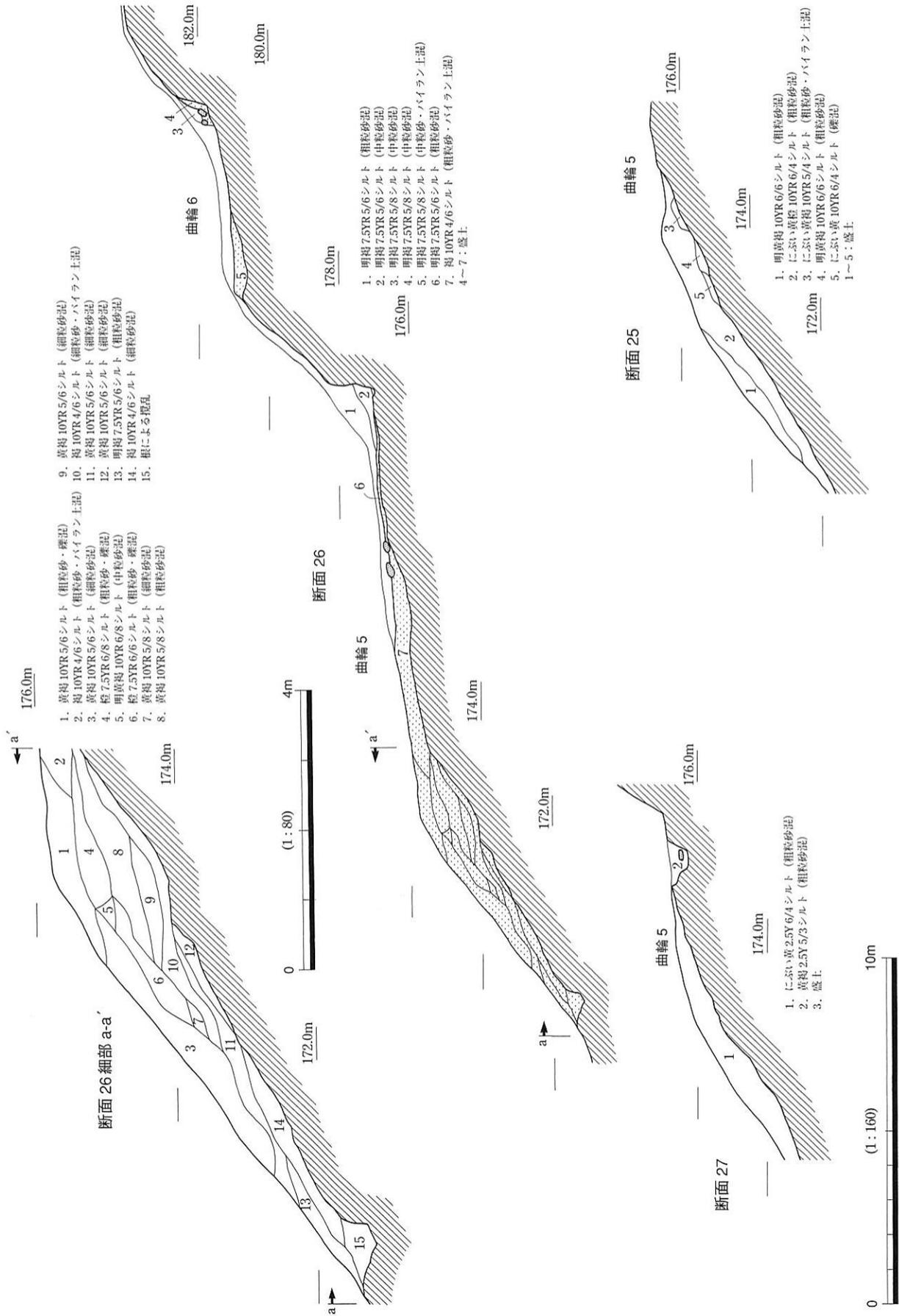


図49 土層断面25~27

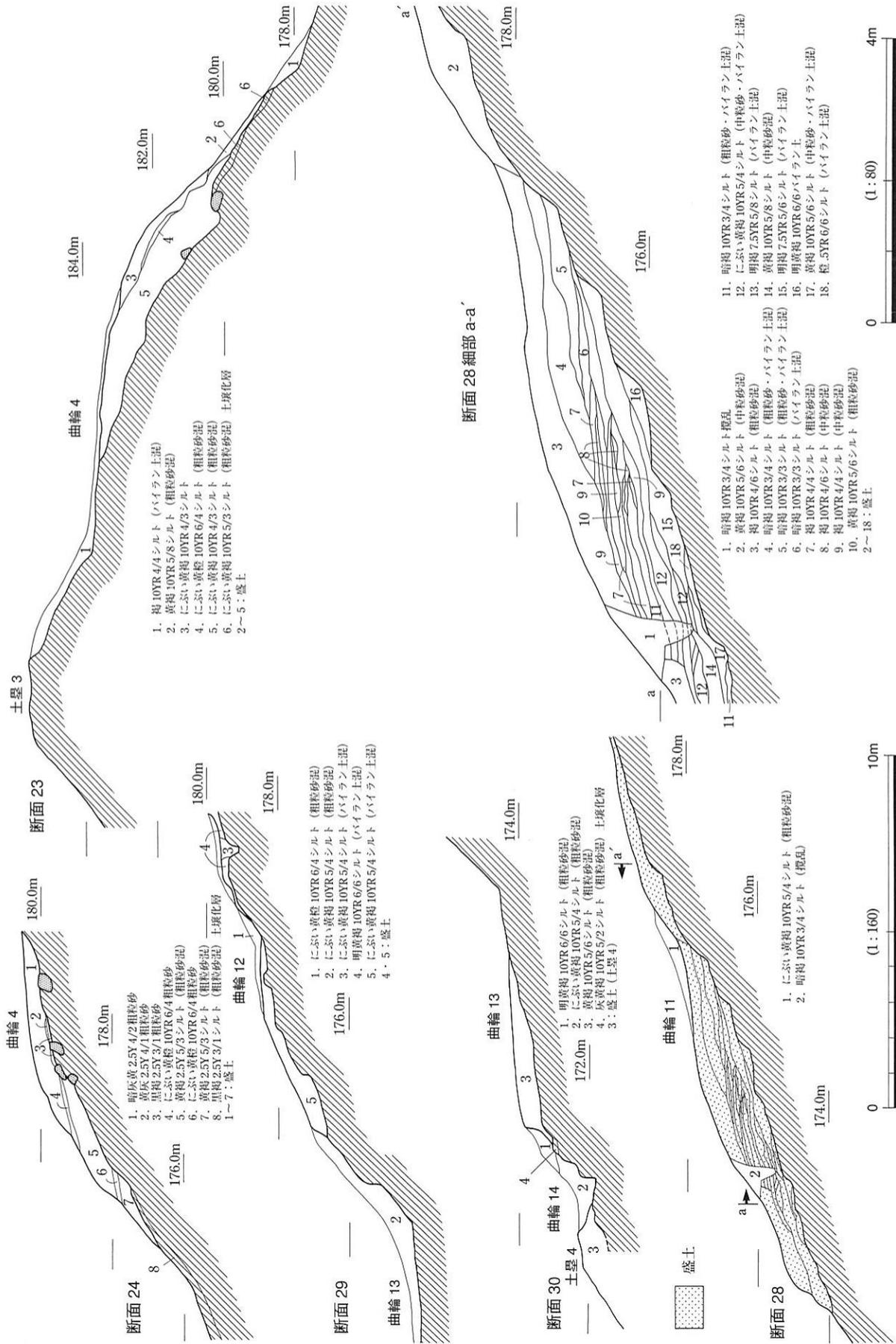


図50 土層断面23・24・28～30



図51 土層観察断面配置図

第2節 遺物

遺構検出面までの堆積土は、腐植土と砦造成時の盛土である流出土からなる。遺物は腐植土と流出土層内の「表層出土遺物」の他に土坑等の「遺構内出土遺物」と砦造成に伴う「盛土内出土遺物」にわけることができる。

1. 土器

供膳具(土師器小皿、瀬戸美濃皿・碗、青磁碗、白磁皿・碗、染付皿・碗)、調理具(土師器鉢、瓦器播鉢、備前播鉢、丹波播鉢)、貯蔵具(備前甕・徳利・小壺、丹波壺)の各種の他、瓦器火鉢・仏花瓶・香炉・風炉、瀬戸美濃水滴が出土している。

図52は曲輪1出土遺物である。1～26は土師器小皿である。口縁端部を強くなで、内面にかすかに平坦面か凹部をもつもの(6・7・9・10・22・23・25・26)と体部をまっすぐに伸ばすもの(11・14・17・20)があり、他に1～3のように体部が短く内弯気味にたちあがるものがある。5は底部に突出部があり、口縁端部に丸みを帯びる。16・24は体部上半部から口縁端部をやや外反気味にしている。21は底部と体部が明瞭であり、内面見込みを強くナデている。5・16・24の時期は15世紀末から16世紀前半と考えられ、他の土師器皿よりやや古い様相を持つ。4～7・11・14・20・23の口縁部には油煙状の黒色物質が付着しており、灯明皿としての機能が考えられる。また、1・15の内面或いは外面調整は粗いハケメ後にナデを行っている。

27～30は白磁の端反り皿であり、28の端部は淡黄色を呈している。32の青磁碗の口縁外面には1条の沈線が巡る。

31・33・34は瀬戸美濃碗である。31は天目茶碗であり、口縁端部はややつまみ気味である。34の口縁

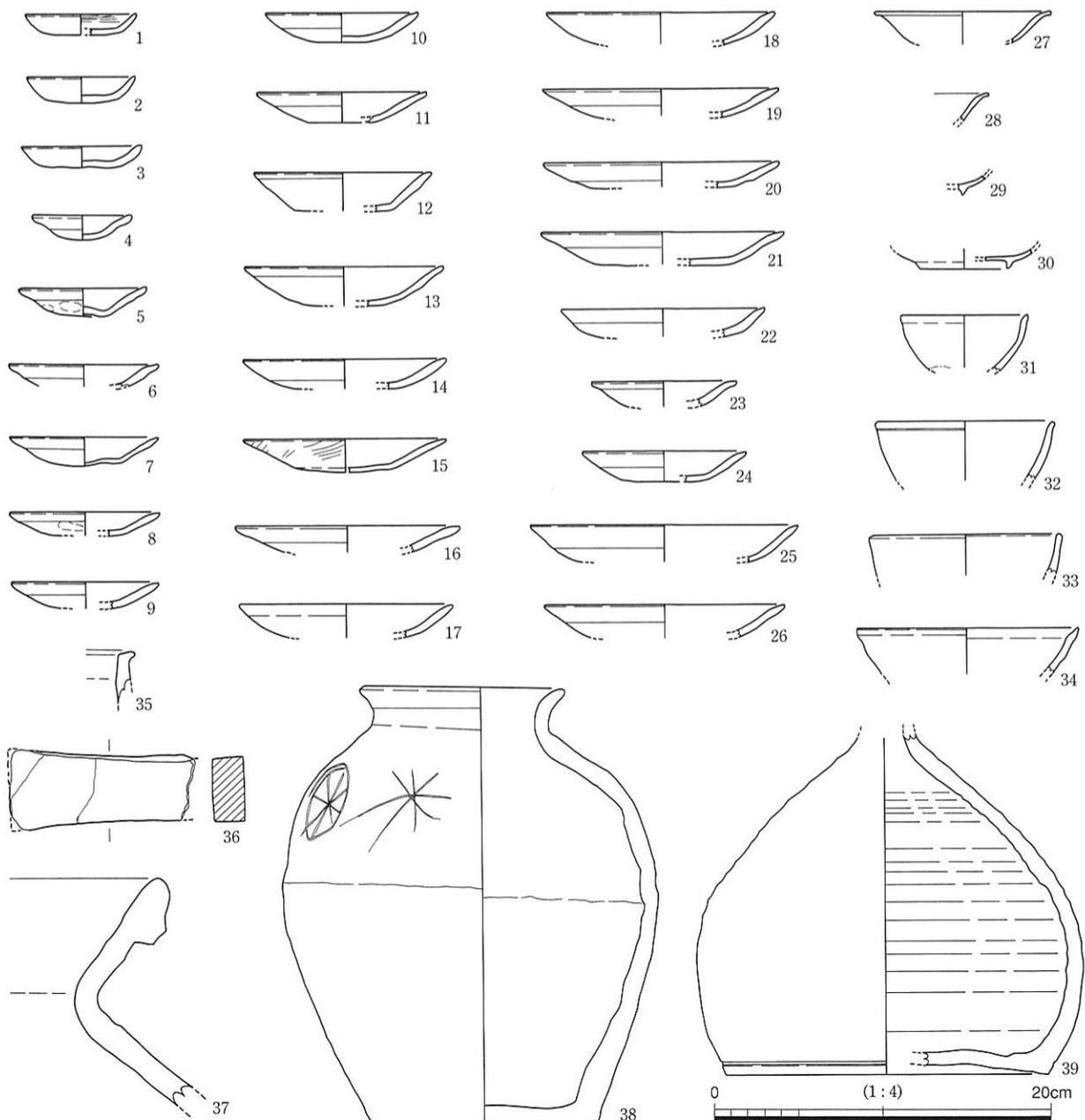


図52 曲輪1出土遺物

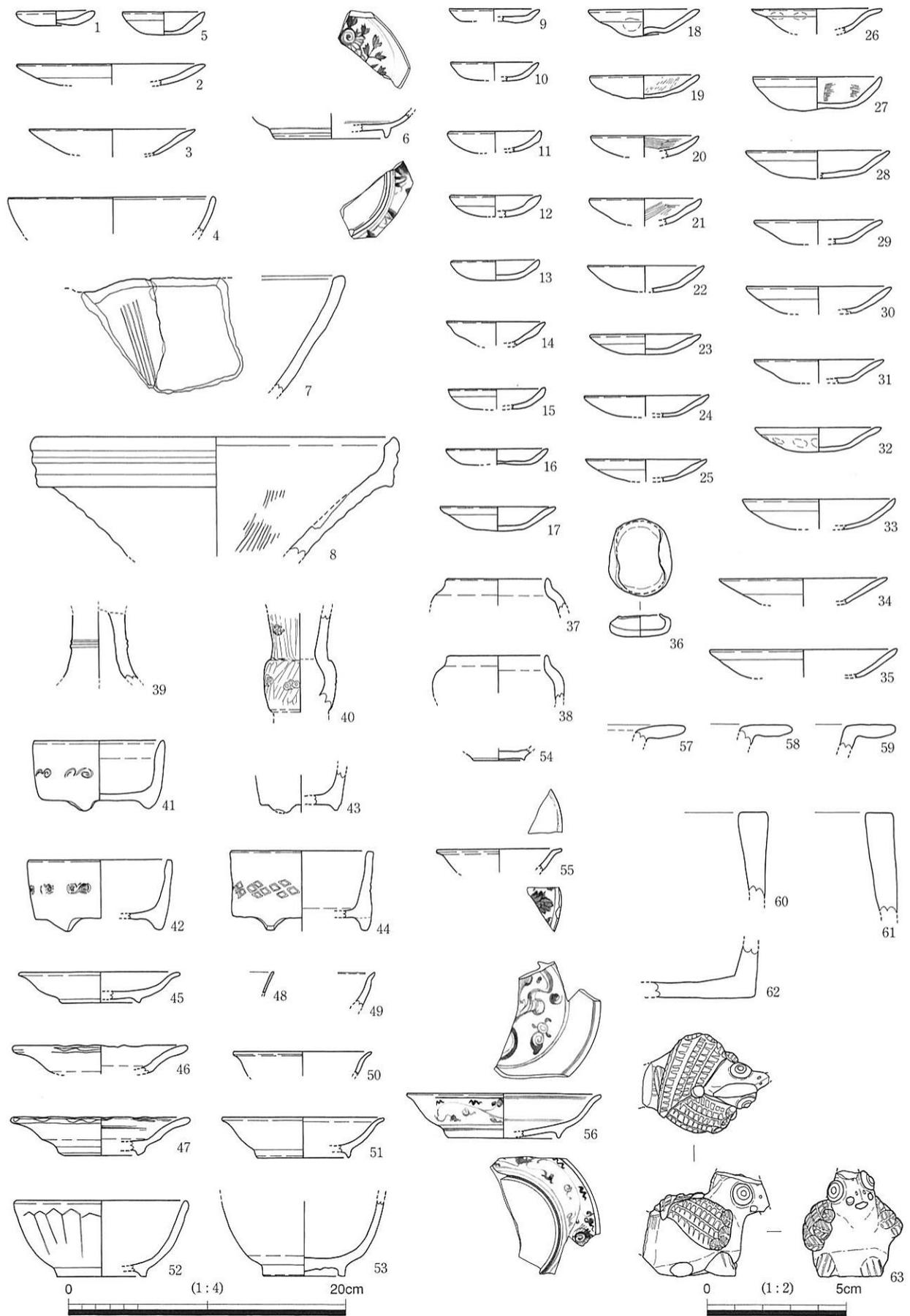


图53 曲輪2 出土遺物

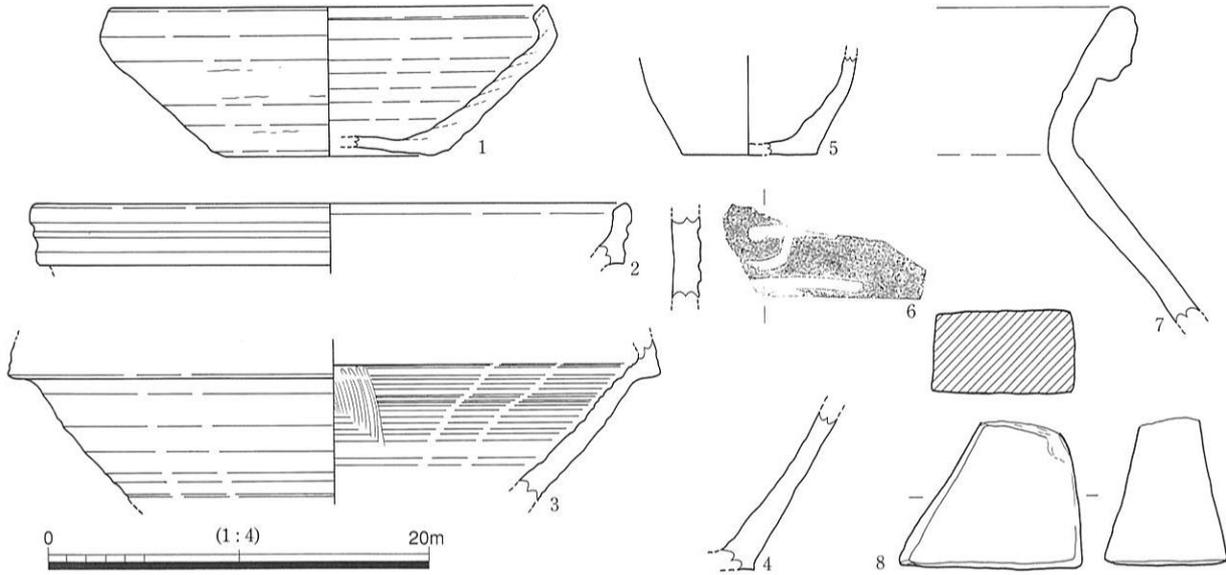


図54 曲輪2出土遺物

端部はやや外方へつまんでおり、14世紀後葉～15世紀前葉の時期が考えられる。

35は瓦器火鉢である。37は備前甕であり、16世紀前葉から中葉のものと考えられる。38は丹波壺であり、ほぼ完形である。肩部2か所にヘラ刻きが施されている。16世紀前半のものと考えられる。39は備前徳利であり、口縁を除いてはほぼ完形である。

図53・54は曲輪2出土遺物である。うち、1～8は遺構内出土である。4は土坑13出土の龍泉窯の青磁碗であり、口縁端部を丸くおさめる。7はピット51と落込2出土の瓦器播鉢であり、大和地方のものである。口縁端部は内傾し、やや丸くなった平坦面を有する。内面磨滅が著しい。8は落込2出土の備前播鉢であり、口縁端部には内側に向く面を有する。15世紀後葉から16世紀前葉に位置付けられる。

9～36は土師器小皿である。口縁端部を強くなで、内面にかすかに平坦面か凹部をもつもの(17・23・26・28・29・31・34)と体部をまっすぐに伸ばすもの(22・30・32・35)があり、他に9～16のように体部が短く内弯気味にたちあがるものがある。18は底部が突出部し、口縁端部を丸くおさめ、15世紀末から16世紀前葉のものと考えられ、他の土師器皿よりやや古い傾向がある。16・17・25・29・31・32・35は灯明皿である。36は口縁部を内側に押しつぶした耳皿である。

37・38は土師器小壺であり、残存不良のため、調整は不明である。57～59は土師器鉢の口縁であり、ほぼ水平に折れる。60～62は瓦器の方形浅鉢であり、大和系と考えられる。外面はミガキ調整を施す。39・40は瓦器仏花瓶であり、40の外面はミガキ調整の後にスタンプ文が施されている。41～44は香炉である。2次被熱のために表面の炭素が飛散し、土師器のようにみえるが瓦器であると思われる。いずれも三脚であり、外面にスタンプ文が施されている。43は同一個体の別破片より花菱紋様のスタンプ文があることがわかっている。39～44の瓦器はいずれも地元のものである。

45・54は瀬戸美濃皿、52・53は瀬戸美濃碗である。15世紀末から16世紀前葉に位置づけられる。63は瀬戸美濃鉄釉鳥形水滴である。4本足であり、顔をやや左へ傾ける。背中中央に水注ぎ口の穴があり、目の下に2つ穴がある。

46・47は青磁皿、48は白磁碗、50・51は白磁皿、49は中国産天目茶碗、55・56は染付皿である。

図54-1は備前鉢、2・3は備前播鉢、4は丹波播鉢、5は備前小壺、6・7は備前甕、8は砥石である。6は外面に刻字があるが、不明である。

図55は曲輪3出土遺物である。1・2は土坑17から出土しており、土師器小皿と瀬戸美濃皿である。2の高台断面は頂部が丸く、口縁はやや外反しており、15世紀末から16世紀初頭のものと思われる。

3～12は土師器小皿であり、3・4の内面は粗いハケメの後にナデ調整を行う。13は土師器壺の底部、14はミニチュア土師器羽釜である。15は瓦器鉢、16は丹波鉢、17は備前甕である。

図56-13・14が曲輪4出土遺物、1～6・8・11・12・15～19が曲輪5出土遺物であり、7が曲輪4・5の破片が接合し、9・10は曲輪4・5・11斜面の破片が接合している。

1の丹波搦鉢には外面に指圧痕が残り、16世紀中葉のものと考えられる。3～5・13・14は土師器小皿である。7は染付碗である。6・17～19は瀬戸美濃皿・碗である。6の天目茶碗は輪高台であり、15世紀後葉に位置し、15～19の皿は15世紀末から16世紀前葉のものである。8の丹波搦鉢は16世紀中葉、10の備前搦鉢は16世紀前葉のものであろう。9は備前小壺である。11・12は瓦器火鉢であり、外面突帯間にスタンプ文が施されている。地元のものである。

図57は曲輪5の土坑26出土遺物である。1の土師器小皿は体部内弯し、端部が肥厚している。灯明皿である。2～6は備前甕である。2は土坑26と通路9出土の破片が接合、3は土坑26、通路9、曲輪2出土の破片が接合、4は土坑26・28、集石2、曲輪3、通路11の盛土出土の破片が接合、5は土坑26・28、集石2、通路11出土の破片が接合している。2は『三入』、3は『二石入』のへら書きがある。16世

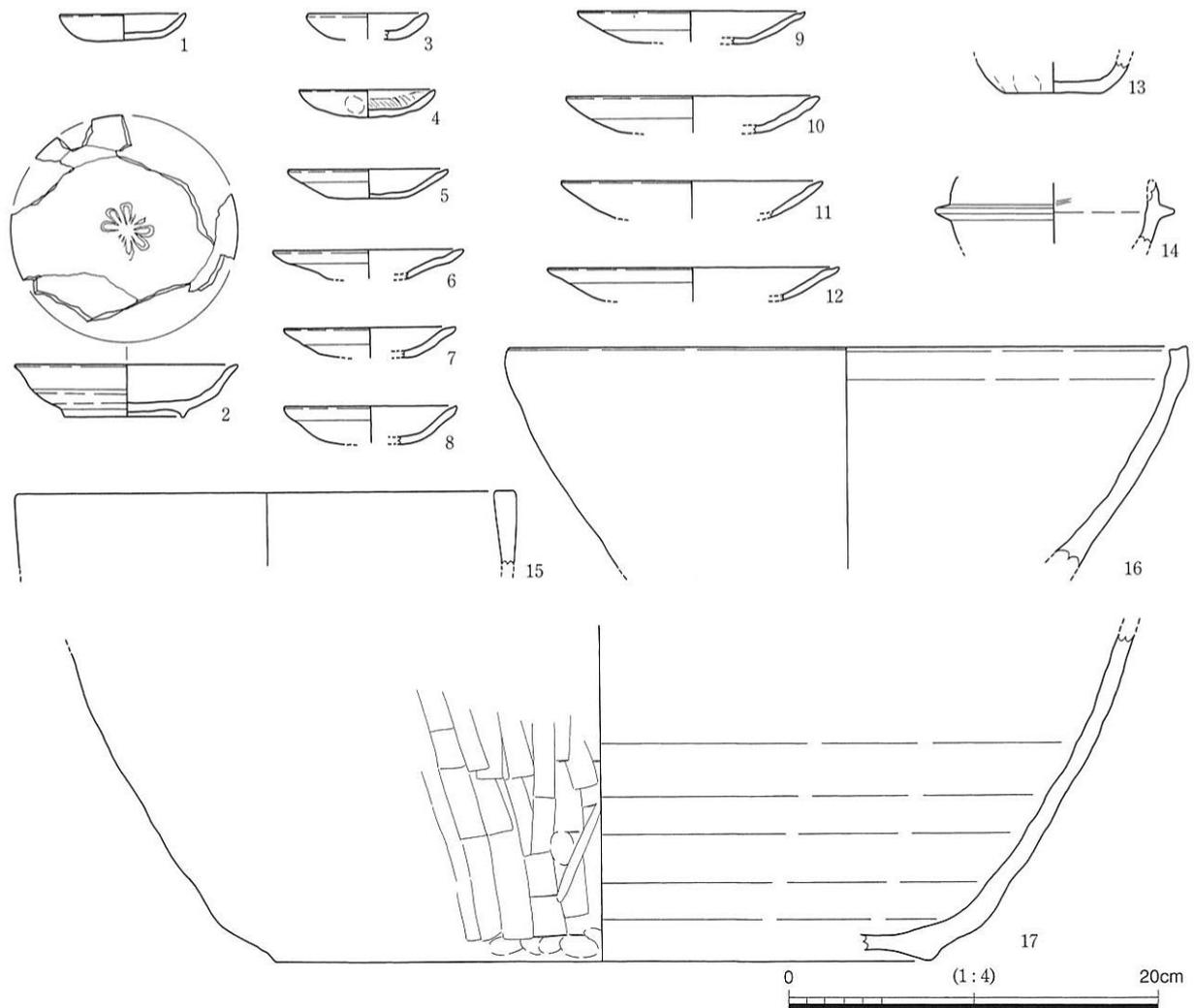


図55 曲輪3出土遺物

紀前葉から中葉のものと考えられる。

図58-1～6は曲輪7出土の土師器小皿である。4の口縁端部は上方につまみあげており、15世紀末のものと考えられる。7～12は曲輪8出土遺物である。7はへそ皿であり、15世紀末から16世紀前葉の時期が考えられる。12はミニチュア土師器壺であり、良好な胎土である。13～18は曲輪9出土遺物である。17は口縁部の両端を押しつぶした耳皿である。18は方形の瓦器火鉢の隅部分破片である。19は曲輪6出土の土師器小皿である。20・21は曲輪11出土の土師器小皿であり、20は灯明皿である。22は曲輪12出土土師器小皿である。23・24は曲輪10出土であり、24は円柱脚部をもつ平面円形の瓦器風炉である。25～27は通路9出土であり、25は口縁を内へ折り曲げ、端部をつまみ上げているが、器種不明である。炭素が飛散してしまった瓦器の可能性はある。28は竪堀2、29は竪堀3出土である。30は通路13、31・32は通路4出土である。31の瀬戸美濃碗は15世紀末から16世紀前葉のものと考えられ、32の瓦器播鉢は大和産の16世紀前半のものであろう。

図59は盛土出土遺物である。1・2は曲輪1盛土出土の土師器小皿である。3～6・8～10は曲輪3盛土出土遺物である。8は染付皿、9は青磁碗であり、10の瓦器風炉には胴部に楕円形の窓がある。7の曲輪4盛土出土の備前播鉢は15世紀後葉のものと考えられる。11～26は曲輪2盛土出土遺物である。11～19は土師器小皿・小碗であり、14・15の内面には粗いハケメが残る。20は白磁皿、24は瓦器火鉢である。21～23・25・26は落込2から落込1へ改修時の埋土出土遺物である。21の瀬戸美濃碗は15世紀末

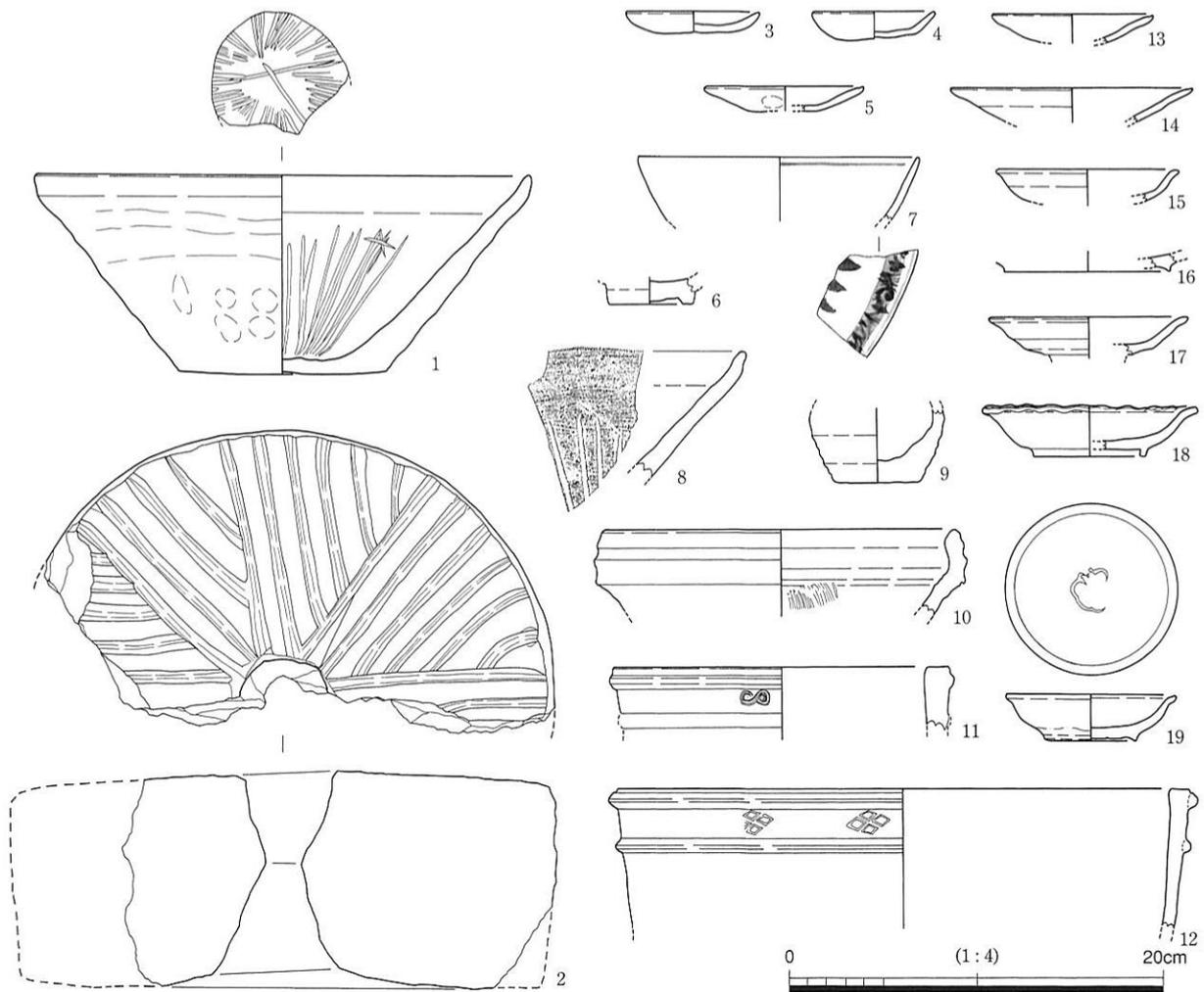


図56 曲輪4・5出土遺物

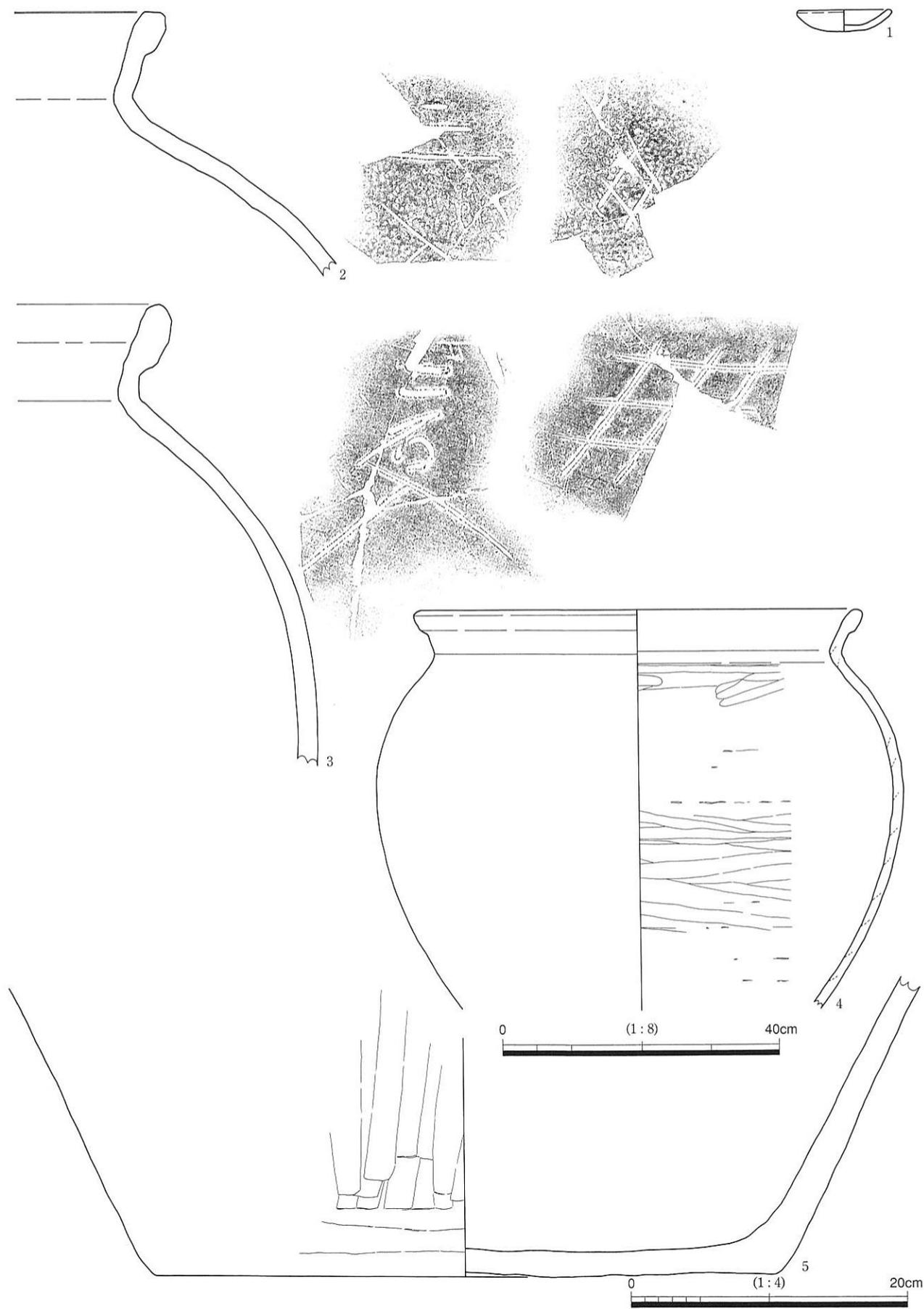


图57 曲輪 5 土坑26出土遺物

から16世紀前葉のものである。22・23の備前播鉢は16世紀前葉のものであり、23はほぼ完形である。25・26は備前甕であり、25は円形に成形しており、遊戯具或いは「つぶて」として使用されたことが考えられる。27～35は曲輪5盛土出土遺物である。27～30は土師器小皿、31は染付、32は青磁碗である。33・34は瀬戸美濃碗であり、15世紀末から16世紀前葉のものと考えられる。35は備前播鉢である。36～44は曲輪9盛土出土遺物である。36は染付皿、44は平面方形の火鉢である。45・46は通路9盛土出土の土師器小皿であり、47・48は曲輪11盛土出土の土師器小皿である。共に内面に粗いハケメ調整が残る。49は通路8盛土出土の土師器小皿である。50～54は曲輪2の石積3盛土出土遺物である。50～52の土師器小皿の内面にはハケメ調整が残る。54は瀬戸美濃皿であり、15世紀末から16世紀前葉のものである。

2. 金属製品 (図60)

金属製品は建築具、生活用具、農工具、武器・武具、他に分類した。

建築具には釘、煽止が出土している。鉄釘は48本出土しており、いずれも身部の断面が方形或いは長方形の角釘である。断面の1辺は3.0～4.5mmを測り、完全な方形のものよりやや長方形気味のものが大半を占める。完存品が図60-5・7・13の3点のみであり、全長は6.1～6.9cmの間におさまっている。頭部の形態は頭部を水平方向まで屈曲させるもの(3・4・9・15)と、さらに端部を身側に巻き込むもの(1・2・5～8・10～14)がある。17は断面方形の鉄線を割りピン状に形成したものであり、煽止の金具と考えられる。

生活用具には火打ち金、鍋がある。16はかすがいの形状をとる火打ち金と考えられる。31は鍋の口縁

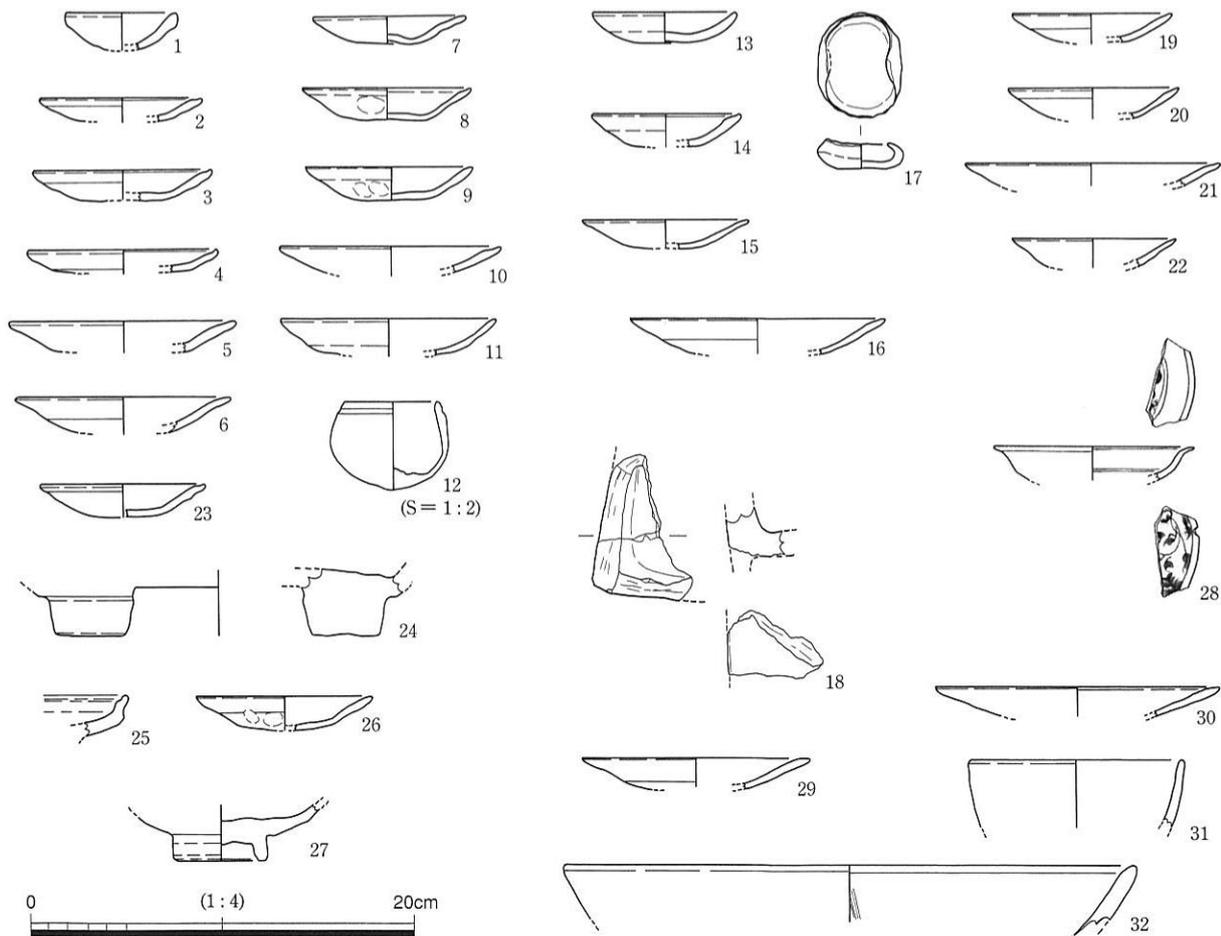


図58 曲輪6～12、堅堀2・3、通路4・9・13出土遺物

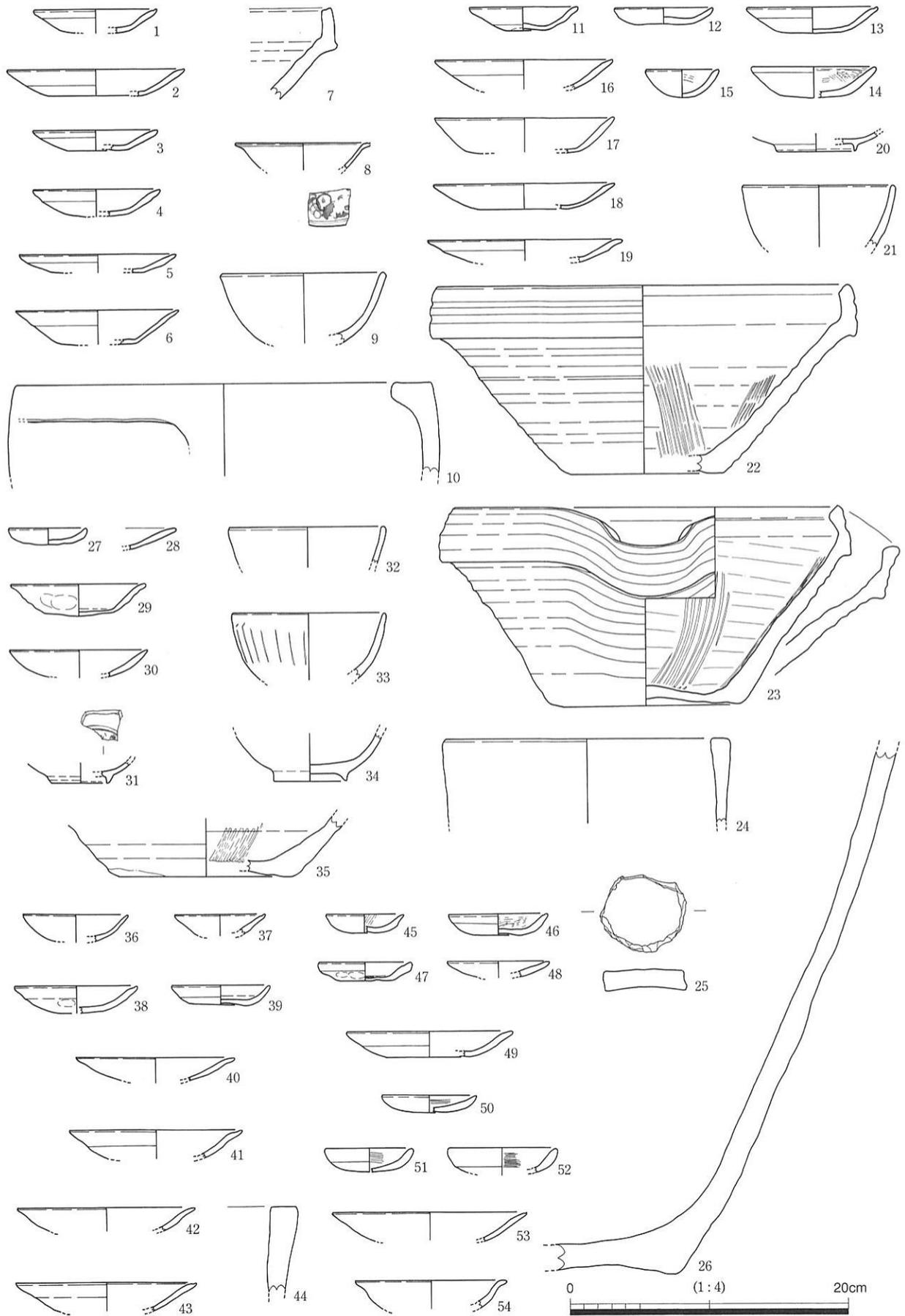


图59 曲輪盛土内出土遺物

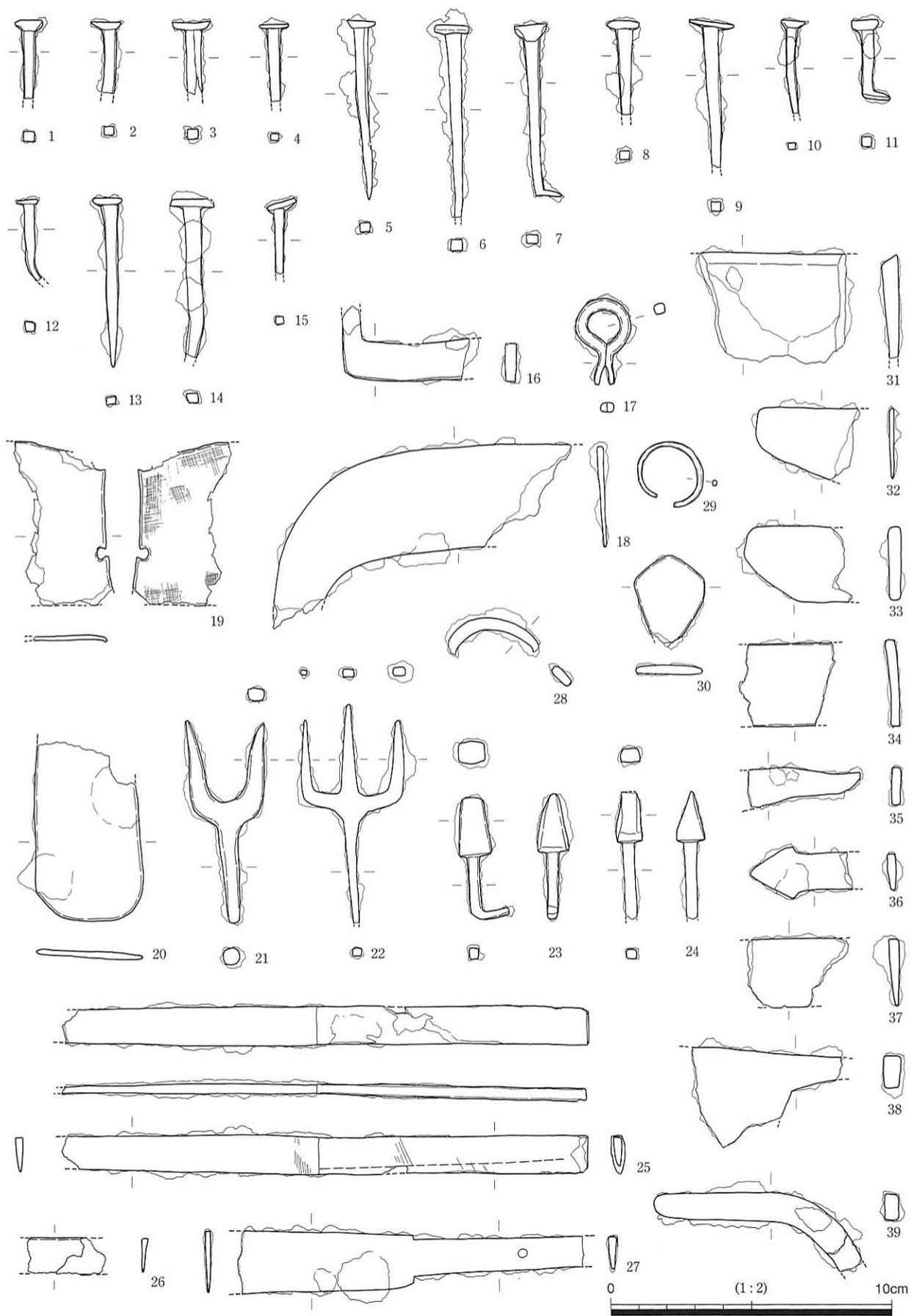


图60 出土金属製品

部分であろう。端部に面を有し、内傾する。

農耕具として18の鎌がある。

武器・武具には鎌、刀、小札がみられる。21、22は二又、三又の鉄鎌である。茎の断面形態が異なる。23・24はノミ先形を有する鎌である。25は小柄であり、鉄製の刀子の茎に銅板を巻き付けている。26は25と同様の銅板部分の破片であろう。27は刀片であり、茎部分に目釘穴がある。37・38も刀片であろう。19・20は武具の一部と思われるものである。19の側縁には若干の折り曲げがあり、小孔が2ヵ所ある。内面に細かい布目圧痕が観察される。20にも小孔が側縁にある。29は銅製の環状金具である。30は卵形を呈しており、武具の飾り金具の可能性がある。32・33は刃物の先端に近似する形状をとるが、32は背がなく、33は厚みがあり、用途不明である。

3. 銭貨

図61の28枚と不明2枚の合計30枚出土し、主に曲輪1の南西部、曲輪2の南西部、曲輪3に集中している。すべて背面は無文である。17の熙寧元寶は直径が通常のものより小さく、模鑄銭の可能性はある。10・13・16・21・22の5枚は重なった状態で曲輪1の南斜面流出土から出土した。

4. 石製品・土壁・他

図52-36の砥石は四面を使用している。図54-8の砥石は五面使用されている。いずれも砂岩である。図56-2の石臼は花崗岩質の下臼であり、刻み目面は平坦面ではなく、ややふくらみをもつ。臼の目は8分画され、8本の主溝に平行して4~6本の副溝が刻まれている。この副溝の中にはやや曲線となる部分がある。

図版40-5は曲輪2出土の石であり、基石と考えられる。長径2.6cm、厚さ0.9cmを測る。

図化はしていないが、曲輪1から火打石と考えられるチャート石片が出土している。

曲輪1平坦面から巻貝、二枚貝、骨片が数片出土している。

曲輪1~3からは土壁が出土しており、特に曲輪1からは多量である(カラー図版8)。木舞の痕跡があり、竹管が観察できる。竹は約1/3から1/2に割り、直角に交わっている。漆喰の痕跡はない。

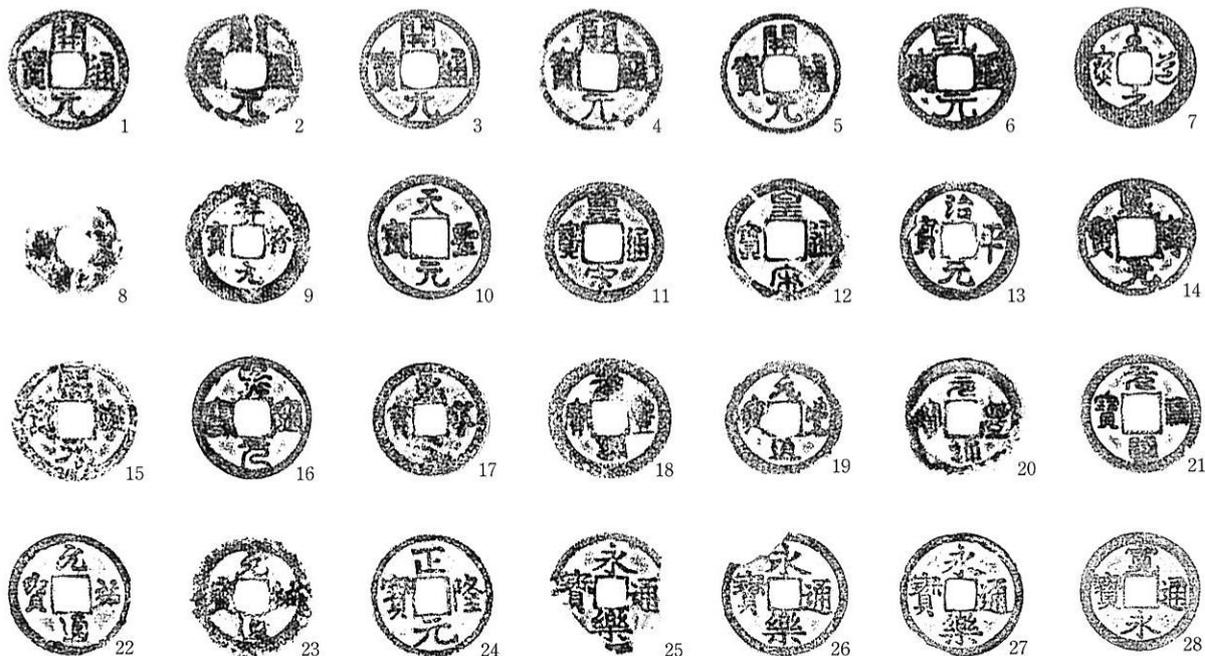


図61 出土銭貨

第5章 砦跡以前の遺構・遺物

第1節 遺構

曲輪8北辺から炭窯と考えられる窯跡が2基と曲輪3南辺斜面から焼土坑が1基検出された。

1. 窯1・2

曲輪8の谷筋の斜面から2基の地下式炭窯跡が検出された(図63、図版34)。

窯1は斜面に対して直行しており、規模は全長1.5m、幅1.5mを測るが、前方部は砦造成時に大きく削平を受けている。奥壁の高さは1.0mを測り、天井は崩落しているが、側壁には天井の一部が残存していた。床面は水平である。煙道は後述する窯2により破壊されていたが、最下段の一部が残存していた。煙道両側に縦方向に石を置き、その上に横方向に石を積み上げている。

窯2は窯1に接して北側に検出された。規模は全長2.2m、幅2.1m、奥壁の高さは1.2mを測る。平面形は円形に近く、床面は水平である。炊口と前庭部は前述の窯1を利用しており、閉塞石の一部が残存する。前庭部は窯2の床面と同一の高さまで埋めている。煙道入口は奥壁のほぼ中央になり、幅10cm、高さ11cmで両側に石を据え、その上部に横長に石を架けている。煙道は窯本体側に石を積み上げ、粘土で目張りしている。煙道の平面は長径32cm、短径17cmを測る楕円形を呈しており、垂直に立ち上がり、床面から高さ約1.9mのところ傾斜角約30°で北方向へ折れる。窯2は窯1より後出する。

また、南方に検出された土坑42は炭化物が混じっており、窯1・2の関連遺構と考えられる。

砦跡の曲輪8の盛土内に炭化物がみられ、また、窯の一部と考えられる土坑42が盛土下層から検出されたところから、窯1・2は砦跡以前に操業していたと考えられ、出土遺物から10世紀前半頃と考えられる。なお、窯1は放射性炭素年代測定により西暦875年から1025年の値が、考古地磁気年代測定ではA.D.1050年～A.D.800年前後の年代が報告されている(第6章 第4・5節)。

2. 焼土坑41

砦跡の曲輪3南辺斜面から検出された。奥行1.2m、幅1.2mのほぼ方形を呈するが残存状況は不良である。底面、側面の一部が赤く焼けており、埋土から炭化物、石が検出された。図62-7の土師器杯が1点出土しており、10世紀の遺構と考えられる。放射性炭素年代測定により西暦875年から1040年の値が報告されている(第6章 第4節)。

第2節 遺物

砦跡以前の時期の遺物が少量ながら出土している。図62-1～4は砦の堆積土層から出土した須恵器であり、6～8世紀に属する。5・6は窯1から出土した遺物である。5は古墳時代土師器の口縁部であり、外面端部に2条の浅い凹線がみられる。6は内面黒色の黒色土器碗である。口縁端部内面に沈線を施し、高台は断面三角形を呈する。10世紀前半の時期に相当すると考えられる。7は焼土坑41から出土した土師器皿である。口縁端部を外反し、内面に沈線が走る。体部外面には指頭圧痕がみえる。10世紀に属すると考えられる。

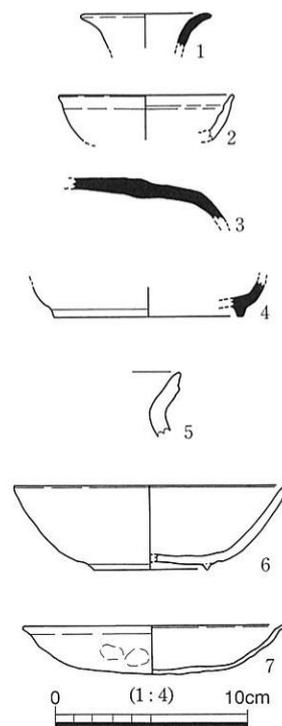


図62 砦以前出土遺物



1. にんじょう黄砂 10YR 6/4 シルト (粗粒砂泥)
2. 明黄砂 10YR 7/6 シルト上 (灰泥)
3. 明黄砂 10YR 6/6 シルト (細粒砂・極細砂・極細赤褐色 2.5YR 2/2 塩平土泥)
4. にんじょう黄砂 10YR 6/4 シルト (粗粒砂泥)
5. 相灰 5YR 5/1 シルト
6. 相灰 7.5YR 4/1 シルト
7. にんじょう黄砂 10YR 5/3 シルト (ややラン土泥)
8. にんじょう黄砂 10YR 5/3 シルト上
9. 相灰 10YR 4/1 シルト (灰泥)

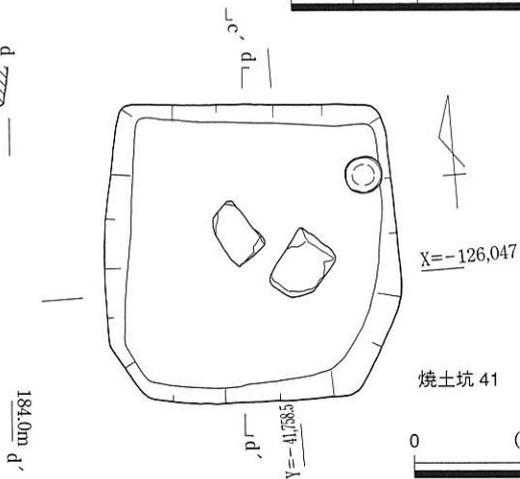
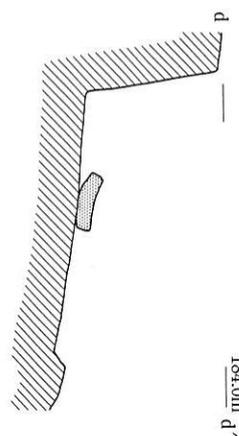
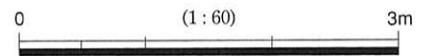
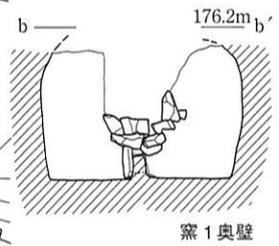
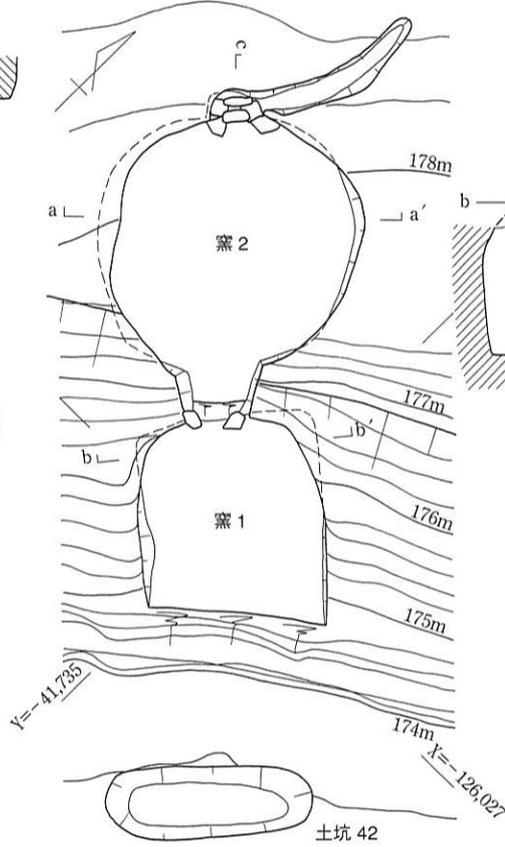
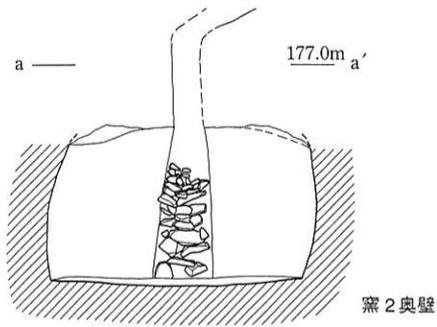
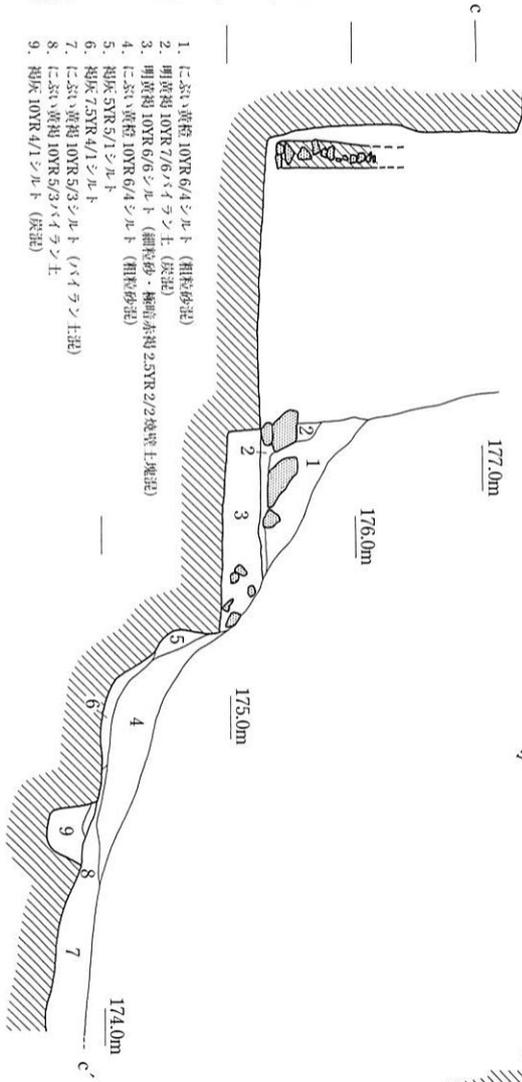


図63 窯 1・2、焼土坑41

第6章 基礎分析

第1節 構造と変遷

佐保栗栖山砦跡は、発掘調査の結果、様々なことが明らかになった。ここでは佐保栗栖山砦跡を特徴づける各構築物についてその機能を検討していくこととする。

1. 石積・石敷・石段

石の使用は曲輪斜面の石積の他、通路の階段・石敷、通路側面の石列がある。

石積は各曲輪のすべての斜面に使用されているわけではなく、部分的なものである。何十段も高く積み上げるものではないので『石積』とよんで『石垣』と区別したり。

その構造は石材の長辺を等高線と垂直方向になるように小口積みに据えており、大型の石を隅部分や基底部に使用している傾向がうかがえる。石積の裏面には裏込めとしての栗石はなく、石材同士を安定させるために支えとしてはめこまれるカイ石やコヅメがみられる程度である。但し、曲輪2の石積3裏面には多くの小型の石が含まれていた(図版13-4)。石材は加工をしない自然石のままであるが、平坦面の有する面や自然剝離した面を外面向けていることがわかる。

石積平面の外郭線は直線を成し、基底石の底面も直線とする。しかしながら、曲輪9の石積1は外郭線も底面も波打っており、安定していない(図17)。曲輪4の石積10は底面が階段状になっており、地山面をあまり加工せずに石積を積み始めている(図36)。また、長辺が1.8mを測る巨石も使用しており、麓から巨石を持ち上げたか考えるより、土塁3のように地山から露呈した石を使用したか考えるべきであろう。

通路8側面の石積9は地山を掘り込んだ1段のみの石列(図29)であり、法面保護と共に化粧としての意識も強いものと考えられる。

通路7・8の石段は扁平石をステップとしている(図29)。また、通路4の出入口1付近の一部は石敷になっている(図21)。

これらの使用場所は出入口1周辺と曲輪3南側に集中しており、両者ともにこの砦跡にとって、重要な場所であることがわかる。出入口1は外界とを結ぶ進入口であり、防御上重要である。通路3から分岐して登城道である通路4に入ると、登り切ったところが石敷となっており、左右両側には曲輪2の石積3～5の張り出しが迫っている。視覚的効果も持ち合わせていたと考えられる。石積3～5上面からは通路4への側面攻撃(横矢掛かり)を行うことができる。曲輪3南側の通路7・8は道幅2.2～2.8mを測り、他通路とは大きく異なる規模をもつ。通路8側面には石列があり、一連の石段・石列は威厳を示すための重要さもあつたと思われる。

曲輪9の石積1は長さ17.5mを有し、佐保栗栖山砦跡の中で最も延長が長く構築された石積である。南斜面からの攻撃を意識し、かつ、曲輪9の平坦面確保の必要性が表れている。

曲輪1の土塁2の北西にはL字状に配された石積2があり、通路4に面しており、小規模の隅櫓的な機能を有していたと考えられる。また、東西方向の石積ラインが土塁2の内側下端ラインと平行しており、幅約4mの土塁2の北西隅部分の一部が検出されたものである可能性もある。

以上のように部分的な数段の『石積』は土留めの補強施設として施されており、城壁を意識した『石

垣』と呼称するには乱雑な積み方であり、技術的にも劣っているものであると考える。しかしながら、石積施工地点は防壁上重要な箇所であることは間違いないことである。

2. 出入口（虎口）

曲輪2の北東隅に位置する出入口1では木戸などの上部構造の有無を確認することはできなかったが、2回の折れがあり、通路4の左右には石積を伴った張り出しを有していることが明らかになった。また、出入口に密接に結びついた固有の空間(枡形虎口)は持たない。

中世城郭研究の中で織豊系城郭の虎口(出入口)の詳細な検討により編年を考古学的な分析方法により試みる研究が千田嘉博により提示されている²⁾。千田は折れと空間に着目し、その変遷を明らかにし、戦国期から織豊期の戦国大名クラスの城郭に広く適用可能であるとした。千田編年によれば当砦跡の出入口は、第III期の2折0空間に当てはまり、永禄10年(1567)から天正4年(1576)にあたることになる。当砦跡は小規模のため、この編年に沿うものかどうか、検討の余地は残る。織豊系城郭以外の研究はあまり進んでいないが、山上雅弘により虎口が検討されている³⁾。山上は「16世紀前半段階で城道が固定されて、通路を誘導されながら内部を進む構造が認められる」。「枡形の原型も既に存在する例が」あり、「複雑なものが早くから登場しており、虎口を強く意識し、防衛的に重要な場所と捉えている」。「地形的制約から十分な施設を設けられないときは、石積みなどで補強する」とした。

佐保栗栖山砦跡は折れと石積を有し、以上の研究成果より、16世紀前葉から中葉の時代幅の新段階にあたる出入口構造をもっていると考えられる。

3. 堀・土塁

防御施設として土塁、堀が検出されている。

豎堀1・2は尾根先端部に位置する佐保栗栖山砦跡を尾根伝いの進入を遮断するために尾根頂上部と南北両斜面に設けられた。特に尾根頂上部は地山の岩盤をも掘削しているため這い上がることは不可能である。また、豎堀1の東側には掘削土を掻く上げることによって土塁1を設け、豎堀と一体とすることにより更に堅固な防御効果をあげている。豎堀2は通路3を分断しているが、全く通行できないようにするのはなく、堀を掘り残すことにより、制限を加えながらも通行可能な状態にしている。

豎堀3は曲輪3の南から西斜面にかけて伸びている。後述する変遷のように曲輪1から曲輪3の規模をもつ時期の南西端として位置すると考えられる。

土塁2は曲輪1の建物1が建つ平坦面の東面、北面に逆L字型に巡っており通路3・4方向を意識した配置になっていることが伺える。また、建物1の遮蔽物になっており、その隙間空間の利用が想定された。

土塁3は曲輪4を囲むように北西から西方向に伸びており、この土塁を境として東側と西側において砦プランの時間的な差異があった可能性が高い。現状では地山の巨石が露呈しており、これを効果的に取り込んだものと考えられる。

土塁4は曲輪14を囲むように北と西方向に伸びている。土塁3・4いずれも砦の北西斜面側を意識した配置になっており、また、曲輪7から曲輪12～14への通路としての機能も果たしている。

4. 曲輪内施設—建物・土坑・落ち込み・溝

曲輪内の施設には建物跡、ピット、土坑、落ち込み、溝がある。

建物 建物は曲輪1～3において各1棟検出されており、そのうち曲輪1と3は礎石建物である。曲輪1の建物1は曲輪中央に建てられている。4×5間の礎石建物であり、北面・南面の梁間間隔は狭く、

底になっている。土壁を有する建物であるが、瓦葺きではない。いくつかの礎石はなくなっているが、束柱がある床を有する建物であった可能性が高い。

曲輪2の建物2は掘立柱建物である。曲輪の南西隅に位置しており、周囲からは多数のピットが検出されているところから、何回かの建て替えが行われた可能性もある。建物2としたピット列の柱間間隔は一定していない。

曲輪3の建物3は一部の残存であるが、2×2間、あるいは2×3間程度の規模が想定される。また、石列1としたものを柵列とすれば倒壊してしまうので、東側へ展開する礎石建物の存在を想定したい。

なお、当砦跡から瓦が全く出土していないことは特記すべきことである。

山城から検出された礎石建物については、中井均が織豊系城郭の特質として、礎石建物・瓦・石垣の3要素を指摘している⁴⁾。戦国期から織豊系の城館における礎石建物について、I類〔居館の礎石建物〕I-a類〔詰城を伴わない平地居館における恒久的施設〕、I-b類〔詰城山麓居館〕、II類〔防御的施設などの軍事的色彩の濃い建物〕II-a類〔周囲から隔離された特殊な倉庫と考えられるもの〕、II-b類〔類線上に位置する礎石建物で隅櫓・多聞櫓に相当するもの〕、II-c類〔居住施設ではなく防御施設としての建物であるが、主郭の中央に位置するもの〕、III類〔城郭内に居住機能を有する礎石建物の出現〕III-a類〔居館・詰城両方に礎石建物が認められるもの、もしくは可能性が高いもの〕、III-b類〔a類と同じく山頂部に主殿的施設としての礎石建物が認められるが丘陵上で詰と居館が一体化した館城タイプの居住施設〕、IV類〔完全に城郭内のみで独立した居住空間と防御空間を有する礎石建物〕に分類した。この分類を一応の時間的変遷としてとらえているが、中井は資料数の少なさから必ずしも時間的変遷を示していないとしている。

この分類によると佐保栗栖山砦跡はII-c類にあたると思われ、中井が述べている「防御を強固にする厚い壁の出現が礎石建物を必要とし、建物の恒久性と高層化に瓦が使用されはじめ」られる直前の形態を表していると考えられよう。

土坑・落ち込み 曲輪2・3・5から検出されている。

これらの遺構はピットと共にその検出量は後述する出土遺物量と比例している。このことから特に曲輪2・5は居住空間であったことが想定される。

曲輪2の落ち込み1・2、土坑7、溝2は曲輪内の移動を制約する機能を有していたと思われる。落ち込み1・2、土坑7は出入口1の正面にあり、通路4を登って出入口1へたどりつくると進行方向は左右どちらかにわかれ、直進できない。溝2は曲輪2平坦面の南東辺に平行しており、この間には遺構がなく、通路として機能していたことが考えられる。他に建物2や曲輪3の建物3は他の曲輪からの連絡通路に近接した場所に立地しており、進入と同時に曲輪内の移動を制約する機能を持っていたと思われる。

このように、曲輪間の高低差だけでなく、曲輪内に凹凸をつくり出し、攻め手の行動を制限し、防御力を高めている。

5. 変遷

検出された遺構には明らかに先後関係があり、改修が認められる箇所がある。佐保栗栖山砦跡には数時期の変遷があることが明らかになった(図64)。

曲輪1-A期：曲輪1北西側に大溝(横堀)が存在していた時期

曲輪1-B期：曲輪1北西側の溝(横堀)が削平され、現状の曲輪2の形態の時期

曲輪2で検出された溝1は、曲輪2の北東隅の石積3の断面調査により、現状での検出された浅い、

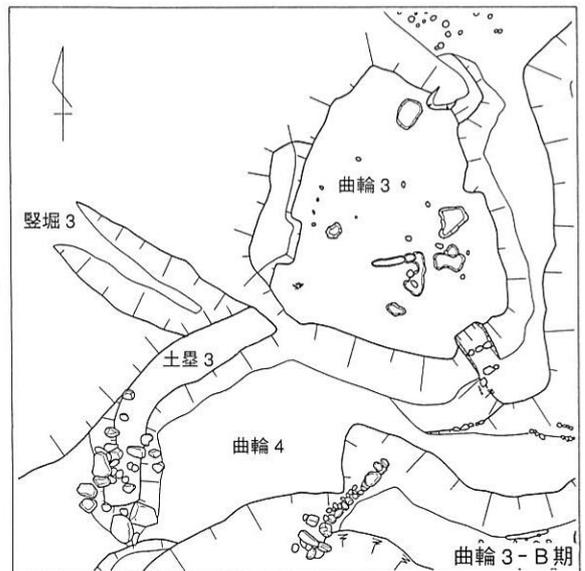
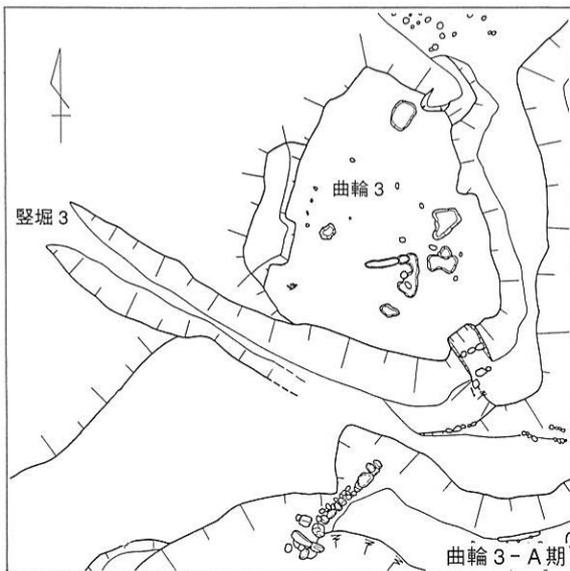
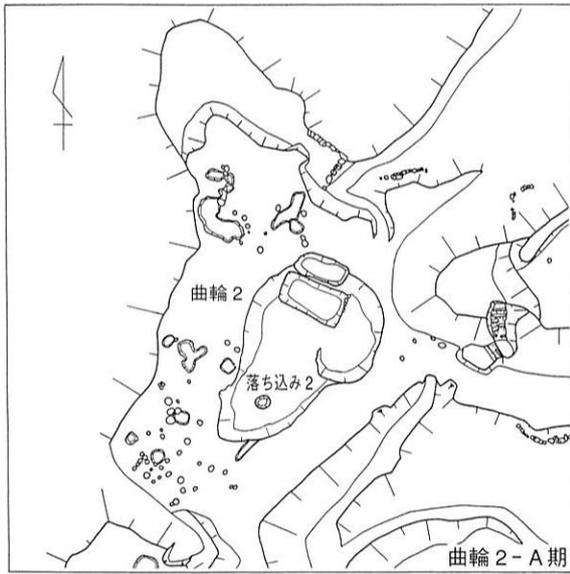
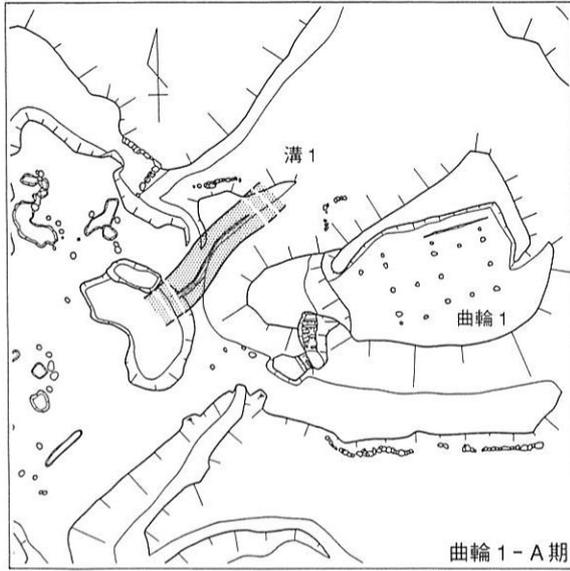


図64 遺構変遷図

細い溝ではなく、幅1.2m以上、深さ0.4m以上の横堀状の遺構であることが明らかになった(P.35)。よって、現状の曲輪2平坦面が異なった形状であったか、或いは曲輪2自体が存在していなかったことが想定される。また、このことにより、曲輪2の出入口1(虎口)が検出された形態ではなかった時期があったことも明らかである。

曲輪2-A期：曲輪2の落ち込み2が存在していた時期

曲輪2-B期：曲輪2の落ち込み1が存在していた時期

いずれも、曲輪2平坦面が現状の拡がりをもっていった時期である。まず、落ち込み2が存在し、その後、南西側を整地し、落ち込み1の大きさに縮小したことが確認できた。また、落ち込み2は調査以前より窪みとして存在していたものである。落ち込み2→落ち込み1(古→新)の先後関係が明らかになった。さらに落ち込み2は断面6(図46)の観察により曲輪2の平坦面が形成された後に掘削されたことが考えられ、落ち込み2も存在しない**曲輪2-Z期**が想定される。

曲輪3-A期：豎堀3が曲輪3の南側に沿って伸びていた時期

曲輪3-B期：豎堀3の尾根頂上部が埋められ、土塁3、曲輪4が造成された時期

豎堀3の頂上部は人為的に埋められており、貫通していた時期があったことが確認された。土塁3と曲輪4北西側平坦面は地山削り出しにより形成されていた。豎堀3の埋土を除去することにより、土塁3の南東裾の地山が豎堀3に沿って、残存していることが確認された(図版16-1)。よって、豎堀3→土塁3・曲輪4の先後関係を認定した。このことにより、曲輪3-A期には現状の土塁3、曲輪4が存在していなかったことが明らかである。但し、豎堀3の東端の痕跡は曲輪4～6、石積10下層において確認することはできなかったため、どのあたりまで伸びていたのか、その形状は不明である。

以上のように、曲輪1-A期→曲輪1-B期、曲輪1-A・B期→曲輪2-Z期→曲輪2-A期→曲輪2-B期、曲輪3-A期→曲輪3-B期の先後関係を明らかにできたが、曲輪1・2の改変と曲輪3の改変との先後関係は不明である。

6. 小結

以上、それぞれの遺構を検討することにより、その構造、性格、変遷を明らかにしていくことができた。

山城には軍事機能としての攻撃施設・防御施設があり、居住機能が認められない山城もある。当砦跡では曲輪2・5に遺構が集中しており、かつ、後述するように遺物が多量に出土している。居住機能としての比重が高い曲輪と考えられる。

軍事機能については曲輪1の土塁2、曲輪2の出入口、豎堀3、曲輪14のあり方から、北斜面から西斜面方向を非常に意識した砦であることがわかる。しかしながら、東斜面、南斜面にも石積(石垣)を設置し、曲輪3の通路7・8のような規模の大きな通路を南側に設置しており、反対方向を無視しているわけではないことも伺われる。

当砦跡の変遷は曲輪1～3の各A～B期を経て、現状の検出状況になったことが明らかになった。しかしながら、曲輪4・11の南斜面の状況や曲輪7の緩斜面の状況から完成された砦ではなく、また、盛土の多量流出とするには不自然なため、造成を途中で放棄した未完成の砦の可能性も考えられる。但し、曲輪12～14の平坦面は完成されているところから、砦の西端が曲輪12～14までの範囲のときに、曲輪3と曲輪12の間が改変を受けたとも考えられる。また、土塁3のあり方からその東と西に砦のプランの時間的な差異があったことも推定される。

曲輪3の北東隅部分では、盛土を除去することにより、幅約4m、長さ約9mにわたって直線をなす

窪みが検出された(図44)。これは曲輪2・3の連絡通路の改変の痕跡である可能性が高く、曲輪3の形状に2時期を有することも考えられる。改変後、窪み部分は版築状に盛土された。

図65は曲輪盛土の流出部を補った復原図である。曲輪の配置はそれぞれ密接な関係にあり、各曲輪は通路により連絡し、攻撃と防御をうまく組み合わせた配置になっている。中心となる曲輪は曲輪1～3であり、主郭は曲輪1 或いは曲輪3と考えられる。古段階のA期では曲輪1が主郭であったと考えられ

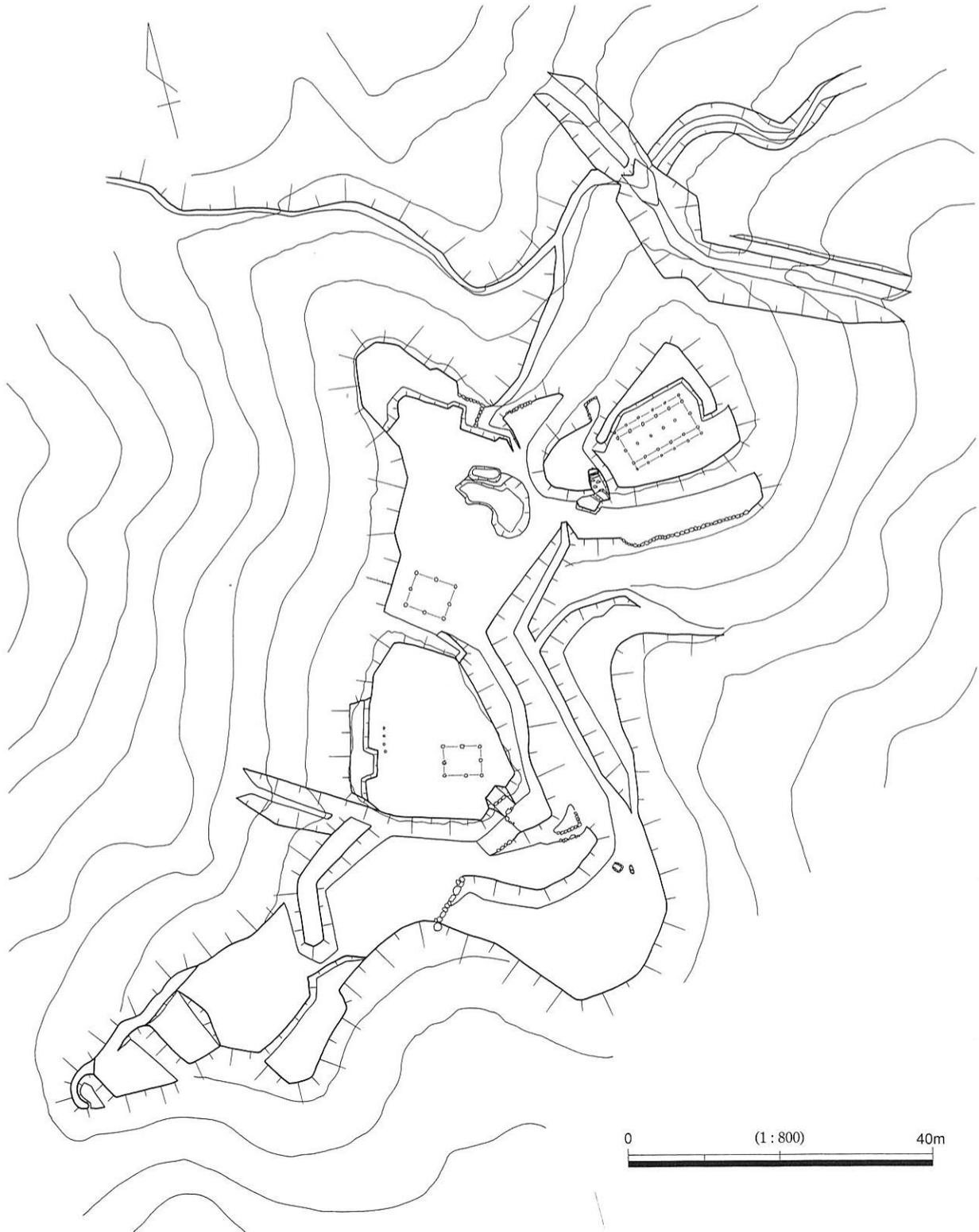


図65 佐保栗栖山砦跡復原図

るが、現状の配置になった新段階では曲輪・通路が周囲に巡り、求心性が認められる曲輪3が主郭であったと考える。

註

- 1) 山上雅弘 1995『小田城跡発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会
- 2) 千田嘉博 1987「織豊系城郭の構造－虎口プランによる縄張り編年の試み－」『史林』70-2
- 3) 山上雅弘 1995「第6章まとめ 第1節遺構の検討」『小田城跡発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会
- 4) 中井 均 1990「織豊系城郭の画期－礎石建物・瓦・石垣の出現－」『中世城郭研究論集』 新人物往来社
1997「礎石建物に関する二・三の考察－山城より検出された事例を中心として－」

『織豊城郭』第4号 織豊城郭研究会

第2節 曲輪の築造方法

山城の築城工事には普請(土木工事)と作事(建築工事)がある。普請は曲輪平坦面の造成、土塁・堀切の構築等の土木作業であり、尾根頂部や斜面を削平し、その土を盛土することにより、平坦面を確保している。作事は曲輪内に建築物を構築したり、土坑、落ち込みを設けたりする作業である。作事については第1節において記述しているので、ここでは普請について記述する。

1. 切土・盛土

第4章第1節で記述したように図43が切土と盛土を行っている範囲である。基本的に尾根頂上部を平坦面にするため、切土をおこない、その結果、生まれた残土を盛土として平坦面の拡充にあてている。盛土は砦の東斜面から南斜面にかけての範囲でおこなっており、北斜面から北西斜面側には皆無に近い状態である。これは北斜面から北西斜面側が自然な急斜面になっており、加工の必要がないために必然的に平坦面の確保を東から南側の斜面にしたものと理解できる。

盛土造成は平坦面を確保するための作業であると共に人工的に地形を改変し、人の移動を規制する効果も生み出している。北斜面では唯一曲輪2の出入口1付近において盛土がみられ、人工的な盛土作業の結果、防御と攻撃の機能を供えた出入口1の形態を作り出していることがわかる。

切土による作業は土塁・豎堀を造り出しており、地山の岩盤をも、削っている。豎堀1・2の頂上部の堀切では岩盤が露出しており、這い上がることが不可能である。

盛土の造成方法は粗雑に積み上げる箇所もあるが、基本的には版築状に粗い土壌と細かいシルトを積み重ねている。このような盛土を行う以前に旧表土面を加工している箇所もある。曲輪3南斜面の断面13や曲輪11南斜面の断面28では旧地表面を階段状に加工していたことが確認された。造成作業のスペース確保や盛土の崩落防止の効果が考えられる。

2. 土量の計算

山上雅弘は盛土調査の重要性を指摘し、普請の工事量として土量を計測することが有効だと考えた¹⁾。同様の検討として岸本一郎は水尾城の築城に関わる作業量換算を土量にて試みている²⁾。しかしながら、失われている空間を復元して算出しているため、誤差が生じることは免れないことではあるが、比較検討の上では有効な方法であると考え、両者の方法を採用し、当砦跡も検討することとする。

発掘調査により砦内の盛土範囲を確認しており、各所の断面を作成している。この断面図をもとに、各曲輪の盛土の平均断面を計算し、全体土量を導き出した。

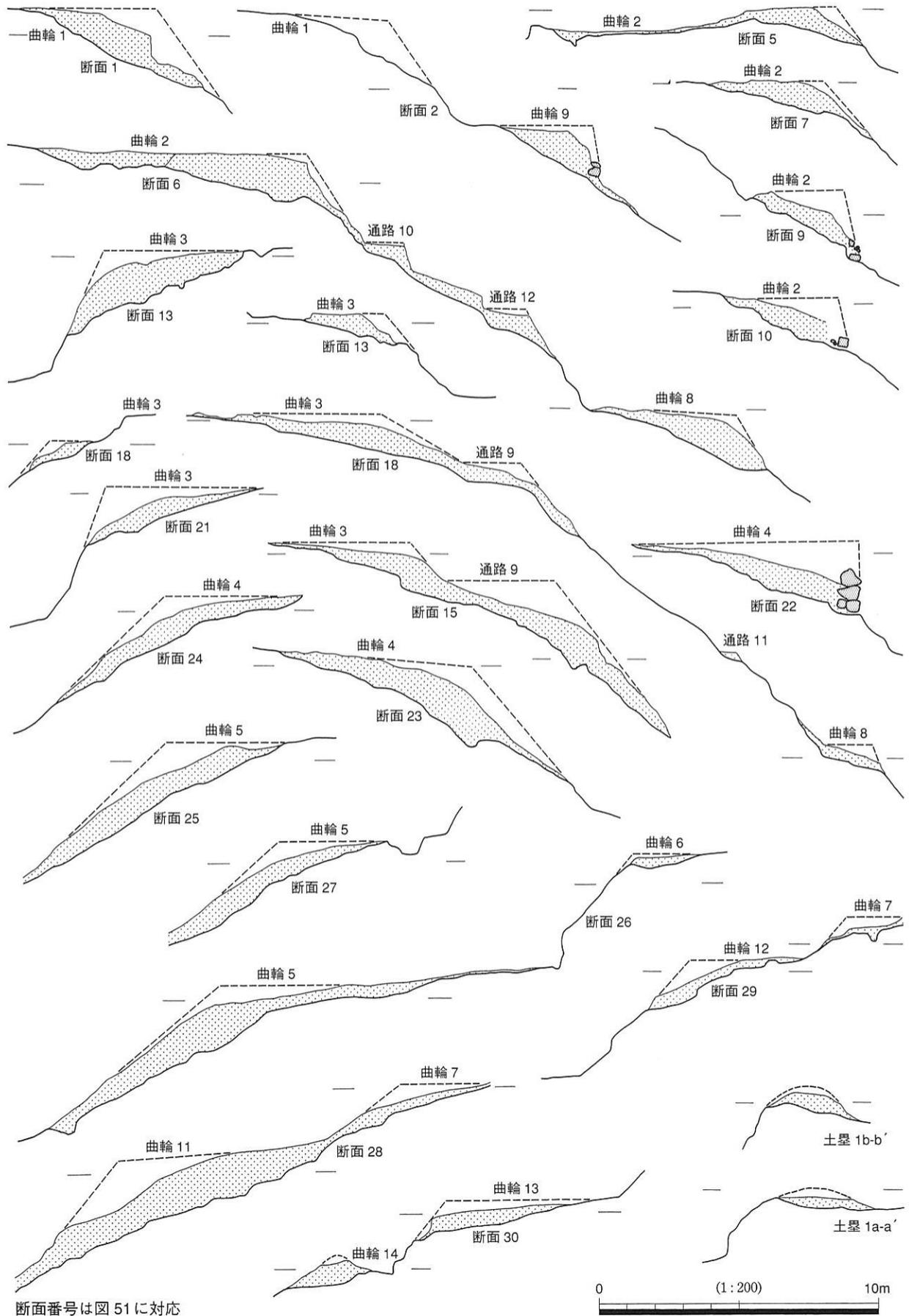
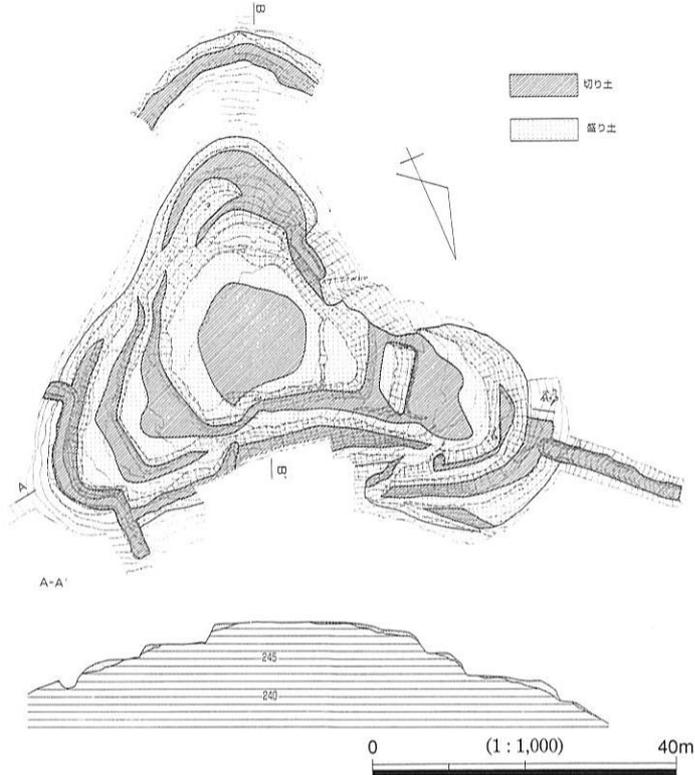


図66 盛土部分断面推定図

所在地：兵庫県西脇市水尾町

水尾城跡土量計算表

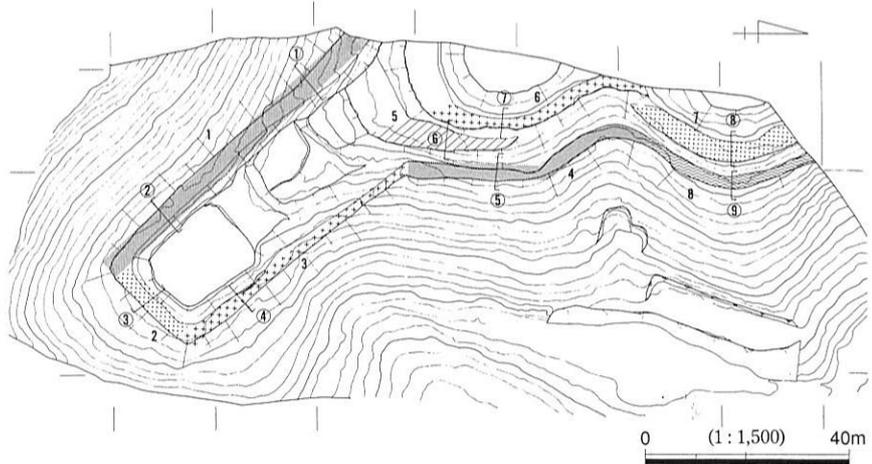
遺構名	土量
主郭	47.5
北一東通路1	20.0
登城通路	3.0
主郭北出郭	盛土のみ
北1郭	14.0
北2郭	33.8
北通路1	11.3
北通路2	13.5
北縦堀	19.8
北一東通路2	16.5
東1郭	28.6
東2郭	7.5
東空堀	64.5
東一南通路1	1.9
東一南通路2	1.8
東一南通路3	2.0
主郭南出郭	盛土のみ
南1郭	6.0
南2郭	7.3
西空堀	3.4
合計	302.4
山城面積	1,924.0㎡
1㎡あたり	0.15㎡



所在地：兵庫県多紀郡西紀町下坂井

内場山城跡土量計算表

斜面番号	土量
1	113.16
2	52.02
3	123.69
4	56.00
5	9.72
6	11.44
7	95.20
8	42.35
合計	503.58
山城全体推定量	806.03
山城面積(調査区内)	3,110.7㎡
1㎡あたり	0.16㎡



所在地：兵庫県豊岡市岩井

岩井城跡土量計算表

遺構名	土量
西第3郭	165.32
虎口通路	18.30
西第2郭	1.75
主郭	82.76
東第1郭	82.02
東第2郭	154.83
犬走り	6.50
主郭北斜面	13.00
東第1郭斜面	2.25
合計	526.73
山城面積	1,795.4㎡
1㎡あたり	0.29㎡

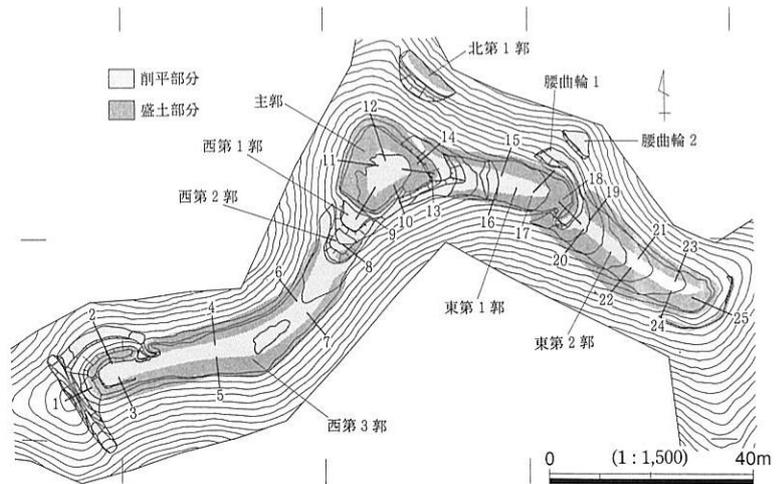


図67 他城郭盛土土量計算

計算手順は以下の通りである。

- ①調査時に実測した断面図を基に盛土部分の断面積を計算する。
- ②隣接する断面積との平均と距離により土量を計算する。
- ③各曲輪・通路ごとの土量を合計する。
- ④1 m²あたりの工事土量を計算する。

なお、各断面積、山城面積はデジタル式プラニメーター(プラコム KP-90N)を使用した。

また、この検討には多くの問題点があることを指摘しておく。

①盛土断面は流出してしまった盛土をも含めて、曲輪平坦面を推定した(図66)。

②土量計算においてはできるだけ多くの断面を測定することにより、その誤差を小さくすることができるのであるが、調査上、間隔も不同であり、必ずしも盛土範囲の最良な断面を測定しているとはいえない。

③不定形平面の盛土範囲を方形と見なして計算したための誤差。

3. 土量からの検討

土量計算においては前述した問題点が多くあり、確定できるものではない。しかし、このような土量計算は兵庫県の水尾城、内場山城、岩井城において行われており³⁾、比較する上で、今回の数値は実情と大きく掛け離れたものではないと考えている。

佐保栗栖山砦跡の各曲輪の数量は表1の通りであり、他山城の土量は図67である。佐保栗栖山砦跡の合計土量は水尾城の5.3倍、内場山城の2.0倍、岩井城の3.1倍に相当し、他の山城と比較して非常に多量であり、大土木事業であったことがわかる。また、1 m²あたりの面積比の土量は佐保栗栖山砦-0.42m³、水尾城-0.15m³、内場山城-0.16m³、岩井城-0.29m³を量り、佐保栗栖山砦の1.5~2.8倍となり、最も手を加えていると言えよう。

また、これらの山城の報告書では作業量の検討のため、掘削、運搬、仕上げの作業について単位面積あたりの労働力を推定し、作業に費やした延人数を求めている。

これらの作業の歩掛かりの数値の確定は当時の作業効率も考えていかなければならないものであり、当報告書ではあえて、その数値は提示しない。

4. 小結

以上のように、盛土部分の調査から、築城の普請に関する様々なことがわかった。

どの箇所にどれだけの平坦面を有する曲輪、或いは通路を必要としたか、読み取ることができる。曲輪3・5では平坦面の半分以上、また、曲輪11・通路9は全面的に盛土をしており、その重要性が伺われる。

城跡の調査にあたって地山面までの掘削調査の必要性は山上雅弘が内場山城跡の報告書において指摘しており、その有効性を再確認できたものと言える。

註

- 1) 山上雅弘 1993『内場山城跡』 兵庫県教育委員会
- 2) 岸本一郎 1992『播磨・水尾城跡の調査と研究』 西脇市教育委員会
- 3) 註1文献、註2文献

平田博幸・藤田淳・山上雅弘・高井治巳 1994『岩井城跡』 兵庫県教育委員会

表1 佐保栗栖山砦跡
土量計算表

遺構名	土量
曲輪1	144.19
曲輪2	136.51
曲輪3	246.08
曲輪4	202.96
曲輪5	254.36
曲輪6	9.41
曲輪7	45.57
曲輪8	61.05
曲輪9	77.28
曲輪11	185.98
曲輪12	25.26
曲輪13	28.42
曲輪14	9.26
通路9	124.56
通路10	5.04
通路11	3.28
通路12	8.40
土塁1	40.03
合計	1607.64
山城面積	3,857.5m ²
1m ² あたり	0.42m ³

第3節 出土遺物の検討

出土遺物を検討することにより、存続年代や当砦跡での特徴を考えることとする。

当砦跡に伴う遺物は供膳具として土師器小皿、瀬戸美濃皿・碗、天目茶碗、青磁碗、白磁皿・碗、染付皿・碗、調理具として瓦器搦鉢、備前搦鉢、丹波搦鉢・捏鉢、土師器鍋、石臼、貯蔵具として備前壺・德利・甕、丹波壺が出土し、他に瓦器火鉢・香炉・仏花瓶、瀬戸美濃水滴、砥石、鉄釘、銭貨などがある。

1. 土器

土師器皿

土師器皿の編年は摂津地方では確立したものはなく、ここでは編年作業が進んでいる京都での成果を援用することとする¹⁾。

土師器皿の法量は口径が5.4～16.0cm、器高が0.9～2.6cmの範囲でみられる。口径が6.5～8.0cm前後、8.5～10.0cm前後、12.0cm前後を中心とした3群の大きさに区別することができる。

口径6.5～8.0cm前後には図52-3、53-19～22のように底部から体部が丸く立ち上がり、すぐに口縁端部になるものがある。この中には53-20・21、59-45・46のように粗いハケメ調整後にナデを行うものが見られる。52-5、58-7、59-11は底部に突出部を有するいわゆる「へそ皿」であるが、突出度は大きくない。口径7.5cm前後に集中して、存在する。

口径8.5～10.0cm前後には52-10のように底部から体部にかけて緩やかに伸びるもの、58-8のように底部と体部がやや屈曲するもの、52-12のように底部と体部が屈曲するが器高が高いものがある。52-12はやや古相を示すものである。

口径12.0cm前後のものに52-13のように底部から体部にかけて緩やかに伸びるものと52-15のように底部と体部が屈曲し、内面立ち上がり部に浅い凹線状圏線の痕跡がみられるものがある。この凹線状圏線は底部と体部を屈曲させるがためのナデ技法上の痕跡であるが、砦跡出土土師器皿には深く明瞭なものはない。52-15は新しい様相を示すものである。52-13・15のタイプには59-19のように口縁端部内面に約1cmのおだやかな面を有したり、55-12のようにごく浅い凹みがみられるものもある。

口径14.0cm以上のものの出土量は少量である。

ハケメ調整が観察される皿が13点出土している。内面に施すが、外面のものも1点出土している。ハケメは粗いものが大半であるが、細かいものも存在する(図版35-5・37-4・39-8)。なお、ハケメ調整後にナデを施すが、ナデが強くなく、ハケメが残存している。

以上のようなタイプの土師器皿が出土しており、小森・上村編年のIX期新段階をやや含むX期古段階・中段階に相当すると考えられる。実年代については京都と摂津の地域差はもちろん、近年では森島康雄の再検討の報告²⁾があり、確定できない面もあるが、おおよそ15世紀末から16世紀中葉におさまるものと思われる。

また、これらの土師器皿の中には煤やタール状のものが付着したのもの

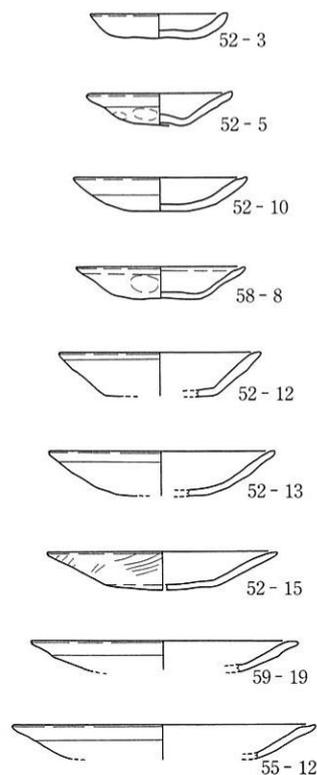


図68 土師器皿のタイプ

あり、灯明皿としての使用が考えられる資料も含まれている。

瀬戸美濃製品³⁾

瀬戸美濃製品には端反皿、丸碗、天目茶碗、平碗、水滴がある。図53-45、55-2、56-16・18・19は端反皿であり、大窯第1段階にあたり15世紀末から16世紀前葉に位置する。56-17は腰折皿であり、古瀬戸後期IV期にあたり、15世紀後葉に位置する。52-33、53-52・53、58-31、59-21・33・34は丸碗である。53-52と59-33の外面には退化した蓮弁文を施す。53-52・53の高台の幅は狭く、断面台形であり、59-34の高台断面は逆三角形に近い。よって、大窯第1段階にあたり、15世紀末から16世紀前葉に位置する。52-31の天目茶碗は口縁端部外面に沈線が走り、古瀬戸後期IV期新段階にあたり、15世紀後葉に位置する。52-34の平碗は口縁端部をやや外方へつまんでいる。古瀬戸後期III期頃にあたり、15世紀前葉から中葉に位置すると思われる。53-63は鉄釉鳥形水滴であり、15世紀末から16世紀前葉にあたる。

以上のように大半は大窯第1段階の15世紀末から16世紀前葉に位置するが、一部古瀬戸の15世紀前葉から中葉と後葉の遺物が含まれることが明らかになった。

備前・丹波製品⁴⁾

丹波窯製品は搦鉢、捏鉢、壺が出土している。図52-38の壺は肩が張らず、丸胴をなしている。口縁部は外反しながら端部をやや尖り気味に丸くおさめる。中尾城編年の資料B2に近いものと考えられ、16世紀前半にあたると思われる。56-1・8の搦鉢は一本引の卸目を持ち、底部に4分割線がはいり、空白が広く残る。口縁端部外面を凹線気味に強くなでている。中尾城編年の資料B101をやや遡るものと思われる、16世紀中葉に位置すると考えられる。

備前窯製品は搦鉢、浅鉢、小壺、徳利、甕が出土している。図53-8、54-2・3、56-10、59-22・23は搦鉢であり、口縁は逆「く」の字に屈曲する。端部には内傾する面を、外面下部には凹線状の窪みを有する。52-37、54-7、57-2～5は甕であり、口縁は幅広の玉縁状であるが、縁帯状にはなっておらず、外面の凹線の窪みは緩やかである。搦鉢・甕共に、間壁編年IV期新段階に位置するものと考えられ、16世紀前葉から中葉に属する。57-2には「三入」、57-3には「二石入」の刻字がある。このような大型品は16世紀初頭から中葉には出現しており、16世紀後葉に増加傾向がある。

青磁・白磁・染付・陶磁器⁵⁾

青磁には稜花の皿(図53-46・47)と無文直口縁の碗(52-32、58-27、59-9・32)があり、白磁には端反皿(52-27・28、53-50・51)である小野C群と碗(53-48)がある。染付は皿と碗がある。皿(53-55、58-28、59-8)は端反であり、小野染付皿B1群にあたる。碗(56-7)の外面には芭蕉葉文があり、小野C群であろう。青磁、白磁、染付共に15世紀後葉から16世紀中葉に位置付けられよう。

53-49の天目茶碗は中国産と考えられ、胎土は密で堅地である。

瓦器火鉢・浅鉢・香炉・仏花瓶・搦鉢

瓦器火鉢は11点出土しており、そのうち図56-11・12は口縁外面に2本の突帯を巡らせ、その間にスタンプ文を施す。53-60～62は直方体を呈した瓦器火鉢であり、大和系と考えられる。59-10は円柱形の瓦器風炉の側面には窓があく。瓦器小型浅鉢(53-41～44)がある。3脚を有し、体部外面に渦巻き文、菱形文のスタンプが押されている。

瓦器仏花瓶(53-39・40)が2点出土している。外面はミガキ調整を施した丁寧な造りをおこなっている。

53-7の瓦器搦鉢は大和産であり、15世紀後葉から16世紀初頭に位置づけられる。58-32も大和産であ

り、16世紀前半のものであろう。

以上の出土瓦器のほとんどは2次火熱を受けており、表面の炭素が飛散しているものが多い。

土師器壺・羽釜・鉢

図53-37・38の土師器壺は口径7.2、7.0cmを測る小型のものであり、55-13がその底部にあたると思われる。また、鏝端部直径13.0cmを測る小型羽釜(55-14)も出土している。

土師器鉢(53-57~59)の口縁部破片が出土している。口縁上面をほぼ水平にし、体部を直角に曲げている。

土器他

円形に加工した備前甕片(図59-25)が出土している。攻撃のためのつぶて、或いは遊戯具と考えられる。

註

1) 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所

鋤柄俊夫 1994「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第四輯 古代学研究所

2) 森島康雄 1999「戦国期からみた織豊期の土器・陶磁器」『土器・陶磁器からみた織豊期城郭 織豊期城郭研究会第7回研究集会』

3) 編年は以下の文献を使用した。

藤澤良祐 1993「第四章 瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史 陶磁史篇四』 瀬戸市

4) 編年は以下の文献を使用した。

備前 佐野元 1998「5. 備前窯」『六古窯の時代』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
一部の資料は岡山市教育委員会 乗岡実氏から御教示を得た。

丹波 松澤和人 1998「4. 丹波窯」『六古窯の時代』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

岡崎正雄 1989『中尾城跡』 兵庫県教育委員会

5) 編年は以下の文献を使用した。

『概説 中世の土器・陶磁器』 1995 中世土器研究会

森田勉 1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2

上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2

小野正敏 1982「14~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2

2. 金属製品

鉄釘、建築具、生活用具、農耕具、武器・武具、銭貨が出土した。

鉄釘の形態はいずれも断面方形であり、頭部は水平に折り曲げるものとさらに巻き込むものがみられる。曲輪1と曲輪2の北半から多く出土している。武器・武具には鏃類、刀類、武具に関するものがみられる。武具の一部と考えられる図60-19・20の鉄片は縁辺に小孔があり、19の裏面には繊維質痕が観察される。

銭貨の中で開元通寶から永樂通寶までは、16世紀当時に流通していたものである。寛永通寶については後世の混入と考えられる。

3. 石製品・他

砥石(図52-36、54-8)は使用頻度が高く、各面は滑らかである。図化していないが火打ち石と思われる

るチャート石片が曲輪1から出土している。曲輪2からは基石と考えられる扁平の小石が出土している(図版40-5)。石臼(図56-2)は刻み目面にふくらみがあるところから下臼と考えられる。

4. 土壁

曲輪1～3を中心に2次被熱を受けた土壁が142.4kg出土している。土壁は竹材を格子状に組み、縄を使用して竹材を固定したものに、スサを含んだ壁土を塗り付けたものである。出土した土壁には壁面となる平坦面が残存したが、荒壁の状態であり、表土塗や外面化粧の漆喰は確認されなかった。また、骨組みとなる格子状に組まれた木舞の痕跡がみられたが、木舞固定の縄綴りは確認されなかった。これはすべての重なり部分に縄綴じをするのではなく、ごく一部分のみであったと考えられる。

土壁の厚みを測定できる資料は40点出土している。尺貫法の単位が想定されるため、3.0cmを基準として、前後1mmの範囲を1単位としてグラフを作成した(図69)。2.9～3.1cmの範囲とその前後の範囲をあわせると62.5%を占める。施工後の収縮を考慮すれば、ほぼ一寸の厚みを基準として土壁が塗られたことが考えられる。

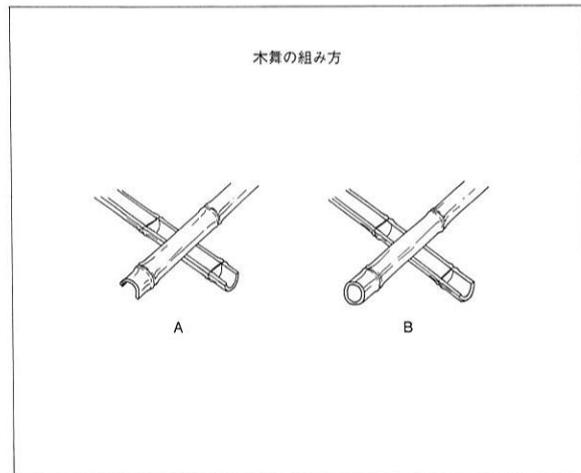
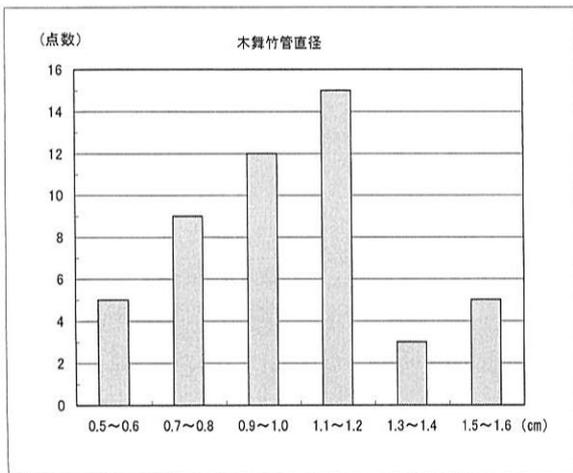
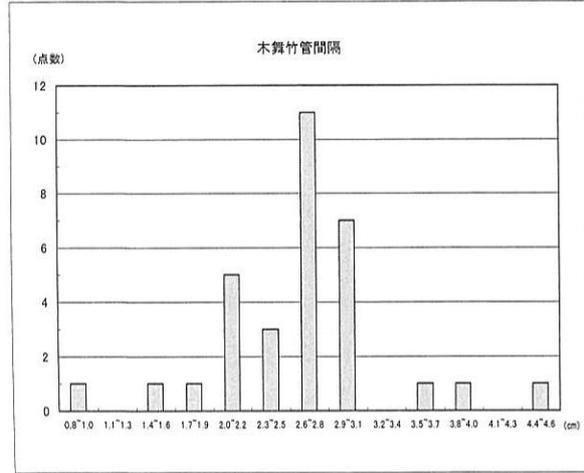
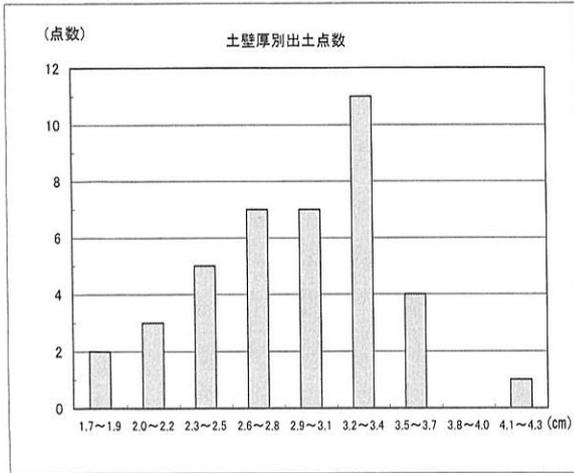
土壁の内部には木舞の痕跡が確認できるものがあるが、いずれも木舞自体は残存していない。木舞部材の竹格子の間隔がわかったものは32点出土している。土壁の厚みと同様に3.0cmを基準として竹管の中心間を測定した結果、2.6～3.1cmの資料が56.3%を占めることがわかった。ほぼ一寸を基準として木舞が組まれたことが考えられる。

木舞に使用された竹管の直径を測定できた資料は49点出土している。0.7～1.2cmの資料が73.5%占めることがわかった。使用するおおよその太さが決まっていたといえよう。また、竹管は半裁ではなく、約1/3に割ったものもあり、それらの資料は図69の観察表の中で直径の値が復原直径として大きな数値として表れている。使用状況としては竹管の重なり面幅がおおよそ1.2cm前後であり、上記した0.7～1.2cmの資料と同等に扱うことができると思われる。

竹管の組み方は図69の2通りを確認することができた。竹材は基本的には半裁のものを使用するが、1/3に割ったものも使用している。A類は半裁にした竹管の切断面を重ね合わせたものである。B類は半裁した竹管と半裁しない竹管を組み合わせたものである。35点の資料中A類は71.4%を占め、基本となる組み方であることが考えられる。また、B類とした資料の竹管直径をみると1.5～1.6cmのみでほぼ占める傾向をみることができ、太い竹管を使用していることがわかる。

土壁の出土例は山城調査において確認されることがあるが、その詳細は明らかにされていない。おおよその状況がわかる例として管見するところでは2例あげることができる。大阪府羽曳野市高屋城跡では木舞の観察がなされており、格子竹管の固定のための縄が確認されている¹⁾。竹管は大小あり、直径1.0cmと2.7cmを測り、大と小の交差部分に縄綴じされている。木舞間隔は1.7、2.3、3.3cmを測る。東大阪市若江城跡では骨組みとして格子状の竹管の他に板材、角材が出土している²⁾。竹管直径は2.0～2.8cmを、木舞間隔は8～10cmを測る。佐保栗栖山砦跡資料には高屋城跡資料のように格子固定の縄目やまったく異なった大きさの竹管はみられない。若江城資料は木舞間隔が当砦跡資料と比較して、幅広く、それと比例して竹管直径も大きいことがよみとれる。また、いずれの土壁も外面化粧は確認されていない。

山田幸一は木舞に竹が部分的に使用され始めるのは平安時代中期で、全面的に竹に置き換えられるのは早くとも桃山時代であるとしている³⁾。当砦跡出土資料のみをもって時期的な位置づけは困難であるが、竹を全面に使用した例として早期のものと考えられるであろう。



出土土壁観察表

資料番号	大地区	小地区	曲輪名	壁厚	竹管間隔	竹管直径	木舞組方	資料番号	大地区	小地区	曲輪名	壁厚	竹管間隔	竹管直径	木舞組方	資料番号	大地区	小地区	曲輪名	壁厚	竹管間隔	竹管直径	木舞組方		
1	A17	a3	曲輪1	2.4				33	A17	a3	南東	曲輪1	2.6			73	A17	a2	北西	曲輪1			0.8		
2	A17	a2	北西	曲輪1			B	34	A17	a3	南東	曲輪1			A	66	A17	a2	北西	曲輪1	2.9		0.9	A	
3	A17	a3	北東	曲輪1	2.1			36	A17	a2	北西	曲輪1	3.2	1.2		67	A17	a2	北西	曲輪1	2.4		0.9	A	
4	A17	a3	北東	曲輪1			A	37	A17	a2	北西	曲輪1	2.6			68	A17	a2	北西	曲輪1	3.0			A	
5	A17	a3	北東	曲輪1		1.0		38	A17	a2	北西	曲輪1	2.7			69	A17	a2	北西	曲輪1	2.6		0.7	A	
6	A17	a3	北東	曲輪1		2.2		39	A17	a2	北西	曲輪1	2.7			70	A17	a2	北西	曲輪1	2.7		0.7	A	
7	A17	a2	北東	曲輪1	1.9			40	A17	a2	北西	曲輪1		1.3	A	71	A17	a2	北西	曲輪1	2.3		1.0		
8	A17	a2	北東	曲輪1		2.1		41	A17	a2	北西	曲輪1	3.1			74	A17	a2	北西	曲輪1			1.0		
9	A17	a2	北西	曲輪1	2.7	2.9	0.7	42	A17	a2	北西	曲輪1	2.3			78	A17	a2	北東	曲輪1				A	
9	A17	a2	北西	曲輪1	2.7	2.9	1.1	45	A17	a4	曲輪1	3.6			79	A17	a2	北東	曲輪1	4.3					
10	A17	a2	北西	曲輪1	3.1			46	A17	a3	北東	曲輪1		0.7		80	A17	a2	北東	曲輪1			1.6	B	
11	A17	a2	北西	曲輪1	3.5			47	A17	a2	北東	曲輪1	3.7	1.2	A	81	A17	a2	北東	曲輪1				1.5	B
12	A17	a2	北西	曲輪1	2.7			48	A17	a2	北東	曲輪1	2.6			82	A17	a2	北西	曲輪1	3.2	2.9	1.1		
13	A17	a2	南東	曲輪1	1.9			49	A17	a2	北東	曲輪1	4.4			83	A17	a2	北西	曲輪1				A	
14	A17	a2	南西	曲輪1		0.9						3.0	2.9	1.4	A	84	A17	a2	北西	曲輪1		2.7			
15	A17	a2	北西	曲輪1		2.6		50	A17	a2	北東	曲輪1	3.0	2.9	0.6	A					0.9	0.9		A	
16	A17	a2	北西	曲輪1		2.7		51	A17	a2	北東	曲輪1	3.3	1.4	A	85	A17	a2	北西	曲輪1		1.2		A	
17	A17	a2	北西	曲輪1	2.9			52	A17	a2	北東	曲輪1		0.6	A	86	A17	a2	北西	曲輪1				B	
18	A17	a2	北西	曲輪1	3.2		1.1	53	A17	a2	北東	曲輪1		1.2		87	A17	a2	北西	曲輪1			1.2		
19	A17	a2	北西	曲輪1		2.1						3.1	2.6	1.6	A	88	A17	a2	北西	曲輪1			0.6	A	
20	A17	a2	北西	曲輪1		2.2		54	A17	a2	北東	曲輪1	3.1	2.2	0.6	A	89	A17	a2	北西	曲輪1			1.6	B
21	A17	a2	北西	曲輪1		2.4		55	A17	a2	北東	曲輪1		1.2		90	A17	a2	北西	曲輪1			1.5	B	
22	A17	a2	北西	曲輪1	3.3			56	A17	a2	北東	曲輪1		3.7		91	A17	a2	北西	曲輪1			1.2		
23	A17	a2	北西	曲輪1	2.2			57	A17	a2	北東	曲輪1		2.7	0.8	A	92	A17	a2	北西	曲輪1		2.7		
24	A17	a2	北西	曲輪1	2.0			58	A17	a2	北東	曲輪1	3.6		1.2	B	97	A17	a2	a3	曲輪1	3.2	3.1	0.9	A
25	A17	a2	北西	曲輪1	3.3			59	A17	a2	北東	曲輪1		2.8	A	44	A17	b5	曲輪2				0.9		
26	A17	a2	北西	曲輪1		1.1						3.3	2.5	0.8	A	45	A17	b5	曲輪2				0.8		
27	A17	a2	北西	曲輪1		1.1		60	A17	a2	北東	曲輪1	3.3	2.5	1.1	A	76	O17	j5	南西	曲輪2			0.5	
28	A17	a2	北西	曲輪1	3.3			62	A17	a2	北西	曲輪1		1.0		77	O17	j5	南西	曲輪2				0.7	
29	A17	a2	北西	曲輪1	3.2			63	A17	a2	北西	曲輪1	2.9			93	A17	e6	曲輪3				1.2		
30	A17	a2	北西	曲輪1	2.8			64	A17	a2	北西	曲輪1	2.6		0.9	A	94	A17	e7	曲輪3			1.8		
31	A17	a2	北西	曲輪1		2.0		65	A17	a2	北西	曲輪1	2.3	2.9	1.0	A	95	A17	e6	曲輪3				1.1	A
32	A17	a3	北東	曲輪1	2.3			72	A17	a2	北西	曲輪1	3.3			96	A17	g5	曲輪5			4.0			

図69 土壁の分析

註

- 1) 内藤俊哉 1985「高屋城跡」『古市遺跡群VI』 羽曳野市教育委員会
- 2) 才原金弘 1988『若江遺跡第27次発掘調査報告』 (財)東大阪市文化財協会
- 3) 山田幸一 1981『ものと人間の文化史 壁』 法政大学出版局

5. 遺物の分布・出土量・器種組成

当砦跡からは表2のように土器が出土しており¹⁾、また、他山城と比較するため、土器組成表を作成した²⁾(表3)。土師器皿が93.35%を占め、他の山城と比較して供膳具の出土量として大きい値になっている。調理具、貯蔵具の比率が1%台の低い値であるが、少なからず、出土しており、砦内である程度の生活がなされていたことが推定される。

土師器皿を除いた組成表を作成した。大俣城の調理具と貯蔵具の比率に相似しており、供膳具の比率の違いは栗栖山砦跡の「他」の分類に香炉・風炉・仏花瓶・水滴が含まれているからである。

遺物分布状況は図70・71である。

曲輪2からもっとも多く多くの遺物が出土している。土師器皿は曲輪2全域から多量に出土しているが、他の土器は北側半分の落ち込み1以北に集中していることがわかる。また、仏花瓶、香炉、水滴などの特殊な遺物を見ることが出来る。他曲輪よりも居住空間の機能が強く、さらに儀礼的な空間をも合わせ持っていたことが考えられる。

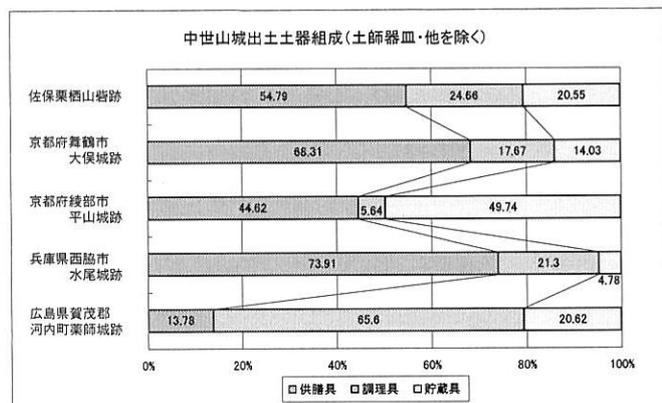
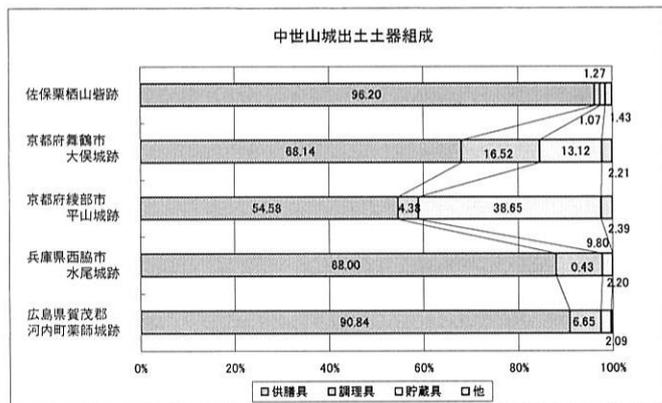
曲輪3は主郭となる曲輪と考えられるが出土量は多くない。生活空間ではなかったからであろう。

曲輪5からは貯蔵具の備前甕が多く出土している。また、瀬戸美濃皿が曲輪2と同量近く出土し、播鉢、火鉢、石臼もみられ、曲輪2に近似しているところがある。居住空間の性格が濃い曲輪であると考

表2 佐保栗栖山砦跡土器組成

		器種	破片数	%
供膳具	土師器	皿	1305	93.35
		碗	8	0.57
	瀬戸美濃	皿	9	0.64
		天目茶碗	2	0.14
	白磁	碗	1	0.07
		皿	4	0.29
	青磁	碗	5	0.36
		皿	2	0.14
	染付	碗	1	0.07
		皿	7	0.50
中国	天目茶碗	1	0.07	
小計			1345	96.20
調理具	土師器	鍋	3	0.21
	瓦器	播鉢	2	0.14
		播鉢	2	0.14
	丹波	鉢	1	0.07
	備前	播鉢	8	0.57
		捏鉢	2	0.14
小計			18	1.27
貯蔵具	土師器	壺	1	0.07
	丹波	壺	1	0.07
		小壺	2	0.14
	備前	徳利	1	0.07
		甕	10	0.72
小計			15	1.07
他	土師器	ミチア土器	2	0.14
		火鉢	10	0.72
	瓦器	香炉・風炉	5	0.36
		仏花瓶	2	0.14
	瀬戸美濃	鉄靴水滴	1	0.07
	小計			20
合計			1398	100.00

表3 中世山城土器組成比較



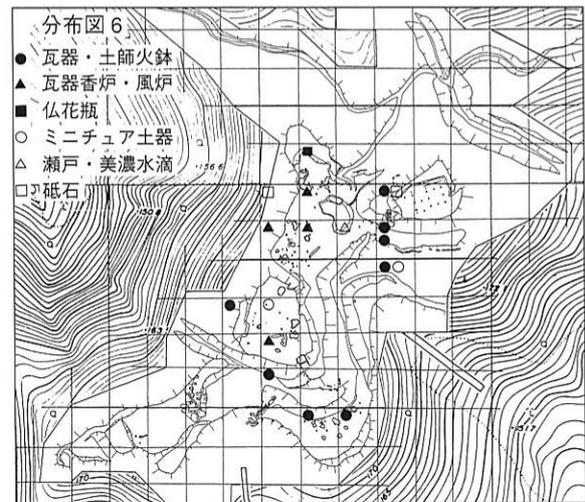
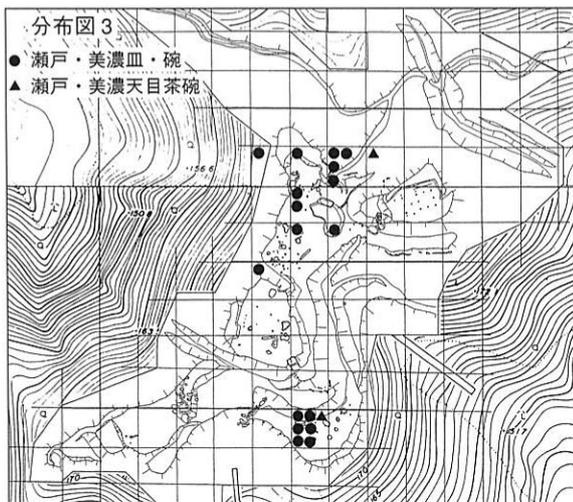
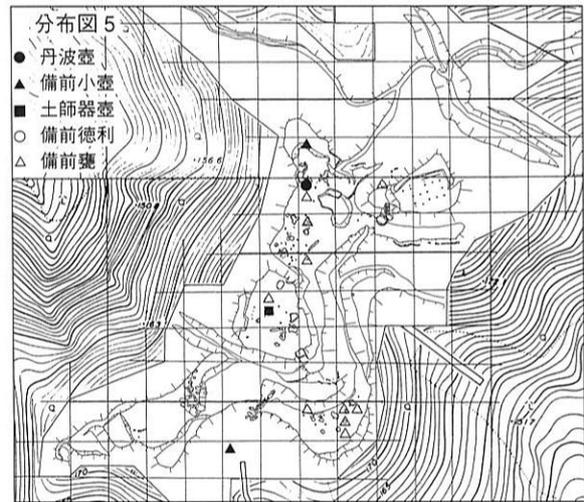
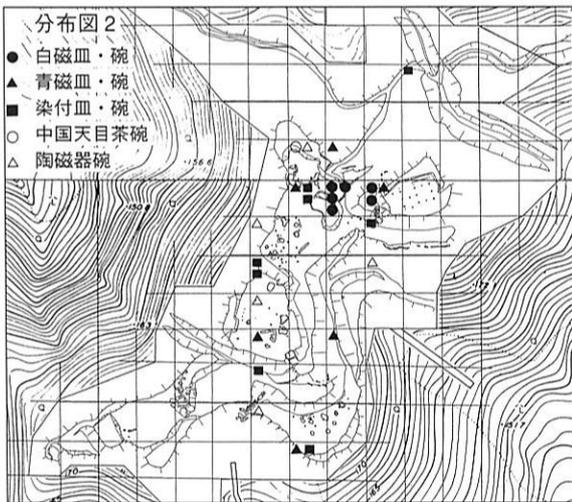
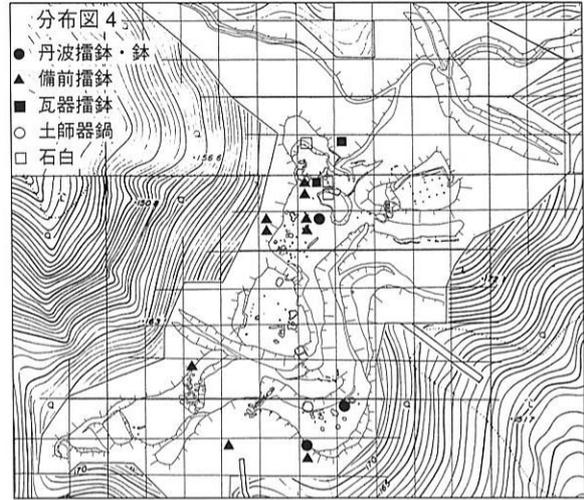
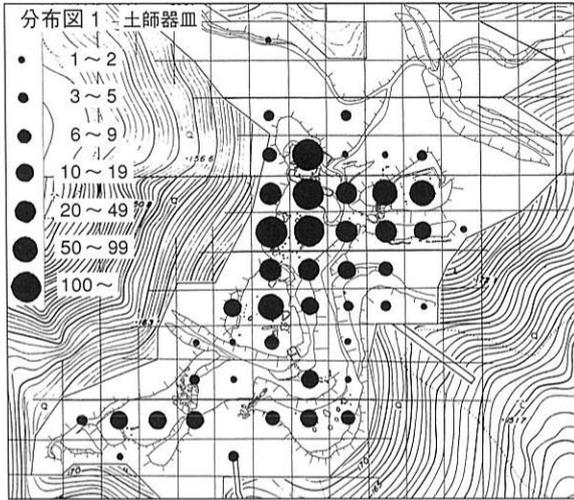


図70 遺物出土分布図(1)

えられる。

曲輪 3・5 より西側の曲輪と曲輪 8 からは土師器皿の出土のみであり、遺物量が極端に少なくなる。日常的に使用する空間ではないことが認められる。

土壁は曲輪 1 から 89.6kg 出土しており、四方を土壁で囲んだ建物の存在が考えられる。曲輪 2・3 の出土量はそれぞれ 31.0kg、18.3kg であり、土壁の建物の存在は推定されるが、四方すべてを囲んだものであるかは不明である。曲輪 6 出土土壁は曲輪 3 からの流出であろう。

釘は曲輪 1 の北西側と曲輪 2 の北端に多く分布している。建築物の使用としては出土量が少ない。

銭貨の分布状況は曲輪 1 の西端、曲輪 2 の南西隅、曲輪 3 中心部に多くみられる。いずれも建物跡に位置する。

つぎに貿易陶磁器組成表を作成²⁾し、他の山城との比較を試みた(表 4)。当砦跡は、染付皿 B 1 群が最も多く、次いで白磁皿 D 群、青磁碗無文直口が続く。シミズ谷城跡は青磁稜花皿・青磁碗の比率が高

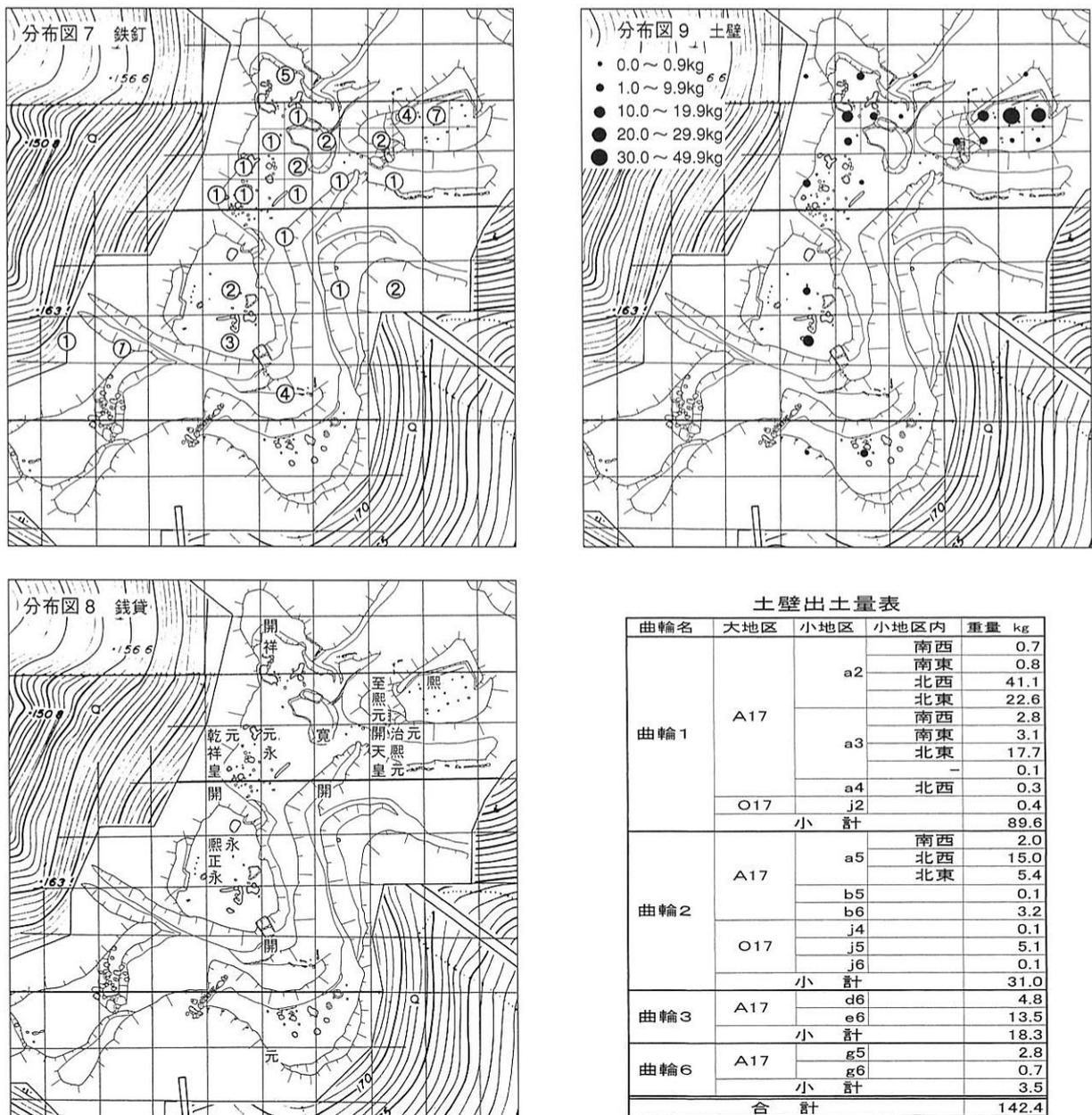


図71 遺物出土分布図(2)

表 4 中世山城貿易陶磁器組成比較

所在地	遺跡名		白磁皿				青磁碗				青磁皿・盤			染付碗					染付皿					天目茶碗	合計						
			B群	C群	D群	変形	蓮弁文 B群	蓮弁文 B'群	蓮弁文 C群	無文 直口	稜花	菊皿	盤	B群	C群	D群	E群	F群	不明	B1群	C群	B2群	E群			F群					
大阪府 茨木市	佐保栗栖 山砦跡	破片数	1	0	0	4	0	0	0	0	5	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	20
		%	4.17			16.67					16.67	8.33					4.17									29.17					4.17
京都府 竹野郡 弥栄町	シミズ谷 城跡	破片数	0	2	0	0	0	2	2	7	2	10	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	34	
		%		5.88				5.88	5.88	20.59	5.88	29.41				2.94									23.53						
京都府 綾部市	平山城跡	破片数	14	0	251	1	28	1	0	5	2	7	3	13	0	11	0	42	0	0	25	4	0	1	0	0	0	0	0	408	
		%	3.43		61.52	0.25	6.86	0.25		1.23	0.49	1.72	0.74	3.19		2.70		10.29			6.13	0.98		0.25							
京都府 舞鶴市	大俣城跡	破片数	1	0	172	0	0	0	0	0	0	0	0	10	5	18	0	52	0	0	5	8	0	2	0	0	0	0	273		
		%	0.37		63.00										3.66	1.83	6.59		19.05		1.83	2.93		0.73							
京都府 綾部市	上林城跡	破片数	0	0	48	5	0	0	0	4	0	0	7	0	0	3	0	14	0	0	11	8	0	8	0	0	0	0	108		
		%			44.44	4.63				3.70			6.48					12.96			10.19	7.41		7.41							
兵庫県 西脇市	水尾城跡	破片数	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	13		
		%	7.70		15.38											7.70		15.38		38.46		15.38									

く、古相を示す。平山城跡は白磁皿 C 群の比率が高く、大俣城跡も白磁皿 C 群の比率が高く、かつ、青磁碗は皆無であり、新相を示す。当砦跡の様相はこの両者の間に位置づけられると考えられる。

このように、当砦跡の貿易陶磁器組成は碗皿の主流が染付ではあるが、青磁碗も若干含まれていることから、15世紀後葉から16世紀前葉の様相を示している。また、土師器皿や備前、丹波等の陶器は各編年から16世紀前葉から中葉を示している。この年代観の相違は、森島⁴⁾が指摘するように、機能した時期の断絶と考えるより、小規模山城では常に最新の貿易陶磁器のセットを入手できる条件が整わなかったからと考えられる。また、瀬戸美濃製品に関しても貿易陶磁器と同様にやや古相を示している。

以上のように、供膳具、調理具、貯蔵具が揃っており、少なからずとも砦内で生活をしてきたことが伺える。個々の曲輪の機能は曲輪 2・5 が居住空間の役割を兼ね備えており、特に曲輪 2 は仏花瓶、香炉等の特殊遺物がみられるところから、儀式的空間を兼ね備えていたと考えられよう。また、曲輪 4・7・8・11~14 は土師器皿の出土のみであり、付随的な施設とみなすことができよう。

註

- 1) 破片数の数量化は接合作業を行ったのちの口縁の残存する破片をカウントした。土師器皿と備前甕以外は口縁破片のカウント数と接合後の単純破片数とあまり変化がないが、両者は大きく異なる。この操作が資料を相互に比較する上で問題になるか、検討の余地はあるものと考えている。「数量化による比較」については小野正敏 1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 2) 森島康雄 1998「丹波・丹後における山城出土の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究会 関西大会資料集 中世前期の貿易陶磁器の流通 戦国期城館における貿易陶磁器』
岸本一郎 1992『播磨・水尾城跡の調査と研究』 西脇市教育委員会
渡邊昭人・松井和幸・久下 実 1996『薬師城跡』 (財)広島県埋蔵文化財調査センター

3) 註2と同じ

4) 註2と同じ

6. 小結

遺物から見た佐保栗栖山砦跡の年代は15世紀後葉から16世紀後葉の時間幅をもつが、終焉は16世紀後葉の中でも第3四半期までにとどまるようである。また、瀬戸美濃皿・碗は15世紀末から16世紀前葉のもので占められ、15世紀前葉のものが1点出土し、貿易陶磁器の様相も同様の時期幅と認められる。この状況は小規模山城が常に最新の貿易陶磁器のセットを入手できる条件が整わなかったからと考えられる。本来の機能した存続時期は土師器皿や備前・丹波窯製品の15世紀末から16世紀中葉と思われる。

出土遺物の分布状況から曲輪 2・5 に居住空間の特質が認められる。

第4節 栗栖山砦跡窯1より採取した焼土試料の考古地磁気測定

1. はじめに

今回大阪府文化財調査研究センターの依頼を受けて、茨木市栗栖山砦跡の窯1より採取された焼土試料について、考古地磁気学的方法でその焼成時期の推定を行ったので、その結果について報告する。考古地磁気で年代推定が可能となるのは、地球磁場の方向と強度とが時間と共に変化(経年変化)する量であり、窯跡などの焼土は、それが高温の状態から冷却してきたときの地球磁場の方向や強度を化石化して保存しているからである。過去の地磁気強度の情報は、手間暇はかかるが壺や煉瓦の破片からでも引き出すことができる。それに対して地磁気方向の情報は窯や炉本体から直接採取された焼土からしか得ることが出来ない。地磁気永年変化曲線との対比から受熱時の年代を割り出す時、いかにして信頼度の高い地磁気化石を取り出すかが問題となる。

2. 試料の測定手順

採取された試料からは、まず残留磁化方向測定用に3.3cm立方の大きさのサンプルが切り出され、余裕があれば帯磁率および残留磁化強度測定用に2.5cm立方の大きさの複数個の小試料(スペシメン)が切り出されている。以下に帯磁率、残留磁化強度、残留磁化方向測定の手順について述べ、各サイト毎にその測定結果について述べる。

3. 帯磁率の測定

帯磁率は地球磁場程度の弱い磁場によって誘導される磁化率であり、火を使用した炉跡や窯跡では帯磁率が強くなることが知られており、その測定は火気を受けた遺構を検知するのに有力な方法となる。英国のBartington社によって高感度な帯磁率計が製品化されて測定が簡単になっている。

帯磁率測定用に切りだした小型スペシメンについて、帯磁率の強さ(Rc)を「帯磁率計」を使って測定するとともに、「残留磁化測定装置」を使って残留磁化の強さ(Jn)を測定し、その相対比(Jn/Rc)の値を計算によって求めてみた。その関係が表5にまとめてある。

一般に土壌の磁氣的性質は受熱の過程で変化する。火を使用した頻度、使用後の環境変化や時間経過、土壌の種類によって、現れる磁氣的性質の差はまちまちであるが、定性的には焼かれた土壌は焼かれなかった土壌より、より大きな強度の、そしてより安定な残留磁化をもつことが示されている(森永他、1989)。

4. 残留磁気測定結果

試料の残留磁化の測定は手始めに「残留磁化測定装置」を使って各スペシメンの自然残留磁化(NRM)が測定されたがこの段階できちんとした磁化をもっていないことが判明した試料は棄却し、以下の作業を停止することになる。

次いで「交流消磁装置」を使って、窯が最後に焼成を受けて後二次的に付着した二次磁化が除去され、試料が焼成時に獲得した初生磁化を分離した。交流消磁による初成磁化の分離がうまく働いているかどうかは後述する直交消磁図で確かめた。

分離された初成磁化方向の平均値の計算は、Fisher(1959)の統計法によって求められており、平均の方向より10度以上離れている試料は順次取り除いて平均値の再度平均値の計算をするという作業を通して最終の残留磁化方向を決定した。

表5 窯1焼土試料の帯磁率・残留磁化の強さ・その相対比

試料番号	Rc (帯磁率 $\times 10^{-6}$ cgs)	Jn (N R M強度 $\times 10^{-5}$ emu)	Jn/Rc	試料番号	Rc (帯磁率 $\times 10^{-6}$ cgs)	Jn (N R M強度 $\times 10^{-5}$ emu)	Jn/Rc
栗栖 1-1 a	19.8	7.776	0.39	栗栖 1-6 a	33.1	19.55	0.59
1 b	30.75	22.38	0.73	6 b	31.5	20.84	0.66
-2 a	22.55	15.38	0.68	6 c	49.7	20.46	0.41
2 b	16.2	8.775	0.54	6 d	36.35	21.74	0.60
2 c	35.95	16.35	0.45	6 e	56.3	51.76	0.92
2 d	52.3	32.80	0.63	6 f	54.95	25.54	0.46
2 e	37.5	13.56	0.36	6 g	51.3	62.08	1.2
2 f	20.9	13.41	0.64	6 h	102.3	195.4	1.9
2 g	42.9	20.56	0.48	-7 a	54.75	27.89	0.51
2 h	16.5	12.48	0.76	7 b	112.45	80.76	0.72
-3 a	77.6	40.14	0.52	7 c	74.7	49.58	0.66
3 b	37.55	5.359	0.14	7 d	120.95	65.09	0.54
3 c	19.45	9.479	0.49	7 e	89.15	35.54	0.40
3 d	98.05	32.59	0.33	7 f	60.6	30.46	0.50
-4 a	40.45	38.05	0.94	7 g	72.6	34.35	0.47
4 b	35.15	30.12	0.86	7 h	97.0	109.4	1.1
4 c	37.55	38.95	1.0	7 i	176.3	120.5	0.68
4 d	28.8	26.45	0.92	7 j	112.4	106.4	0.95
-5 a	121.35	260.9	2.1	7 k	101.85	66.26	0.65
5 b	52.6	20.15	0.38	7 l	62.2	139.1	2.2
5 c	80.3	33.45	0.42	-8 a	57.8	30.06	0.52
5 d	107.3	74.46	0.69	8 b	56.3	45.03	0.80
5 e	54.65	37.11	0.68	8 c	46.05	18.93	0.41
5 f	192.2	599.1	3.1	8 d	32.65	20.45	0.63
5 g	149.9	403.3	2.7	8 e	46.15	33.97	0.74
5 h	59.7	29.32	0.49	8 f	45.4	20.86	0.46
5 i	57.25	36.31	0.63	-9 a	157.55	448.6	2.8
5 j	40.8	13.21	0.32	b	280.95	798.8	2.8
5 k	163.55	352.4	2.2	c	272.1	1263	4.6
5 l	53.0	17.41	0.33	-10 a	320.4	3127	9.8

5. 残留磁化方向測定の結果

栗栖1の試料の交流消磁は二通りの様相を示す。図72は *KURUSU 01-02*、*KURUSU 01-09* と命名された試料のいずれも直交消磁図 (Zijderveld, 1967) と強度変化図を示したものである。直交消磁図と呼ばれる図は、消磁の各段階で磁化ベクトルの終点をつないだものの平面図と立面図とを一つに纏めて描いたもので、方向だけでなく大きさも図示しているので、段階消磁によって磁化ベクトルが徐々に変化していく様子がよく分かるように工夫されている。黒丸が水平面図(上が西、下が東、右が北、左が南)、白丸が南北鉛直図(上が上方、下が下方、右が北、左が南)を表している。白丸の横に記した数字は交流消磁磁場の強度で、単位は mT (ミリテスラ) で表してある。*01-02* の試料は2.5mT から30mT までの、*01-09* の試料は2.5mT から70mT までの消磁が施されている。いずれの試料も2.5mT 以的に付着した磁化は2.5mT までの交流消磁でほぼ除去されたことを示している。消磁に伴う強度変化を図示したものでは *01-02* の試料が急速に強度を減じているのに対し、*01-09* の試料は緩やかに減じていると対照的な様相を呈している。試料の磁化の安定性を示す一つの目安ともなる Median Destructive Field (磁化の強さが最初の磁化の強さの半分になる消磁磁場強度) は *01-02* で11mT、*01-09* で45mT と大きな違いを見せている。*01-09* のタイプに属する試料は他に *01-10* があるのみで *01-08* の試料

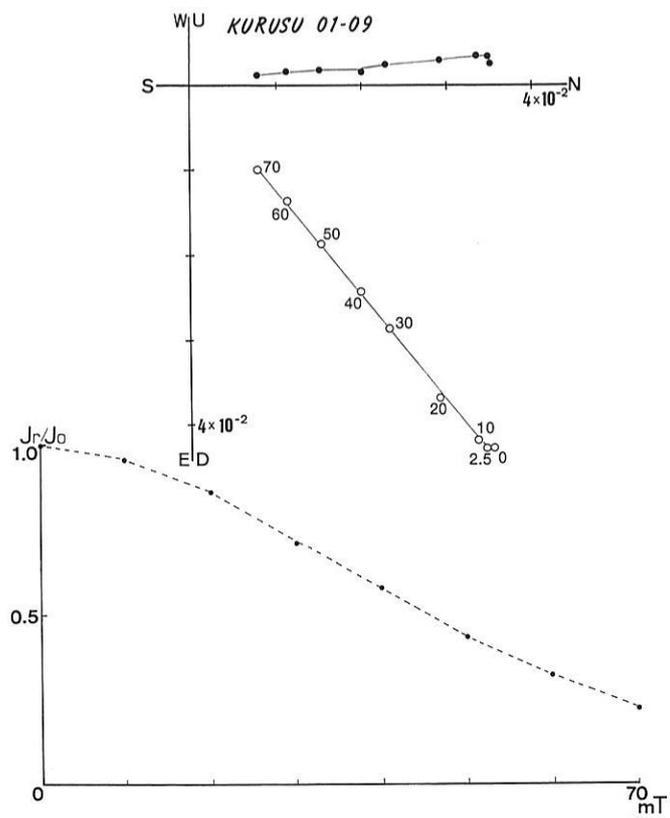
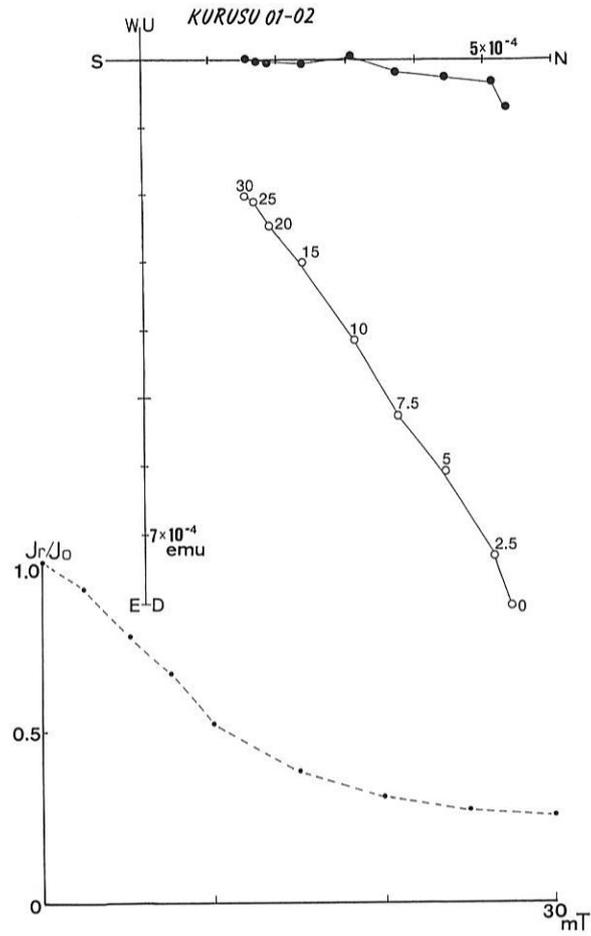


図72 窯 1 の試料の交流消磁直交消磁図

はすべて 01-02 のタイプであった。09 および 10 の試料がより信頼のおける磁化を獲得したであろうことはその獲得した残留磁化強度の強さが二桁に近い強さをもっていることから伺われる。10個の試料について測定された消磁前後の残留磁化方向の比較が表 6 に示されている。消磁の前後の磁化方向に大きな差異はみられず、平均値の計算をしたときの95%信頼角の値が2度と小さく、磁化方向のまとまりも極めてよく、信頼度の高いデータが得られたといえる。

表 6 窯 1 の試料の残留磁化測定結果

スペシメン 番号	N R M 強度 ($\times 10^{-5}$ emu/g)	交流消磁前の磁化方向		交流消磁後の磁化方向	
		偏角 ($^{\circ}$ E)	伏角 ($^{\circ}$)	偏角 ($^{\circ}$ E)	伏角 ($^{\circ}$)
KURUSU 01-01	2.0	- 8.4	60.6	- 5.3	57.6
-02	1.3	9.2	56.4	4.3	55.0
-03	3.6	-10.1	53.3	-11.5	51.0
-04	1.6	- 1.4	58.1	- 3.0	56.2
-05	30	- 9.2	57.1	- 8.7	56.6
-06	5.6	-11.5	55.0	- 5.3	53.5
-07	2.5	- 4.5	56.2	- 4.7	52.7
-08	15	- 9.7	55.4	-11.0	54.6
-09	75	- 4.1	50.1	- 4.4	50.5
-10	110	-12.1	51.5	- 9.6	52.1
平均 N=10		- 6.3 \pm 2.8	55.5 \pm 2.8	- 6.0 \pm 2.2	54.1 \pm 2.2

6. 考察

交流消磁によって二次磁化を除去し、分離された初成磁化方向の結果は、偏角が西偏 6.0° で伏角が 54.1° 、95%信頼角が 2.2° であることを示している。試料の採取はクリノコンパスを使用して行われたものであるため、得られた偏角値は磁北に対するものとなっている。従って真北からの偏角値を求めるためには試料採取地の地磁気偏角値(-6.7°)で補正する必要がある。補正後の偏角値は西偏 12.7° となる。

図73は、現在までに西南日本各地の考古地磁気測定から得られた過去二千年にわたる考古地磁気永年変化曲線(前中、1997)で、今回の測定値を順次当てはめて走査してみると以下ようになる。

図73から偏角が($-12.7^{\circ} \pm 2.2^{\circ}$)、伏角が($54.1^{\circ} \pm 2.2^{\circ}$)という値を示す年代を走査していく。偏角が 10° 以上の大きな西偏を示すということで A.D.1050年~A.D.800年前後、さらに伏角の値が 54° 前後の値を示すということで最適確な年代として A.D.1000年という年代が浮かび上がってくる。栗栖 1 の試料は記述したように最も信頼度の高いデータを提供しており、この推定年代は確信の高いものとなっている。

参考文献

Fisher, R.A. (1953) : Dispersion on a sphere, *Proceed. Roy. Soc. London*, A217, 295-305.

前中一晃 (1997) : 考古地磁気永年変化曲線の作成、古文化論叢、65-71.

森永速男、井口博夫、山下秀樹、久保弘幸、藤田淳、安川克己(1989) : 古地磁気的手法による先土器遺跡の炉址検出法の開発とその有効性、第四紀研究、第28巻3号、171-183.

Zijderveld, J.D.A. (1967) : A.C. Demagnetization of Rocks : Analysis of results. in *Methods in Paleomagnetism*, edited by D.W. Collinson et al., 254-286., Elsevier.

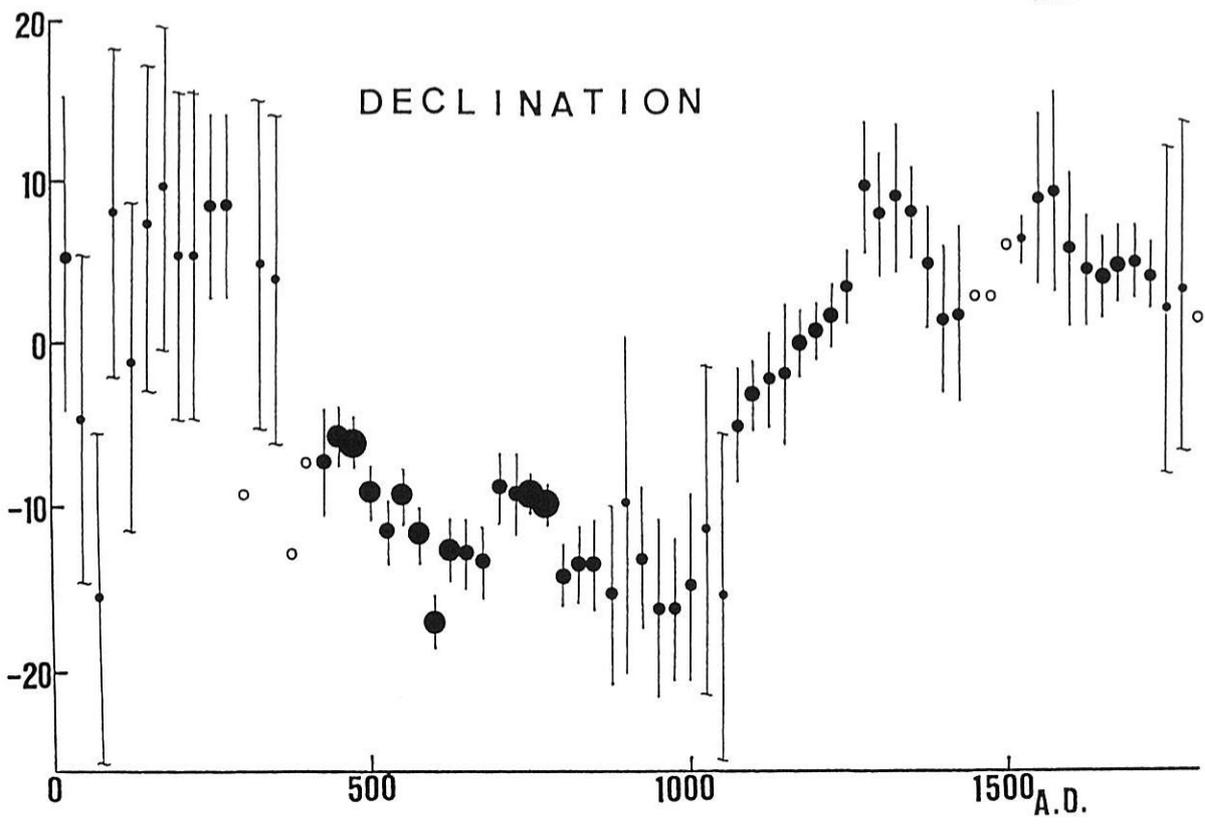
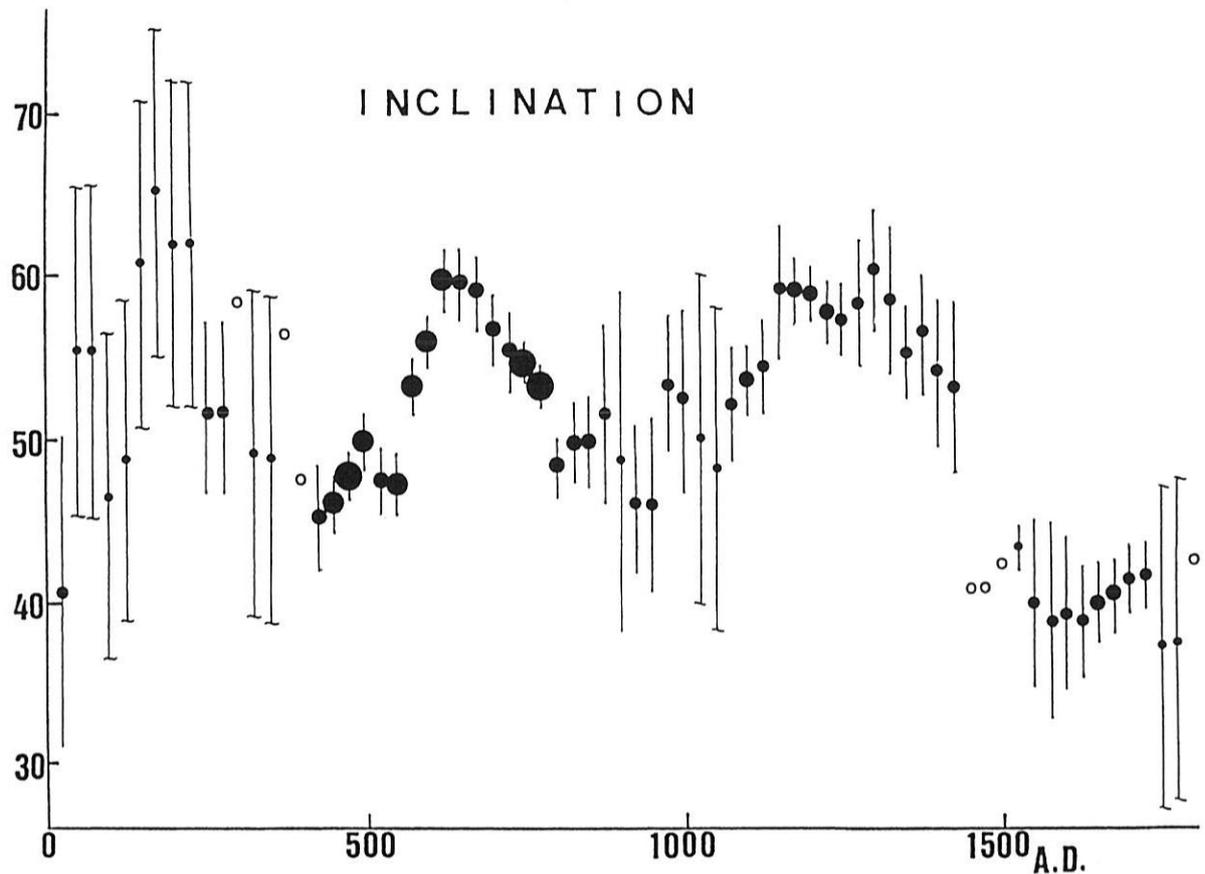


図73 西南日本の永年変化曲線

第5節 窯1・焼土坑41の放射性炭素年代測定

1. 報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C 年代測定値

試料の14C/12C 比から、単純に現在 (1950年 AD) から何年前 (BP) かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

補正14C age (y BP) : 補正14C 年代値

試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して資料の炭素の同位体分別を知り、14C/12C の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

13C (permil) :

試料の測定14C/12C 比を測定するための13C/12C 比。

この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表現する。

$$13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C) [\text{試料}] - (13C/12C) [\text{標準}] \times 1000}{(13C/12C) [\text{標準}]}$$

ここで、13C/12C [標準]=0.0112372である。

暦年代 :

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14C の測定、サンゴの U-Th 年代と14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (// INTCAL98 Radiocarbon Age Callbration // Stuiver

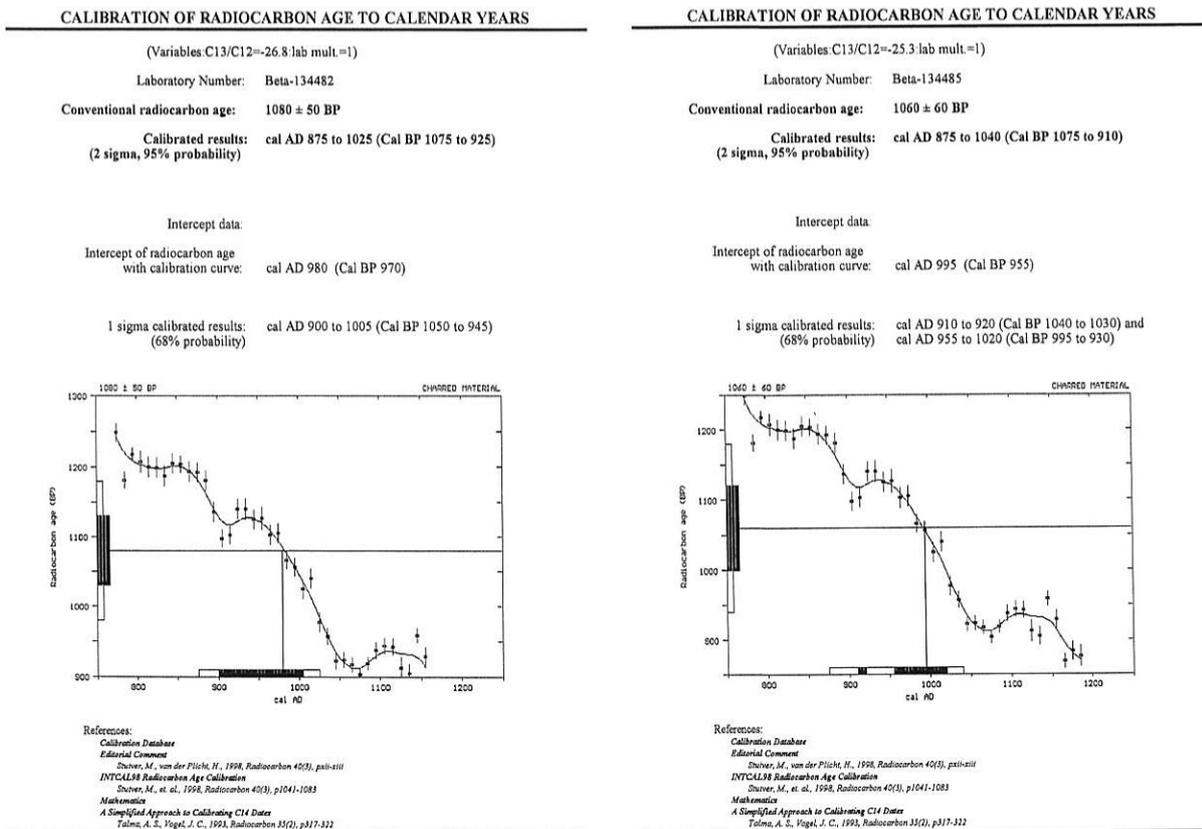


図74 カーボン年代測定結果

et al,1998,Radiocarbon 40 (3)) により約19,000年までの換算が可能となった。※

※但し、10000yBP 以前のデータは未だ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

2. 測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS：加速器質量分析

Radiometric：液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調整・その他：資料の前処理、調整などの情報

前処理 acid-alkali-acid：酸-アルカリ-酸洗浄

acid washes：酸洗浄

acid etch：酸によるエッチング

none：未処理

調整、その他

Bulk-Low Carbon Material：低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction：骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction：木材のセルロース抽出

Extended Counting：Radiometric による測定の際、測定時間を延長する。

分析機関：BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, Fl.33155, U.S.A

3. C14年代測定結果

試料名	試料データ	C14年代 (y BP) (Measured C14 age)	13C (permil)	補正 C14年代 (y BP) (Conventional C14 age)
(1215) KRS-B-KA1 窯 1	Beta-134482	1110±60	-26.8	1080±50
(1216) KRS-B-KA2 焼土坑41	Bate-134485	1060±60	-25.3	1060±60

測定方法、期間 : radiometric-standard

試料種、前処理など : charred material acid-alkali-acid

4. 暦年代

遺構名	試料名	試料データ	暦年代
窯 1	KRS-B-KA1	Beta-134482	AD 875 to 1025
焼土坑41	KRS-B-KA2	Beta-134485	AD 875 to 1040

第7章 総括

第1節 佐保栗栖山砦跡の調査成果

佐保栗栖山砦跡は「砦」と呼称するよりも「山城」と言うべき規模を有するものであることが明らかとなった。また、全面発掘調査により、曲輪同士の連絡機能が明確になり、様々な工夫がみられる注目すべき貴重な調査例となった。

1. 構造・変遷

北斜面を重要視した立地と構造

砦跡は自然の要害性の高い地形を選んで築いている。その中で清坂街道の枝道と考えられる砦跡北斜面の通路3に接しており、それを意識するように曲輪1平坦面の北面には土塁が築かれている。通路3の城外から砦へ入る経路の通路4は曲輪2へ登りきる地点で屈曲し、かつ、両斜面には石積を設け、堅固にしている。その一方、南斜面には曲輪9に石積を設けているように、南方向に対して全く意識をしていないわけではない。通路3を東へ進むと国見峠へ至り、当時の重要な街道のひとつである丹波と大坂を結ぶ清坂街道と接続している。当砦跡が清坂街道の枝道の通路3に面しており、この枝道の重要性、また、反対に当砦の重要性が伺われる。通路3は西へ進むと麓へ降り、茨木川にたどり着く。

土壁を有した建物

曲輪1・3から礎石建物、曲輪2から掘立柱建物が検出された。曲輪1の礎石建物は土壁を有していたと考えられるが、瓦葺きではない。土壁の出土量からいずれかの面のみ土壁であったことも考えられる。土壁の平均的な厚みは約3cmを測り、内部には木舞が観察された。

曲輪1から曲輪3への主郭の変遷

主要曲輪である曲輪1～3のうち、主郭は高所にある曲輪1あるいは曲輪3が想定される。遺構変遷で述べたように古段階では曲輪1を中心とした単郭の構造が想定され、新段階において曲輪1～3が形成され、石段を有する通路7・8がある曲輪3が主郭となったという変化が考えられる。このような変遷が推定されるが、痕跡として現れなかった遺構もあると思われ、明瞭な変遷をたどることはできなかった。また、曲輪1と3が並列した構造時には曲輪3には通路が2か所あり、かつ、周りには帯曲輪・通路が巡り、曲輪3を中心とした求心性が認められる。よって曲輪3が主郭と位置づけられよう。

曲輪4・7・11の評価

豎堀3の存在により、豎堀3より南西方向の曲輪の改変が考えられた。検出状況では曲輪4と7に高低差がほとんどなく、その間には土塁3があり、その必要性が不明瞭である。また、曲輪4・11の南側斜面は当砦跡の中で最も多量に盛土している箇所である。なぜ、それほどまでの平坦面を確保する必要がでてきたのか、検討を要するところである。曲輪7・11は平坦面がなくなだらかな斜面となっており、曲輪4も南半分は傾斜している。出土遺物も極端に少量である。この状況は造成が途中であり、そのまま、当砦跡が放棄されたことを示していると考えられる。

先端部曲輪12～14の存在

西端の曲輪12～14の小規模曲輪は平坦面があり、曲輪4・7・11と違い、完成した形になっている。西端に位置する曲輪14は窪地状になっており、いわゆる「武士隠し」とも考えられる。

出入口1の構造と時期

通路4から曲輪2へ至る地点に出入口1がある。その構造は砦への進入通路に「折れ」があり、出入口に密接に結びついた固有の空間を持たない段階のタイプである。当砦跡の出入口1は16世紀中葉に該当させることができるものと思われる。現状の曲輪1～3を中心とした形態になったのが、この時期と推定される。

石積の構造と時期

曲輪の斜面には石積が使用されていた。石積は曲輪平坦面の高さまで積み上げたものではないと推定でき、平面的にも部分的なものである。石材自体は基本的に加工はせず、小口を外側に向け、比較的大きな石を基底部に設置している。石材を安定させるため、はめ石を置くが、裏込めの栗石はない。「石垣」と呼称するものではない。このような特徴も16世紀中葉の特徴である。

切土・盛土（普請）の確認

今回の調査で注目すべき成果として、切土・盛土の城の普請に関する項目がある。今までの表面観察による縄張り研究では、切土・盛土造成という築城における重要な工程のひとつである普請（土木工事）は確認できなかった。どの曲輪にどれだけの大きさの平坦面を必要とし、そのための労力を確認できた。北斜面は自然の急斜面をそのまま利用し、南斜面に盛土をすることにより、平坦面を確保していることが明らかになった。曲輪3とその周辺的重要性が伺われる。

出土遺物の特徴と出土地点の曲輪の性格

供膳具の土師器皿が多量に出土し、また、調理具、貯蔵具も少なからず出土しており、砦内である程度の生活が営まれていたことが確認できた。遺物の出土地点の様相から曲輪2・5が居住空間を兼ね備えた曲輪であり、曲輪2では仏花瓶などの出土より儀礼的な空間としても使用されていた可能性が考えられる。曲輪に機能分担があり、防御的要素と生活的要素を合わせ持っていることが明らかになった。

佐保栗栖山砦の存続期間

出土遺物からは15世紀末から16世紀中葉までの期間が考えられ、出入口1の構造、各石積の使用状況、礎石建物、瓦の不使用方法から、現状の構造となって、放棄されたのが16世紀中葉の新段階であると考えられる¹⁾。礎石建物や斜面の石積は短期的な存続を考えたものではなく、また、遺構の変遷も確認されたところから、15世紀末或いは16世紀前葉に築城され、16世紀中葉に破却されるという存続期間を推定する。

2. 築城主体について

全国の中世山城の中には地誌、郡志、地元の伝承に収録され、城主等の名前が確認できる例があるが、佐保栗栖山砦跡ではそのような記録は残っていない。

当砦跡は大規模な山城ではないが、在地集落在住者である小領主が築いた城としては規模の大きさや構造面から考えにくい。もう少し強力な権力が介在したと考えるべきではないかと思われる。村落に密着した在地支配の拠点として築城されたのではなく、何らかの軍事緊張に伴って築城されたことが推定される。近くには佐保城がありながらも異なったこの場所に栗栖山砦を築城している。その意義は大きいものであろう。

但し、変遷で述べたように曲輪1を中心とした小規模の単郭山城であった古段階の時期を想定するならば、小領主、土豪の城郭として当初は機能していたことも考えておかなければならない。

周辺の歴史的状況や今回の考古学的調査により明らかになった築城年代から佐保栗栖山の築城主体について、少しでも近づいてみることにする。

佐保栗栖山砦跡の立地は、茨木川の左岸、尾根先端部に位置する。砦の北斜面の通路3を東へ行くと清坂街道に接続し、国見峠にあたる。清坂街道は南北に伸びる大坂と丹波を結ぶ重要な街道であり、通路3は東西に伸びるその枝道として存在していた。この立地からこれらの街道を押さえるがために築城されたことが考えられる。

周辺には当該期の山城が多数存在していたことが確認されている(図7)。当時の重要な山城のひとつである芥川山城は佐保栗栖山砦跡を直接見通すことはできないが、近接した位置にあり、係わりは無視できない。芥川山城に関わる人名に細川高国、能勢頼則、細川晴元、三好長慶、薬師寺与一、芥川孫十郎、織田信長等をあげることができる。

佐保栗栖山砦跡の築城時の15世紀末或いは16世紀前葉のこの地域は能勢氏や高山氏が支配していた。16世紀中葉には三好長慶が摂津を掌握し、東側に位置する芥川山城にはいり、一時期は畿内の中枢として機能していた時期があった。16世紀後葉には織田信長が北摂に侵攻し、平定している。その頃に佐保栗栖山砦跡は機能を停止したものと考えられる。

佐保栗栖山砦跡は古文書等にその名前は出現しない。しかしながら、16世紀後葉の信長摂津侵攻について、『信長公記』の中で天正6年(1578)11月「大田の郷北の山に御取出」の普請の記事がある²⁾。これを佐保栗栖山砦跡であると想定することも一案とできるのであるが、やや距離が離れすぎており、その確証となるものはなく、検討を要するところである³⁾。

以上のように当時の勢力関係を記したが、佐保栗栖山砦跡の主体者を確定するには至らず、より検討が必要なものと考えている。なお、歴史的な流れについては第2章第3節を参照していただきたい。

3. 最後に

以上のように佐保栗栖山砦跡は戦国期に拡がった防御技術を各所に積極的に活用していることがわかった。中世山城は築城主体・戦闘方法・社会情勢などの変化の中で、城自体にも様々な機能が求められ、それに応じて構造と共に著しく多様化をとげていった。佐保栗栖山砦跡も半世紀に近い存続の中で様々な変化をしたことが明らかになった。

今回の発掘調査では盛土部分をほぼ全面的に調査することができ、「普請」部分の多大な成果をあげることができた。地表面観察の縄張り図と発掘による結果の違いがわかり、さらに出土遺物の分布から曲輪の性格が導かれた。今後の山城の発掘調査において新たな視点での検討を行う材料を提供することができたといえよう⁴⁾。

佐保栗栖山砦跡の遺構・遺物から築城主体の権力構造の特色を導き出し、地域史・在地構造を分析し、さらに、一国以上の規模からもその存在について検討しなければならないのだが、十分な検討をすることまでに至らなかった。

註

1) 村田修三氏・千田嘉博氏の両者より永禄年間(1558~1570)の織豊期に至る前の構造をしていることを御教示いただいた。

石積については村田が「永禄年間1558~1570を境に、特に畿内周辺から西国にかけて急速に石垣の多用が目立つ」としている。

村田修三 1981「中世城郭の縄張り」『日本城郭体系別巻I』 新人物往来社

2) 『信長公記』奥野高広・岩沢憲彦校注 巻11 1969 角川書店

3) 「大田の郷北の山に御取出」を積極的に佐保栗栖山砦跡と結び付ける意見もある。

島野 稜 2000『佐保栗栖山砦の一考察』 私家本

4) 山上雅弘が普請を重要視した発掘調査の必要性を唱えている。

山上雅弘 1992「西日本における中世城館跡調査」『考古学ジャーナルNo.353特集・中世城館跡』

第2節 佐保栗栖山砦跡以前の調査成果

砦跡の曲輪8の谷筋斜面から炭窯と考えられる窯が2基、曲輪3の南辺斜面から焼土坑が1基検出された。

いずれも砦跡の下層から検出されており、砦の時期以前の遺構であることが確認された。出土遺物はごく少量であるが、10世紀に相当する土器が出土しており、これらの遺構の時期にあてることができるものと考えられる。

また、焼土坑41は、土師器皿が1点、人頭大の石が2点出土しており、墓としての性格も考えておかなければならないところである。

時期をより正確に知るために考古地磁気年代測定と放射性炭素年代測定をおこなった。

考古地磁気年代測定では、窯1はA.D.1050年～A.D.800年前後、さらに正確な年代としてA.D.1000年という年代を示している。放射性炭素年代測定では、窯1はA.D.875～A.D.1025、焼土坑はA.D.875～A.D.1040の年代を示している。

出土遺物の時期、年代測定における時期のいずれも、近似値であり、双方共、信頼度が大きいことが確認できた。

佐保栗栖山砦跡の位置に10世紀には、人の行動が及んでいたことが明らかになった。

付章 佐保栗栖山砦の縄張り と 遺構

村田修三

佐保栗栖山砦は開発によって消滅することになったが、徹底的な発掘調査のおかげで多くの知見を我々に残してくれた。それは土木技術面から縄張り・立地に関わるものまで多岐にわたっている。

そのうち全国的にも初めて確認されたと思われる曲輪造成技術に関わる事実は、曲輪11下面の地山刻み込みである。開発覚悟の全掘方針ではあっても、普通はここまではしないという最後のダメ押しの発掘で、私は現物を見る機会がなかったが、写真を送って頂いて驚いた。土層断面28(図50・75)のように、地山に階段状に刻みを入れて、その上に盛土をして曲輪11を造成していたのである。盛土がずり落ちないようにする工夫だと思われる。後から土層断面図を見せてもらってわかったことだが、この部分の盛土の下半分は版築が行われているようである。古代では版築は珍しくないが、中世城郭では稀である。

堀切り延長の豎堀の構造が発掘によって確認されたのも成果の一つである。城域の東を限る堀切りの南側が豎堀1、北側が豎堀2となって、山腹を流れ下っている。そのうち南側の豎堀1は外側に盛土して土塁を築いている。同じ形は大和の十市氏関連の多武峰城塞群や穴師山などにある。私はかつて、空堀に対して土塁は内側に、という原則に逆行するが、尾根の鞍部に下る手前に堀切りを設けると、外側が浅くなるので、深さを確保するために外側に盛る、という説明を試みたことがある(拙稿「中世城郭の縄張り」『日本城郭体系・別巻1 城郭研究入門』1981 新人物往来社)。この城の場合は尾根の鞍部の凹みは明瞭ではないので、十市氏の例をそのまま適用するのは難しいが、応用はできる。ヒントは、外側土塁が南側にはあるが北側にはない、という点である。北側は道を渡さねばならないという事情があるが、それよりも山腹の地形の違いに注意すべきである。堀切り地点から尾根筋がカーブするので、山腹での対外高低差は、南側は下降の、北側は上昇の効果を生じている。だから南側だけ外側土塁の手法を採用したわけである。このような理屈に手慣れた様子は、1560年代前半の十市氏と同じレベルとみてよい。縄張りの編年作業に使える事例である。

これは地表観察からも予想できた話であるが、次に、掘らなければ絶対に分からなかった縄張りの秘密といってよい発見例をいくつか引用させて頂く。

曲輪2の虎口の両脇から石垣が検出された。櫓台状の壇を迫り出して設け、通路が二度折れするように仕向けたのである。急坂ではあるが、柵形と同じ効果を得ている。そして曲輪2に上がり付いた場所のすぐ前に、落ち込み1が確認された。地表観察でもこの場所は浅い窪地になっていたが、発掘によって意図的に掘り込まれた落ち込みであることがわかった。いびつな形なので当初はその意図が分からなかったが、虎口の念入りな作りが確認されるにつれ、この落ち込みも相当な工夫の産物であるに違いないと思うようになった。後述する謎の曲輪5に至る通路10の始点や曲輪1およびそれへの通路との位置関係を考えていたら、イメージが湧いてきた。曲輪1とこの落ち込みが連動して、曲輪2の動線を限定しているようである。まず曲輪2に上がり込んだ所に狭い虎口空間が特定できる。そこからの主要な動線は曲輪1に背を向けて落ち込みを迂回するルート、副次的な動線は曲輪1の西端の切岸とこの落ち込みに挟まれた狭い余地を南行するルートである。いずれも曲輪1の鼻先から厳しく監視(把握)されている。要するにこの落ち込みは虎口からの動きを規制するための障害物の役割を果たしていたのではないだろうか。だとすると、規模こそ違え、姫路城二の丸の三国堀に相当する。曲輪1の西端の迫り出しの厳しさも、この関係で説明しやすくなる。

この落ち込み1の前空間と曲輪1の間に、古くは空堀が存在したことがわかった(図64 曲輪1-A期)。その時期には、前述のような念入りな進入ルートもなく、曲輪2の部分が今より高い尾根であったこと、そこから曲輪1が切断されて孤立していたことがわかった。そのころの本城は眼下の道を監視する軍事機能しか持たない閉鎖的な砦だと思われる。それが改修されて、曲輪2が造成され(=空堀が埋められ)、前述のような虎口と進入ルートの工夫がなされ、道との関係を積極的に追求するような性格の城に変質したのである。外と出入りする、開くということと、外と戦う、閉ざすということとの矛

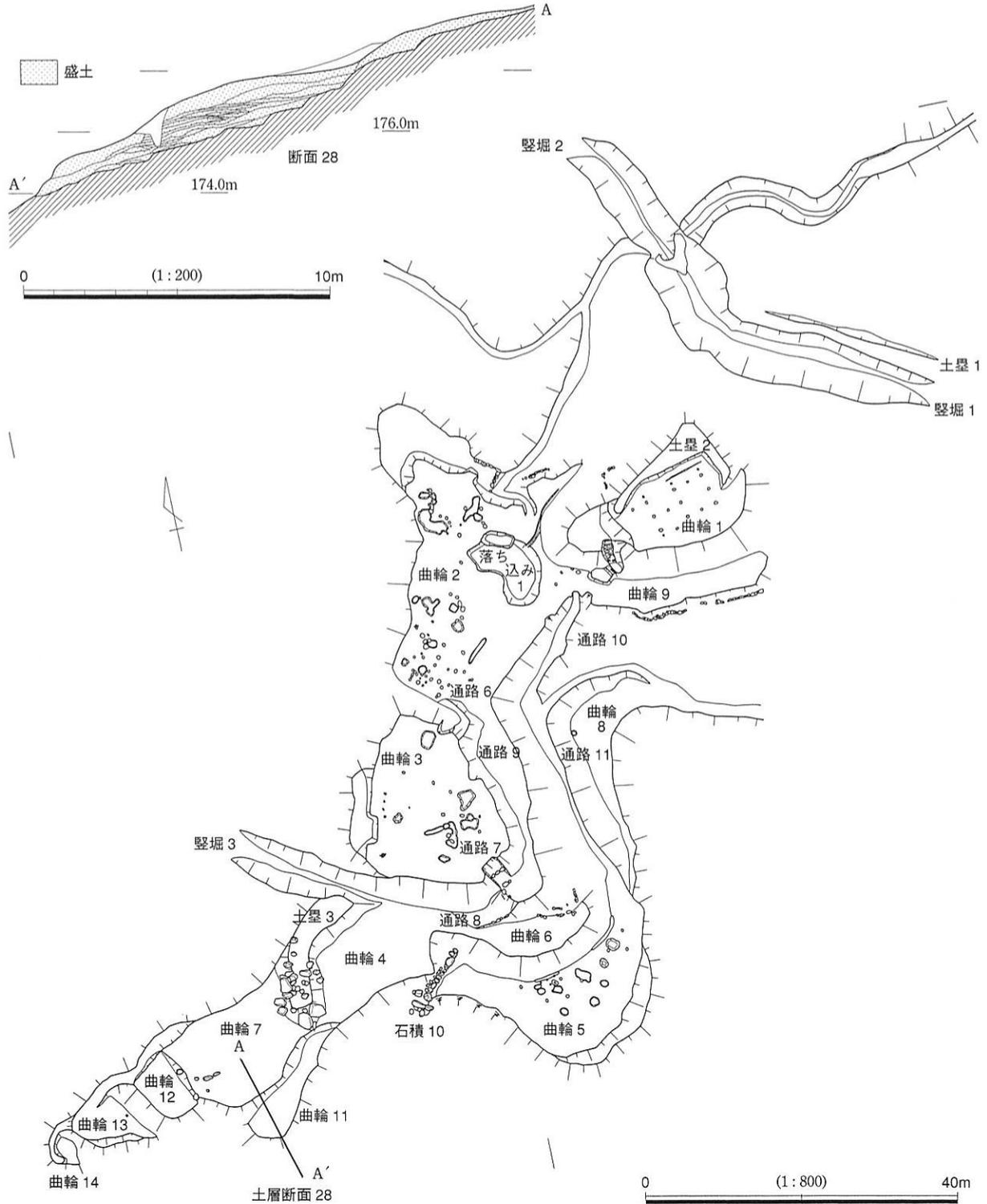


図75 佐保栗栖山砦跡全体図

盾を解決するために、虎口の工夫がなされるのである。

同様の变化は曲輪3の西下においても確認された。曲輪3と土塁3の間は土橋状の小鞍部で繋がっているが、古くは豎堀3の延長の空堀によって断ち切られていたのである(図64 曲輪3-A期)。曲輪4が造成されていなかったため、土塁3も存在せず、一体の尾根だった。そういう西方尾根を空堀で切断して曲輪3が出来上がっていた。それを交えて、曲輪4を造成し、削り取った土で空堀を埋めたのである。単に曲輪3の西に曲輪4を連立させるだけなら空堀を埋める必要はない。曲輪4を曲輪3と密接な関係において作り上げる必要があったのである。そのことを如実に物語るのが通路7・8の念入りな作りである。とくに通路7では石階段が出土して驚かされた。通路8の幅の広さも注目に値する。かなりの重要人物がこの通路を上下したにちがいない。だとすると妙なことに気づく。そもそも本城の虎口は前述した曲輪2の虎口だけである。曲輪3へ入る正規のルートは曲輪2から上がってくる通路6で、次いで通路9を使う迂回ルートである。それらより立派なルートとして曲輪4から上がる通路8・通路7が確認されたのである。しかもその曲輪4へはこのルートを使って曲輪3から逆行するしかない。何かとんでもない堂々巡りをしているような妙な気分になる。

この謎は曲輪4の東下の曲輪5の奇妙な位置と連動しているようである。前に曲輪2で問題にした落ち込み1の裏の空間から通路10・11が分岐して問題の曲輪5につないでいる。そもそも落ち込み1と曲輪1でルートを挟み込む工夫をせまった要因として、この曲輪5に至る通路の限定という事情があったのではないと思う。この通路は異常に残りが良かった。城道としてしっかり手当がされていながら、城の中核部である曲輪2・3を経由せずに曲輪5に導いてくれる。曲輪5は城内でありながら遠ざけられた存在である。そしてその奥は異様な石積10で行き止まりになっている。こういう扱いの曲輪はここだけである。近世城郭では、こういう位置の曲輪は人質曲輪と呼ばれることがある。中世城郭では人質曲輪の確認例はない。それどころか人質曲輪のような機能の限定をすることが妥当かどうか疑問視されている。曲輪5の出土遺物の特徴からすると貯蔵庫の可能性があるようだ。

曲輪5の機能については今は保留せざるをえないが、形態としては行き止まりの曲輪である。行き止まりを明示する石積10は、本城内で出土した他の石積と異なる。他は曲輪造成上の必要から土留めとして築かれたものだが、石積10は曲輪4との段差をことさら強調するために設けられたものである。それでは曲輪5から曲輪4へは金輪際上がれないのか。近世城郭ならずとも建物を介して連絡した事例が確認されるようになってきた。曲輪5の石積寄りからは建物跡は検出されなかったが、特別な手立てでここを越えた可能性を否定することはできない。ここまでこだわるのは、そうでもしないと曲輪4から曲輪3への通路が本城内で最も儀礼的に整備されたルートであることの理由を説明できないからである。

曲輪3は曲輪1と両頭合い並ぶ関係に立っている。曲輪1には本城中最も整った建物1が検出されたが、この建物は土塁2(檜台)とセットになった軍事性の高いものである。それに対して曲輪3は、建物の残り方は悪いが、通路の仕上げの丁寧さからみると、主郭と評価することができる。ところがその評価の主要因である通路が曲輪4を介して曲輪5と結んでいる。このことから本城全体の性格を問うと、人質曲輪の可能性のある謎の曲輪5を秘匿=重用することを任務の一つに負わされて、改修されたのではないだろうか。

本城は周辺との地理的な関係から見ると、高山氏が淀川筋に進出する際の繋ぎ城の可能性が高いが、それも細川・三好・松永等上部権力との関わりなしには考えられない。複雑な畿内政治に組み込まれる中で、特異な縄張りが必要になったのであろう。

報告書掲載遺物一覧・遺構一覧

表7 掲載遺物一覧(1)

図番号	写真番号	器種	曲輪	遺情・層位	特徴	口径	器高	時期	地区		
52	1	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	内面に粗いハケメ後ナデ	6.5	1.3	16中後	A17-a2		
52	2	35	1	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる。	6.4	1.6	16中後	A17-a2
52	3	35	2	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる。	6.9	1.3	16中後	A17-a2
52	4			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	体部外反、口縁端部部分的に丸くおさめる。灯明皿	5.7	1.5	16前葉	A17-a2
52	5	35	3	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部に突出部。口縁端部が丸みを帯びる。灯明皿	7.4	1.7	15末16前	A17-a2
52	6			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	口縁部を強くナデ、内面に外傾する平坦面を持つ。灯明皿	8.8	-	16前中	A17-a3
52	7	35	4	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに凹部あり。灯明皿	8.9	1.7	16前中	A17-a4
52	8			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	体部外面中位の指圧痕不鮮明	8.8	1.4	16前中	A17-a3
52	9			土師器小皿	曲輪1	平坦面堆積土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに凹部あり	8.2	1.6	16前半	A17-a2
52	10			土師器小皿	曲輪1	土塁2流出土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに凹部あり	9.0	1.8	16前半	O17-j2
52	11			土師器小皿	曲輪1	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。灯明皿	9.9	1.8	16中後	A17-a3
52	12			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部と体部明瞭。口縁端部やや外傾	10.4	2.3	15末16前	A17-a3
52	13			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる。口縁端部外面横ナデ不明瞭	11.8	2.4	15末16前	A17-a2
52	14			土師器小皿	曲輪1	土塁2流出土	体部まっすぐに伸びる。灯明皿	12.0	1.8	16中葉	A17-a2
52	15	35	5	土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	体部外面に粗いハケメ後、ナデ。内面底部と体部に強いナデ	12.1	2.0	16中後	A17-a2
52	16			土師器小皿	曲輪1	土塁2流出土	体部上半部やや外反気味	13.2	-	15末16前	A17-a2
52	17			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	12.6	2.0	16中葉	A17-a3
52	18			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	口縁端部やや外反気味につまみあげる	13.5	2.0	16前中	A17-a3
52	19			土師器小皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	底部と体部明瞭、口縁部外面強いナデによる凹線	13.9	1.8	16中後	A17-a3
52	20			土師器小皿	曲輪1	土塁2流出土	口縁端部丸く仕上げる。灯明皿	13.8	1.6	16中葉	A17-a2
52	21			土師器小皿	曲輪1	平坦面堆積土	内面底部際に強いナデ	14.4	2.0	16	A17-a3
52	22			土師器小皿	曲輪1	通路5堆積土	口縁部外面強いナデによる凹部。端部上方ややつまみ上げ	12.1	-	16前葉	A17-a4
52	23			土師器小皿	曲輪1	西斜面流出土	口縁端部、内面にかすかに凹部あり。 内面底部と体部に強いナデ。灯明皿	8.5	-	16前半	A17-a4
52	24			土師器小皿	曲輪1	南斜面流出土	口縁端部やや外反気味	9.1	1.8	15末16前	A17-b2,b3
52	25			土師器小皿	曲輪1	南斜面流出土	底部と体部明瞭、口縁端部内面にかすかに凹部	16.0	2.2	16中後	A17-b3
52	26			土師器小皿	曲輪1	南斜面流出土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに凹部あり。内面	14.2	-	16中後	A17-b3
52	27			白磁皿	曲輪1	平坦面堆積土	端反り。口縁端部丸く仕上げる。端部淡黄色		16		A17-a3
52	28			白磁皿	曲輪1	建物1平坦面堆積土	端反り。口縁端部丸く仕上げる。端部淡黄色。 28~30は同一個体の可能性大		16		A17-a3
52	29			白磁皿	曲輪1	平坦面堆積土	高台畳付け露胎。28~30は同一個体の可能性大		16		A17-a4
52	30			白磁皿	曲輪1	平坦面堆積土	高台畳付け露胎。28~30は同一個体の可能性大		16		A17-a4
52	31			瀬戸美濃天 目茶碗	曲輪1	北斜面流出土	端部は外面に沈線が走り、つまみ気味。古瀬戸後IV新		15後葉		O17-j3
52	32			青磁碗	曲輪1	平坦面堆積土	口縁端部外面に1条の沈線		16		A17-a3
52	33			瀬戸美濃碗	曲輪1	北斜面流出土	体部はやや内湾しまっすぐ立ちあがり、端部を丸くおさめる。 大窯第1段階		15末16初		O17-j4
52	34			瀬戸美濃碗	曲輪1	北斜面流出土	口縁端部やや外方へつまむ。外面に調整の凹凸。古瀬戸後III		15前中		O17-j4
52	35			瓦器火鉢	曲輪1	平坦面堆積土	外面ミガキ。内面ケズリ		15~16		A17-a3
52	36			砥石	曲輪1	平坦面堆積土	砂岩。四面使用		-		A17-a3
52	37			備前甕	曲輪1・曲輪 2・3・5、 堀堀 1	平坦面堆積土、南斜面・東斜面流出土、 落込2・北斜面	口縁部を外へ折り曲げ、下半部に凹線。推定直径54.0cm		16前中		A17-a3,b3,b5,c6, h6,A17-j1
52	38	36	2	丹波壺	曲輪1・2	西斜面流出土・平坦面堆積土	体部内外面に三段造りの痕跡。外反する口縁はやや尖り気味。 肩部2か所にヘラ刻き		16前半		A17-a4,a5,b4,b6
52	39	36	1	備前德利	曲輪1・2	南斜面流出土・北東斜面流出土	三段造り。		16		O17-j5・A17-b3
53	1			土師器小皿	曲輪2	落込2	底部の器壁薄い	5.4	1.1	16中後	A17-b5
53	2			土師器小皿	曲輪2	土坑5	口縁端部やや外反気味	13.4		16前中	A17-a5
53	3			土師器小皿	曲輪2	土坑7	口縁端部内面にわずかに平坦面	11.8	1.8	16中後	A17-a5
53	4			青磁碗	曲輪2	土坑13	龍泉窯。内外面淡黄緑色。胎土淡褐色			16前半	A17-b6
53	5			土師器小皿	曲輪2	ビット51	口縁端部外面強くナデ	3.9	1.6	16中後	A17-b5
53	6	35	12	染付皿	曲輪2	建物2ビット74	高台畳付無軸			15後~16中	A17-c6
53	7			瓦器播鉢	曲輪2	ビット51、落込2、 堆積土	大和地方産。片口。内面使用痕			15後~16初	O17-j5・A17-a5,b6

表8 掲載遺物一覧(2)

図番号	写真番号	器種	曲輪	遺構・層位	特徴	口径	器高	時期	地区		
53	8	備前搦鉢	曲輪2	落込2	口縁部は直立し、端部は内に向く面を持つ			16前中	A17-a5		
53	9	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部内面に粗いハケメ	6.4	0.9	16中後	A17-b6		
53	10	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる	6.3	1.3	16中後	A17-a5		
53	11	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる口縁端部内湾	6.5	1.5	16中後	A17-b6		
53	12	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁部を強くナデ、内面にかすかに平坦面を持つ	6.4	1.6	16中葉	A17-a5		
53	13	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる。口縁端部内湾	6.2	1.5	16中後	A17-b6		
53	14	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。口縁端部外面ナデ不明瞭	7.0	-	16前中	A17-a5		
53	15	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部際、内湾状に立ちあがる。口縁端部内湾	6.9	1.5	16中後	A17-b6		
53	16	35	7	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部と体部明瞭。灯明皿	7.2	1.2	16中後	A17-c5
53	17	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに凹部あり。灯明皿	8.2	1.8	16中葉	A17-j5		
53	18	35	8	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部に突出部。口縁端部が丸みを帯びる	17.8	2.0	15末16前	A17-a5
53	19	35	9	土師器小皿	曲輪2	南東斜面流出土	底部体部に粗いハケメ、底部際は内湾状に立ち上がる	7.7	1.7	16中後	A17-j5
53	20	土師器小皿	曲輪2	南東斜面流出土	内面に粗いハケメ、口縁端部内湾	7.7	1.5	16中後	A17-c5		
53	21	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	内面に粗いハケメ、口縁端部内面につまみ出しによる凹部	7.9	1.9	16	A17-b6		
53	22	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。口縁端部外面ナデ不明瞭	8.3	1.9	16中後	A17-b6		
53	23	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁部を強くナデ、内面にかすかに平坦面を持つ	7.8	1.4	16後葉	A17-c5		
53	24	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	8.9	1.5	16中葉	A17-b6		
53	25	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。灯明皿	8.6	1.6	16中葉	A17-b6		
53	26	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁上半部外反し、端部内面に平坦面を持つ	9.3	-	16前中	A17-b6		
53	27	35	10	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	内面細かいハケメ後ナデ。歪み大	9.1	2.5	16中後	A17-c6
53	28	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	10.2	2.0	16前葉	A17-j5		
53	29	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁端部内面にかすかに凹部あり。灯明皿	9.0	1.7	16前中	A17-b6		
53	30	土師器小皿	曲輪2	北東斜面流出土	体部まっすぐに伸びる	10.4	1.9	16中後	O17-j5		
53	31	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部やや外傾。灯明皿	9.3	1.7	16中後	A17-b6		
53	32	35	11	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。口縁端部外面ナデ不明瞭。灯明皿	9.0	1.8	16中後	A17-c6
53	33	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	10.7	2.2	16中後	A17-b5		
53	34	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	口縁部を強くナデ、内面にかすかに平坦面を持つ	12.0		16中後	A17-b5		
53	35	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	底部と体部明瞭。体部まっすぐに伸びる。灯明皿	13.4	2.1	16中葉	A17-b6		
53	36	35	6	土師器小皿	曲輪2	平坦面堆積土	耳皿。口縁部を2方向に押しつぶす	5.4	1.6	16	A17-b6
53	37	土師器小壺	曲輪2	平坦面堆積土	調整不明			中世	A17-a5		
53	38	土師器小壺	曲輪2	平坦面堆積土	調整不明			中世	A17-a5		
53	39	36	8	瓦器仏花瓶	曲輪2	平坦面堆積土	表面の炭素飛散。上端欠損部粘土接合剥離面。地元産		15~16	O17-j5	
53	40	36	7	瓦器仏花瓶	曲輪2	平坦面堆積土	表面の炭素飛散。外面ミガキ。スタンプ文様。地元産		15~16	O17-j5	
53	41	36	3	瓦器香炉	曲輪2	平坦面堆積土	表面の炭素が飛散。スタンプ文様。地元産		15~16	A17-b6	
53	42	36	4	瓦器香炉	曲輪2	平坦面堆積土	瓦器と思われる。表面の炭素が飛散か。スタンプ文様。地元産		15~16	A17-a5	
53	43	瓦器香炉	曲輪2	平坦面堆積土	表面の炭素が飛散。同一個体よりスタンプ文様あり。地元産			15~16	A17-b5		
53	44	36	5	瓦器香炉	曲輪2	平坦面堆積土	瓦器と思われる。2次火熱のため表面の炭素が飛散か。地元産		15~16	A17-a5	
53	45	瀬戸美濃皿	曲輪2	平坦面堆積土	端反。体部内湾。全面施釉。大窯第1段階			15末16前葉	A17-a5		
53	46	青磁皿	曲輪2	北東斜面流出土	稜花皿			15~16中葉	O17-j4		
53	47	青磁皿	曲輪2	平坦面堆積土	稜花皿。高台登付と高台内露胎			15~16中葉	A17-a5		
53	48	白磁碗	曲輪2	平坦面堆積土	口縁端部外方へ丸くおさめる			16	A17-b6		
53	49	天目茶碗	曲輪2	平坦面堆積土	中国産。口縁端部外反し、くびれる			15	O17-j5		
53	50	白磁皿	曲輪2	平坦面堆積土	端反り。口縁端部丸く仕上げる。端部淡黄色			15~16	A17-a4		
53	51	白磁皿	曲輪2	平坦面堆積土	端反り。高台登付露呈。2次火熱			15~16	A17-b6		
53	52	瀬戸美濃碗	曲輪2	平坦面堆積土	丸碗。断面台形の付高台。体部外面に鈎形印花文。大窯第1段階			15末16初	A17-a5		
53	53	瀬戸美濃碗	曲輪2	平坦面堆積土	丸碗。断面方形の付高台。高台内にトチン痕。大窯第3段階			15末16前葉	O17-j5		
53	54	瀬戸美濃皿	曲輪2	平坦面堆積土	高台断面逆三角形。高さ0.1cmを測り、低い。大窯第2~3段階			15末16前葉	A17-b5		
53	55	36	9	染付皿	曲輪2	平坦面堆積土	端反		15後16前中	A17-a5	
53	56	37	2	染付皿	曲輪2	平坦面堆積土	端反。高台登付無釉		15後16前中	A17-a5	
53	57	土師器鉢	曲輪2	平坦面堆積土	口縁内面平坦			16	A17-a5		
53	58	土師器鉢	曲輪2	平坦面堆積土	口縁内面平坦			16	A17-a5		
53	59	土師器鉢	曲輪2	北東斜面流出土	口縁内面平坦			16	O17-j5		

表9 掲載遺物一覧(3)

図番号	写真番号	器種	曲輪	遺構・層位	特徴	口径	器高	時期	地区
53	60	瓦器浅鉢	曲輪2	平坦面堆積土	方形。表面の炭素が飛散か。外面ミガキ。大和系			16	A17-a5
53	61	瓦器浅鉢	曲輪2	北東斜面流出土	方形。表面の炭素が飛散。外面ミガキ。大和系			16	O17-j5
53	62	瓦器浅鉢	曲輪2	平坦面堆積土	方形。表面の炭素が飛散か。外面ミガキ。大和系			16	A17-b5
53	63	瀬戸美濃鳥形水滴	曲輪2	平坦面堆積土	鉄軸。くちばし・頭部・尻尾欠損。4本脚			15末16前	A17-b4
54	1	備前鉢	曲輪2	平坦面堆積土	底部外面未調整			15~16	A17-a5b4,,c5
54	2	備前播鉢	曲輪2	平坦面堆積土	口縁端部に内傾する面あり。口縁外面に二条の凹線			16前中	A17-b6
54	3	備前播鉢	曲輪2	平坦面堆積土	内面磨耗著しい			16前中	A17-b6
54	4	丹波播鉢	曲輪2	平坦面堆積土				中世	A17-a5,c5
54	5	備前小壺	曲輪2	北東斜面流出土	内面回転ナデの凹凸			中世	O17-j5
54	6	備前甕	曲輪2	平坦面・北東斜面流出土	刻字あり			中世	A17-c5, O17-j5
54	7	備前甕	曲輪2・3・5・通路9	平坦面堆積土・盛土	口縁外面不明瞭な凹線二条。口径59.6cm			16前中	A17-b5・d6,e4,h6
54	8	砥石	曲輪2	平坦面堆積土	砂岩。五面使用				A17-a6
55	1	土師器小皿	曲輪3	土坑17	底部際、内湾状に立ちあがる	6.9	1.5	16中後	A17-c6
55	2	瀬戸美濃皿	曲輪3	土坑17	高台内トチン痕。高台断面は頂部が丸い逆三角形。大竈第1段階			15末16前葉	A17-c6
55	3	土師器小皿	曲輪3	南東斜面流出土	内面に粗いハケメ。器壁肥厚	6.4	1.4	16中後	A17-d6
55	4	土師器小皿	曲輪3	北斜面流出土	内面に粗いハケメ。外面全面指圧痕	7.4	1.5	16中後	A17-c6
55	5	土師器小皿	曲輪3	北西斜面流出土	口縁部を強くナデ。内面にかすかに平坦面を持つ	8.6	1.6	16中	A17-d7
55	6	土師器小皿	曲輪3	北西斜面流出土	口縁端部やや内湾	10.3	1.6	16前	A17-d7
55	7	土師器小皿	曲輪3	東斜面流出土	底部と体部不明瞭。口縁端部やや外傾	9.3	1.7	16中	A17-c6
55	8	土師器小皿	曲輪3	北西斜面流出土	体部まっすぐに伸びる	9.3	2.1	16中後	A17-d7
55	9	土師器小皿	曲輪3	東斜面流出土	体部まっすぐに伸びる	12.3	1.7	16中	A17-c6
55	10	土師器小皿	曲輪3	平坦面堆積土	底部と体部明瞭。口縁端部内面にかすかに平坦面を持つ	13.6	2.0	16中後	A17-d6
55	11	土師器小皿	曲輪3	北西斜面流出土	体部まっすぐに伸びる	14.1	-	16中	A17-d6
55	12	土師器小皿	曲輪3	東斜面流出土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	15.7	-	16前半	A17-d6
55	13	土師器壺	曲輪3	東斜面流出土	体部外面ケズリ			中世	A17-d6
55	14	ミニチュア土師器羽釜	曲輪3	東斜面流出土	鈎断面三角形			中世	A17-d6
55	15	瓦器鉢	曲輪3	北西斜面流出土	口縁端部・外面ミガキ			15~16	A17-d7
55	16	丹波鉢	曲輪1・2・3・9	平坦面堆積土	口縁端部にやや内傾する凹部を有する端面			13~14	A17-a2・a5・b5・b6
55	17	備前甕	曲輪2・3・5・8	平坦面堆積土	体部外面縦線にヘラナデ。器壁8~10mmを測り、薄い			中世	A17-a5・c5・c6、d4、d5、d6・g4、g5、g6
56	1	丹波播鉢	曲輪5	集積2・平坦面堆積土	口縁端部外面凹線気味に強くナデる。片口内面下に手印			16中葉	A17-g4
56	2	石臼	曲輪5	集積2	花崗岩。4または6条を単位とする刻目			中世	A17-g5
56	3	土師器小皿	曲輪5	南西斜面流出土	外面全面指押さえ	7.1	1.1	16後葉	A17-h7
56	4	土師器小皿	曲輪5	平坦面堆積土	体部内湾	6.5	1.6	16後葉	A17-g4
56	5	土師器小皿	曲輪5	石組	口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	8.5	1.3	16中後	A17-g4
56	6	天目茶碗	曲輪5	平坦面堆積土	瀬戸美濃。輪高台			15後葉	A17-g5
56	7	染付碗	曲輪4・5	平坦面堆積土・盛土	胴部外面に芭蕉葉文。小野染付碗c群1類			15後~16中	A17-f8,h5
56	8	丹波播鉢	曲輪5	南斜面流出土	口縁端部外面凹線気味に強くナデる			16中葉	A17-h5
56	9	備前小壺	曲輪4・5・11	南斜面流出土	底部外面未調整			中世	A17-h7
56	10	備前播鉢	曲輪4・5・11	南斜面流出土	口縁部はやや内傾し、端部は内に向く面を持つ			16前葉	A17-h7
56	11	火鉢	曲輪5	土坑29	瓦器と思われる。表面の炭素飛散か。外面に2本の突帯間にスタンプ文。地元産			15~16	A17-g4
56	12	火鉢	曲輪5	平坦面堆積土	瓦器と思われる。表面の炭素飛散か。外面突帯貼り付け。突帯間にスタンプ文。地元産			15~16	A17-g5
56	13	土師器小皿	曲輪4	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部ややつまみあげる	8.6	-	16中後	A17-f8
56	14	土師器小皿	曲輪4	平坦面堆積土	口縁端部内面に凹線。端部外面強い横ナデ	12.0	-	16前半	A17-f8
56	15	瀬戸美濃皿	曲輪5	平坦面堆積土	端反皿。大竈第1段階			15末16前	A17-g4,g5
56	16	瀬戸美濃皿	曲輪5	平坦面堆積土	皿の高台部分。高台断面台形。大竈第1段階			15末16前葉	A17-g5
56	17	瀬戸美濃皿	曲輪5	平坦面堆積土	端反。体部下半から高台にかけて無施軸			15後葉	A17-g5
56	18	瀬戸美濃皿	曲輪5	平坦面堆積土	ヒダ皿。高台外面から内面無施軸。高台断面台形			15末16前葉	A17-g5
56	19	瀬戸美濃皿	曲輪5	平坦面堆積土	端反皿。高台内トチン痕。高台断面逆三角形。大竈第1段階			15末16前葉	A17-g5

表10 掲載遺物一覧(4)

図番号	写真番号	器種	曲輪	遺構・層位	特徴	口径	器高	時期	地区
57	1	土師器小皿	曲輪5	土坑26	体部内湾、口縁端部肥厚。灯明皿			16中後	A17-g4
57	2	備前甕	曲輪5、通路9	土坑26、堆積土	体部肩部に「三入」の刻字と格子文ヘラ記号。推定口径67.5cm			16前中	A17-c5,d5,e5,g4,g5
57	3	備前甕	曲輪2・5、通路9	土坑26、堆積土	体部肩部に「二石入」の刻字と格子文ヘラ記号。推定口径66.6cm			16前中	A17-c5,d5,e5,g4,g5
57	4	備前甕	曲輪3・5、通路11	土坑26・28、集石2	口縁端部外面に凹線なし。内面ヘラによるナデ。推定口径63.2cm			16前中	A17-c5,d5,e5,g5,h5
57	5	備前甕	曲輪5、通路11	土坑26・28、集石2	体部外面下から上ヘラナデ。底部外面ヘラナデ			15~16	A17-g4
58	1	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	体部肥厚。歪みあり	5.6	2.0	16中前	A17-g9
58	2	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	口縁端部強くナデ、内面に稜線あり	8.4	1.2	16前半	A17-g9
58	3	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面に凹部を持つ	9.3	1.6	16前半	A17-g10
58	4	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	口縁端部上方につまみあげる	9.9	1.2	15末	A17-g9
58	5	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	11.6	1.6	16後半	A17-g10
58	6	土師器小皿	曲輪7	平坦面堆積土	口縁端部やや外傾し、まっすぐに伸びる	11.1	-	16中	A17-g10
58	7	土師器小皿	曲輪8	平坦面堆積土	底部に突出部。体部上半外面の横ナデ不明瞭	8.0	1.5	15末16前	A17-c4
58	8	土師器小皿	曲輪8	平坦面堆積土	口縁端部やや外傾	8.8	1.7	16中	A17-c3
58	9	土師器小皿	曲輪8	南東斜面流出土	口縁端部内面にかすかに平坦面を持つ	8.6	1.8	16後半	A17-e4
58	10	土師器小皿	曲輪8	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	11.7		16中葉	A17-c3
58	11	土師器小皿	曲輪8	平坦面堆積土	体部やや内湾する	11.3	1.9	15~16	A17-c3
58	12	ミニチュア土師器壺	曲輪8	平坦面堆積土	胎土緻密。口縁外面に沈線			17か	A17-c3
58	13	土師器小皿	曲輪9	南斜面流出土	体部内湾。歪みあり	7.4	1.6	16中後	A17-b2,b3
58	14	土師器小皿	曲輪9	石積1裏込盛土	口縁端部内面に凹部を持つ	7.7	1.7	16前半	A17-b2,b3
58	15	土師器小皿	曲輪9	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	8.7	1.5	16中後	A17-b3
58	16	土師器小皿	曲輪9	南斜面流出土	体部まっすぐに伸びる。体部上半部強く横ナデ	13.4	-	16中葉	A17-b2,b3
58	17	土師器小皿	曲輪9	平坦面堆積土	耳皿。口縁部を2方向に押しつぶす	5.3	1.3	中世	A17-b1
58	18	瓦器火鉢	曲輪9	平坦面堆積土	隅部分。脚部貼り付け面斜縁、外面ミガキ			14~16	A17-b2,b3
58	19	土師器小皿	曲輪6	平坦面堆積土	口縁端部強くナデ、内面にかすかに稜線あり	8.3	-	16前中	A17-f5
58	20	土師器小皿	曲輪11	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。灯明皿	8.9	1.6	16中後	A17-g8
58	21	土師器小皿	曲輪11	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる。口縁端部やや外傾	13.4	-	16中後	A17-h10
58	22	土師器小皿	曲輪12	平坦面堆積土	体部まっすぐに伸びる	8.6	-	16前半	A17-g10
58	23	土師器小皿	曲輪10	南斜面流出土	口縁端部つまみあげ、端部内面に凹部をもつ	8.5	1.8	16前半	A17-f5
58	24	瓦器風炉	曲輪10	南斜面流出土	平面円形。門柱脚部が付着			15~16	A17-f6
58	25	土師器	通路9	堆積土	口縁端部に凹線。瓦器か			中世か	A17-e4
58	26	土師器小皿	通路9	堆積土	体部まっすぐに伸びる。口縁端部外面強くナデ	9.2	1.8	16中後	A17-e4
58	27	青磁碗	通路9	堆積土	高台畳付と高台内は露胎			15後~16中	A17-e4
58	28	染付皿	竪堀2	堆積土	端反。小野染付皿B 1群VI類			15後~16中	O17-h2
58	29	土師器小皿	竪堀3	堆積土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	12.0	1.7	16中後	A17-e8
58	30	土師器小皿	通路13	堆積土	体部まっすぐに伸びる	15.0	-	16後半	A17-f4
58	31	瀬戸美濃碗	通路4	堆積土	丸碗。体部やや内湾し、端部丸くおさめる			15末16前	O17-j4
58	32	瓦器摺鉢	通路4	堆積土	外面炭化物付着。大和産			16前半	O17-j4
59	1	土師器小皿	曲輪1	盛土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ。灯明皿	8.8	1.7	16前半	A17-a3
59	2	土師器小皿	曲輪1	盛土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面に平坦面を持つ	12.7	1.9	16中後	A17-a3
59	3	土師器小皿	曲輪3	東斜面盛土	体部まっすぐに伸びる	8.9	1.5	16中後	A17-c5
59	4	土師器小皿	曲輪3	北斜面盛土	口縁端部内面にかすかに凹部。端部外面強い横ナデ	9.0	1.5	16前半	A17-c6
59	5	土師器小皿	曲輪3	東斜面盛土	体部まっすぐに伸びる	11.2	1.3	16中葉	A17-c5
59	6	土師器小皿	曲輪3	東斜面盛土	内面底部際に強い横ナデの凹線	11.6	2.5	16後葉	A17-c5
59	7	備前摺鉢	曲輪4	盛土	口縁端部に内傾する面。口縁下端玉縁状にする			15後葉	A17-f8
59	8	染付皿	曲輪3	北斜面盛土	端反。小野染付皿B 1群VI類			15後~16中	A17-c6
59	9	青磁碗	曲輪3・5	東斜面盛土	無文			15~16	A17-f4・e6
59	10	瓦器風炉	曲輪3・9	西斜面・南斜面盛土	胴部に楕円形の窓。口縁・体部外面ミガキ。地元産か			15~16	A17-b3,d7,e6
59	11	土師器小皿	曲輪2	北東斜面盛土	底部突出部あり。外面指圧痕のみ	7.7	1.7	15末16前	A17-i5
59	12	土師器小皿	曲輪2	北西斜面盛土	体部内湾	7.0	1.2	16中後	O17-j5
59	13	土師器小皿	曲輪2	南東斜面盛土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面にかすかに凹部を持つ	9.3	1.9	16後葉	A17-b4
59	14	土師器小皿	曲輪2	南東斜面盛土	内面に粗いハケメ。体部まっすぐに伸びる	8.8	2.2	16後葉	A17-c5
59	15	土師器小椀	曲輪2	北東斜面盛土	内面に粗いハケメ	5.0	2.0	16	O17-j5

表11 掲載遺物一覧(5)

図番号	写真番号	器種	曲輪	遺構・層位	特徴	口径	器高	時期	地区	
59	16	土師器小皿	曲輪2	北東斜面盛土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面かすかに平坦面を持つ	12.6	-	16中後	O17-j5	
59	17	土師器小皿	曲輪2	南東斜面盛土	底部と体部明瞭な屈曲	12.8	2.6	16中後	A17-b5	
59	18	土師器小皿	曲輪2	南東斜面盛土	体部まっすぐに伸び、口縁端部内面かすかに平坦面を持つ	12.9	1.9	16中後	A17-b5	
59	19	土師器小皿	曲輪2	北東斜面盛土	口縁端部内面にかすかに平坦面を持つ。灯明皿	14.0	-	16中後	O17-j5	
59	20	白磁皿	曲輪2	石積4・5裏込	高台登付露胎			15~16	O17-j5	
59	21	瀬戸美濃碗	曲輪2	落込2	体部内湾し、端部丸くおさめる			15末16前	A17-a4	
59	22	備前揃鉢	曲輪2・6・8	落込2・平坦面堆積土	底部外面未調整。内面摩滅著しい			16前葉	A17-a5・b5・f5・c4	
59	23	40	3	備前揃鉢	曲輪2	落込2		ほぼ完形。口縁端部に内傾する面	16前葉	A17-b3・b5・c6
59	24			瓦器火鉢	曲輪2	南東斜面盛土		円形。口縁端部・外面ミガキ	中世	A17-c5
59	25			円形陶器片	曲輪2	落込2		備前葉片。円形に成形。つぶてか？	中世	A17-a5
59	26			備前甕	曲輪2・5	落込2、盛土		体部外面縦位のヘラナデ	中世	A17-a5, g4, g5, O17-j5
59	27			土師器小皿	曲輪5	盛土	5.5	1.2	16中後	A17-g5
59	28			土師器小皿	曲輪5	盛土			16後半	A17-g5
59	29			土師器小皿	曲輪5	盛土	9.6	2.5	15後16前葉	A17-g4
59	30			土師器小皿	曲輪5	盛土	9.8	-	16後半	A17-g4
59	31	39	12	染付皿	曲輪5	盛土			15後~16中	A17-f6
59	32			青磁碗	曲輪5	盛土			15~16	A17-h5
59	33			瀬戸美濃碗	曲輪5	盛土			15末16前	O17-j6
59	34			瀬戸美濃碗	曲輪5	盛土			15末16前	A17-g5
59	35			備前揃鉢	曲輪5	盛土			中世	A17-h5
59	36			染付皿	曲輪9	盛土			中世	A17-b3
59	37			土師器小皿	曲輪9	石積1裏込盛土	6.5	-	16前半	A17-b2, b3
59	38			土師器小皿	曲輪9	盛土	8.8	2.0	16前葉	A17-b4
59	39	39	9	土師器小皿	曲輪9	盛土	7.1	1.4	16中後	A17-b3
59	40			土師器小皿	曲輪9	石積1裏込盛土	11.4	-	16中	A17-b2, b3
59	41			土師器小皿	曲輪9	盛土	12.3	-	16前葉	A17-b2
59	42			土師器小皿	曲輪9	石積1裏込盛土	12.7	-	16中葉	A17-b2, b3
59	43			土師器小皿	曲輪9	盛土	13.0	-	16中葉	A17-b3
59	44			火鉢	曲輪9	盛土			14~16	A17-b3
59	45			土師器小皿	通路9	盛土	5.5	1.3	16中後	A17-d5, e5
59	46	40	1	土師器小皿	通路9	盛土	7.0	1.6	16中後	A17-d5, e5
59	47			土師器小皿	曲輪11	盛土	6.6	6.6	16中後	A17-g9
59	48			土師器小皿	曲輪11	盛土	7.2	7.2	16中後	A17-g9
59	49			土師器小皿	通路8	盛土	12.0	1.8	16中後	A17-f6
59	50			土師器小皿	曲輪2	石積3盛土	6.7	1.2	16中後	O17-j4
59	51			土師器小皿	曲輪2	石積3盛土	6.2	1.7	16中後	O17-j4
59	52			土師器小皿	曲輪2	石積3盛土	7.8	-	16中後	O17-j4
59	53			土師器小皿	曲輪2	石積3盛土	13.9	-	16前半	O17-j4
59	54			瀬戸美濃皿	曲輪2	石積3盛土			15末16前	O17-j4
62	1			須恵器壺	曲輪3	平坦面堆積土			古代	A17-d6
62	2			須恵器杯	竪堀3	堆積土			7世紀	A17-e 8
62	3			須恵器杯蓋	曲輪4・5・11	斜面流出土			6世紀	A17-h7
62	4			須恵器杯	通路9	斜面流出土			8世紀	A17-c5, d5, e5
62	5			土師器	窠1	埋土			古墳時代	A17-c4
62	6			黒色土器椀	窠1	埋土			10前半	A17-c4
62	7	40	2	土師器皿	焼土坑41	埋土			10世紀	A17-f6
	40	5		基石	曲輪2	堆積土			16	A17-a5
	カラ-8			土壁	曲輪1	堆積土			16	A17-a2, a3

表12 掲載鉄釘一覧

図番号	写真番号	残存長	頭幅	基部断面	頭部形態	曲輪名	遺構・層位	地区		
60	1	42	12	2.8	1.0	4.5×4.0	巻込	曲輪1	平坦面堆積土	A17-a3 (南西)
60	2	42	13	2.6	1.1	4.0×3.5	巻込	曲輪1	土塁2流出土	A17-a3 (北東)
60	3	42	14	2.5	1.4	4.5×4.5	屈曲	曲輪1	土塁2流出土	A17-a2 (北西)
60	4	42	15	2.8	1.1	4.0×3.5	屈曲	曲輪1	土塁2流出土	A17-a2 (北西)
60	7	42	11	6.9(完存)	1.1	3.0×3.0	巻込	曲輪1	建物1平坦面堆積土	A17-a3 (北東)
60	6	42	16	7.1	1.2	4.0×4.0	巻込	曲輪1	土塁2流出土	A17-a2 (北西)
60	5	42	17	6.5(完存)	1.1	4.0×3.5	巻込	曲輪1	土塁2流出土	A17-a2 (北西)
60	8	42	18	3.4	1.2	4.0×3.5	巻込	曲輪2	平坦面堆積土	A17-a5 (南西)
60	9	42	19	5.2	1.6	4.5×4.0	屈曲	曲輪2	平坦面堆積土	O17-j5
60	10	42	20	3.3	0.9	3.0×3.0	巻込	曲輪2	平坦面堆積土	A17-a5 (北東)
60	11	42	21	2.8	1.0	4.0×4.0	巻込	曲輪2	土坑12	A17
60	12	42	22	3.0	1.1	4.0×3.0	巻込	曲輪3	土坑18	A17-e6
60	13	42	23	6.1(完存)	1.6	4.0×3.5	巻込	曲輪3	盛土	A17-d6
60	14	42	24	5.8	1.1	3.0×3.0	巻込	豎堀6	堆積土	A17-e6
60	15	42	25	2.6	0.8	3.5×3.0	屈曲	曲輪5	堆積土	A17-g5 (西半)

表13 掲載金属製品一覧

図番号	写真番号	種類	曲輪名	遺構・層位	特徴	地区		
60	16	41	8	火打金	曲輪2	平坦面堆積土	断面長方形を呈する。先端部両側ともに欠損	O17-j5
60	17	41	10	輪状鉄製品		建物1平坦面堆積土	堀り止めか。鉄線をリング状に曲げ、端部をやや広げる	A17-a3(北東)
60	18	42	8	鎌	曲輪2	平坦面堆積土	厚み1.0~2.5mmを測る。両側共に欠損	
60	19	41	1	板状鉄製品	曲輪2	平坦面堆積土	武器か。端部に小孔が2ヶ所。端部をわずかに内側に折り曲げる。裏面に布目圧痕。1cmあたり13本の糸痕	A17-i6(南東)
60	20	41	2	板状鉄製品	曲輪2	平坦面堆積土	武器か。隅丸長方形の平面を呈する。厚さ約2.0mm。端部に小孔が1箇所	A17-i6(南東)
60	21	41	5	雁叉鏃	曲輪4	石積10裏込	二叉。基部の断面は円形、枝部は方形	A17-f6
60	22	41	4	三叉鏃	曲輪5	土坑30	基部から三叉に伸び、中央が長く伸びる。断面はいずれも方形	A17-g5
60	23	41	6	尖根鏃	曲輪2	北西斜面石垣盛土	約8mmを測るノミ型先形にする。茎部断面は四角形	A17-a4
60	24	41	7	尖根鏃	通路10	平坦面堆積土	約7mmを測るノミ型先形にする。茎部断面は四角形	A17-c5
60	25	40	4	小柄	曲輪2	土坑8	柄部分は銅貼り。柄部分に繊維質、刀身部分に木質が残存	A17-a5
60	26	40	7	銅製柄	曲輪9	南斜面石垣裏込盛土	銅版を折り曲げている	
60	27	40	6	刀破片	曲輪1	建物1平坦面堆積土	刃部から茎部にかけての破片。茎部中央に目釘穴	A17-a2(北東)
60	28	42	9	輪状鉄製品	曲輪5	平坦面堆積土	断面長方形を呈し、輪状に曲がる。両端が欠損しているか否か不明	A17-g5
60	29	41	11	輪状銅製品	曲輪1	土塁2流出土	直径2.5mm	A17-a2(北西)
60	30	41	3	卵形鉄板片	曲輪1	建物1	先端が尖る卵状を呈する	A17-a3(北東)
60	31	41	9	鉄鍋片	曲輪2	平坦面堆積土	口縁部分と考えられる。端部に内傾する面を有する	O17-j5(南東)
60	32	42	4	鉄板片	曲輪2	平坦面堆積土	刃物の先端部分のように見えるが背がない	A17-a5(北西)
60	33	42	2	鉄板片	曲輪1	平坦面堆積土	鉄延べ板状の先端を丸くおさめる。均一の厚みを有する	A17-a3
60	34	42	1	鉄板片	曲輪1	平坦面堆積土	幅3.1cmを測る鉄延べ板状片。縦断方向にやや湾曲している	A17-a3
60	35	42	10	鉄板片	曲輪16	盛土	用途不明	A18-g1
60	36	42	7	鉄板片	曲輪2	北東石垣流出土	矢印のような先端を呈する	O17-j5
60	37	42	5	鉄板片	曲輪2	平坦面堆積土	幅2.5cmを測る鉄延べ板状片。片縁が薄くなっている	A17-c5
60	38	42	3	刀破片	曲輪1	平坦面堆積土	基部は腐蝕により膨張している	A17-b3
60	39	42	6	鉄製品	曲輪5	南斜面盛土	断面長方形を呈し、緩やかに曲がる	A17-h5

表14 掲載銭貨一覧

図番号	銭貨名	遺構名	層位	書体	国名	初鋳年	地区	
61	1	開元通寶	曲輪1	南斜面流出土	楷書	唐	621	A17-b3
61	2	開元通寶	曲輪2	平坦面堆積土	楷書	唐	621	O17-j5
61	3	開元通寶	曲輪6	平坦面堆積土	楷書	唐	621	A17-f5
61	4	開元通寶	通路6	平坦面堆積土	楷書	唐	621	A17-c6
61	5	開元通寶	通路11	盛土	楷書	唐	621	A17-c4
61	6	乾元重寶	曲輪2	平坦面堆積土	楷書	唐	758	A17-b6(南東)
61	7	至道元寶	曲輪1	平坦面堆積土	草書	北宋	995	A17-a3(南東)
61	8	祥符(通、元)寶	曲輪2	平坦面堆積土	楷書	北宋	1009	A17-b6(北東)
61	9	祥符元寶	曲輪2	北斜面流出土	楷書	北宋	1009	O17-j5
61	10	天聖元寶	曲輪1	南斜面流出土	楷書	北宋	1023	A17-b3
61	11	皇宋通寶	曲輪1	南斜面流出土	楷書	北宋	1038	A17-b3
61	12	皇宋通寶	曲輪2	平坦面堆積土	篆書	北宋	1038	A17-b6(南東)
61	13	治平元寶	曲輪1	南斜面流出土	楷書	北宋	1064	A17-b3
61	14	熙寧元寶	曲輪1	土墨流出土	行書	北宋	1068	A17-a2(北西)
61	15	熙寧元寶	曲輪1	平坦面堆積土	楷書	北宋	1068	A17-a3(南東)
61	16	熙寧元寶	曲輪1	南斜面流出土	篆書	北宋	1068	A17-b3
61	17	熙寧元寶	曲輪3	平坦面堆積土	楷書	北宋	1068	A17-d6(南西)
61	18	元豐通寶	曲輪1	平坦面堆積土	篆書	北宋	1078	A17-a3(南東)
61	19	元豐通寶	曲輪2	平坦面堆積土	行書	北宋	1078	A17-b6(南東)
61	20	元豐通寶	曲輪5	盛土	行書	北宋	1078	A17-h5
61	21	元祐通寶	曲輪1	南斜面流出土	篆書	北宋	1086	A17-b3
61	22	元祐通寶	曲輪1	南斜面流出土	行書	北宋	1086	A17-b3
61	23	元祐通寶	曲輪2	平坦面堆積土	行書	北宋	1086	A17-b5
61	24	正隆元寶	曲輪3	平坦面堆積土	楷書	金	1161~78	A17-d6(南西)
61	25	永樂通寶	曲輪2	平坦面堆積土	楷書	明	1408	A17-b5
61	26	永樂通寶	曲輪3	平坦面堆積土	楷書	明	1408	A17-d6
61	27	永樂通寶	曲輪3	平坦面堆積土	楷書	明	1408	A17-d6(南西)
61	28	寛永通寶	曲輪2	平坦面堆積土	楷書	日本	1636	A17-b4
		不明	曲輪2	平坦面堆積土	—	—	—	A17-b6(北東)
		不明	曲輪2	平坦面堆積土	—	—	—	—

表15 遺構一覧(1)

曲輪	遺構名	地区名	辺・径(cm)	深さ(cm)	埋 土	
曲輪2	土坑1	O17	j5	125×85	5	黄褐10YR5/8シルト(粗粒砂混)
曲輪3	土坑2	O17	j5	88	14	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	土坑3	O17	j5	71×51	8	明黄褐10YR6/6シルト(粗粒砂混)
曲輪2	土坑4	A17	a5	115	49	黄褐10YR5/6シルト(中粒砂混)
曲輪2	土坑5	A17	a5	380	33	にぶい黄橙10YR6/4シルト(炭化物・焼土粒混)
曲輪2	土坑6	A17	a5	131	14	にぶい赤褐5YR4/4シルト(焼土塊混)
曲輪2	土坑7	A17	a5	400×170	32	図20
曲輪2	土坑8	A17	a5	143×143	12	図20
曲輪2	土坑9	A17	b5	112	22	図20
曲輪2	土坑10	A17	b5	150	10	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂混)・にぶい褐7.5YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	土坑11	A17	b6	192	45	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	土坑12	A17	b6	104×70	18	黄褐2.5Y5/4シルト(炭化物混)
曲輪2	土坑13	A17	b6	132	32	図20
曲輪2	土坑14	A17	b6	90×55	13	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	土坑15	A17	b6	100	25	図20
曲輪2	土坑16	A17	b6	120	57	図20
曲輪3	土坑17	A17	c6	220×160	12	図27
曲輪3	土坑18	A17	d6	290×210	28	図27
曲輪3	土坑19	A17	d6	108	28	図27
曲輪3	土坑20	A17	e6	226×147	23	図27
曲輪3	土坑21	A17	e6	354×60	16	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂・焼土粒混)
曲輪3	土坑22	A17	e6	90×65	9	—
曲輪3	土坑23	A17	e6	250×64	19	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪3	土坑24	A17	e6	150×90	8	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂・焼土混)
曲輪3	土坑25	A17	d7	119	28	黄褐2.5Y5/3シルト(粗粒砂混)
曲輪5	土坑26	A17	g4	34	29	—
曲輪5	土坑27	A17	f4	176	55	図33
曲輪5	土坑28	A17	g4	124	45	図33
曲輪5	土坑29	A17	g4	104	16	明褐7.5YR5/6シルト(中粒砂混)
曲輪5	土坑30	A17	g4	126	25	図33
曲輪5	土坑31	A17	g5	220×120	13	—
曲輪5	土坑32	A17	g5	120×100	22	図33
曲輪5	土坑33	A17	g5	136×95	31	—
曲輪5	土坑34	A17	g5	94×54	16	図33
曲輪5	土坑35	A17	g5	103	19	明褐7.5YR5/8シルト(中粒砂・パイラン土混)
曲輪5	土坑36	A17	g5	98×44	9	明褐7.5YR5/8シルト(微粒砂混)
曲輪5	土坑37	A17	g5	126×118	35	—
曲輪8	土坑38	A17	d4	72	35	—
曲輪2	土坑39	A17	b5	12.5	2	図20
曲輪2	土坑40	A17	a5	54	20	—
曲輪2	溝1	A17	a4	800×40	5	にぶい黄橙10YR6/4シルト(炭・焼土塊混)
曲輪2	溝2	A17	b5	410×50	6	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪5	溝3	A17	f4	525×16	3	図33
曲輪5	溝4	A17	g5	670×40	11	図33
曲輪2	落込1	A17	a5	1030×530	45	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	落込2	A17	a5	1700×1140	60	明黄褐10YR6/6粗粒砂
曲輪2	ピット1	A17	b4	60	14	にぶい黄褐10YR5/4シルト
曲輪2	ピット2	A17	b4	36	23	にぶい黄褐10YR5/4シルト
曲輪2	ピット3	A17	b4	28	13	黄褐10YR5/6シルト
曲輪2	ピット4	A17	b4	38	22	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット5	O17	j5	35	7	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	ピット6	O17	j5	52×36	3	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	ピット7	O17	j5	42	16	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混・焼土塊混)
曲輪2	ピット8	O17	j5	34	33	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット9	A17	a5	48×21	22	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混・焼土塊混)
曲輪2	ピット10	A17	a5	38	29	橙7.5YR6/6シルト(粗粒砂・炭化物混)
曲輪2	ピット11	A17	a5	41	6	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混・焼土塊混)
曲輪2	ピット12	A17	a5	17	13	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット13	A17	a5	28	5	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット14	A17	a5	45	6	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット15	A17	a5	25	6	黄褐2.5Y5/4シルト
曲輪2	ピット16	A17	a5	40	7	黄褐2.5Y5/4シルト
曲輪2	ピット17	A17	a5	26	15	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混・焼土塊混)
曲輪2	ピット18	O17	j5	30	10	黄褐2.5Y5/4シルト(炭化物混)
曲輪2	ピット19	O17	j5	20	8	黄褐2.5Y5/4シルト
曲輪2	ピット20	O17	j5	39	18	にぶい黄褐10YR5/4シルト
曲輪2	ピット21	O17	j5	20	14	にぶい黄褐10YR5/3シルト
曲輪2	ピット22	O17	j5	30	10	にぶい黄褐10YR5/3シルト(焼土塊・炭化物混)

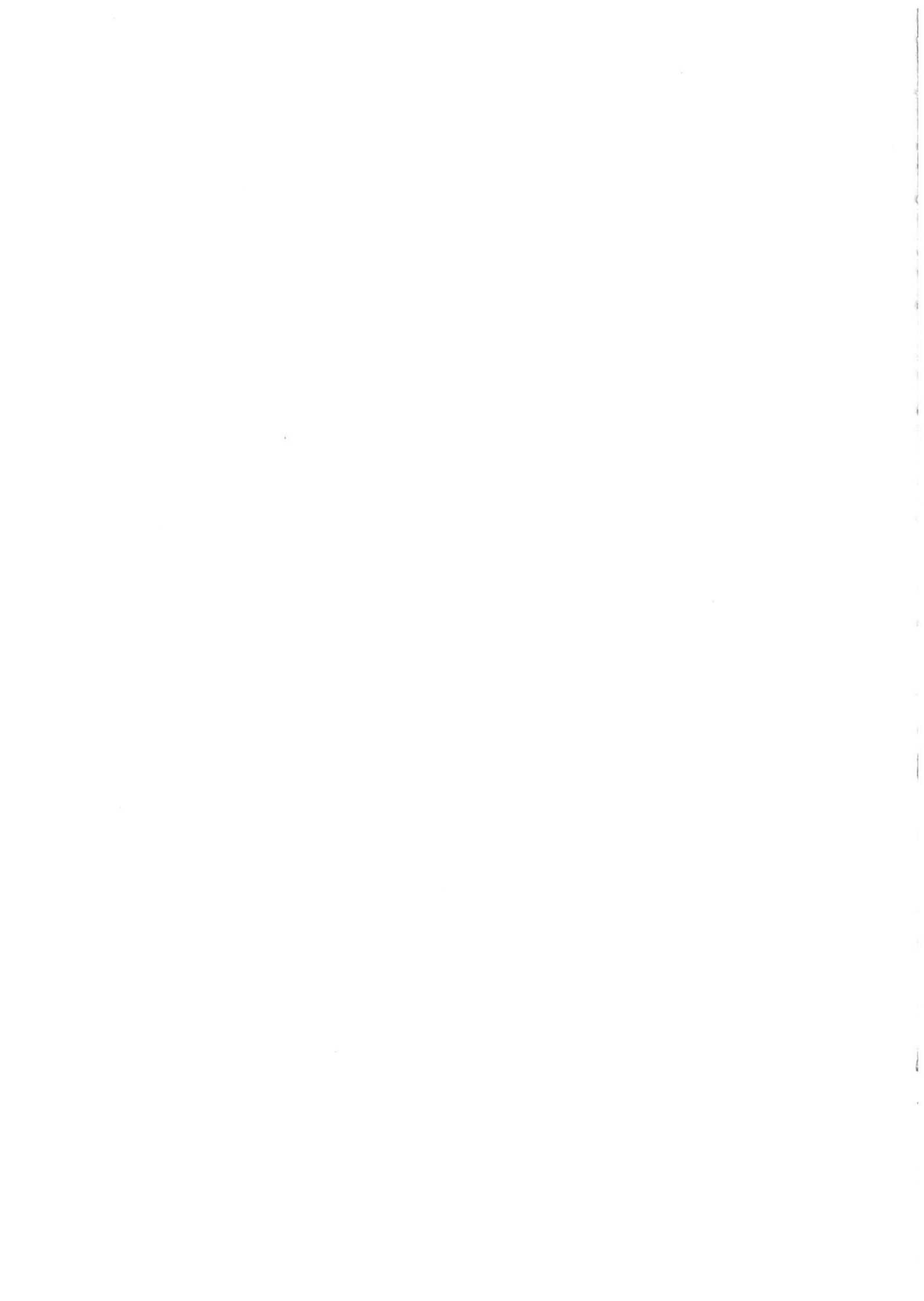
表16 遺構一覧(2)

曲輪	遺構名	地区名	辺・径(cm)	深さ(cm)	埋 土	
曲輪2	ピット23	O17	j5	20	1	にぶい黄褐10YR5/3シルト(焼土塊・炭化物混)
曲輪2	ピット24	O17	a5	36	5	にぶい黄橙10YR6/4シルト(焼土塊・炭化物混)
曲輪2	ピット25	O17	a5	20	10	にぶい黄褐10YR5/3シルト
曲輪2	ピット26	O17	a5	45×25	6	にぶい黄褐10YR5/3シルト
曲輪2	ピット27	O17	a5	37	25	にぶい黄橙10YR6/4シルト(焼土塊混)
曲輪2	ピット28	O17	a5	54	27	にぶい黄橙10YR6/4シルト(焼土塊混)
曲輪2	ピット29	O17	a5	30	15	にぶい黄橙10YR6/4シルト(焼土塊混)
曲輪2	ピット30	O17	a5	40×32	9	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット31	O17	a5	35	17	明黄褐10YR6/6シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット32	O17	a5	30	12	黄褐10YR5/6シルト(中粒砂混)
曲輪2	ピット33	A17	b6	40	—	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	ピット34	A17	b5	41	11	—
曲輪2	ピット35	A17	b5	51×28	16	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂・炭化物混)
曲輪2	ピット36	A17	b5	70×41	22	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット37	A17	b5	70×50	20	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット38	A17	b5	50	37	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット39	A17	b6	29	19	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット40	A17	b6	20×40	—	—
曲輪2	ピット41	A17	b6	27	14	褐10YR4/6シルト(バイラン土混)
曲輪2	ピット42	A17	b6	25	23	黄褐10YR5/8シルト(細粒砂混)
曲輪2	ピット43	A17	b6	40	8	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	ピット44	A17	b6	37	17	黄褐10YR5/6シルト(中粒砂混)・褐10YR4/6シルト(中粒砂混)
曲輪2	ピット45	A17	b6	50×20	10	褐10YR4/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット46	A17	b6	52	32	にぶい黄橙10YR6/4シルト
曲輪2	ピット47	A17	b6	27	27	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット48	A17	b6	36	30	—
曲輪2	ピット49	A17	b6	73	7	図20
曲輪2	ピット50	A17	b6	47	35	図19
曲輪2	ピット51	A17	b6	42	10	図19
曲輪2	ピット52	A17	b5	43	19	図19
曲輪2	ピット53	A17	c5	40	37	黄褐2.5Y5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット54	A17	c5	22	37	黄褐2.5Y5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット55	A17	c5	32	—	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂・炭化物混)・にぶい黄橙10YR6/3粘質シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット56	A17	c5	41	35	図19
曲輪2	ピット57	A17	b6	31	24	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット58	A17	b6	32	19	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット59	A17	b6	44	38	黄褐10YR5/6シルト
曲輪2	ピット60	A17	b6	45	12	図19
曲輪2	ピット61	A17	b6	30	22	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット62	A17	b6	30	8	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット63	A17	b6	23	9	にぶい黄橙10YR6/4シルト(バイラン土混)
曲輪2	ピット64	A17	b6	27	27	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)・褐10YR4/4シルト(バイラン土混)
曲輪2	ピット65	A17	b6	29	32	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット66	A17	b6	33	29	にぶい黄褐10YR5/4シルト(中粒砂混)・褐10YR4/6シルト(細粒砂混)
曲輪2	ピット67	A17	b6	36	25	図19
曲輪2	ピット68	A17	b6	26	22	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット69	A17	b6	30	13	にぶい黄橙10YR6/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット70	A17	b6	30	6	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット71	A17	c6	32	15	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット72	A17	c6	42	23	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット73	A17	c6	17	8	—
曲輪2	ピット74	A17	c6	30	42	図19
曲輪2	ピット75	A17	b6	33	27	図33
曲輪2	ピット76	A17	c6	27	17	黄褐2.5Y5/6シルト(中粒砂混)
曲輪2	ピット77	A17	c6	46×31	32	図19
曲輪2	ピット78	A17	c6	25	19	—
曲輪2	ピット79	A17	c6	26	16	—
曲輪2	ピット80	A17	c6	42	31	図19
曲輪2	ピット81	A17	c6	35	35	図19
曲輪2	ピット82	A17	c6	20	30	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット83	A17	c6	42×32	19	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪2	ピット84	A17	c6	42×25	12	図20
曲輪2	ピット85	A17	c6	48	10	黄褐10YR5/6シルト(粗粒砂・炭化物混)
曲輪2	ピット86	A17	c6	25	17	黄橙10YR5/6シルト(粗粒砂・炭化物混)
曲輪3	ピット87	A17	d6	40×22	11	にぶい黄褐10YR5/4シルト(粗粒砂混)
曲輪3	ピット88	A17	d6	48×19	20	橙7.5YR6/8シルト(中粒砂混)・明褐7.5YR5/8シルト(中粒砂混)
曲輪3	ピット89	A17	d6	48×20	19	黄褐2.5Y5/3シルト(粗粒砂混)
曲輪3	ピット90	A17	e6	48×22	19	明黄褐10YR6/6シルト(粗粒砂混)

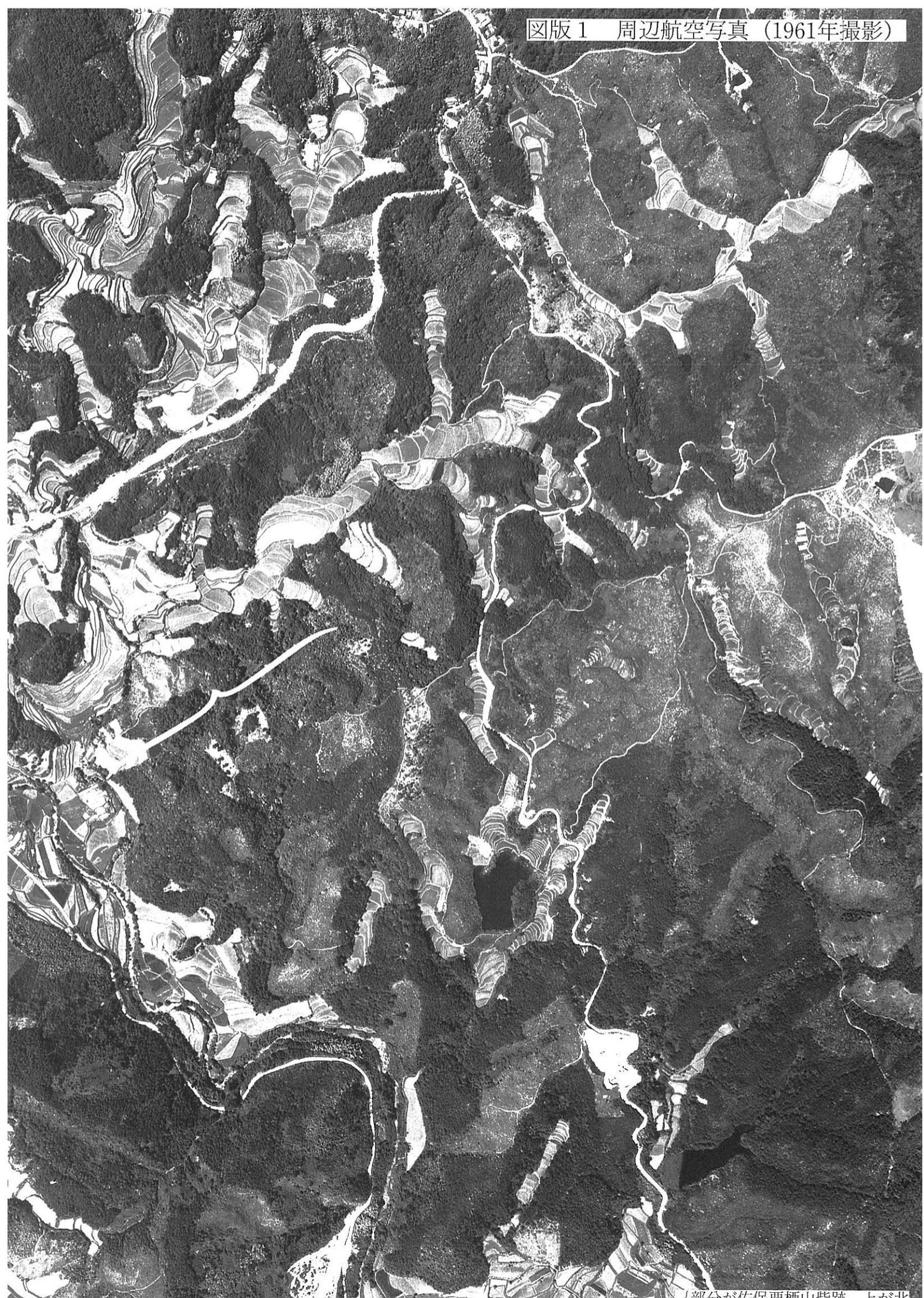
表17 遺構一覧(3)

曲輪	遺構名	地区名	辺・径(cm)	深さ(cm)	埋 土	
曲輪5	ピット91	A17	f4	48×23	37	図33
曲輪5	ピット92	A17	g4	48×24	26	明赤褐5YR5/8シルト(粗粒砂混)
曲輪5	ピット93	A17	g5	48×25	7	—
曲輪5	ピット94	A17	g5	48×26	22	—
曲輪5	ピット95	A17	g5	48×27	35	—
曲輪5	ピット96	A17	g5	48×28	18	黄褐2.5Y5/3シルト(粗粒砂混・焼土粒混)
曲輪5	ピット97	A17	g5	48×29	31	図33
曲輪5	ピット98	A17	g5	48×30	21	—
曲輪5	ピット99	A17	g5	48×31	25	黄褐2.5Y5/3シルト(粗粒砂混)
曲輪5	ピット100	A17	g5	32	30	図33
曲輪5	ピット101	A17	g5	34	28	図33
曲輪5	ピット102	A17	g5	36	33	図33
曲輪13	ピット103	A18	g1	27	32	—
曲輪2	ピット104	O17	j4	30	23	黄褐2.5Y5/3シルト
曲輪2	ピット105	O17	j4	20	4	黄褐2.5Y5/3シルト
曲輪2	ピット106	O17	j4	30	38	暗灰黄2.5Y5/2シルト
曲輪2	ピット107	O17	j5	25	19	暗灰黄2.5Y4/2シルト
曲輪2	ピット108	O17	j6	40	19	にぶい黄褐10YR5/3シルト(中粒砂混)
曲輪2	ピット109	O17	j6	40	35	にぶい黄褐10YR5/3シルト(バイラン土混)

版 函



图版1 周边航空写真 (1961年撮影)



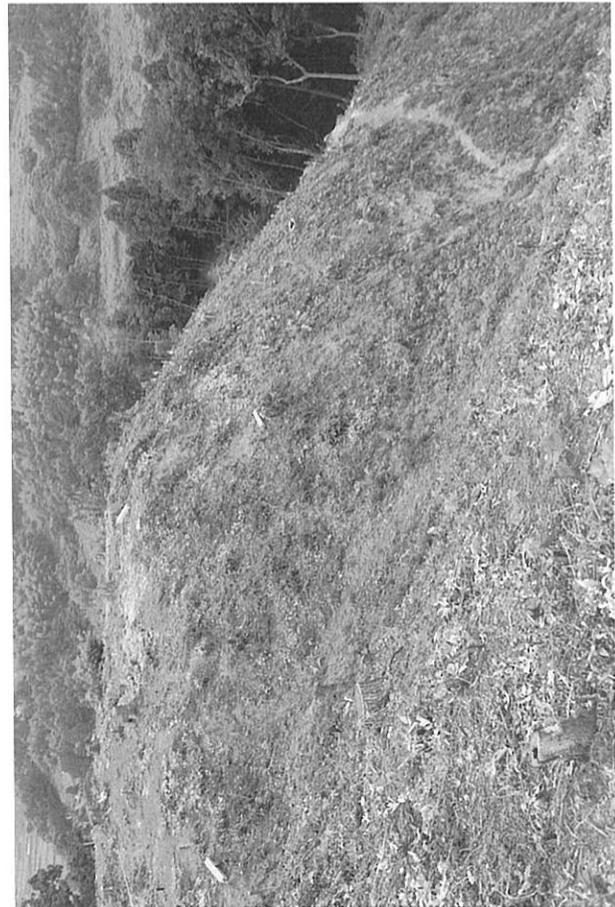
図版2 佐保栗栖山砦跡調査前



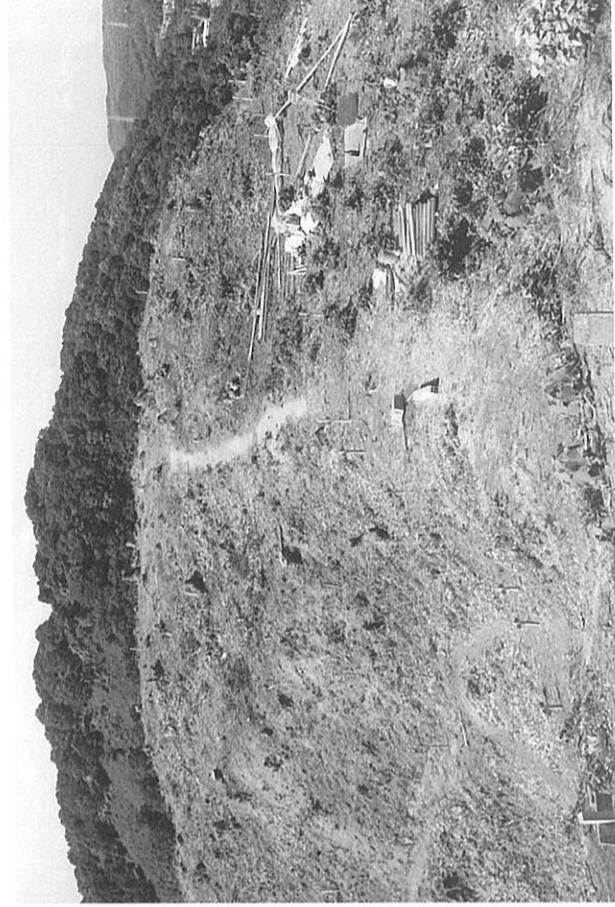
1. 曲輪3から曲輪1・2・9を望む(南西から)



3. 曲輪2から出入口1・通路4を望む(南西から)



2. 曲輪1から曲輪2、通路3・4を望む(東から)



4. 曲輪1から曲輪2・3を望む(北東から)



1. 曲輪2から曲輪8、通路11・13を望む(北から)



2. 曲輪3から曲輪4・7・11、土塁3を望む(北東から)

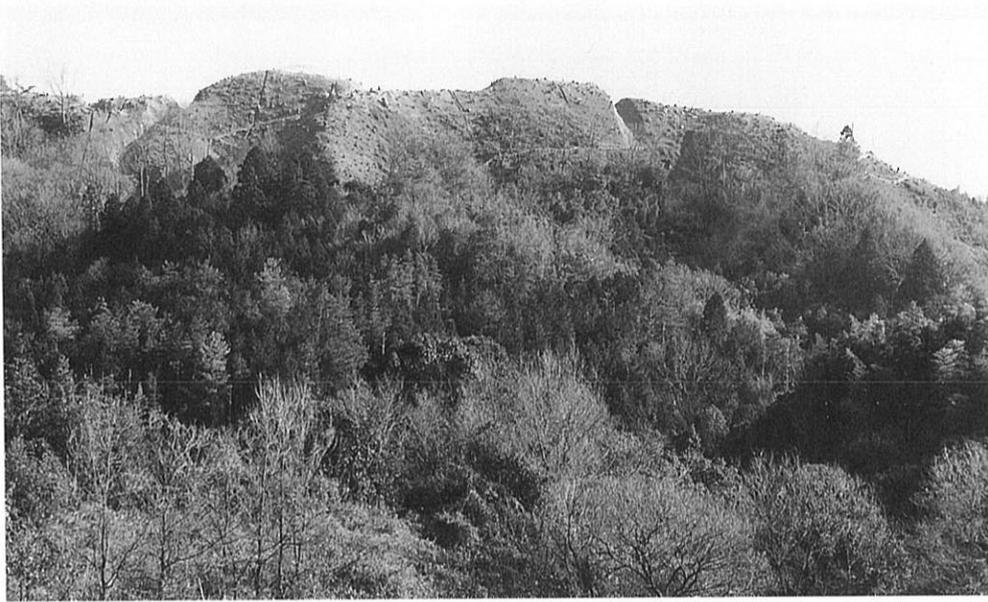


3. 竪堀1(北西から)



4. 石積10(北東から)

図版 4 佐保栗栖山砦跡 全景



1. 全景（北西から）



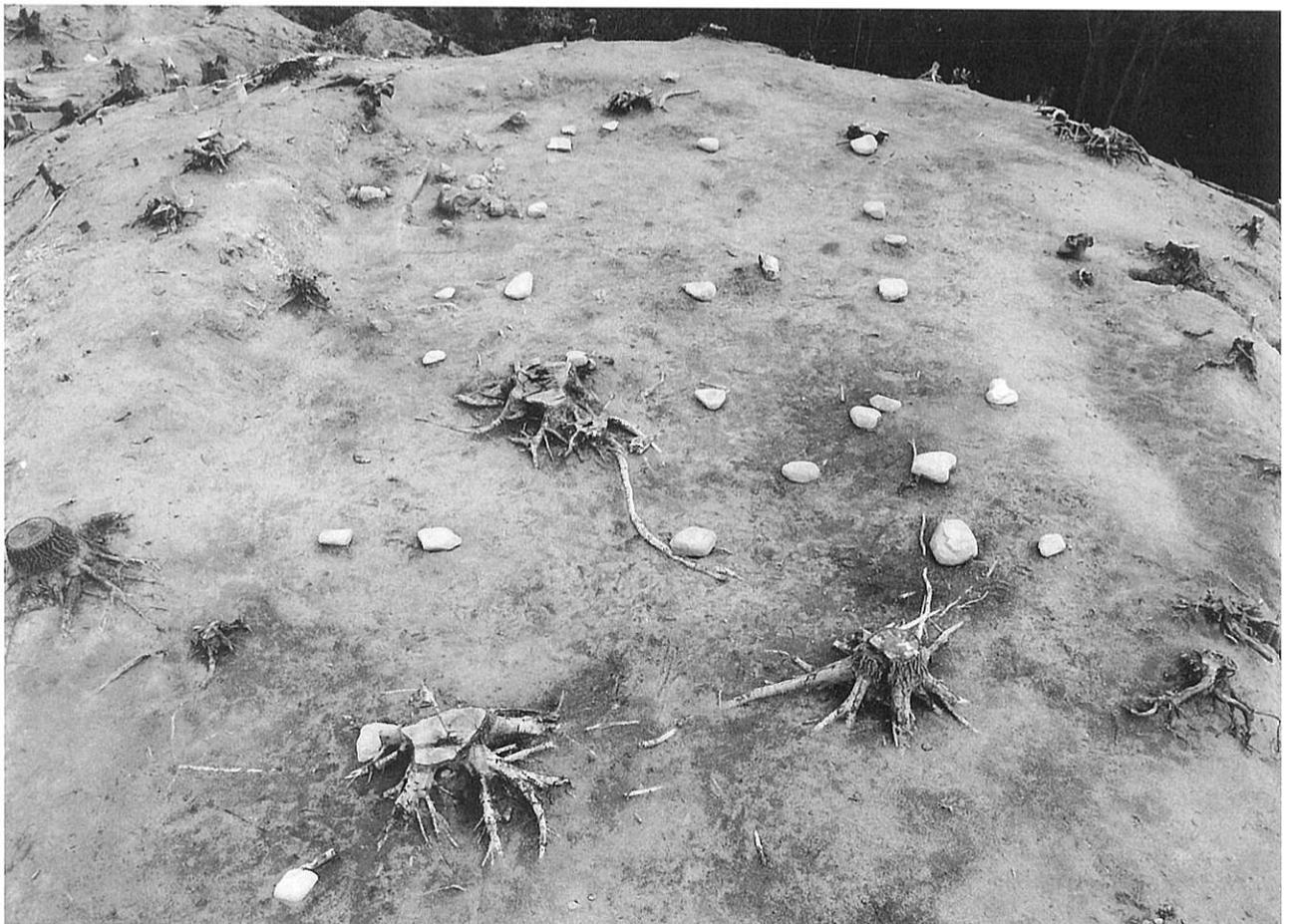
2. 全景（西から）



3. 全景（南から）

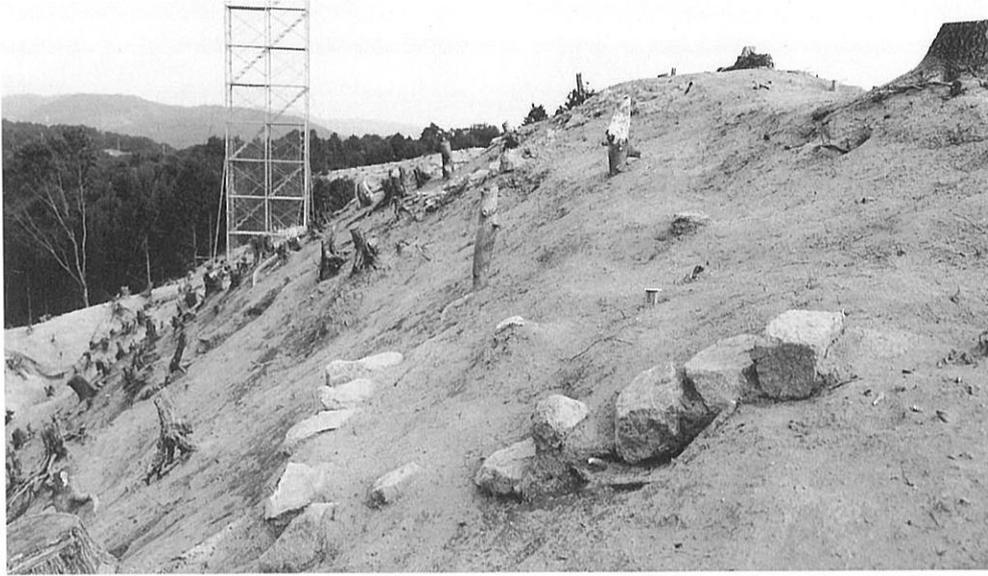


1. 曲輪1・9全景（南西から）



2. 建物1全景（南西から）

図版6 曲輪1



1. 石積2 (西から)



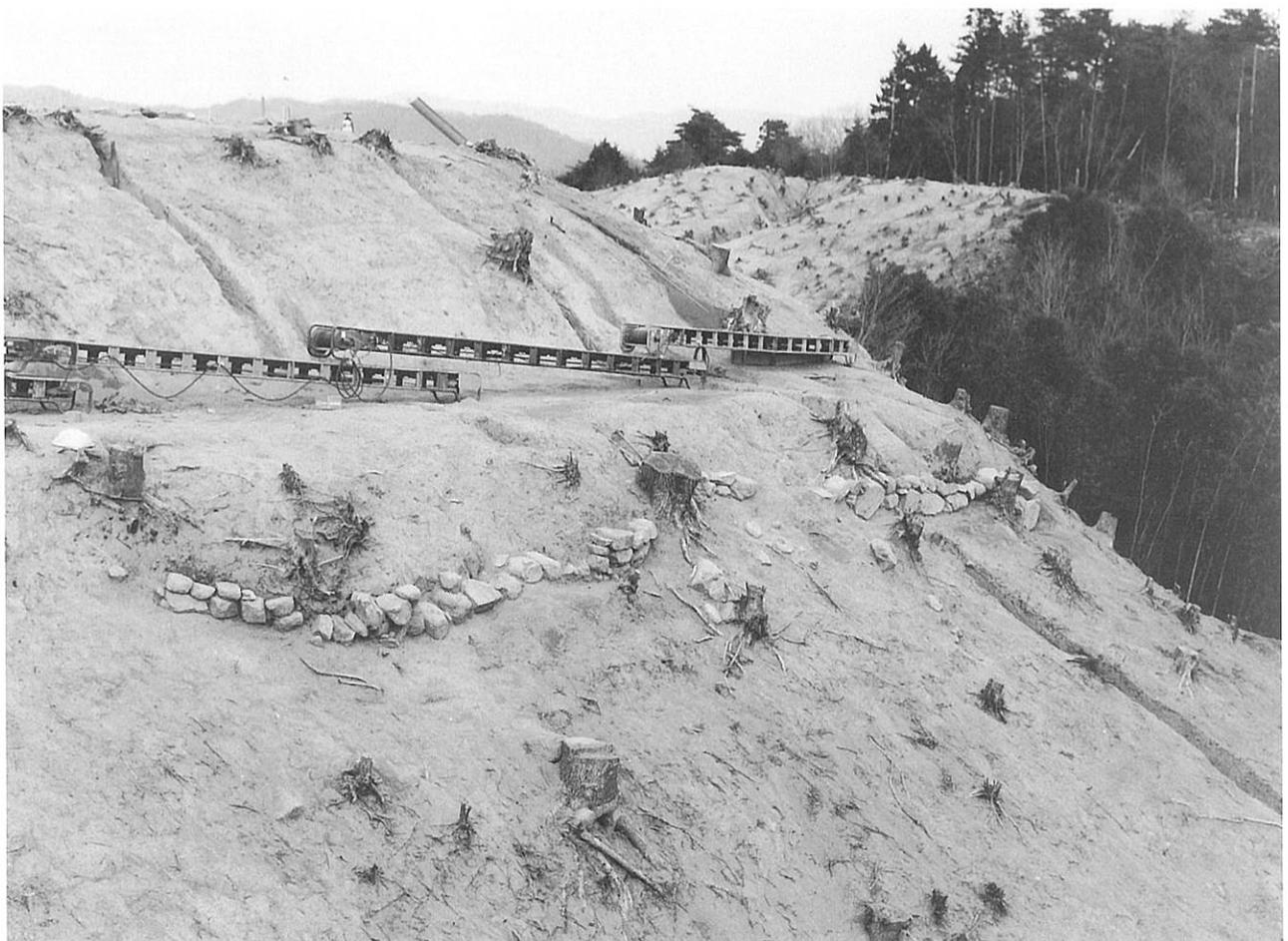
2. 石組1 (南西から)



3. 通路5 (南西から)



1. 全景 (西から)



2. 石積1 (南西から)



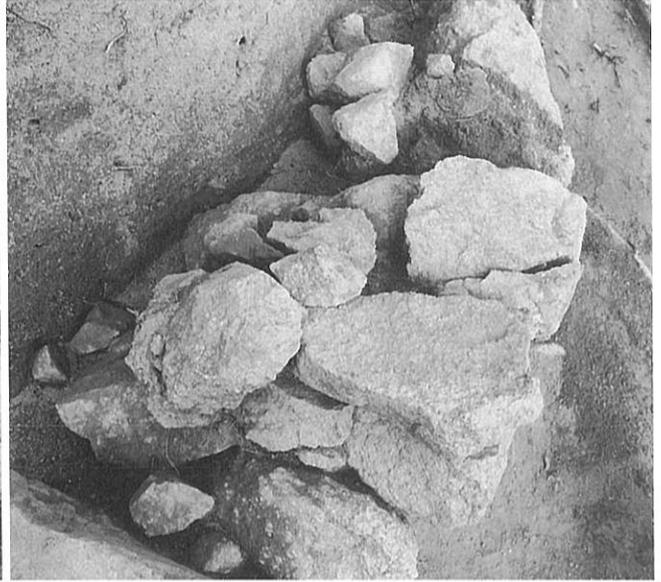
1. 石積 1 西半 (南から)



2. 石積 1 東半 (南東から)



1. 石積1 裏込め状況 (南西から)



2. 石積1 裏込め状況 (南西から)



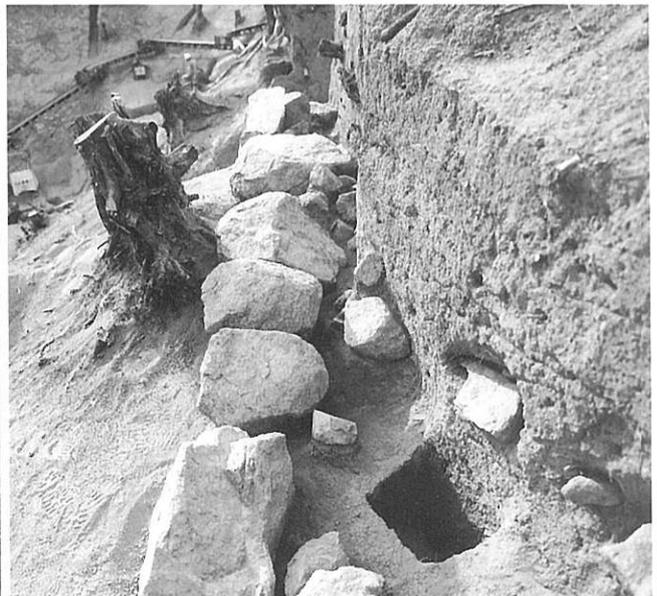
3. 石積1 裏込め状況 (南西から)



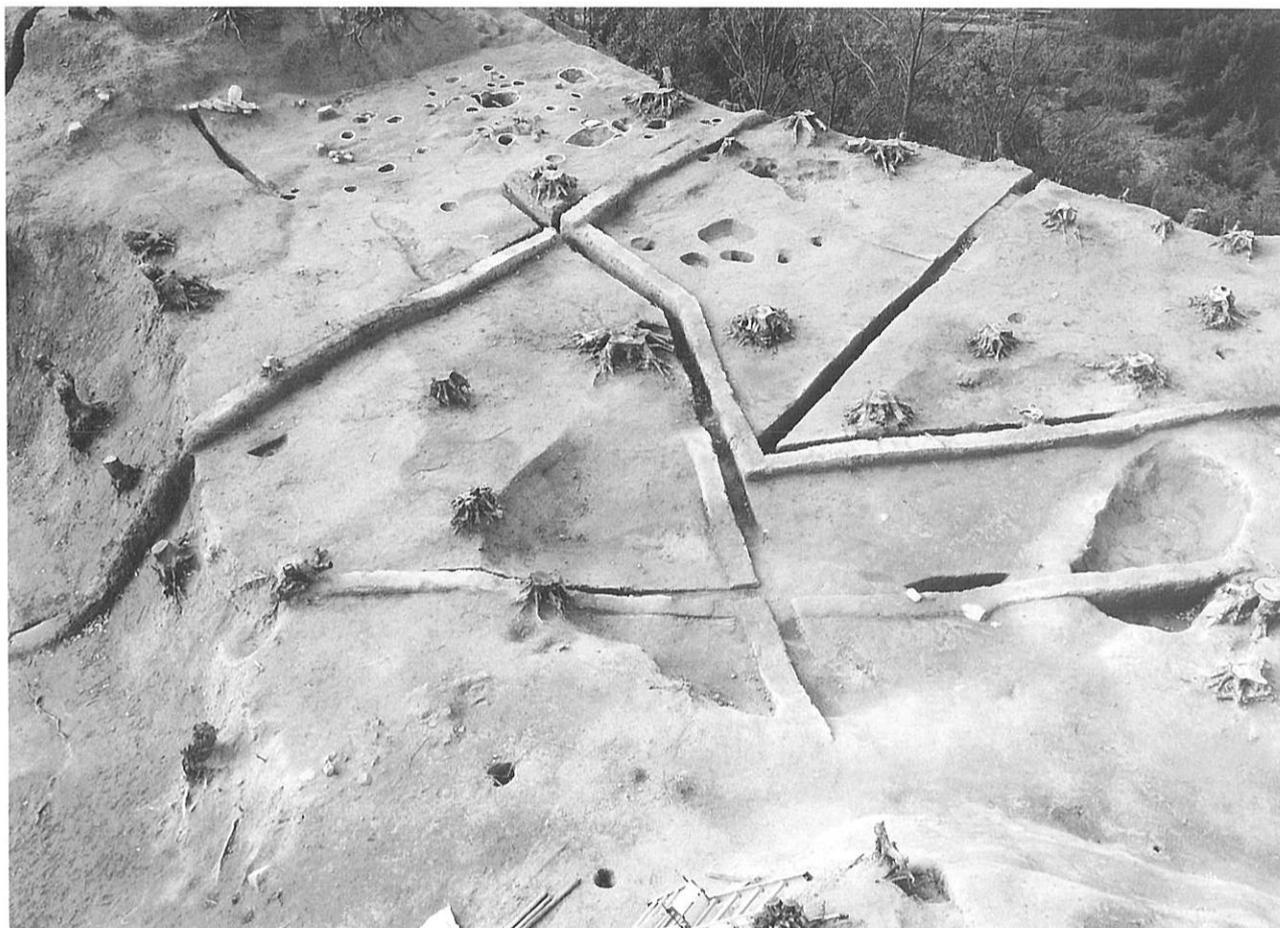
4. 石積1 最下段検出状況 (南西から)



5. 石積1 最下段検出状況 (南西から)



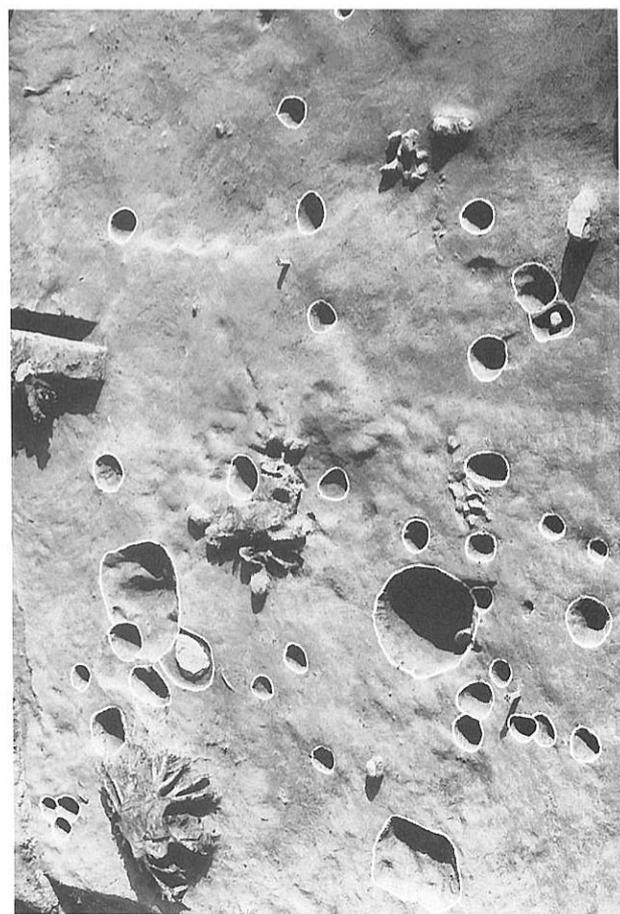
6. 石積1 最下段検出状況 (南東から)



1. 南半全景（北東から）



2. 北半全景（南西から）



1. 建物 2 (南西から)



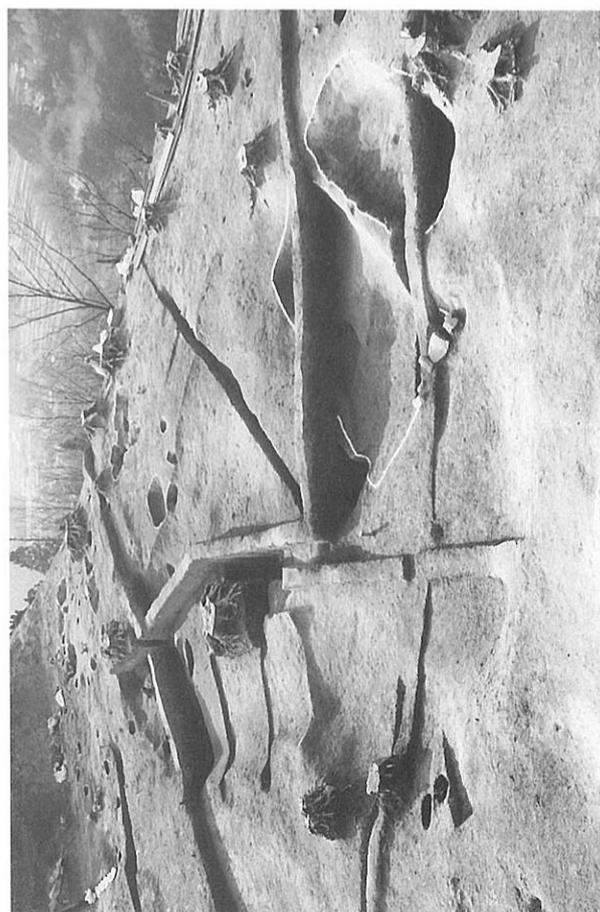
3. 土坑16 (南西から)



2. ピット49 (南から)



4. 土坑 8 小柄出土状況



1. 落ち込み2 (東から)



3. 溝1 (南西から)



2. 出入口1、通路4 (北東から)



4. 溝1埋土 (北東から)

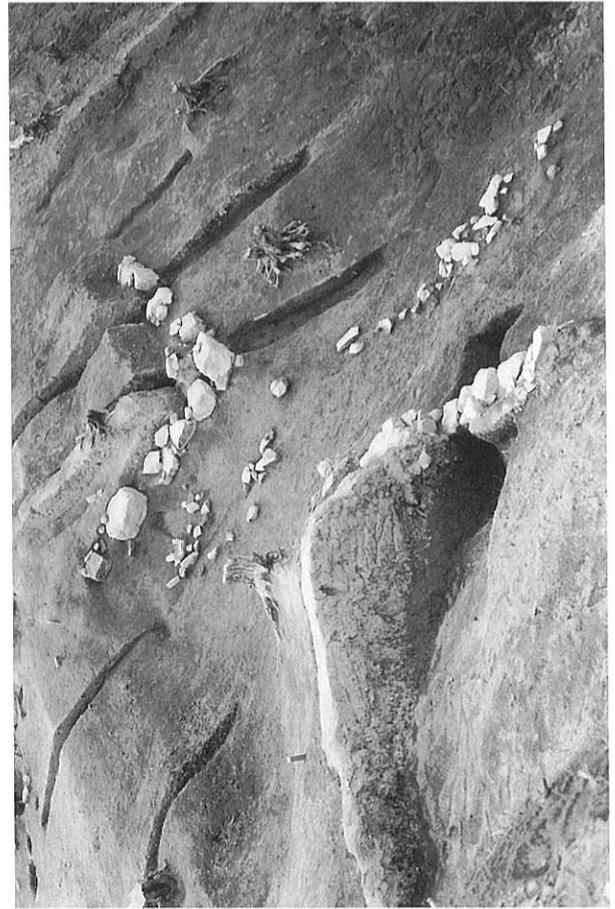
図版13 曲輪 2 出入口1、通路4



1. 出入口1、通路4全景 (北東から)



3. 石積3 (北西から)



2. 出入口1、通路4 (東から)



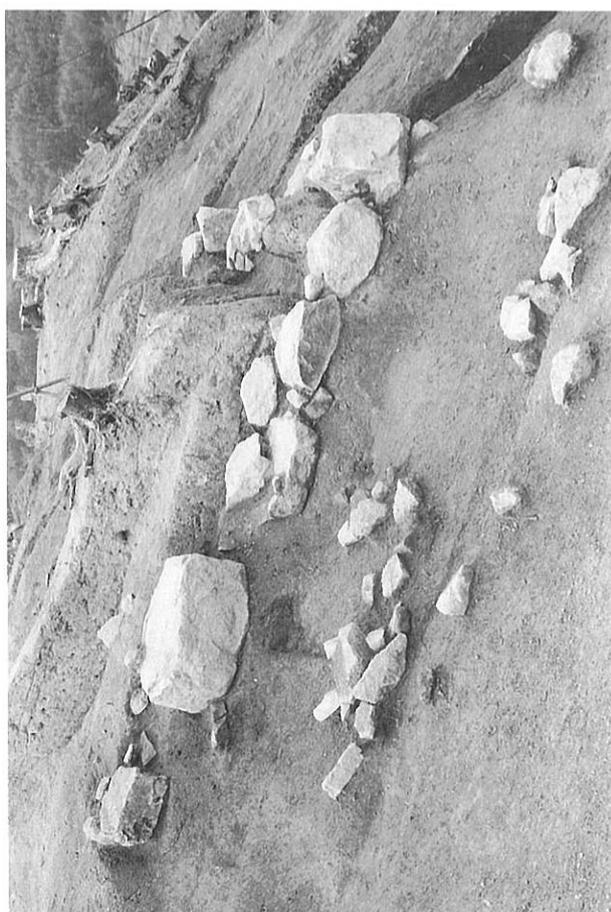
4. 石積3裏面状況 (南西から)



1. 石積 4 (北西から)



3. 石積 4・5 直交部分 (西から)



2. 石積 5、通路 4 (東から)



4. 通路 4 石敷 (北から)



3. 曲輪 8、通路10・11・13 (北東から)



4. 曲輪 8、通路10～12 (北から)



1. 通路 3・4 (北東から)



2. 通路 3・4 (北西から)



1. 曲輪 3・10 全景 (南東から)



2. 通路 7・8 石段 (南東から)



1. 建物 3 (北から)

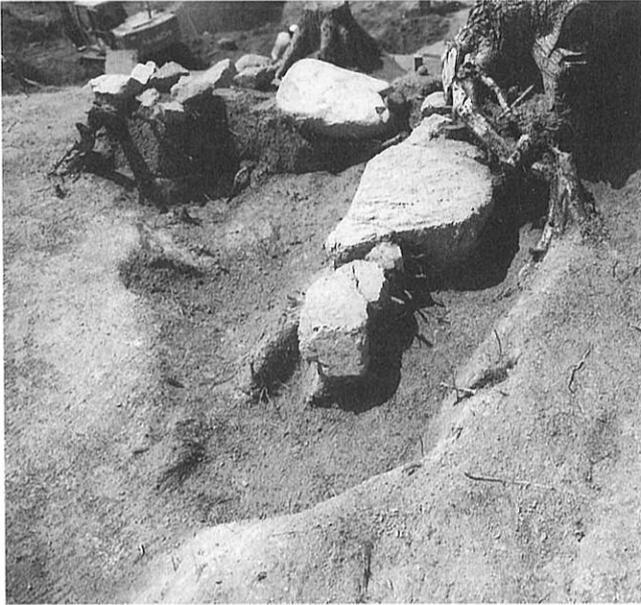


2. 通路 7 石段 1
(南東から)



3. 通路 8 石積 9
(南西から)

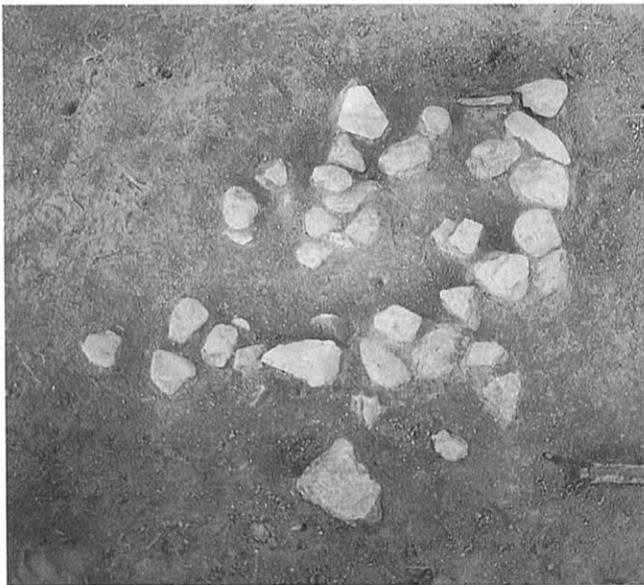
図版18 曲輪 3・6・10、通路 7



1. 通路 7 石段 2 掘方 (西から)



2. 曲輪 3 石列 1 (南から)



3. 曲輪 3 集石 1 (南西から)



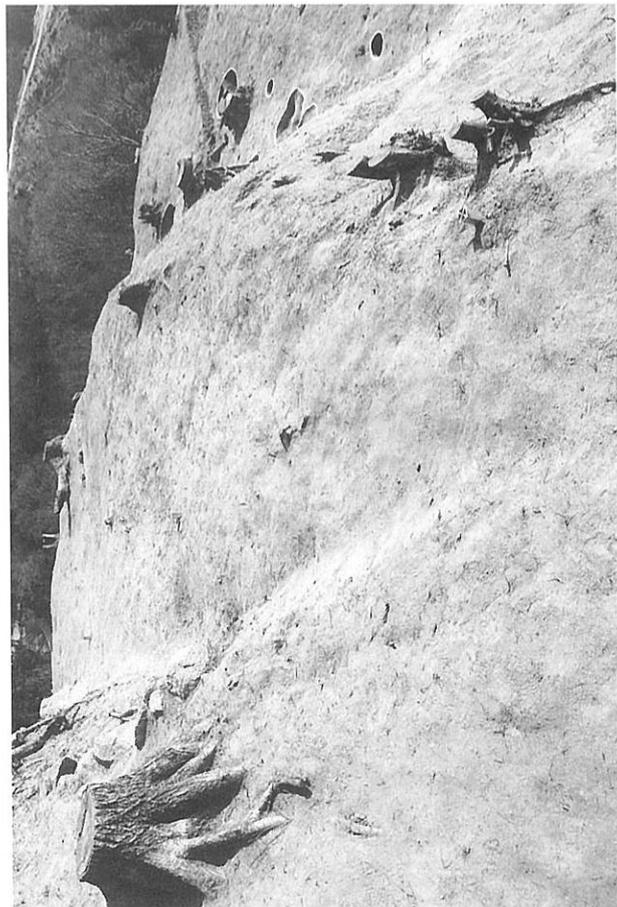
4. 曲輪 6 石積 8 (南から)



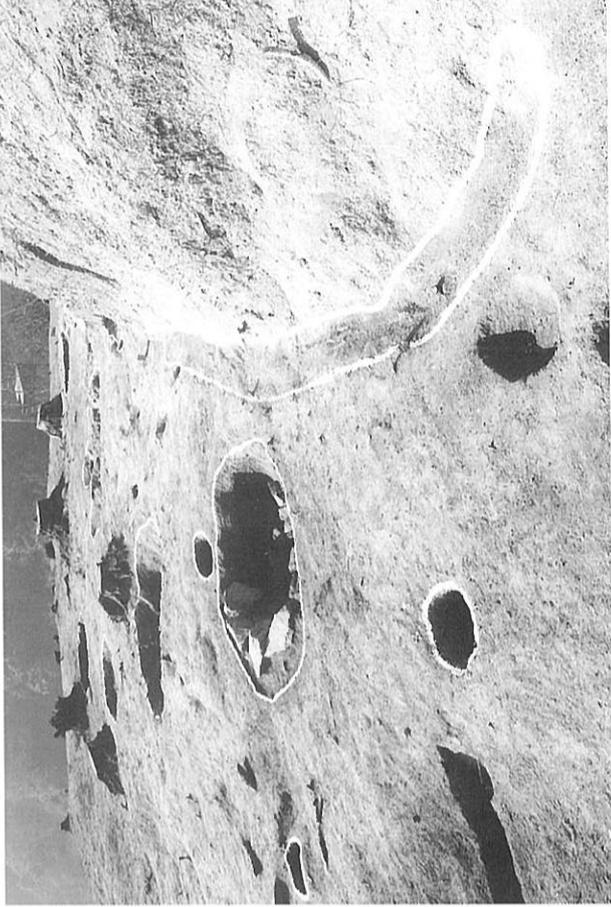
5. 曲輪 6 石積 8 (南西から)



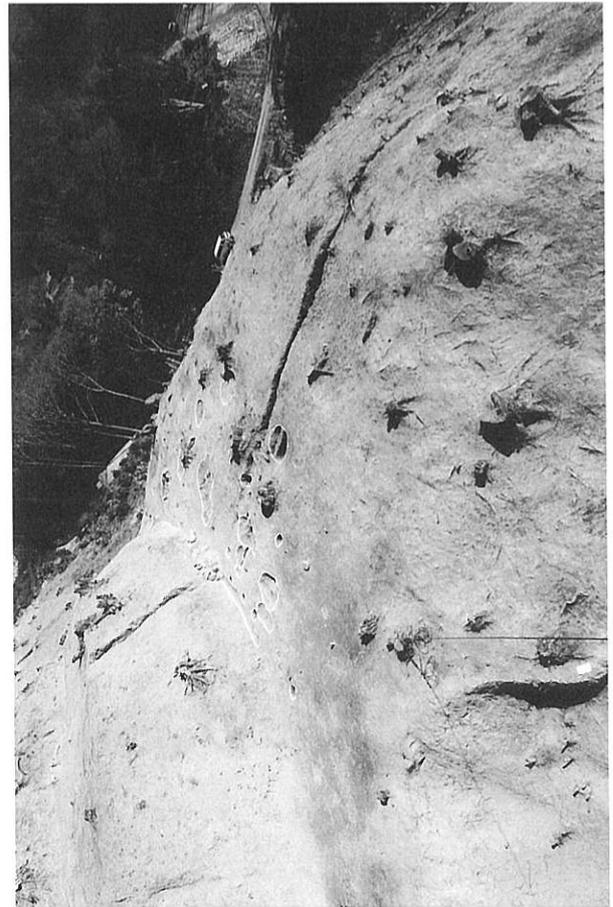
6. 曲輪 10 石積 7 (南東から)



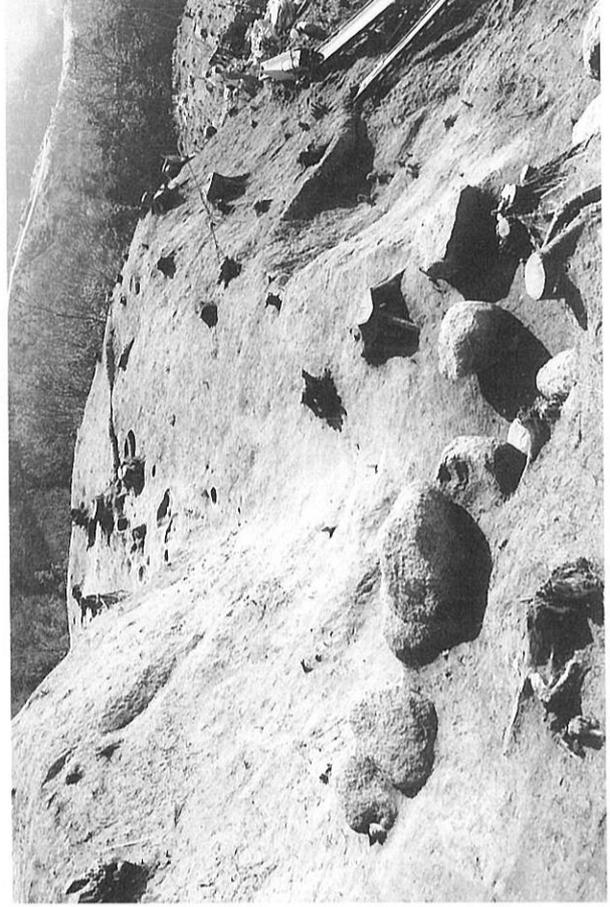
1. 曲輪6 (西から)



3. 曲輪5 (北東から)



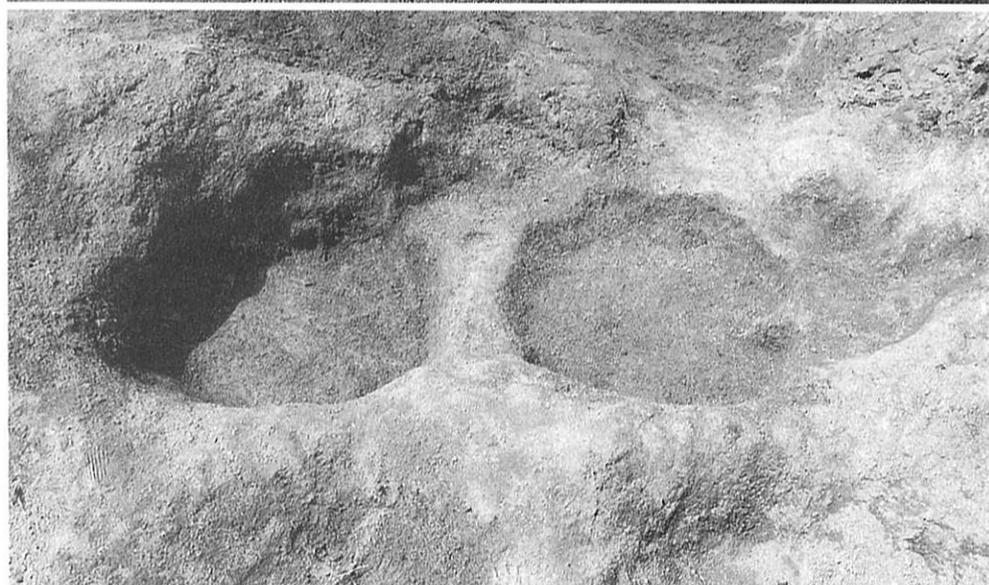
2. 曲輪5 (南西から)



4. 曲輪5 (西から)



1. 集石 2 (南から)



2. 土坑26 (東から)



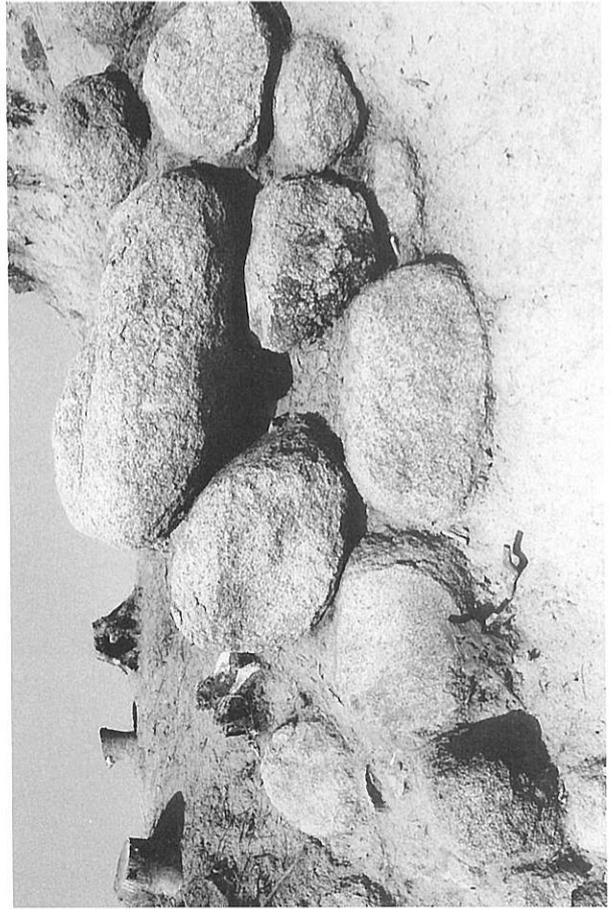
3. 土坑27 (北西から)



1. 石積10全景 (北東から)



3. 石積10裏込状況 (北東から)



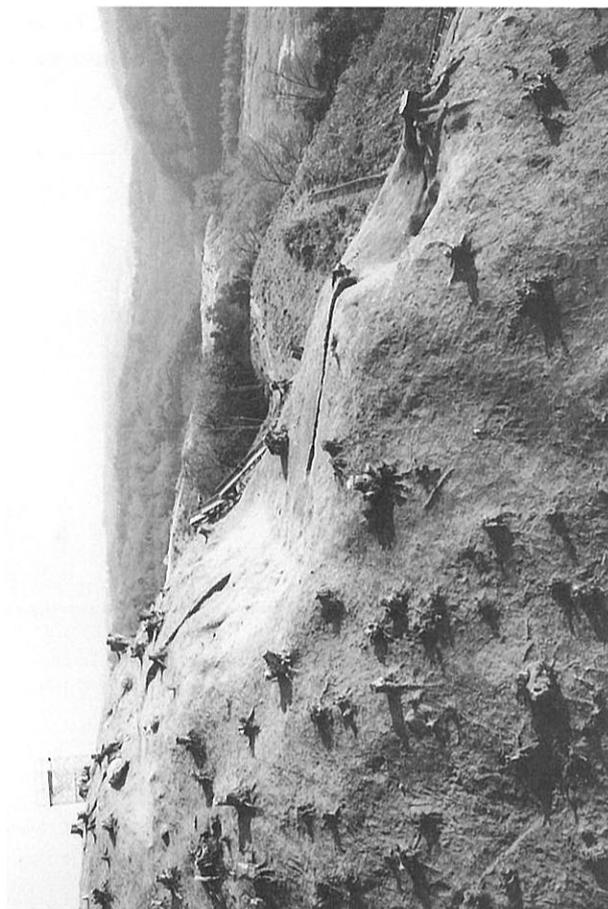
2. 石積10 (南東から)



4. 石積10最下段 (北東から)



3. 曲輪11 (北東から)



4. 曲輪12～14 (北から)



1. 曲輪4・7・11、土塁3 (東から)



2. 曲輪4・7・11、土塁3 (北東から)



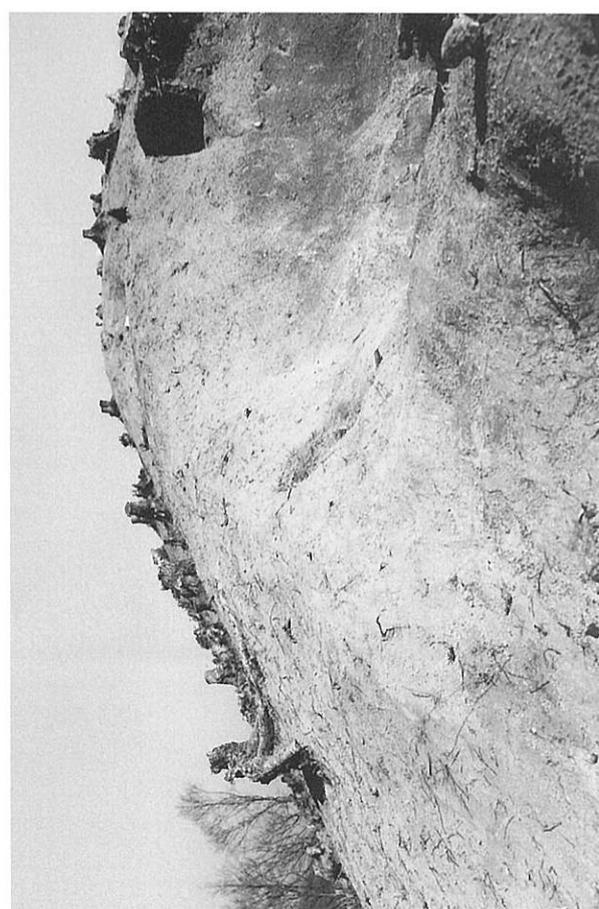
3. 曲輪13 (東から)



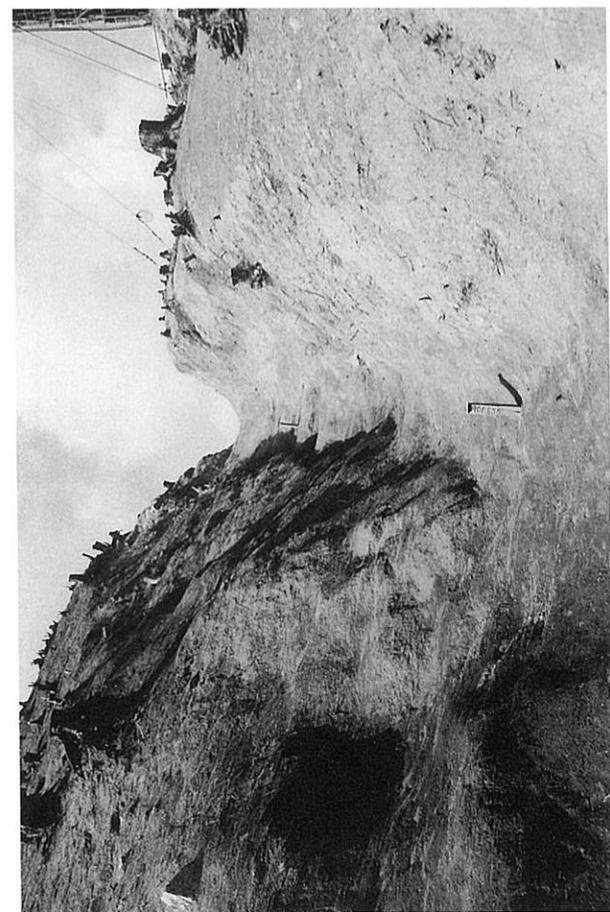
4. 曲輪14 (東から)



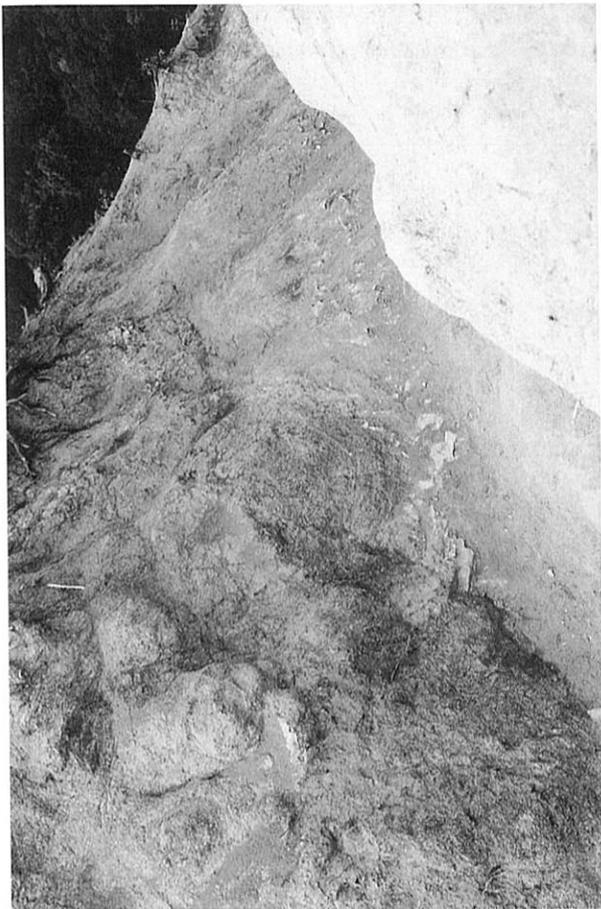
1. 曲輪12 (北西から)



2. 曲輪13、通路14 (西から)



1. 豎堀1 (南東から)



3. 豎堀1 頂上部 (東から)



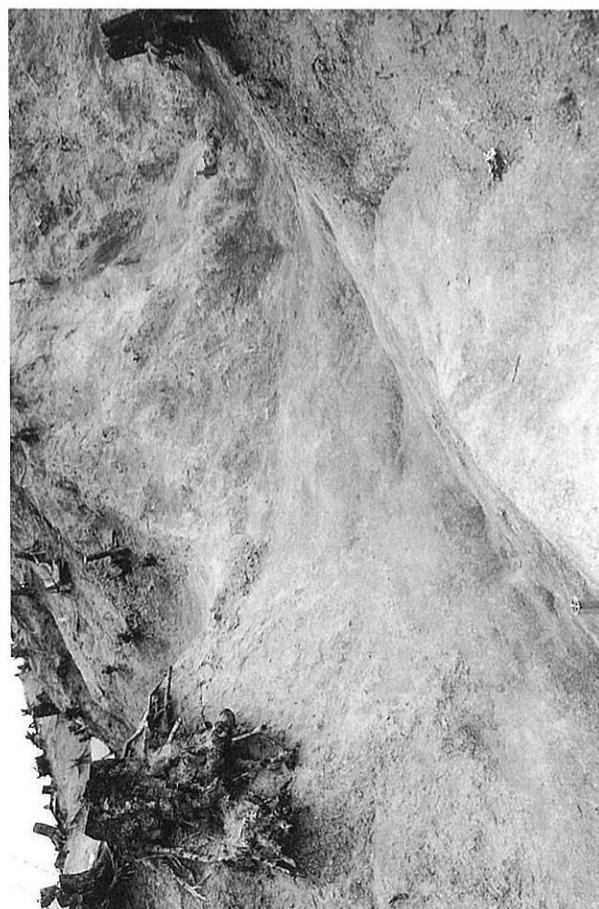
2. 豎堀1、土塁1断面 (東から)



4. 豎堀1、土塁1 (北から)



1. 豎堀 2 (南東から)



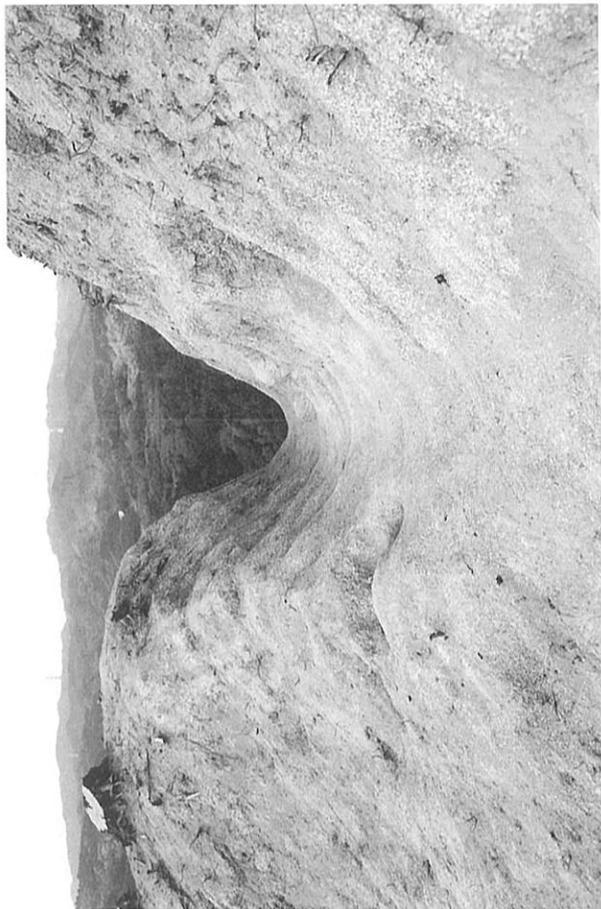
2. 豎堀 2 (通路 3 分断部分) (西から)



3. 豎堀 1・2 頂上部断面 (北西から)



4. 豎堀 2 断面 (北西から)



3. 豎堀3 頂上部 (南東から)



4. 豎堀3 断面 (北西から)



1. 豎堀3 (西から)



2. 豎堀3 (北西から)



1. 曲輪 1 平坦面堆積土 (断面 2) (西から)



2. 曲輪 1 平坦面堆積土 (断面 2) (西から)



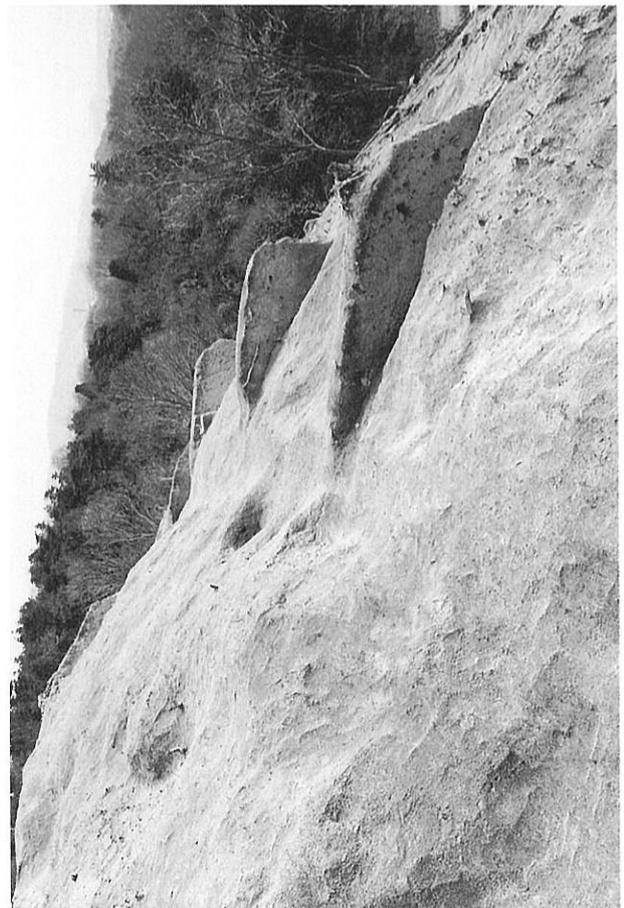
3. 曲輪 1 南東斜面盛土 (断面 1) (南西から)



4. 曲輪 1 南西斜面堆積土・盛土 (断面 2) (南西から)



1. 曲輪9盛土〔断面3・4〕(東から)



2. 曲輪9盛土〔断面2～4〕(西から)



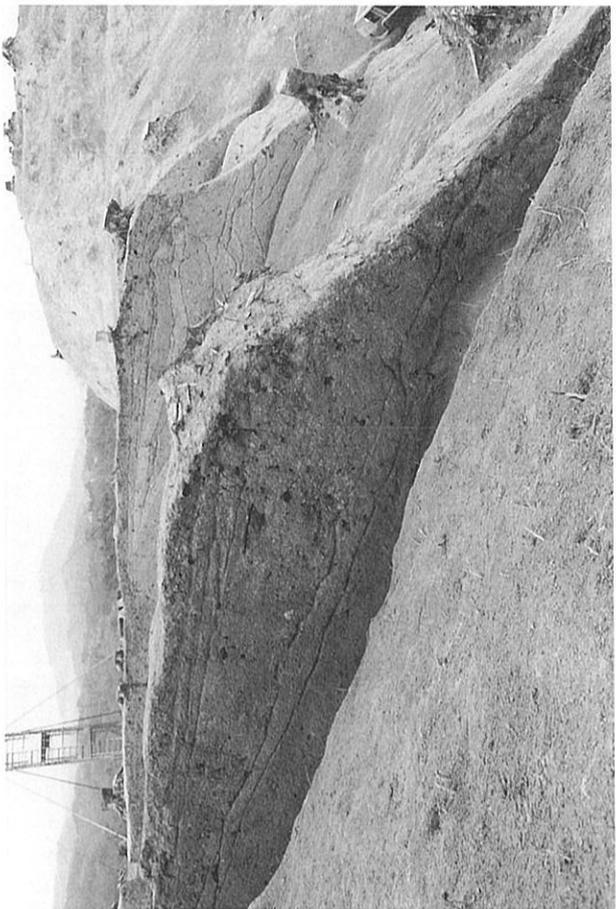
3. 曲輪9石積1盛土〔断面2〕(南西から)



4. 曲輪1南斜面～曲輪9堆積土・盛土〔断面2〕(南西から)



1. 曲輪2東端堆積土(断面8)(西から)



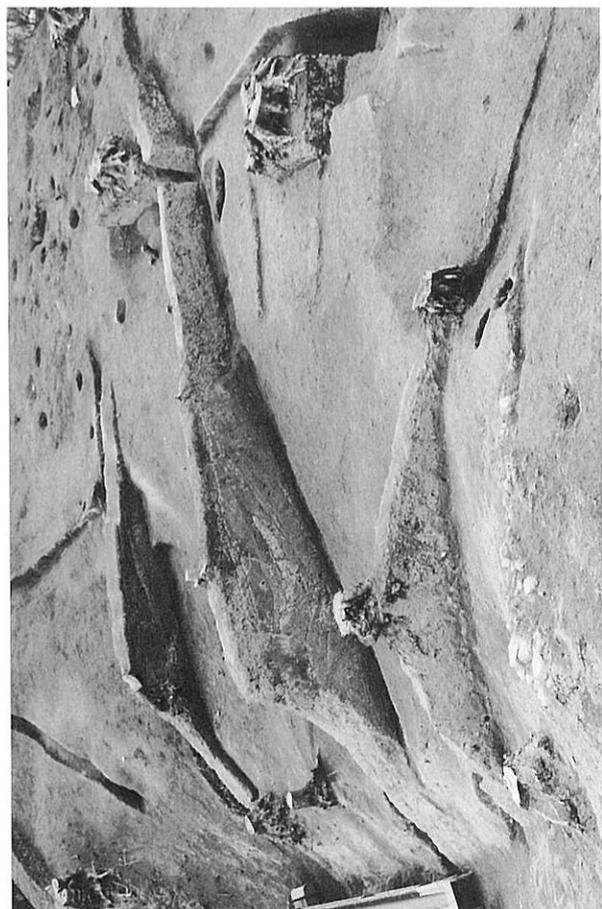
3. 曲輪2南東斜面盛土(断面7)(南西から)



2. 曲輪3北斜面・曲輪2南端(断面8)(南東から)



4. 曲輪2南東斜面盛土(断面5)(南西から)



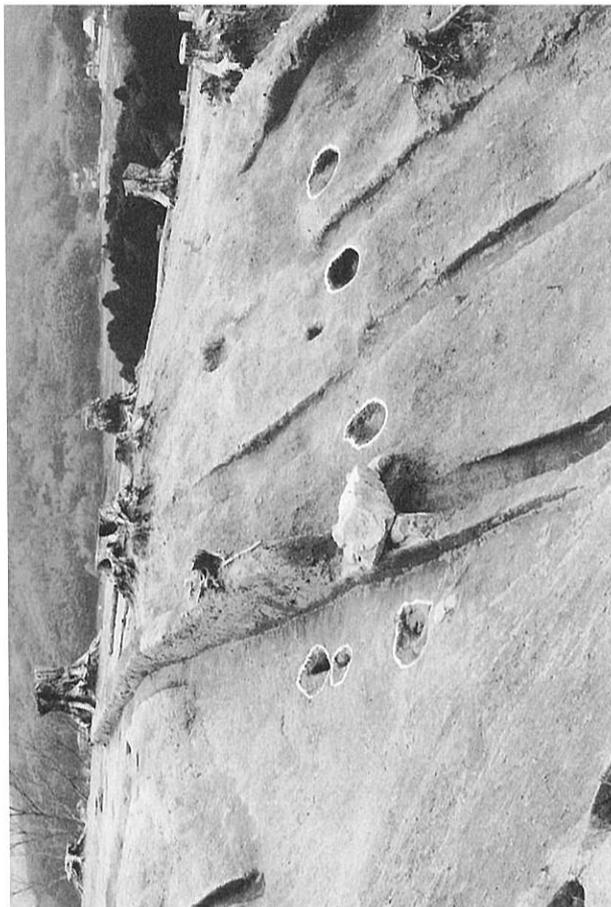
1. 曲輪 2 南東斜面盛土 (断面 5 ~ 7) (北東から)



3. 曲輪 2 石積 3 盛土 (断面 9) (北から)



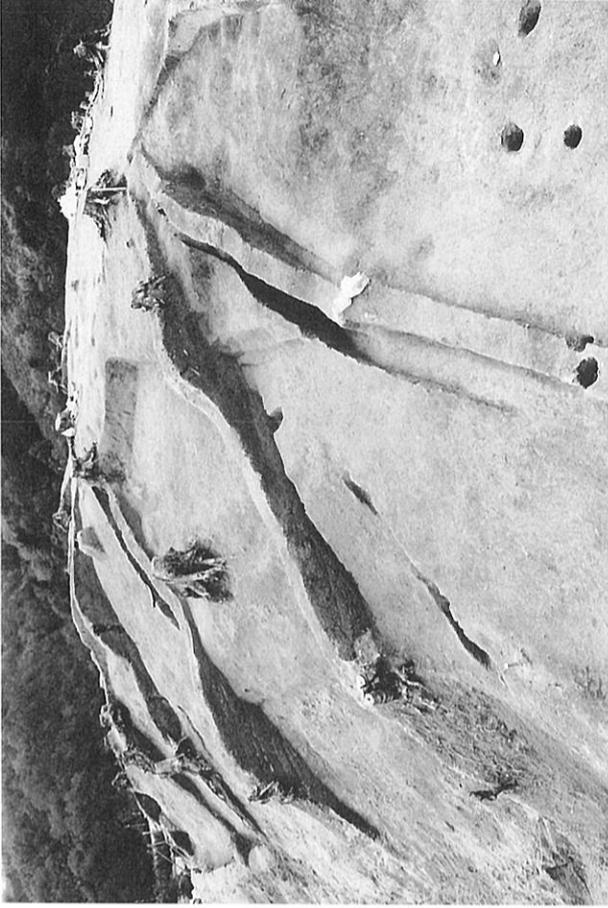
2. 曲輪 2 南東斜面盛土 (断面 6) (北東から)



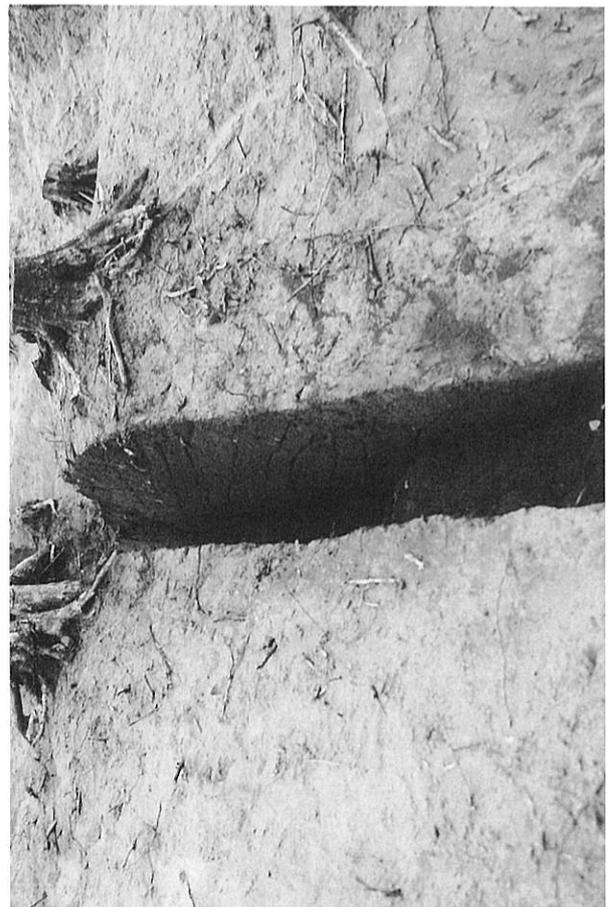
4. 曲輪 2 石積 4・5 下層ビット 104 ~ 109 (東から)



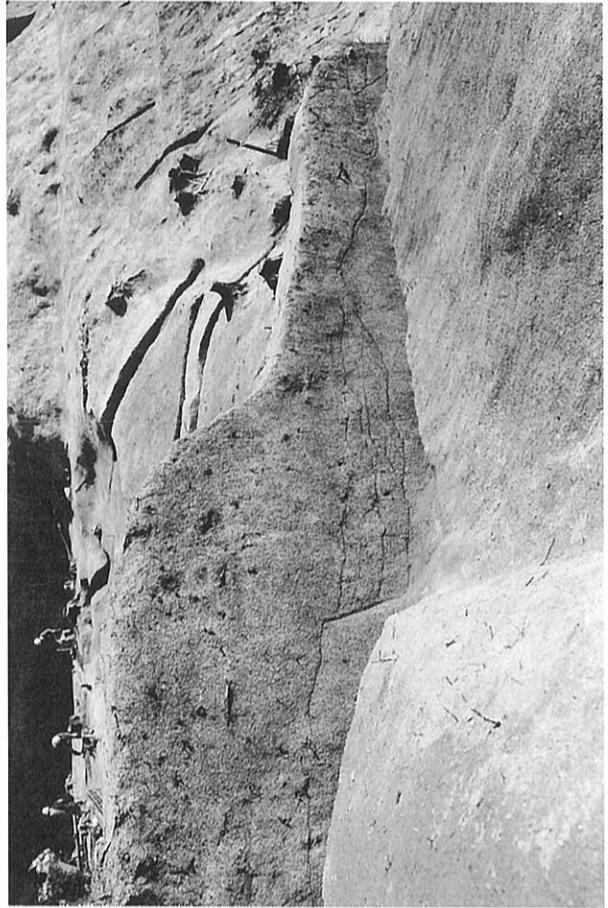
1. 曲輪 2 南東斜面、通路10堆積土・盛土 [断面 6] (南から)



3. 曲輪 3・通路 9 盛土 [断面14~18] (北から)



2. 曲輪 8 盛土 [断面 6] (北東から)



4. 曲輪 3 盛土 [断面15] (北東から)



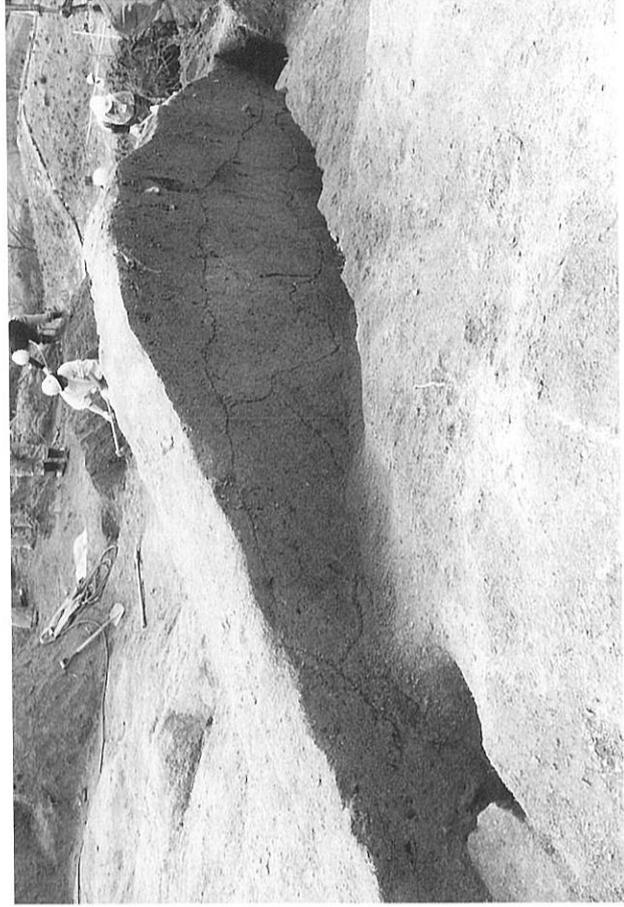
1. 曲輪3南斜面、曲輪10盛土〔断面19~22〕(南から)



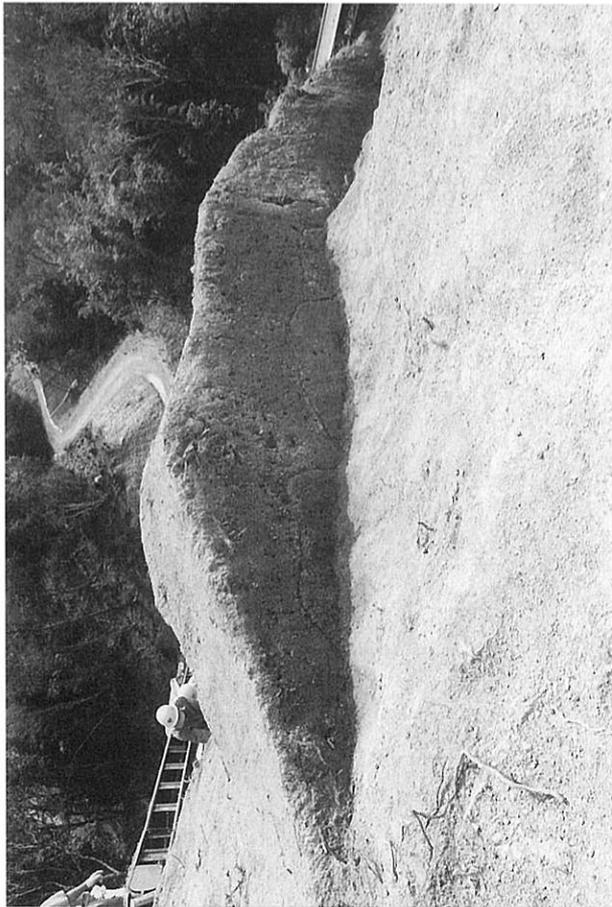
3. 曲輪5盛土〔断面26・27〕(西から)



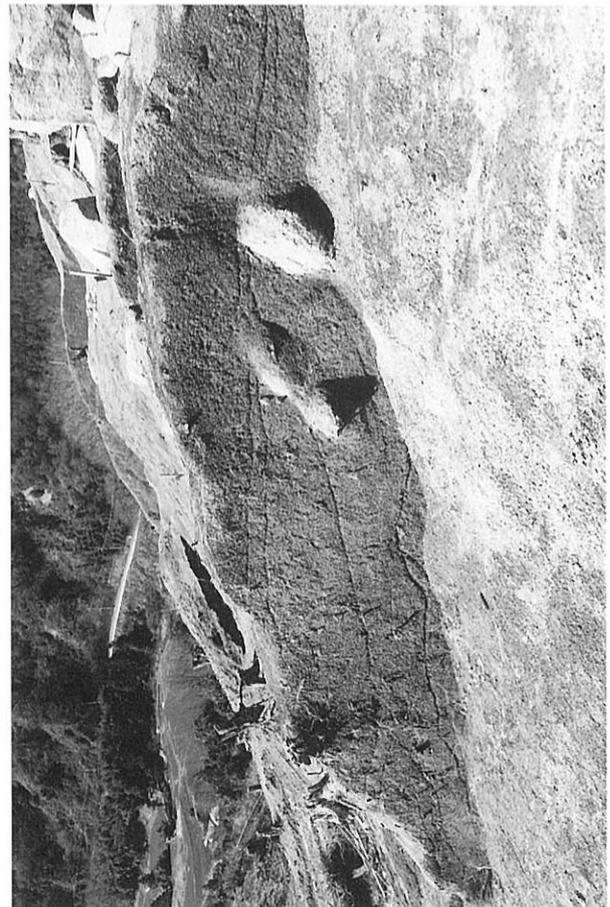
2. 曲輪3盛土〔断面21〕(東から)



4. 曲輪5盛土〔断面27〕(北東から)



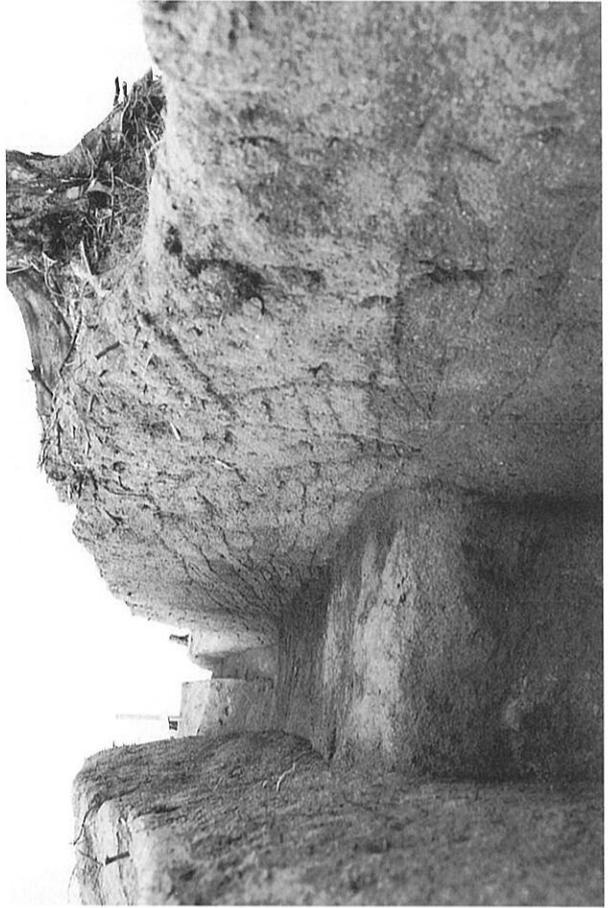
1. 曲輪 5 盛土〔断面25〕(西から)



2. 曲輪 4 盛土〔断面23〕(北東から)

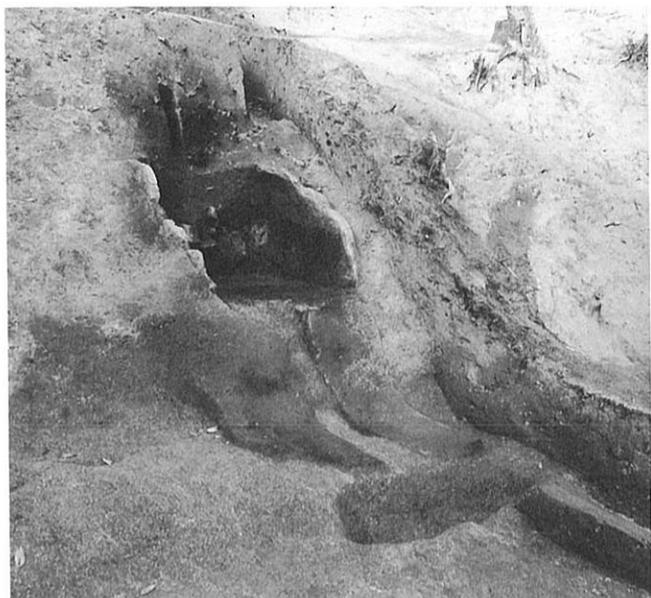


3. 曲輪14盛土〔断面28〕(南西から)



4. 曲輪14盛土〔断面28〕(南西から)

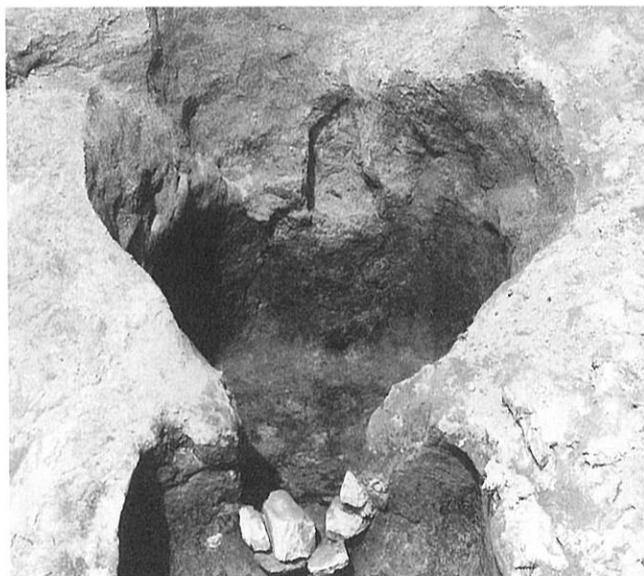
図版34 窯 1・2、焼土坑41



1. 窯1 (南から)



2. 窯1奥壁 (南東から)



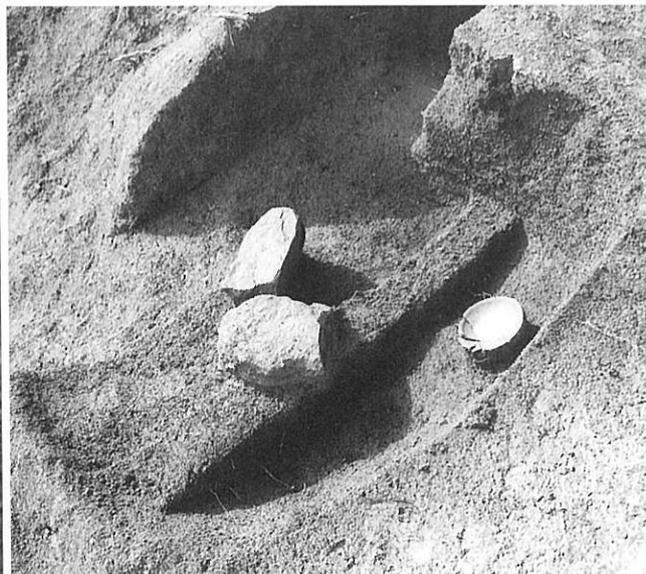
3. 窯2 (南東から)



4. 窯2煙道 (東から)



5. 窯2煙道断面 (東から)



6. 焼土坑41 (南東から)



1



2



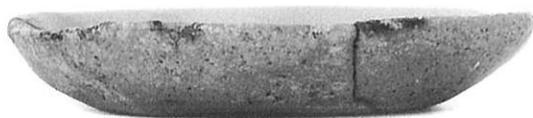
3



4



5



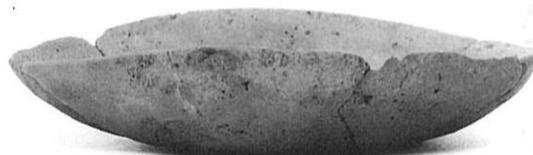
7



8



9



10



11



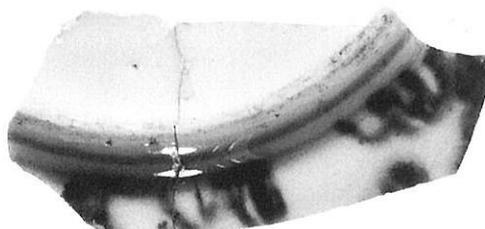
6



12



6'



12'

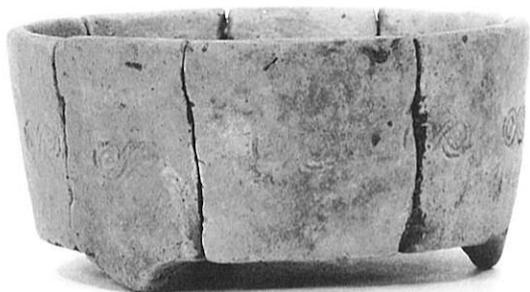
曲輪 1 (1~5)、曲輪 2 (6~12)



1



3



4



2



5



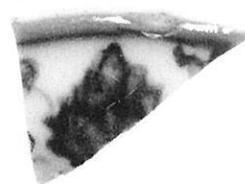
6



7



8



9

曲輪 1・2 (1・2)、曲輪 2 (3~9)



1



2



3



4



2'



5



6

曲輪 2 (1・2)、曲輪 3 (3~5)、曲輪 5 (6)

図版38 曲輪 4・5・8 出土土器・石製品



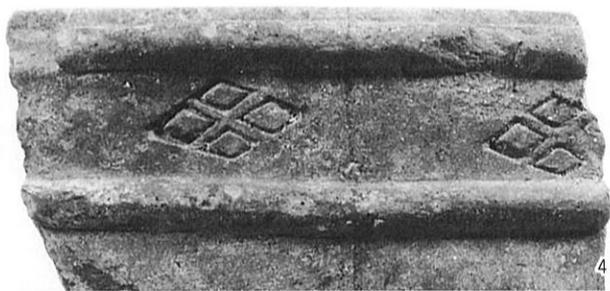
1



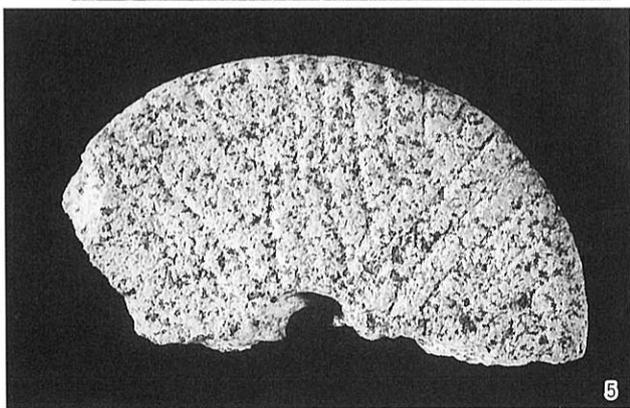
2



3



4



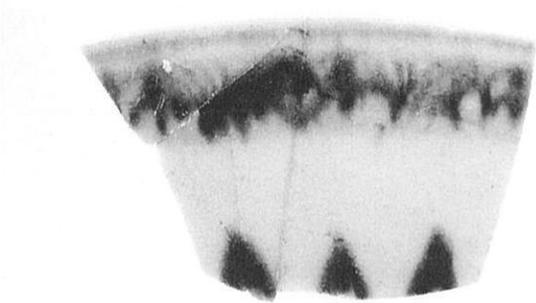
5



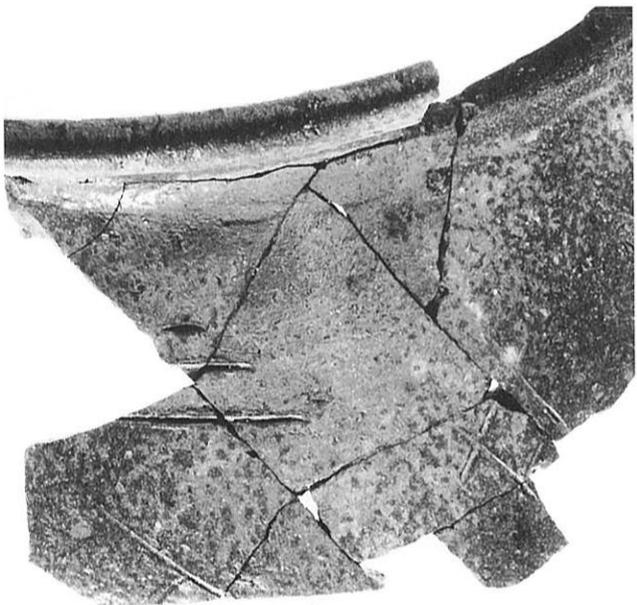
6



6'



7



8



9

曲輪 5 (1~5)、曲輪 8 (6)、曲輪 4・5 (7)、曲輪 2・5、通路 9 (8・9)

図版39 曲輪 8・9、各曲輪盛土出土土器



1



5



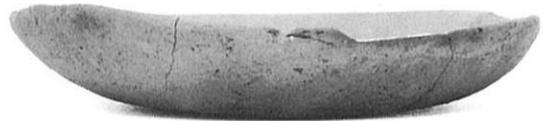
2



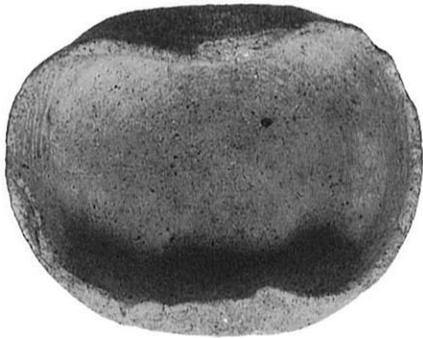
6



3



7



4



8



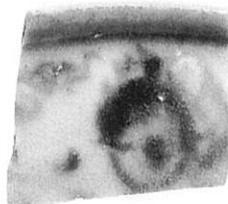
4'



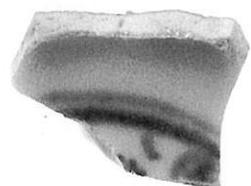
9



10



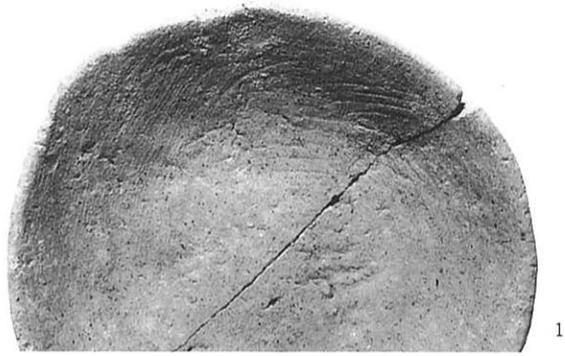
11



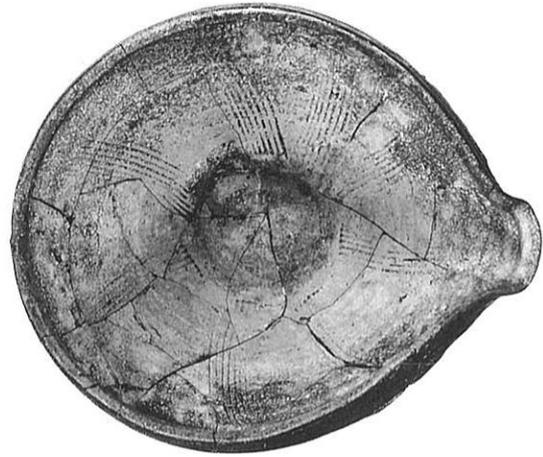
12

曲輪 8 (1~3)、曲輪 9 (4・5・9)、曲輪 2 盛土 (6~8)、豎堀 10 (10)、曲輪 3 盛土 (11)、曲輪 5 盛土 (12)

図版40 盛土・遺構出土土器、金属製品



1



3



1'



2



3'



4



4'



4''



5

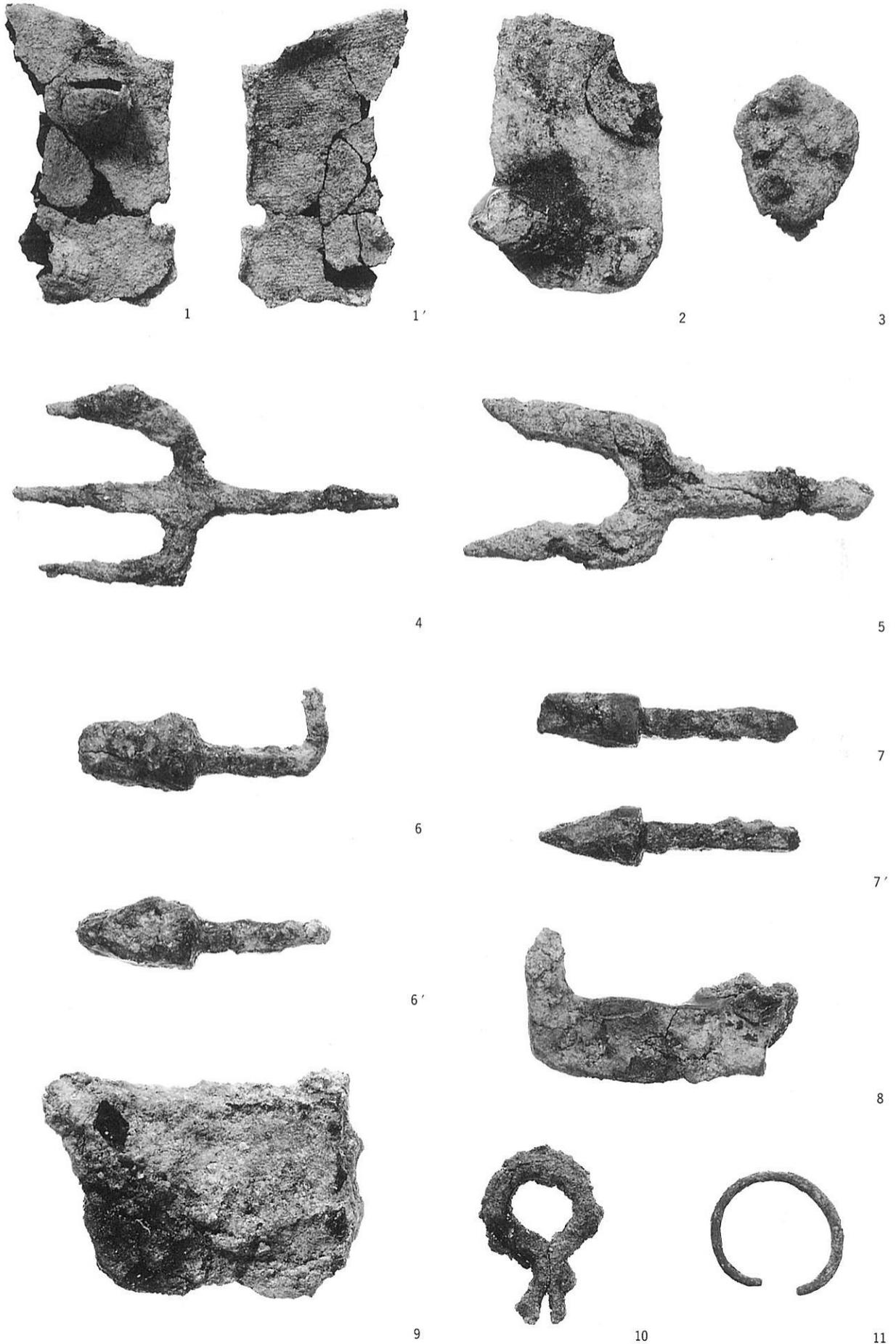


6



7

通路9(1)、焼土坑41(2)、落ち込み2(3)、土坑8(4)、曲輪2(5)、曲輪1(6)、曲輪9(7)



曲輪 2 (1・2・4・6・8・9)、建物 1 (3)、石積10裏込(5)、通路10(7)、曲輪16(10)、曲輪11(11)

図版42 金属製品



曲輪 1 (1~3・11~17)、曲輪 2 (4・5・7・8・18~21)、曲輪 3 (22・23)、曲輪 5 (6・9・25)、曲輪 16(10)、豎堀 6 (24)

報 告 書 抄 録

ふりがな	さほくるすやまとりであと							
書名	佐保栗栖山砦跡							
副書名	国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第56集							
編著者名	市本芳三 瀬戸哲也 福島正和 森屋美佐子							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3-21-4 Tel 0722-99-8791 Fax 0722-99-8905							
発行年月日	西暦2000年11月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さほくるすやまとりであと 佐保栗栖山砦跡	おおさかふいぼらまし 大阪府茨木市 さほ 佐保字クルス	27211	100	34度 51分 46秒	135度 32分 54秒	1997.11.4) 1999.4.15	12,392	国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
佐保栗栖山砦跡	山城	室町時代	曲輪、通路、出入口、堅堀 土塁、礎石建物、掘立柱建物 石積、土坑	土師器皿、備前甕、丹波壺・鉢、美濃瀬戸皿・水滴、貿易陶磁器、鉄釘、鏃、刀		16世紀の山城。全域を調査し、全体構造、盛土・切土の状況が把握された。		
	窯	平安時代	窯、焼土坑			10世紀の炭窯と焼土坑		

佐保栗栖山砦跡

(財)大阪府文化財調査研究センター

—国際文化公園都市特定土地地区画

発掘調査報告書 第56集

—整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2000年11月

編集発行／(財)大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 堺市竹城台3-21-4 TEL 0722-99-8791

印刷／(株)じんのう

〒532-0036 大阪市淀川区三津屋中3-3-5
